

Copyright © 1974 by Shogakukan Inc. All rights reserved. Printed in Japan. Published by Shogakukan Inc., 1-1-1, Nishi-Shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 163, Japan.

奇譚クラブ

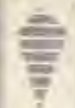


1974

10
10
10

1974.10

奇譚クラブ



THE KITAN CLUB

Published Monthly by
Miyazaki Shoppo
Osaka, Japan



奇譚クラブ 臨時増刊

女体緊縛写真集 定価一〇〇〇円(送料50円)



天然色写真

素肌に唯い込む麻織 前田真知子
首飾模倣二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な夢のたえ 前田真知子
麻織と鉄肌の明暗 前田真知子
新しい視点を味う 前田真知子
準備運動OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

金髪娘の美女	前田真知子
黒髪娘の美女	前田真知子
赤髪娘の美女	前田真知子
白髪娘の美女	前田真知子
金髪娘の美女	前田真知子
黒髪娘の美女	前田真知子
赤髪娘の美女	前田真知子
白髪娘の美女	前田真知子
金髪娘の美女	前田真知子
黒髪娘の美女	前田真知子
赤髪娘の美女	前田真知子
白髪娘の美女	前田真知子
金髪娘の美女	前田真知子
黒髪娘の美女	前田真知子
赤髪娘の美女	前田真知子
白髪娘の美女	前田真知子

緊縛女体の光と影

花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子
花を映した子	前田真知子

これから、どうするの？

美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子
美しき吊り	前田真知子

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々に

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の方々の協力により、本誌は今日まで存続し、発展を遂げてまいりました。本誌の発展のため、今後も多くの女性モデルを求めます。本誌のモデルは、年齢、身長、体型、髪色、瞳色など、多岐にわたります。興味のある方は、本誌編集部までお問い合わせください。

本誌三百号突破記念

百万円懸賞原稿募集

入選作品 第一席	二十万円
入選作品 第二席	十万円
入選作品 第三席	五万円
入選作品 第四席	三万円
入選作品 第五席	二万円
佳作	一万円
選外佳作	五千元

▽内容▽
本誌創刊以来、多くの女性モデルが活躍し、本誌の発展に貢献してきました。本誌のモデルは、年齢、身長、体型、髪色、瞳色など、多岐にわたります。興味のある方は、本誌編集部までお問い合わせください。

女体緊縛の醍醐味を語る

本誌編集部

本誌編集部は、女体緊縛の醍醐味を語るための企画を立ち上げました。本誌のモデルは、年齢、身長、体型、髪色、瞳色など、多岐にわたります。興味のある方は、本誌編集部までお問い合わせください。

景の越前遠征す長驅

塚本鉄三・撮影



乙女の羞らしい

△堀 貴代子▽



昭和四十九年 十月号目次 △第二十八卷 第十号
通刊第三百二十号▽

フォト『にじみ出るマゾの味』	△藤田明子▽	蟻田 義忠	(29)
『カメラ』と『ペン』のルポルタージュ	△堀貴代子の巻▽		
『長駆遠征す越前の景』		塚本 鉄三	(30)
M女浩子を想う『再び・黒い乳房』		諏訪大路健	(64)
連載・Mグループ作品『女の虜囚』	(8)	佐治 麻造	(68)
告白『小夜子さまの便器となって』		葉城 雄二	(80)
連載小説『大噴火』	△第七十二回▽	千葉 青鬼	(84)
浣腸随想『妻と浣腸の想い出』		藤岡江根真	(92)
連載・M派交友録 ⁽⁵⁵⁾ 『痴愚の泥海』		鬼山 絢策	(94)
連載S時代小説『紫蘭の門』		風流極道軒	(110)
真知子再びー『花と蛇から』		小沢 準一	(123)
『SM研究会』の会合に出席して			
『雨の夜の語らい』		中河 恵子	(129)
笠井奈保子様への便り			
『僕にとって素晴らしい人』		高橋 睦夫	(140)
体験告白『緋牡丹は二つ』		瞳 耀太郎	(144)
妊婦フォトを入手した感激			
『女性の妊娠と羞恥責め』		小倉 悠紀	(152)
SM短篇小説『棕櫚縄物語』		芝 好夫	(156)
告白『西側の窓辺に倚りて』		荒尾 慶子	(162)
体験告白『女責め図絵の系譜』		南 彦造	(166)
S研レポート『白豚飼育調教記』			
古都々奈良々の黄昏		塚本 鉄三	(174)
ある変執マニアの告白『手鏡の中のロマン』		窪田 旭	(194)
嗜虐千一夜Ⅱ SとMの招待状		町 陽一	(204)
読者通信		編集部選	(260)

カラー・フォト・セクション (十ポーズ)
堀貴代子・渡部好美・矢島靖子・前田真知子

長駆遠征す越前の景 (塚本鉄三・撮影)

初縛りの表情☆美しき縛り……堀 貴代子

バラの鉢植え☆羞恥責めの深淵……中河 恵子

見られることの悦楽……前田真知子

後手吊りの苦悶☆後手縛りの美……川路むら子

☆亀甲縛り……渡部 好美

二M女連縛……矢島 靖子

三名花の美しき開花……関谷富佐子

惑溺のひととき……矢島 靖子

縦縄の羨望……玉木 章子

美女と縄と縛り……苗木 陽子

目隠し……矢島 靖子

イメージギャラリ

「悦虐の陶醉」「伺候

して拝受、若く美しき

妻、夜の妖精」「これ

でも私は幸福だ」「紫

蘭の門、高嶺の花」

「M女をもらったゴリ

ラ」岡たかし◎「実験

台」室井亜砂路◎「浣

腸責めの結果」マエダ

・ヒオミ◎「臨月妊婦

の柱吊り」小妻容子◎

「乳首吊り責め」ト

マ・功

目次フォト
渡部 好美
前田真知子



奇 ク サ ロ ン (212)

女性の青筋に憧れる……大隅 三郎
被浣腸者の……鎌倉 健哉
妻をモデルに……尾田 明武
全M女性へ……島田 紀夫
私を責めて……村上千恵子
浣腸の……とやまかずひこ
放尿と……山口 苗子
若者のイメ……技川 鶴丸
女の鼻……高田 初朗
ゴム……大田 邦雄
獣姦……甲斐 千恵子
奇ク……浜村 君夫
と……丸木 加津子
花……丸木 加津子
白豚……丸木 加津子
S M……丸木 加津子

我がマゾの妄想……高浜 純
我が男女奴隷飼育日記……土田 健一
数珠と割腹……島崎 健一
肥満の美……笠井 保子
一奴隷妻……若江 正史
イメ……坂本 輝
渡部……橋本 輝
編集……橋本 輝
S青年の夢……橋本 輝
縛りの美学……橋本 輝
イメ……橋本 輝
おしめ……橋本 輝
虹の……橋本 輝
道子……橋本 輝
恐れ……橋本 輝
美少女……橋本 輝
サイン……橋本 輝



初 縛 り の 表 情

＜堀 貴 代 子＞





バラの鉢植え

〈中 河 恵 子〉

羞恥責めの深淵

＜中 河 恵 子＞





後手吊りの苦悶

〈前田真知子〉



縦 縄 の 美 景

<矢 島 靖 子>

美女と縄と縛り

〈玉木章子〉

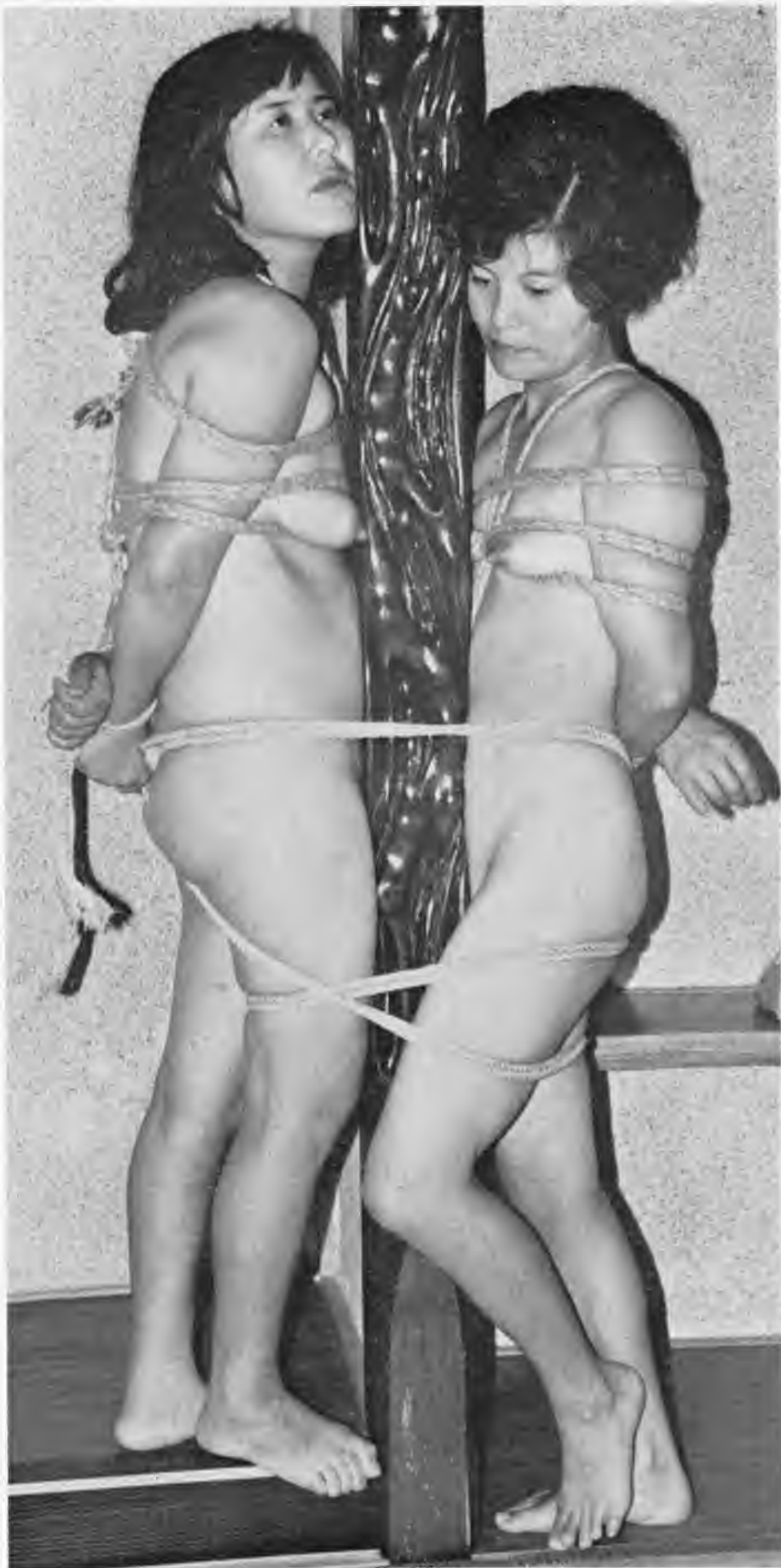




後手縛りの美

〈前田真知子〉

二
M
女
連
縛



△ 渡部 好美 △
△ 川路 むら子 △



亀 甲 縛 り

＜前 田 真 知 子＞

三名花の美しき開花

△堀 貴代子▽

△渡 部 好 美▽

△矢 島 靖 子▽







海老縛り <矢島靖子>

目隠し <苗木陽子>





見られることの悦楽

＜中 河 恵 子＞



惑溺のひととき

＜関 谷 富 佐 子＞



美 し き 縛 り

＜堀 貴 代 子＞



















奇

譚

ク

ラ

ブ

1974

10月号

<第28巻 第10号 通刊第320号>

……にじみ出るマゾの味……

どこから見ても、職業的なモデルといった臭いの片鱗さえも、窺い知ることが出来ないのが、藤田明子という素晴らしい女性である。

私は、こうした、如何にも素人くさい——それだけに、稚拙な、作られたものでない、せっぱつまった、抜きさしならない真実味というものを、そこに見るのである。

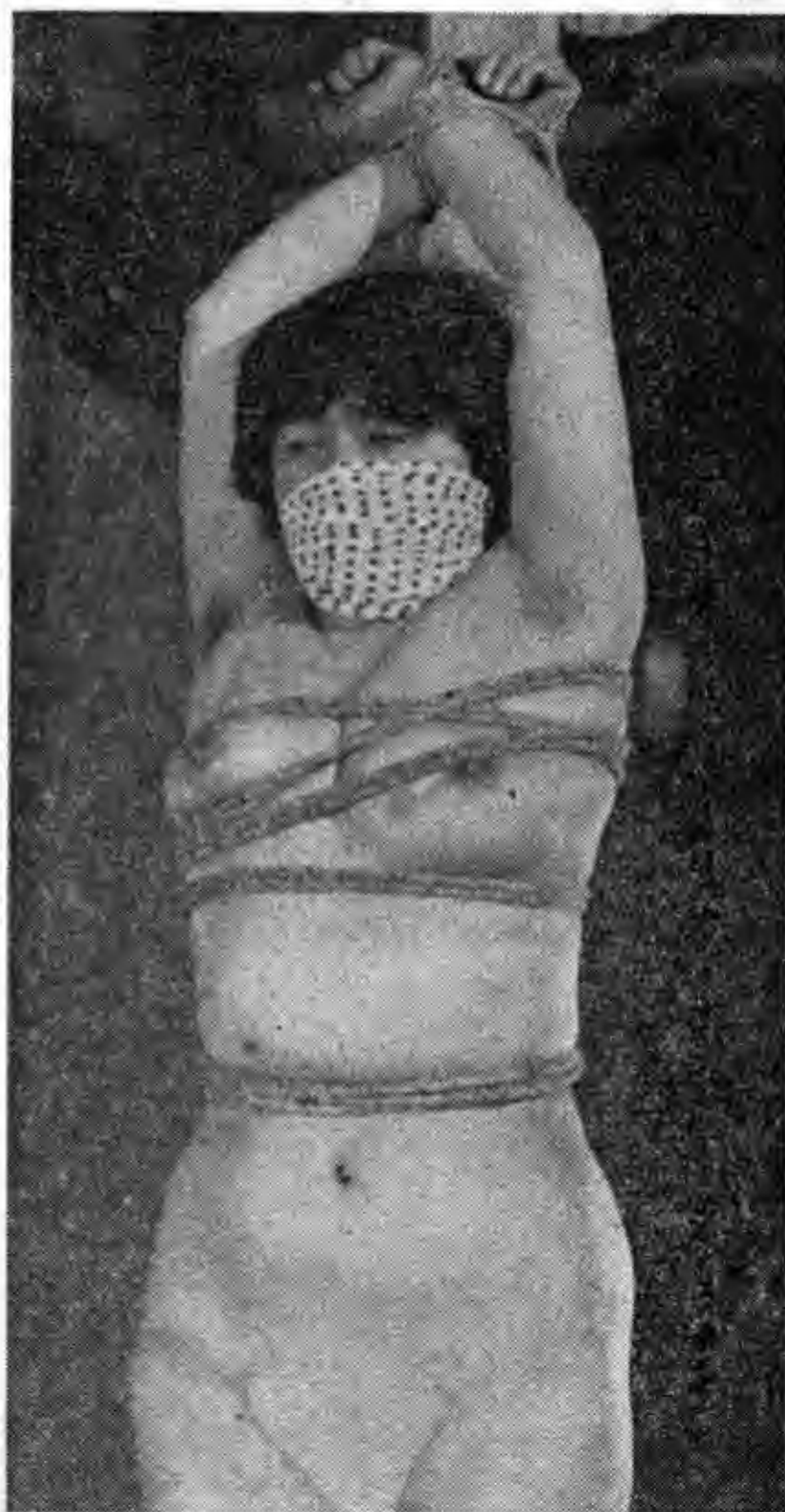
いわば、あの市井の人生相談に見るような生々しい人間像を、そこに感じとることが出来るのだ。この、どこから見ても円熟しつく

……モデル……藤田 明子……

した藤田明子という女性の肉体から発するマゾの電波は、私の頭脳中枢に対して激しい刺激を絶え間なく与えてくれるのだ。

羞らいに顔をかくしながらも、やむにやまれぬマゾの欲求のために、我が身を投げだして秘かに縛られ、そして、あくなき責めと汚辱に喘ぐ彼女の心情の中に、私は真実のM女姿を見る思いがするのだ。

(蟻田義忠・記)



「カメラ」と「ペン」のS M Lポルタージュ

長駆遠征す越前の景

△堀 貴代子の巻▽

塚 本 鉄 三

若くて凄く可愛い清纯な女性。それが縛られてもいい、いや、縛られてみたいと言うのだ。奇巧の愛読者——初縛り。私の食指は動いた。生まれて初めて縛られるという年若い美女を、私はどのようにして責めたいのだろうか。とにかく私は、彼女を一見してその裸身を縛りたい気持ちが、ふつつつと湧いた。



☆栗田口の邸宅

△前田真知子を囲むダベリ会▽の楽しい会合が、ほんの昨日のことのように思えるのに、早くも二月の月日がたってしまった。

その日、私はT料亭での支払いを準備していったのだが、五月三日の夜、前田真知子嬢が、翌四日に、月心寺へ行く都合で、離室に泊るといふ関係もあって、それらの費用一切の請求書は、予世場良三氏を通じて、私の手元へ届けて貰うように頼んでおいた。

その後、一向に請求書が届かないので、料亭に問合わせたところ、予世場氏が既に十六

万八千四百円也の請求代金全額を支払ってしまっていて、返事だった。

それで私は、梅雨の晴間の一日、予世場氏に立替えて貰った料亭での費用を支払うべく栗田口にある彼の閑居を訪れたのであった。

彼に教えられた通り、三条通りを東へ向い平安神宮の赤い鳥居が左手に見えるところで一方通行の道を右折すると、山中美術館の前に有料駐車場があった。

そこから、予世場良三氏の屋敷は、歩いて五分とはかからなかった。

表構えは、さして大きくはないのに、一歩足を屋敷内に踏み入れてみて、その間取りの広いのに、先ず驚いた。入るなり土間の左右に二部屋があり、中庭を隔てて離室が独立して二棟建っていた。

その奥にある、背後の山を借景にした日本式庭園のたたずまいは、まるで禅寺へでも来たような幽邃なものだった。先日来の雨で庭の樹々は、一段と緑の濃さと深さを増し、手入れのよく行き届いた松の木の間には、木々が白い花を咲かせていた。

「塚本さん、つまらないものですが、私のコレクションを一度、見て下さいますか。今までに、誰にも他人には一切見せたことのない

ものなのですが……」

離室の一室に落着いて、ダベリ会の思い出や奇巧のこと、それにSMの話題に花を咲かせたあとで、ふと彼は、思いついたように、古風な文箱の蓋を開けると私の前に置いた。

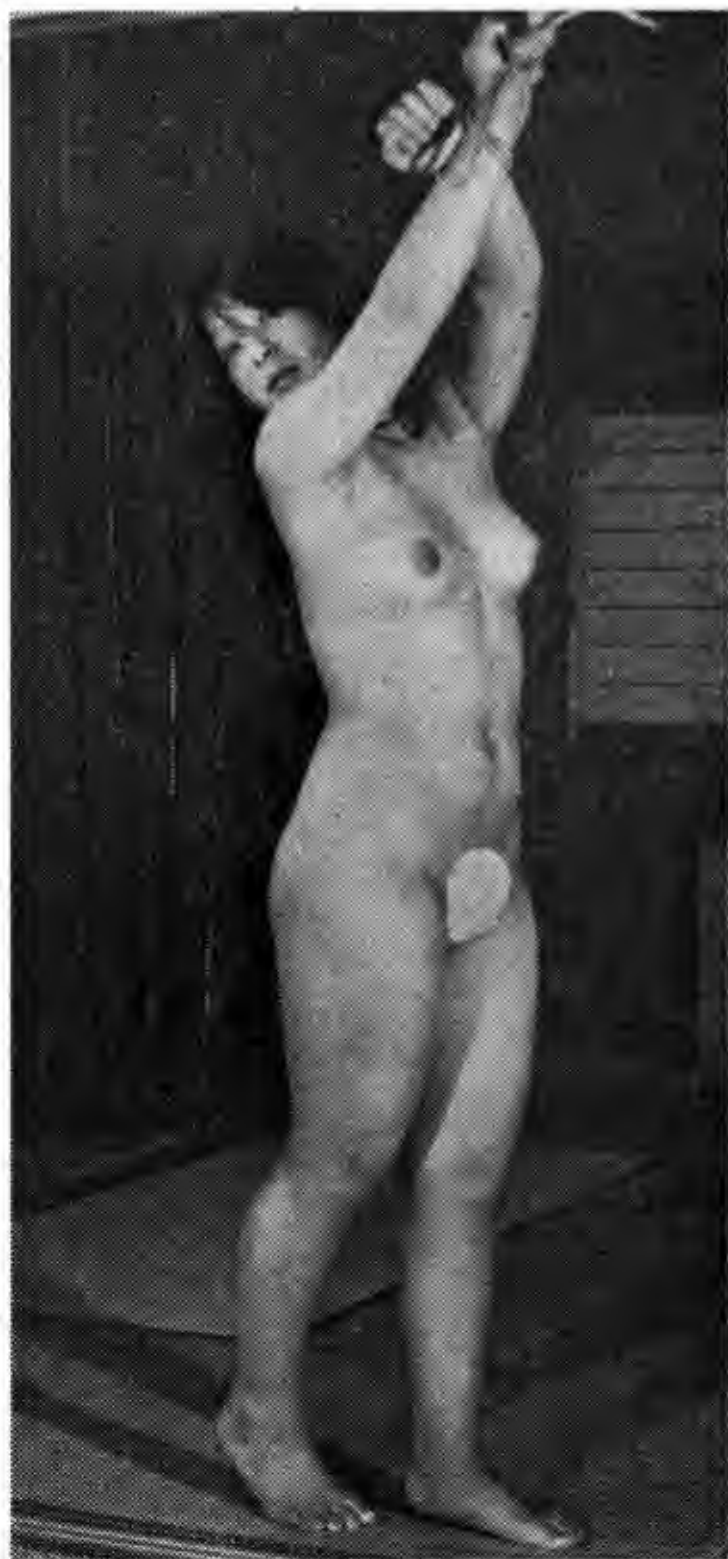
私が手にとると、先ず伊藤晴雨氏の華麗な色彩画が目射した。十二枚続きの肉筆の責絵で、晴雨氏の若い頃の作品らしく、雄渾なタッチで、十二支にちなんだ日本畫の美女が、さまざまな姿態で縛られていた。

それから、次々と取り出されてくる責画、縛り絵、私刑の場面、お仕置の状景などなど夥しい数の画が、いくつもの文箱に、ぎっし

りと収められているのであった。

「戦前から集めていたものですから、知らず知らずのうちに、こんなになってしまいました。これなんか、私が絵の内容を説明して、わざわざ、知人の画家に描いて貰いましたがSMに理解のない人でしたから、奇麗なばかりで迫力は、さっぱりないんです」

私が、その膨大な絵のコレクションに驚くと、予世場氏は金にあかして手に入れた蒐集品に対して事もなげに答えた。戦前の稀少価値のある集め難い時代には、情熱をこめて蒐めたけれど、今のよう解放されてしまうと集める気がなくなったとも言った。



「絵だけなんですか？」

「いやいや、絵もね、今、お見せしたのは、極く一部でして、私の書斎にしている隣の離室には、衣装箱に入れてあります。写真となると、ホレ、こんなにあるんですよ」

そう言っって部屋の隅に置いてあった柳行李を持ち出してきて蓋を開けると、無難作にハトロン封筒に入れた写真が一杯出てきた。

「ほう、これは、これは、凄い……」

私は、その夥しい量に声をのんだ。

すでに変色して茶色くなった古い時代のものから、最近の私の作品に至るまで、ぎっしりと行李に詰まっているのだ。

この絵、この写真——。こんなに沢山のものを、ゆっくり眺めていたら、とても、一日中かかっても見尽くすことは出来ない。

いやはや、まことに恐れいった量のSMコレクションだ。これを分類して保存したら、きっと、貴重な資料として残るのに——と、私は考えたが、彼は、どうやら、蒐集することとに情熱を燃やするような口ぶりだった。

「ねえ、塚本さん。あんたに、もう一つ、是非、お見せしたいものがあるんですよ」

「ほう、まだ、この他に、そんな大切なコレクションがあるんですか？」

「そう、コレクションといえば、これも大切なコレクションの一つかも知れません。でもこれは並のコレクションと違って、塚本さんも、一遍に、お気に召すでしょう」

予世場氏は氣を持たず言い方をする。

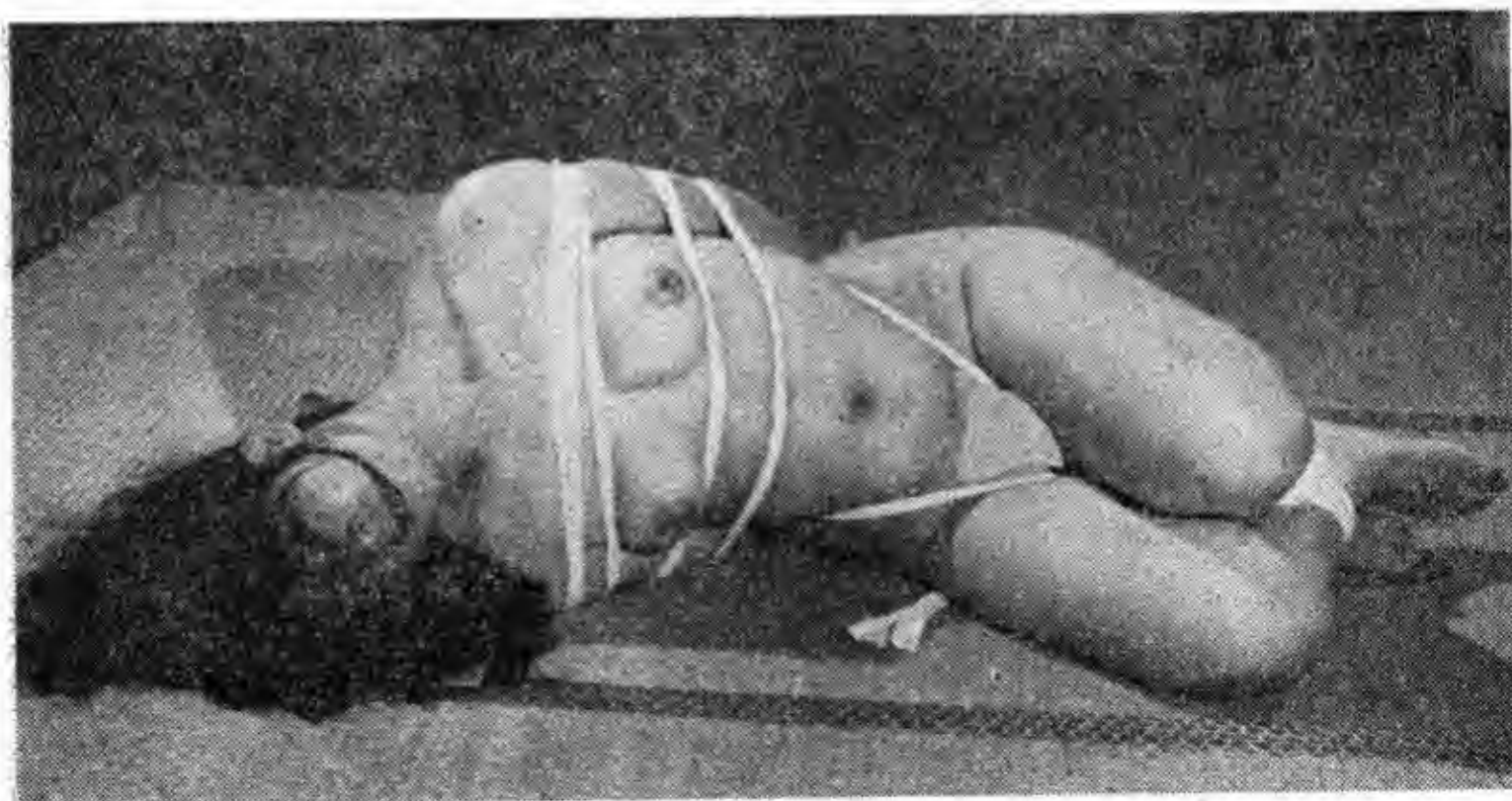
色の白い、小柄で上品な夫人が持ってきて下さった民芸風のそばを食べ終ってしまっても、一向に、彼の言う大切なコレクションなるものは出て来そうにない。

「それじゃ、塚本さん。車で来ておられるんでしたら、一っ走りしませんか。少し上の方になるんですが、私の片手間にやっている店があるんです。そう手間はとらせませんから一緒に行って下さいナ」

青蓮院の前の駐車場まで歩いて行き、そこから、予世場氏の案内で車を走らせる。

彼の指示通り、右だ、左だと言うがままに運転しているので、私には、何処をどう走っているのか、さっぱりわからない。三十分も走ったろうか。軒の低い家と家との間に木の柵をして「駐車場」と木札の立っている露天の広場に車を駐めた。

「ここからは車が入りませんから歩きましょう。歩いて、二分ほどですから……」
紅殻格子の家の軒が接する家並みの間を





突き当たると、目の前に、がっちりとした和倉風の建物の白壁が、でんと構えていた。

「私の別宅に求めておいたんですが、遊ばせておくのも勿体ないと思って、こんな民芸調のレストランを片手間にやっているんです。ちよっと休んで行きませんか」

そう言えば、予世場氏は、相当以前から、

西陣の工場の方を息子さんに継がせて、ご自分分は悠々自適の生活を楽しんでいるということを聞いていたが、こんな上品な店の経営者に納まっていたのかと、そのバイタリティに私は感心させられる思いだった。

見上げるような高い天井。踏み固められた土間の中央には囲炉裏があって、自在鉤が下

っていた。入口の

粹な暖簾、三方に

は座敷があつて、

そこで軽い食事な

んかも取れるし、

土間には、紺の可

愛い座布団を敷

いた縁台が、いく

つも置かれてあり

腰掛けて、そばや

ぜんざいを食べる

ことが出来た。

粹でシックな店

構えだった。いや

店というより、な

にか、旧家を訪れ

たような親しみと

心易さを覚えるの

だった。

そして、裏の庭がまた素晴しかった。背後の山を、そのままに取り入れて、滝の水が岩の間を不断に流れて、庭の真中にある池に注いでいた。展望台のように見晴しのよい山の中腹の亭までは、人一人が、やっと通れるくらいに幾曲りもの石段がついていて自由に昇れるようになっていた。

ウィークデイだというのに、幾組もの若い女の子のグループが、緋毛氈を敷いた庭の縁台の上で、汁粉なんかを食べていた。

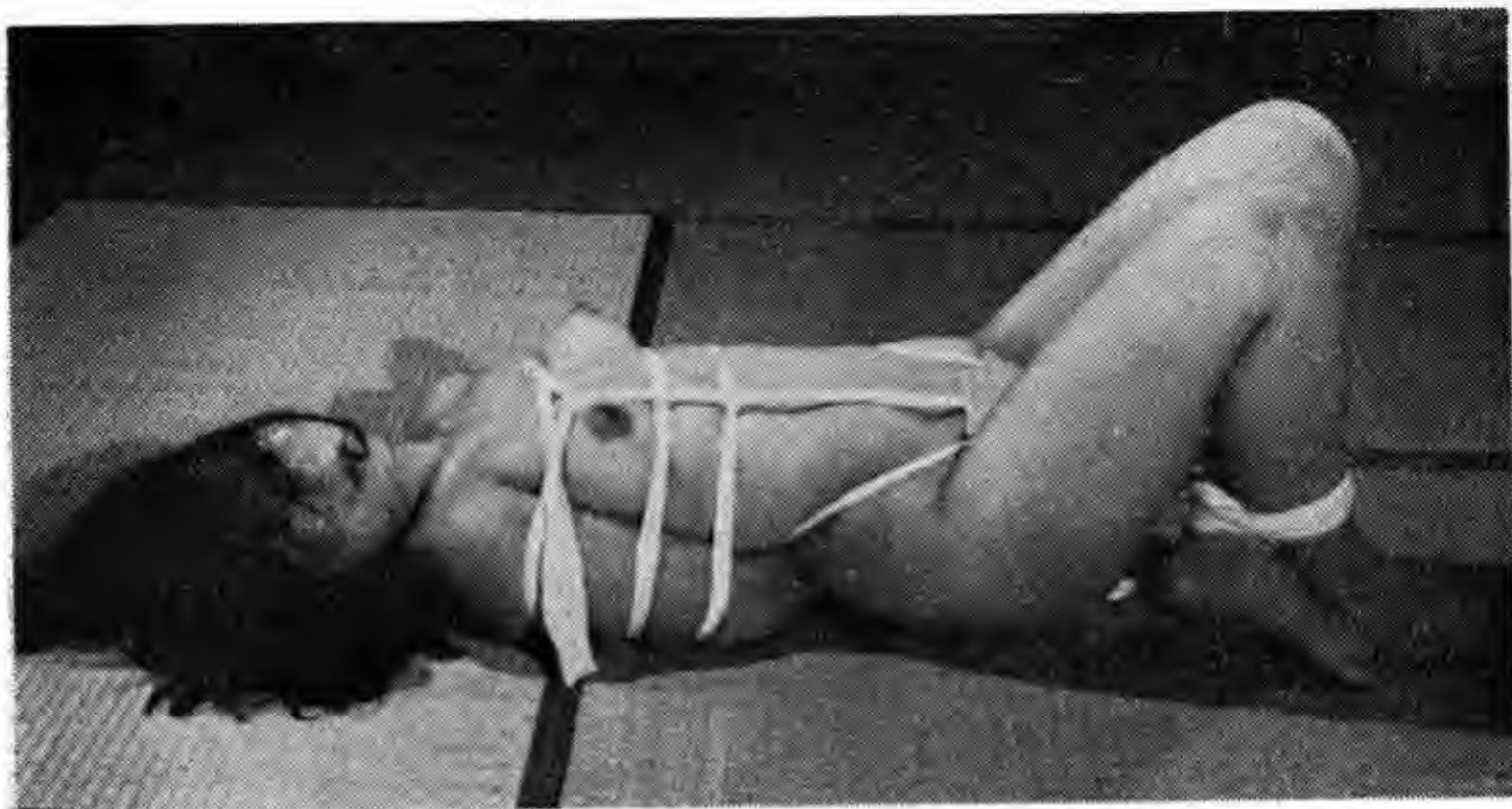
「二階へ上ってみませんか」

彼の案内で、黒光りのする、どっしりとした一枚板の階段を昇ると、二階の広い板の間には、数百点の民具、民芸品、郷土家具、調度の類が、整然と展示されていた。

「これも、私が永年に亘って蒐めたものなんです。息子なんか、親爺はガラクタばかり集めおって……と冷やかしていたんですが、今では、もう二度と絶対に手に入らないものもこの中には相当あるんですよ」

彼は鼻高々のような。さては、私に見せたと言っていた、もう一つのコレクションというのは、これなのか——と思った。

今は、無料で一般の人に自由に開放してい



るのだそう。板の間の中央に、手動の機はた織り機おが一台、置かれてあった。

「今から、これを動かしてみても貰いますからよく、見ていて下さいネ」

予世場氏は、私に、そう言ってから、階段口へ行って下へ向って呼んだ。

「キヨちゃんや、ちょっと、こちらへ、来てくれるかい」

超ミニの若い女の子が、形ばかりの前掛けを取りながら、階段を上ってきた。

「いらっしゃいませ」

愛嬌のある顔が、にっこりと笑った。

清純な顔立ち、笑うと、えくぼが可愛い。顔が小さくて、全体に細っそりした身体つきなので、とても背が高く見えた。

「やってみてくれるかい。このお客さんが見たいと、おっしゃるのでね」

女の子は、織機おの前の椅子に腰を下すとボタン、ボタンと足で踏みながら、布を織りだした。私は、その女の子の足の動きにばかり目を奪われていた。ミニのスカートから溢れている太股、素晴らしい肉づきの脚線美が、目の前で動いているのは目の毒だった。

——こんな足の持主の女の子の身体って、

どんなんだろうか——と、あらぬ妄想に耽ひたっている私だった。

☆

見晴しのよい亭ちんに、二人っきりで腰を下したとき、予世場氏は、私に言った。

「あの女の子なんです。私が塚本さんにお見せしたいと言っていた、特別のコレクションは……」

「ええっ、それは、一体、どういう意味？」

「あの子はネ、あれで、奇譚クラブの熱心な愛読者なんです。もっとも、最初は、私が見せたんですがね」

そこまで言ってから、人目がないのに、彼は私の耳元に口を寄せて囁いた。

「彼女は、あんたに、縛られてもいいって、言ってるんです。どうです？ 一つ、やってみませんか。縛られたことは勿論、今までに裸を他の男に見せたこともない純な女の子です。今年の春、二十才になったばかりですが、いい身体、してるでしょう？」

「身体もいいが、顔もいいですな。一遍に気に入りましたね。でも、縛られることは、本当に納得してるんですか？」

「若いときは、二度とないから、自分の美しい身体を、写真に残しておきたいって、

言ってみましたから、写真に撮られることは、承知してるんですよ」

「ほ、ほう、そりゃ都合だ。それで、縛られる方も脈ありそうですか？」

「実は、彼女の母親が、私の若い頃、うちの機織り女でしてね。越前の越廼村の出なんです。そんな縁で、彼女に、こちらの店を手伝って貰っているんですが、純朴で、大人しくて、上品で、よく働く子なんです。母親の若い頃とそっくりなんです。それがね、今年の三月だったかな、栗田口の家へ使いにきたとき、偶然、奇譚クラブが届いたところだったもんで、何の気なしに、あの子に見せたいんです。そうしたら、すっかり興味を示してしまっ、それ以来、愛読しているんです」

「ふん、ふん。どんな個所に興味を持って読んでいるんでしょうかね」

「そうなんです。私も、それが知りたくていろいろ話し合っているうち、あの子の緊縛カラーフォトをコレクションしたくなりました。それとなく口説いてみたら、最初のうちは、羞かしいとか、なんとか言ってたんですけど、雑誌の口絵なんか眺めているうちに、私もやってみようかしら」と言うように、なっただけですよ。だから、前田真知子さんの

ようにまではいきませんが、縛られることは納得してる筈です」

「そりゃ、益々以て有望ですナ」

「でしよう？ だから、今日は、塚本さんに下見しておいて貰って……というわけで、お連れしたってわけです。どうですか？ 物になりそうですか？ よけりゃ、一つ、縛り写真を撮ってやってみてくれないか」

「私が彼女に対する初縛りってわけですか。こりゃ、願ってもないタナボタですな。是非、写真に撮りたいものです。裸にしたら、どんなに素晴らしいことだろうなあ。そんなことを考えるとぞくぞくしてきますよ。さっきはそんな気持ちで見なかったけれど、そうときまれば、帰りしなに、もう一度、ゆっくりと、彼女を拝みたいものですナ」

「どうぞ、どうぞ。彼女は店にいますから、何か、好きなものでも注文して、持たして寄こしたら、いいでしょう。彼女には、あんたが塚本さんとは云っていませんから、とっくりと、ごらんになって下さいナ」

私たちは亭を降りて座敷へ戻った。



「キヨちゃん、ちょっと、おいで——」
「はい、何か……」

円らな瞳が、ぱっちりに見ひらいて汚れない明るさで顔を覗かせた。

実は、この日、私は予世場氏に立替金の支払いを済ませたら、すぐ、その足で帰宅する予定だった。シーラ・ケニーという白人女性を紹介して貰ったことのある将棋友達の徳田圭之助（彼のことは、昭和45年6月号のカメラ・ルポ『金髪碧眼の美女を縛る』のなかで詳しく書いた）から直接伝授を受けた金儲けの二件で、人と会う約束をしていたのだ。

それが、予世場氏の人をそらさない応接の巧みさにつられて、次々と時間が経っていつてしまった。私は内心、気が気でなかった。

しかし、また反面、気がせくからこそ、忙中閑あり——という気持ちもしないでもなかった。これが、退屈で退屈で、しょうがないときであつたら、このように、この閑静なたたずまいを心から楽しむ気も起らなかったろうし、また、このピチピチとした美女の余香をこれほどまでに賞^めでる気にも、なれなかったかも知れないのだ。

忙しいことは良いことだとまでは言わないが、まあ諦めて、頑張ることにしよう。

☆越 前行

六月上旬に梅雨入りして以来、毎日鬱陶しい日が続いた。

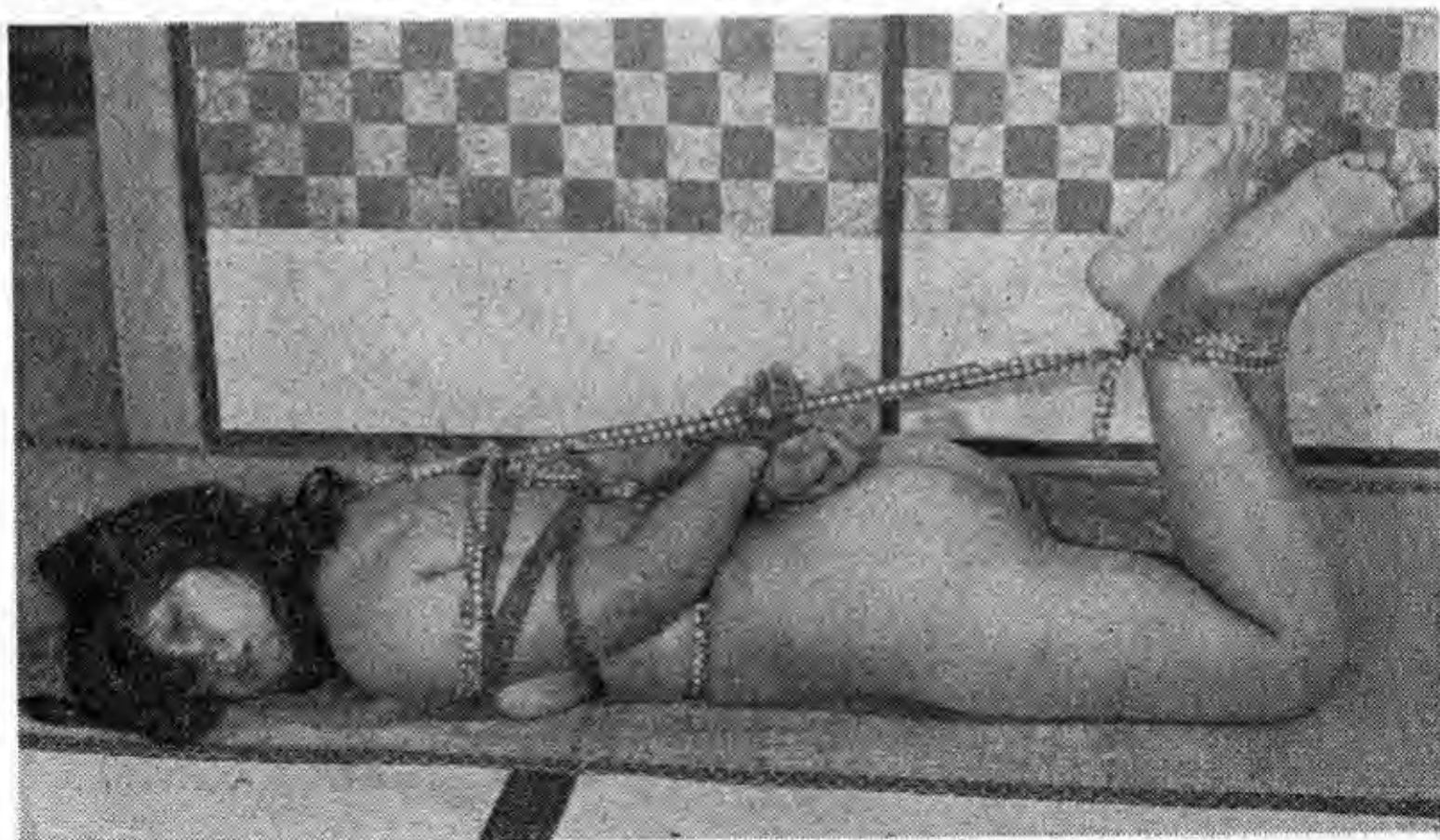
六月という月は、私にとって、思わぬ忙しい月になった。事業を多方面に拡げた関係もあつて、東奔西走、休む日とてなかった。

徳田圭之助から伝授を受けた金儲け哲学の秘伝実践の方は、順調に進捗していたが、その方で手を取られるのは嫌だった。金には一文にもならなくても、カメラ・ルポで走り回っている方が、うんと楽しかった。

矢島靖子と浜松で邂逅したり、渡部好美夫人を野崎貞二と一緒に責めたり森田美美子と逢ったり、それに、S研の人達とも、寸暇をさいて会合したり我ながら、マメに動きまわったものだと呆れるほどだった。

予世場良三氏の栗田口の邸宅を訪れてから、いつの間にか、一ト月以上経っていた。

そして、私は、あの日、彼が紹介してくれた堀貴代子という女性について





も、忙しさに取りまぎれて、いつとはなしに忘れていた。

予世場氏は私に気を持たせるような、あんな

な言い方をしていたが、彼女自身の意向を確かめたわけでもなし、その場限りの話にしておいた方がよいと思っていたからでもある。

それというのも、二十才という彼女の、余りにも、あどけない純朴そうな顔つきを見ていると、素裸にひん剝かれて縄で縛られるなどとは、とても思えなかったからだ。

それと、もう一つ。私はあるロマンチックな物語を組立てていた。

予世場氏の若き日の恋人が、彼女の母親であるような気がして、仕方がないのだ。

工場の若主人と機織り女はたおめとの恋。これは、ありふれた市井のロマンスだ。勿論昔風の両親が、そんな恋を許す筈はない。おきまり通り、機織り女は故郷へ帰って平凡な結婚。彼もまた、身分、家柄の

釣り合った、良家の教育のある娘と幸せな結婚。そして、二十何年経った今、彼は、堀貴代子という娘の倅のなかに、嘗ての恋人の姿を見たのではないだろうか。まさに、——倅見えて懐かしく——という流行歌の文句通りに……。

そして、せめて、彼女の緊縛姿態を眺めて嘗ての恋人の上に果し得なかった占有欲を、改めて、形を変えて満足させたいという思いが、あのような言になったのだろう。

と、というような構想が、私の頭のなかで渦巻くように、でっち上げられていった。

若し、この物語を、予世場氏に話したら、『そんな馬鹿な……』と一笑に附すか、或は『流石に塚本さんだ。よく、そこまで、推測されましたナ。その通りなんですよ』と白状するか、それは、わからない。

ただ、予世場氏が、彼女の母親のところへ福井県丹生郡越廼村某崎——と、はっきり、空で覚えているあたり、恋人のところへ、何度も手紙を出している証拠と私は見た。

☆

六月の末、予世場氏から電話がかかった。「塚本さん、いけますよ。一緒に行きましょう。いつか、いいですか？」



「ええっ？ それなんのこと？」
「ほら、堀貴代子のことですよ。
この前、お話ししたでしょ。写真を
撮るって……」

「ああ、あのこと」

「なあんだ、もう、忘れてしまっ
ていたんですか？ いやになるな
あ」

「いや、そうじゃないんだけど
余り、突然だったもんで、まごつ
きましたよ」

「彼女、今、故郷へ帰ってるんで
すが、私は母親にも逢いたいし、
行こうと思ってるんです。それで
塚本さんと御一緒出来たらと考え
ているのですがプレイの方は、彼
女のOKをとっていますから、や
れますよ」

話はトントン拍子に進んだ。

あの堀貴代子の緊縛写真が撮れ
る——となると、俄然、私のSM
的な意欲が、グンと盛り上ってき
た。

服を脱がしたら、どのような裸
が現われてくるだろうか。あの可

愛い顔だったら、きっと、ヌードも素晴し
いだろうなあ——と空想したり、縄を掛けた
ら、どんなにして悶えるかと想像すると至極
楽しかった。

そうときまれば、一刻も早く、堀貴代子な
る可愛い女性を縛りたかった。

六月末から七月にかけて、連日雨だった。

予世場氏はドライブで福井まで行こうと言
う。私は雨の中の運転は余り好まないのだが
と返事したが、それだからこそ、向うへ行っ
てから便利なんだ——と、執拗にせがむ。

そんなわけで、車だったら、荷物も余分に
持てるし、撮影場所へ行くにしても便利だと
いうことで、ドライブを兼ねて彼女を訪ねよ
うという彼の意向に押し切られてしまった。

七月三日。

天気予報では、雨と言っていたが、予想に
反して、よいお天気だった。

早朝、私は約束通り、予世場氏の屋敷を訪
れた。彼はハンチングなんかをかぶって、ま
るでゴルフへでも行くような格好だ。

京都東I・Cから名神高速道路に入って、
彦根I・Cまで飛ばす。早朝なので車も少な
くて快調だ。昨日まで降り続いた雨も、今日
はすっかり上って路面の状態も、タイヤがび

ったりと密着した感じで至って運転しよい。左右の山々も、美しい緑に囲まれて、窓を開けると、むっとする草いきれのような樹々の匂いが、むせかえるようだ。

二人の共通の話題といえば、やはりSMに関することだ。奇譚クラブは古くから読んでいる予世場良三氏のことだから、あのときはこうだった——と、話の継穂には、事欠かない。でも、彼は、戦前の伊藤晴雨氏が活躍していた頃からの女体責めファンで、伊藤竹酔氏の『粹古堂』の常連だったというのだから、戦後派の私なんかから比べれば、彼は先輩に当るわけだ。

そんなSM的な話題を別として、予世場氏は、やはり事業家として長年、事業の経営に当たってきた人だけに、なかなか、気むずかしいところもあるようだ。

私と逢うまでは、△責画▽や△縛り写真▽の蒐集という自分の殻にとじ籠って、他の人と話し合ったりすることは、ついぞ一回だっ

て、なかったらしい。だから、先日、「前田真知子嬢を囲むダベリ会」に、無理に引っ張りだしたといったって、彼の方から、わざわざ、私に電話をかけてくるというのは、余程のことだろう。

もしかしたら、前田真知子嬢の若々しい肢体を直接眺めたことによって、彼の心情に、或種の変化を齎したのかも知れない。

なんだかんだと話し合っているうち、いつの間にか、彦根I・Cに着いた。（実際はSMのことばかりじゃなく、一般的な世間話も多かった。でも、それは、この稿では関係ないし個人的なことは読者の方には興味ないと思うので一切、省くことにする）

彦根からは国道8号線に入り、琵琶湖北岸の波打際の快適なドライブウェイを疾走、それから山道に入って峠を一気に通過、暫くすると敦賀に着いた。

敦賀からは左側に日本海の断崖を望んで走る風光明媚なコースだ。国道8号線は滋賀県から、すでに福井県に入っていた。

敦賀湾の向うには、半島が青い寝姿を見せている。晴れているので日本海も波一つなく



風いできて、至って穏やかである。海の見えるドライブインへ寄って軽い食事をする。

彼は其処から電話をしていた。

「福井駅へ午後一時に来るように言っておきましたから……」

戻ってきた彼は、私に報告する。

敦賀道路のいくつものトンネルをくぐり抜けると、国道は海岸線と別れを告げて内陸へと入る。車が非常に少ないので至って走りやすいので助かる。両側が田圃の平坦な道、それが真直ぐに続いている。ともすれば、睡魔に襲われそうな変化のない道だ。

彼との話題もつきた格好だ。クーラーを少し強目にして、スピードアラームを制限速度いっぱいセット、あとは車の走るにまかしておいた。予世場氏は、快い車の振動に身をゆだねて、私の傍で軽い鼾をかいている。

ドライバーとしては、横で寝られると、こちらでも眠くなって困る。私は唇をぐつと歯で噛みながら睡魔と斗っていた。

やがて福井市内。予定より大分、早く着いた。案内標識に従って福井駅の方向、左へハンドルを切る。道路の両側には、新しい近代的な建物が建ち並んでいる。新興都市という感じが、私の目には映った。



約束の時間には、まだ相当、間がある。それで、時間待ちを兼ねて食事を執るために、レストランへ車を乗り入れた。

広い駐車場だ。隣が、輪島塗と九谷焼の土産物を陳列してある店で、レストランも極めて都会風だ。北陸といえば、暗くてジメジメした田舎といったイメージを持っていた私に

とって この洗練された明るさにはカンが狂わされた。

食事をしながら、彼と、これからのプランについて打合わせをする。

午後一時から四時まで、近くのワンルームワンガレージ式のモーターへ行って、堀貴代子の緊縛姿態を撮影する。その後、越前海岸

の彼女の家へ行って一泊。翌日、京都へ帰ろうという彼の企画であったが、私は明四日には、どうしても人と会わなければならぬ用件があった。これが、宮仕えであつたら、休暇をとるとか、俄ニセ急病の手も使えるのだが、それが宮仕えでない悲しさ、彼の言うように、加賀温泉郷めぐりをやっているわけにも、いかなかった。

それで、撮影が終つたら、二人を越廼村まで送ってゆきその足で、とって返して私は大阪へ、帰ることに決めたのだった。

☆初縛りの感激

ノースリーブに超ミニ、全くの夏姿の堀貴代子を駅前で拾って再び国道8号線にとつて返す。国道沿いには、ドライブインやモーター、土産物店などが軒並み新しく建っている。それ等のなかで、一番新しく、広そうな所を選んで車を乗り入れた。

堀貴代子は、予世場氏から

前以て何を聞かされておったのか、私の顔を見るなり、恥かしそうに顔を伏せたまま、無言の行を続けている。ここは、やはり選んできただけあって長椅子、ソファを置いてカーペットを敷きつめた洋間があつて、その奥に、八帖と十帖の和室が二間あつた。置いてある調度品も、すべて真新しいところを見ると

建ってから、まだ、いくらか経っていないらしい。

私は洋間のソファの前のテーブルの上に鞆二個を置いて、カメラや照明用具を並べていった。予世場氏は、冷蔵庫からオレンジ・ジュースを取りだしてきて彼女のためにコップに注いでやっている。普通だったら、主人



である彼が……である。どうも、男性はいくつになっても若い女に対してフェミニストぶりを発揮するものらしい。

堀貴代子は、こわばった顔つきで、如何にも緊張したといった面持ちである。こんなところへ来るといふのも生れて初めての経験なのだろう。私としては彼に一切まかせであるので、彼女のことは彼の誘導を待つことにして専ら撮影の準備に掛かっていた。

二つの部屋の間の襖をはずすと、鴨居があらわれた。どちらの部屋から撮るにしてもヒケが十分にあるから、吊り責めをするのには、もって



来いだが、初縛りの堀貴代子に対しては、それは、とても無理だろう。

それよりも第一、彼女が自分の本心から、自発的に「縛られたい」と思っているのか、どうか、それさえ私には疑問だった。彼女の口から直接、一言も、そんな意向を聞いたことがなかったからだ。すべて予世場氏の口を通しての話なのである。

私が部屋の中で撮影の準備をしながら、何度も、道具やカメラを取りに洋間へ足を運んだが、彼女は、じっとソファに腰を下したまま、身体を堅くして無言の行を続けているばかりである。

この前、「ダベリ会」のときの経験からして、予世場氏も書斎派から脱して、実践派に宗旨替えをしたのか、盛んに私の手伝いをし

てくれる。三台のカメラに、それぞれ、コダカラーのリバーサルとネガフィルム、ネオパンスフィルムを装填して準備を終った。

もう大分以前のことになるが、奇クに専属で責絵を描いていた四馬孝氏と、一緒に話し合ったことがある。

「生まれてこの方、まだ一度も縛られたことのない、また人前で裸になったことのない無垢の若い女の子を、二人で初縛りにしたいものだ。そして、その限らない羞じらいに満ちた緊縛姿態を絵と写真にしたいものだ」と。

四馬孝氏は勿論、私と同様、絵を描くことを専門にしているプロではない。いわば、好きでやっているアマチュアであり、しっかりした本業を持っている人であるが、しかし、SMに関しての眼は確かなものだった。

彼の責絵を見ても、よく判るように、彼独特の革具を用いた責め、それに美女の鼻責めに見られる特徴が彼の好みでもあるわけだ。

そうした強烈な個性を持ちながらも、四馬孝氏の美女好みというか、面クイというか、容貌ばかりかプロポーションに至るまで、その要求には厳しいものがあつた。

縛らせるのだったら、どんな女でもよいというのでは決してなかった。

その点は、私のように美醜老若男女を問わない——といったなんでも喰いなのに比較すると、ずっと純粋なような気がする。男性は勿論のこと、女装の男性もOKと対象を拡げすぎると、益々エキセントリックに思われるかも知れない。

今、四馬孝氏のことを、ふっと思いうかべたのは、この堀貴代子のような無垢の女性だったから、さぞかし、彼の氣に入るに違いないと考えたからだ。

美しくて若い女性を、美しく縛ってソフトタッチで責めたい——というのが彼の主義であるようだった。彼と一緒に女を責めたというのは十回ぐらいだったろうか。四馬孝画という責絵からは想像できないフェミニストぶり、女の肌を、こわごわ縛っている彼の傍が目に浮かぶようだ。

さて、準備が出来たところで、私は予世場氏に声を掛けた。

「用意が出来たから、来てもいいぞ」

予世場氏が堀貴代子に、早く和室の部屋へ行くように勧めているような気配だが、なかなか、こちらへは姿を見せない。冷房をしているので、窓にはカーテンが、ぴったりと閉じているが、合わせ目からは、強い陽光が射

し込んで、お天気の良いさを示している。

カーテンをかぶると、むっとする熱気。窓を開けると、裏は一面の田圃である。田圃といっても勿論、作物を作っているわけでもなく、いざれ分譲住宅か何か、建てるのだろうか、空地になっているのだ。

何処も同じ、都市近郊の宅地造成地のありふれた風景だ。

福井市だから、モータールといっても、少しは変わっているかと思ったが、建て方も内装も何も彼も、大阪近辺と余り変りないのには、



驚いた。

のんびりとモータールの二階の窓から周囲を眺めているというのも暢気なものだ。今日中に大阪まで帰らねばならないというのに、果して、それまでに写真が撮れるのだろうか。

人の気配に、窓を閉めてふり向くと、堀貴代子が、厩所に引かれる小羊のように、予世場氏に背中を押されて、しょんぼりと立っていた。

「裸になるのが、どうしても恥かしいって言うもんですからね。口説いていたところなん

ですよ。この洋服でも、腕と足は出ているんだから、胴体を脱ぐだけだとね……」

「だってエ、私、恥かしいんですもの」

「一思いに脱いでしまったら、さっぱりするよ。こんな立派な身体のスードを見せるんだから、むしろ、誇らしいくらいの気持にならなくちゃ駄目じゃないか」

「でも、でも、私、毛深いんですもの。そんなの、見られたら、恥かしいわ」

「思いきって、脱いでしまったら、それです、覚悟が出来てしまうものだよ」

「さっと脱いで、また、すぐに洋服を着てもいいんですの？」

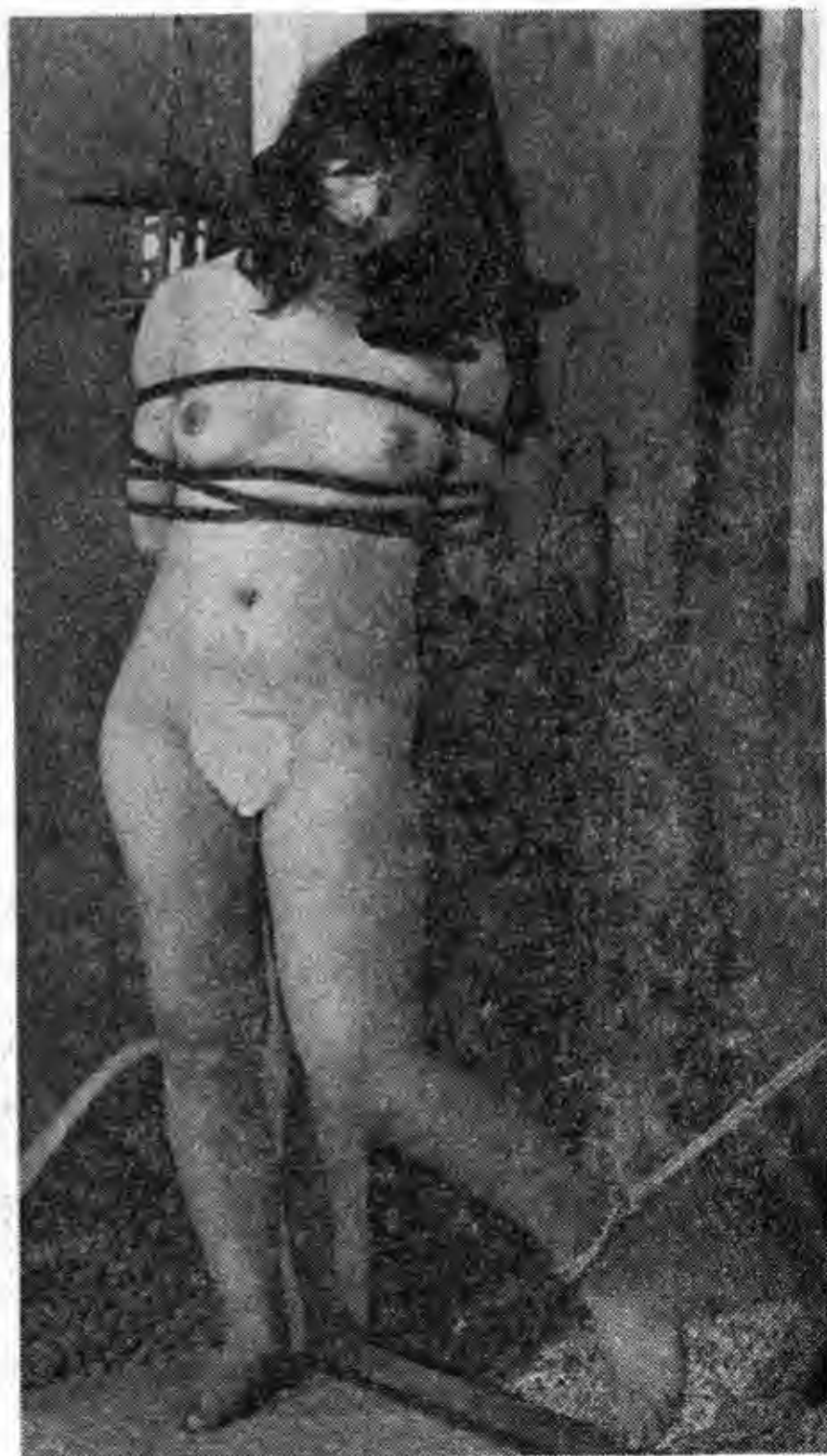
「そういうわけには、いかないよ。脱いでから縛らなきゃいけないし、それに、写真だつて、撮らなきゃいけないだろう」

「だったら私、恥かしいわ。とても、そんなこと出来そうにないもの」

「心配しなくてもいいよ。僕が、その洋服を脱がしてあげるから……」

「うわあ、恥かしいわ。じゃあ、自分で、ぱっと脱いで、ぱっと洋服着ますわ」

「何を言ってるんだよ。素裸になってから縄で縛るんだよ。それから、ゆっくり、写真を撮るって、寸法なんだ。わかった？」



「手も括りはるの？」

「そうだよ」

私は、ゆっくりと彼女に近づいて、洋服に手をかけた。

「恥かしいわ、裸になるの。それに、括られてしまったら、手で隠せないもの……」

「そんなに、恥かしいかい？」

「ええ、そりゃ、もう……」

横から予世場氏も脱衣を手伝う。

「まだね、誰にも、裸を見せたことが、ない」

らしいんだよ。どんな裸をしてるか、私も、是非、見たいと思ってね。縄で縛られたら、そりゃ、見事な写真に、なると思うがね。それから、塚本さん、最初に、カラーでヌードを撮ってやって下さいナ」

「いやヨ、いやヨ。そんなの恥かしいわ」

女の子の身に纏っている布片なんて、一つかみしかない。ノーブラだし、忽ちにして、パンティだけになってしまった。

堀貴代子は、胸を両手で押えたまま、立ち

すくんでいる。

「さあ、そいつは、自分でとるんだらう？」

「ねえ、これも脱ぐの？」

「そうだよ。それを脱ぐとね、キミの身体が何倍も、きれいになるよ」

「いやあ、かなわんワ。どうしても、脱がなきゃいけないの。私、毛深いのヨ」



「毛深いの、大いに結構。さあ、脱いだ、脱いだ。自分でよう脱がないんだったら、手を縛っておいてから、こちらで脱がそうか？」

「ああ、脱ぎます、脱ぎます」

彼女は、その場に、うずくまってしまう。

「キヨちゃん、早く脱がないか。そんなことしてたら、時間ばかりたってしまうじゃない

か。今日は、これから越廼村まで送ってもらって、塚本さんは、また、大阪まで帰らにやならんのだよ」

「ええ、わかってるわ。だから、見ないで。そっちを向いていて……」

彼女は、うずくまったままで、パンティをずらすようにして脱いでから、まわりを見まわして、それを前に当てた。

見ていた私は、一瞬、小麦色の彼女の肌が腰のあたりから背中へかけて、パツと紅葉を散らしたように赤くなったのを見た。

素裸になってしまった堀貴代子は、部屋の中央でうずくまったまま、じっと立てないでいる。私は、彼女に対する第一発目の閃光を放った。カラーとモノクロの各々一枚。

カメラを置いてから、ロープを手にして、彼女の背後へと回る。赤くなった肌は、今でもピンク色に染まったままだ。

ふっくらとした柔らかい肉づきの手首に、白いロープを巻きつけると両手首を揃えて括り、頭上へ引き上げた。

「さあ、立つんだっ」

縛られた両手を引っ張られて、よろよろとよろめくように、彼女はイヤイヤをしながら立ちあがって、私の導きに從って歩きます。

鴨居の前に来たとき、縄尻を放り投げて通しておいて横木に結びつける。

彼女は自由になる身体を、くるくると回すと、前を隠して、お尻ばかりを、こちらへ見せようとする。そのお尻さえも、私から見れば格好のよい可愛い肉の膨らみだ。

可愛いといっても、流石に娘のお尻だ。

皮下脂肪のたっぷり沈着した、豊富な肉塊なのだ。着やせするタチなのか、お尻ばかりじゃなしに、太股も逞しく太いし、胫も大根足とまではいかないが、かなり太い。

私はチラッと見ただけで、貴代子の裸身の品定めをやった。

「思ったよりも、太ってるじゃないか。それに、逞しいくらい、肉づきがいいナ」

私は予世場氏の耳元でささやく。

「そりゃ、漁村育ちだからね。小さい時から力仕事をしてるんだらう」

「上半身よりも下半身に、肉がつきすぎるく



らい、ついている。洋服を着ているときは、そんなに見えなかったんだがナ」

「とにかく、いい身体だ。こりゃ素晴らしいヌードじゃないか」

堀貴代子は、私たち二人の男性に、ジロジロと裸身を眺められて、消え入りたげに、恥かしそうだが、両手を縛られて上へあげさせ

られているので、逃げだすことも、前を隠すことも、どちらも出来ない。

ただ、全身をくねらせて、私たちの方へ、お尻を向けているのが、せめてもの救いなんだろうが、それだけに、その肉がたっぷりについて形のよい臀部や、お尻の膨らみから太股へ移ってゆこうとする凹凸までを、すっかり鑑賞の目に晒してしまったのだ。

そんな、恥かしくて、恥かしくて、たまらないといった貴代子の縛られの裸身に向ってカメラの焦点を合わせる。

肩、背中、お尻、太腿――

黒子一つない、すべすべした肌だ。むっちりとした今を盛りの若々しい張りきった肌だ。

だが、肌の色の方は、あの前田真知子のような抜けるような白さではない。漁村育ちと言われる通り、小麦色の健康色で、それが、恥じらいで赤くなっているのである。

身体全体から比較して、小さ目の顔が、私

たちが何をしてるのかと窺うように、そっと視線をうしろへ向ける彼女――。

私はカメラを予世場氏に渡しておいて、彼女の背後へと迫る。

「美しい。実に、美しい身体だ。こんな見事なプロポーションの女の裸を、見たことがない。本当に素晴らしい。逆三角形が男性の裸体美だとすれば貴代子は三角形の女性美だナ」私は彼女のお尻へ手をやって、その、えも云えぬ感触を、たっぷりと味あう。

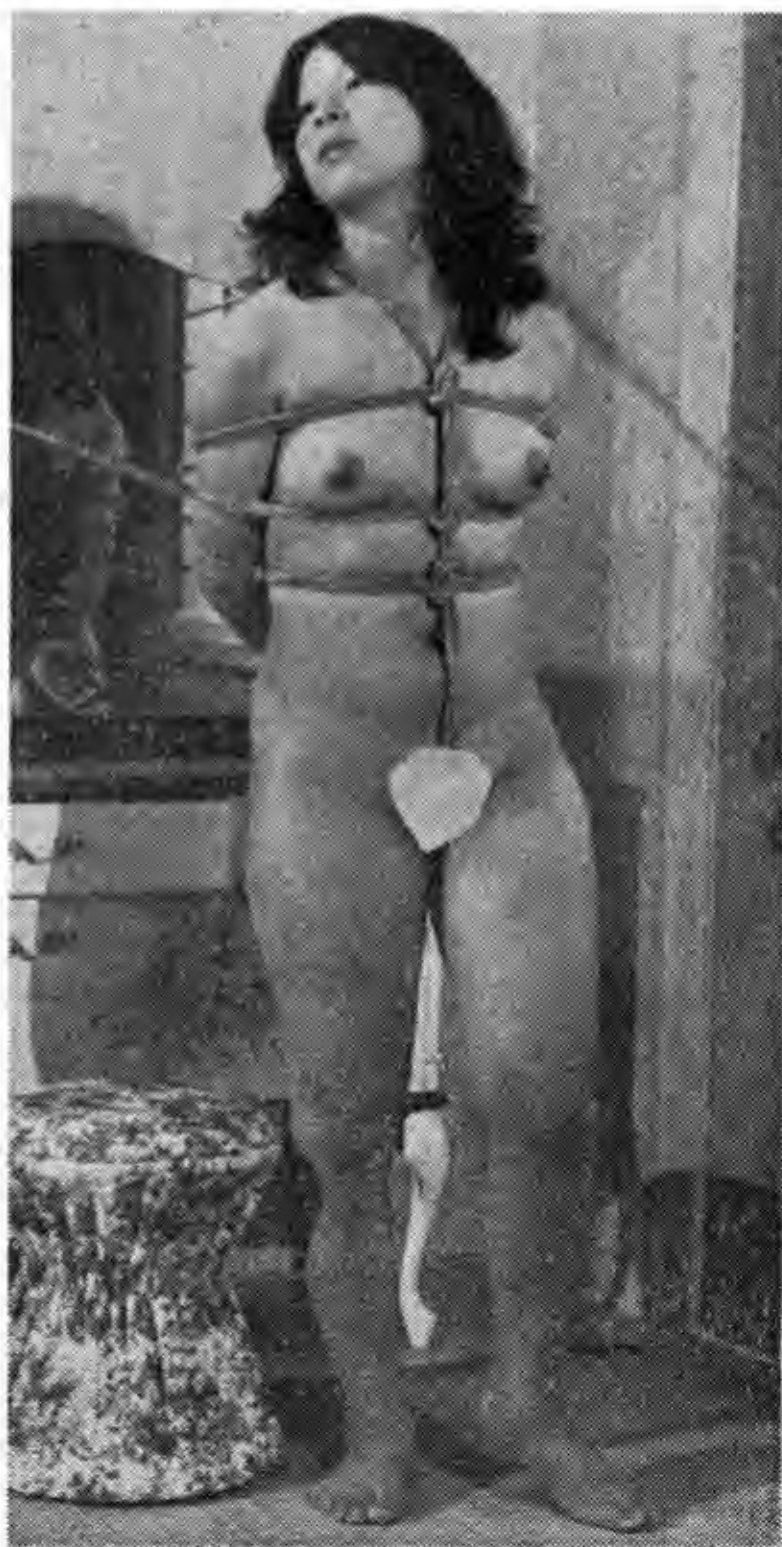
「あああ、よして、よして……」

彼女は、全身をうねらせて恥らう。お尻を前へ突きだして、少しでも、私の触手から逃げようとするが、両手を吊られているため、くると、身体が一回転して、前が私の方へ向いてくる。それは、彼女にとっても不本意だろう。熱い吐息が私の頬にかかる。

その回りっぱなの、むっちりした腰を、私は両手で抱えて、自分の方へ向けさせる。

「ああ、私、毛深くって、それで、恥かしいのよ。見ないで、見ないで……」

両手を挙げさせられた完全に無防備な堀貴代子の裸身の正面が、二人の目の前にむきだしになった。二十才になる今日まで、誰の目にも触れさせなかった無垢の裸像だ。



大きからず、さりとて、小さからず、適度の盛りあがりを見せた、まさに花なら今にも咲きそうな蕾の膨らみが、頂点にピンク色の乳首をのせている。

きゅっと、くびれたウエストに目をやるとペコンと窪んだ可愛い臍窩が、彼女の喘ぎにつれて、息をするように動いている。

両手を縛って、このように吊っておかなければ、とても眺めることの出来ない素晴らしい女体風景である。

彼女が自分で心配するほど、そんなに毛深いということとは決してない。二十才という年

令からして、少し房々しているようだが、顔があどけない少女なのに比べて、下半身が、これだけ十分に成熟しているのだから、それも当然といってよいだろう。

「ねえ、手がだるいの……」

彼女が控え目に、恥かしそうに訴える。

十二分に、自分の全裸の隅々までを眺めつくされ、諦めきった気持になったとき、始めて、揃えて挙げさせられている手のことに気がついたのだろう。

「待て待て、これから写真を撮るからナ」私は慌ててカメラを向ける。

写し終って予世場氏が両手の縄を解くと、彼女は、その場にうずくまってしまった。

「まず、括られていた両手首に視線をやる。そこには、むごたらしいと見えるまでの深い縄の目が、縄の形そのままの窪みを皮膚の上に、くっきりと残している。」

彼女は、そこに、じっと、しゃがんだまま立ちあがろうともしない。

私たち二人は、洋間へ戻って、深々とソファに腰を埋めて煙草をくゆらす。

「彼女、いい身体をしてるじゃないか。時間があつて、ゆっくり飼育することが出来たら素晴らしい緊縛写真が撮れると思うがナ」

「今度一回限りって、いうことで一応は納得してるんだが、もし、私の店を引続いて彼女が手伝ってくれるんだったら、京都で撮る機会もあると思うんだ。あんたも、こんなところまで、そう度々来れないだろうからね」

「そうだな、ここまでは、そう度々は無理だね。だったら、今日は時間の限り、撮るだけ撮ってみるとするか。それはそうと、彼女、あんたの店へ帰ってくるんかね」

「それが、複雑な家庭の事情だね。彼女の母親というのが主人を若くして亡くして、彼女を連れて今の家へ再婚してるらしいんだよ。」

その家というのが、夏場だけ、今流行りの民宿をやっているね。冬は雪で駄目なんだそうだが、夏になると越前岬とかいって、人が集まるんだそう。いわば、これからが、かき入れどきって云うわけだ。それで、彼女を呼び戻したっていうことなんだが、彼女自身はやはり、家には義理の父親や兄姉があつて、

居辛いらしいんだ。私は、今夜は、その民宿に泊まろうと思ってるんだがね……」

「彼女の母親に逢いたいって、わけか？」

「そういうわけじゃないんだが、どうしてるかと思ってるね」

「昔の恋人なんだろう？ 逢いたいって、顔に書いてあるよ」



「おい、冷やかさないでくれよ」

予世場氏は年甲斐もなく赤くなる。

彼女の母親というのだったら、きっと綺麗な人なんだろう。時間さえあれば、私も、その民宿に泊りたい気がする。

新鮮な魚介類、日本海の荒波。なんだから、鼻先に磯の香がプンプン匂ってくるようだ。へ彼女の母親に逢いたいために、私を、こんなところまで一緒につれてきたんだろうV

そんなことを考えたが、私は口に出しては

言わなかった。

「よし、次をやろうぜ」

私はソファアールから腰をあげた。

☆悩ましい股間縛り

和室の部屋へ戻ると、堀貴代子はバスタオルを胸に巻いたままドレッサーの前のスツールに腰を下して、自分の顔を鏡に映している

ところだった。

「どうだい？ 初めて縛られた感想は？」

「とっても恥かしかったわ。裸になったまま手が縛られているのですもの、前が隠せなくなって、恥かしいったら、なかったわ。これから、まだ、縛りはるの？ もう、おしまいじゃなかったの？」

「今のは、ほんの手初め。これから、いろんな紐や縄を使って、じゃんじゃん、縛るんだよ。そうしたら、貴代ちゃんも、縛られることが大好きになると思うがナ」

「うあー、うち、かなわんワ。そんなの」

「そんなに、心配することなんか、ちっともないんだよ。ホラ、立ってごらん」

私は彼女の背後から腕を捉って、白晒の紐で縛っていった。

私は、この白紐を長時間の羞恥責めを加えるとき、手足の拘束のために、よく用いた。ひどい痛さや縄痕を残さない割りに、自由を束縛して自己を支配下に置くことが十分に出来るからだ。

疼痛や血行障害がなくて、被汚辱感だけがあるの、被縛者にとっても都合良かった。

堀貴代子に対しては、最初から、肌に痛いトゲトゲの麻縄でギリギリと縛り上げて一度





に、びっくりさせてしまっただけでは得策ではないので、徐々に馴らす意味で、この白紐を用いたのだ。

まるで太った、如何にも若々しい乙女の肌を、白い紐で、くびっていった。

手首も足首も、括られてしまっただけで、もう自由で、自分の思いのままに動かすことが出来

ない。足首を縛って連結した紐が、両脇の腹部を圧迫して、お臍が押し上げられたように臍窩を細めている。

「どうだ。縛られても、そう思ったほど、痛くはないだろう？」

「ええ、そりゃ、辛抱出来そうだけど、素裸で動けないところを、そんなに、じろじろと

見られたら、とっても恥かしいわ」

「見られるだけじゃなしに、ほら、こんなにして、何枚も写真に撮られるんだよ」

「わあー、撮ったら、早く解いて……」

「痛くもないのに、甘えるな」

とは言ったが、時間がないので、一わたり写し終ると、予世場氏に紐を解いて貰う。今のところ、彼は、傍観者であり、ライトマンであり、且つ縄の解き役でもある。彼が彼女の縄を解いている間、私は次の準備にとりかかった。

なんといっても、堀貴代子のM度については全くの未知数である。予世場氏が、どのように口説いたか知らないが、第一回目の今日としては、打診の域を出るわけにはいかないのだ。専ら、初めて眺める彼女の素晴らしい裸身に目を奪われている。

次に取り出したのは、やはり、肌に当りの柔らかい綿の赤白斑模様模様の腰紐だ。肌ざわりが良いので、遠慮しないで高手小手に充分に締めつけて縛りあげ、更に別の紐にて首から回してタテ縄を掛ける。初心の女体を縛る際には、こうした柔らかい紐を使って、要所を十分に締めつけて縛ったら、仕上りがよいと思う。

もつとも、単なるSMプレイオンリーで、緊縛姿の鑑賞という面を重要視しないのなら、形式的に、「さあ縛ったぞ」「ハイ、縛られました」という要領で、どんな、ゆるゆるの括り方でも、プレイへ導入してゆくことが出来るかも知れない。

先日、私は森田美美子とSMプレイをやった際、心せくまま、浴衣の紐で両手首だけを背後で括っておいただけにしておいた。そして、やがて、激しいファック・アクションの末、その紐が解けてしまったけれど、彼女は、最後まで、自分の両手首は縛られているという設定の下に行動してくれた。

実際のプレイの際は、それでもいいのだ。でも、鑑賞用の緊縛姿を写真にするのだったら、見る人は、それでは承知しない。緩んだ縄の自然さが、逆に、女体に対する拘束の仕方の怠慢としか、とられないのだ。

この和室二部屋の中の奥の部屋は、どうしたわけか、部屋の片側に、卓一つを挟んで椅子二脚が畳の上に置いてあった。一番広い、和洋折衷の特別室を選んだので、こんなにいるんな調度が揃っているのか。とにかく、その白い真つ四角の卓の上に、彼女をのせて晒し者にすることにした。

赤と白の斑らの紐で、上半身を美しく彩って縛られた堀貴代子の輝くような裸身が、私と予世場氏の二人の見物人の前に現われた。

「立て」

「坐れ」

「アグラを組め」

「足を挙げ」

私と彼とで交互に、それぞれ、思い思いの注文を出す。貴代子は、それが自分に与えられた役目のように言われたままに身体を動かす。縛りの効果とでも云おうか。今や、縛られた女は縛った男の口先のままに、動かされるように先ず飼育されつつあった。

「両脚を拡げて……」

一瞬、彼女は若い女の常として、当然のように、ためらったけれど、命ぜられた通り、そうしなければいけないかのように、脚を、



ジリジリと少し宛、開いてゆくのだ。

小麦色の豊かな肉づきの肌に、赤と白の斑らの鮮やかな色の紐が、喰い込んでいる。

美しい緊縛絵模様だ。

これこそ、まさに若さの魅力だ。頭のとっぺんから、足の爪先に至るまで、瑞々しい若さが匂うばかりに溢れている。

これほどまで早く、飼育の効果があらわれるとは——と私たち二人は、ほくそ笑んだ。

歩み寄るなり、二人して、彼女を抱えあげた。五十キロぐらいあるのか、掌のなかに、ズシリとした弾力性のある、むちむちとした肌の感触が伝わってくる。抱きあげているので、お尻であろうが、太腿であろうが、足の裏であろうが、彼女の好きなのところを存分に触れることができるのだ。

女が縛られているための功德なのだ。彼女は、じっと、二人の淫らな触手に身をゆだねて、そうされても仕方がないといった諦めた表情で、僅かに擦ったように、身をよじるだけだった。

畳の上に女体をころがすなり、余った紐で足首を揃えて括った。

両手も両足も括られて自由がきかないが、べったりと腹を畳につけた腹這いのポーズに



されたまま、それに安住したかのように視線を私の方に向ける。

素裸にされたばかりでなく、高手小手に縛られ、しかも、でっかい臀部を、二人の男の目に晒しているのである。これが、あの何日か前、予世場氏の店で「いらっしゃいませ」と上品な口ぶりで私を迎えてくれた、あの娘なのだろうか。

ぬめぬめと、光ったように盛りあがっているお尻が、何か造り物の陶器のように、シミ

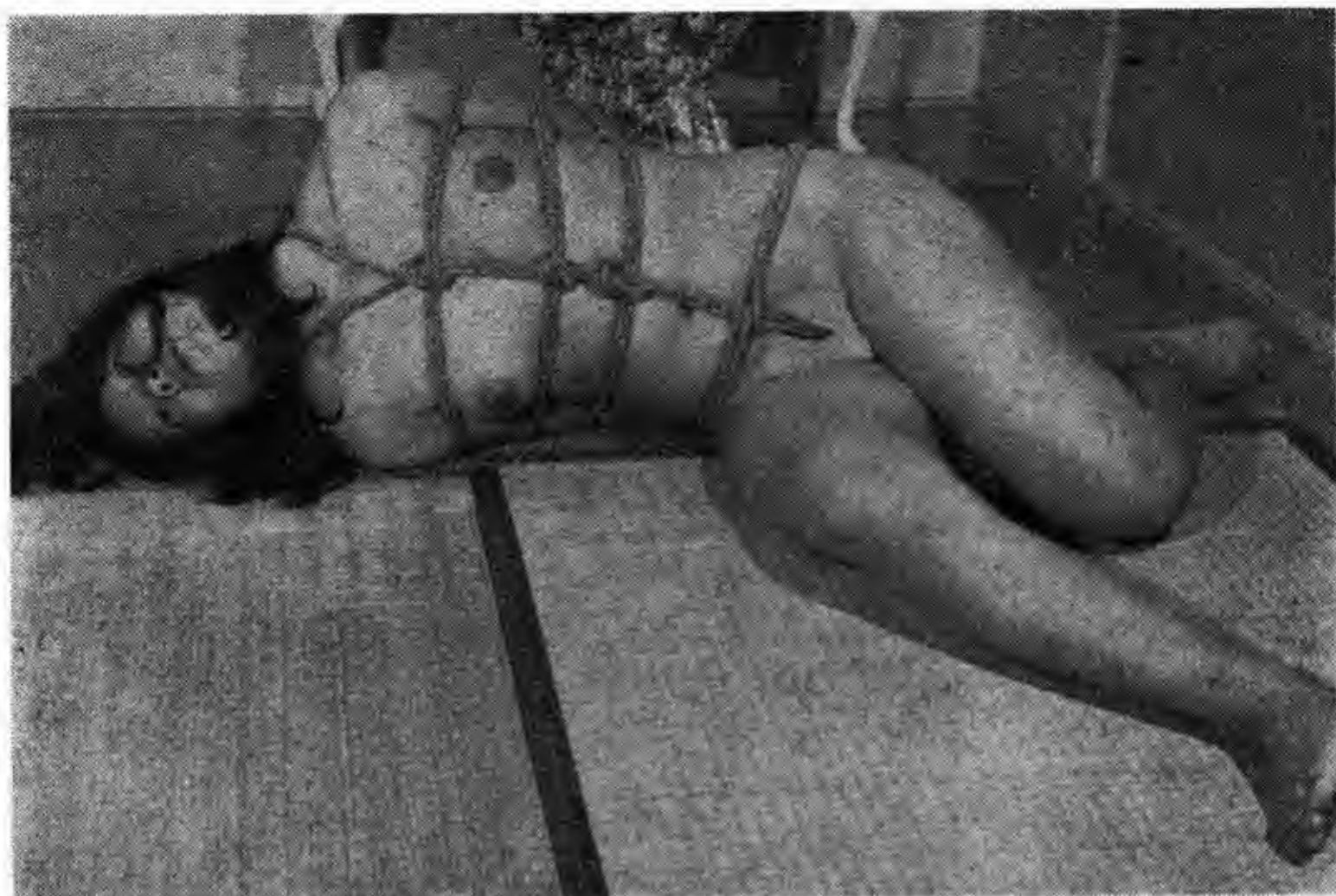
一つないのが、かえって私には凄く肉感的に見えて仕方がなかった。

「ころがって、ごらん」

どうしていいのか、わからず、彼女は、そのまま、キョトンとしている。

「ころがらないかっ」

私の叱声に、彼女は括られたままの両足に弾みをつけて起きあがろうとするが、むっくりと肉のついた臀部が、徒らに複雑微妙な動きを見せるだけで起きあがれない。



私は足を挙げて脇腹をこづきあげて腹這いの女体を横に倒す。それでも彼女は、私に命じられた通り、なんとか、起きあがろうとする。しかし両足首を揃えて括られていたものだから、とても起きあがれそうもない。

やっと、両膝で起きあがれかけても、すぐに、どたりと横倒しになってしまった。

「ああ、起きられないわ。足が括ってあるんですもの、無理ですわ」

「だったら、足だけ、ほどいてあげるから、自由にもがいて起きてごらん」

彼女の足首を括ってあった紐を解いてから椅子に腰をどっかりと下して、予世場氏を手招きして呼ぶ。

「彼女、大分、縛られることに、慣れてきたじゃないか。この調子だったら、今日中に相当な線までゆけそうだぜ。」

それはそうと、何時頃まで、いいんだい？」
「そうだな。貴代子の家の民宿まで、ここから一時間はかかるだろうなあ。そうすると、六時までに帰るとしたら、ここに五時までおられることになるわけだが……。あんな、それから大阪へ帰るとしたら、途中で日が暮れてしまふと違うかね」

「日が暮れてしまふどころか、うろうろしていると、今日中に帰れるかどうか疑問だよ」

「それだったら、泊っていったら、どうだ。」

明日、東尋坊から永平寺へ回って帰ったら、いいじゃないか」

「出来るものなら、そうしたいものだね」

二人でそんな雑談を交していると隣室で彼女の声がした。

「ねえ、括ったままで、私一人を放っておいて、どうするのよお」

予世場氏は慌てて彼女の紐を解く。

「時間がないから、これからは休みなしで、持ってきた縄をフルに使ってやるからナ」

バスタオルを胸に巻いて、やれやれといった表情で椅子に腰を下ろそうとする堀貴代子の腕をとって立たせる。私とて、今朝は六時に家を出発しているのだから、今日は長い一日になりそうなのだ。中腰で屈んだり、立つ

たり、しゃがんだり、写真を撮るといふのも結構、くたびれるものなのだ。

これが、こんな若いピチピチとした女の子を素裸に剥いて縛るんじゃないから、とっくの昔に、音を上げてしまっているのだが、やはり好きな道は違ったものだ。益々調子が出てきてへひよっとしたら、この娘を縛って写真を撮るのも、今日一日で最後になるのかも知れないVと考えると、いろんな縄を有るだけ使って縛りたいという欲がでてくる。私が手にしたのは黒縄だ。

部屋の隅に、何のためか一本の柱がある。黒縄を彼女の胸に手荒く締めつけてゆく。最初のように、ためらうことはない。

窓のカーテンに射し込んである陽ざしも、心なしか、弱まってきた感じだ。私は時間にせかされたように、後手に縛った彼女を引き回して部屋の中を横切り、柱の前に連れてき



た。後ろむきになろうとするのを、くるりと正面に向きを変えさせて、縄尻を、しっかりと柱に括りつけてしまう。

正面むいて黒縄で縛られた堀貴代子の裸身が、晒し者となって、柱の前で羞らいにむせんでいる。黒縄に挟まれて盛りあがった乳房の頂点がピンク色にハイライトを浴びて、美

しく輝いている。如何にも乙女らしい、可愛い乳首だ。縄を掛けていなかったとしたら、彼女は、一遍にこの場から、とんで逃げてしまったことだろう。

予世場氏が畳の上にくわがっていた縄を一本持って近寄ってきた。

「この子がね、こんなに、いい身体をしているとは、思ってもいませんでしたナ一つ、脚でも挙げさせてみますかね」

彼は、しゃがんで、彼女の左足首に手にしたロープを巻きつけて引っぱる。

「いやよ、いやよ。そんな

の……」

彼女は首を振って駄々をこねるようにしながら、ふんばって足を挙げようとしな。私はカメラを構えたままで、じっと、そんな二人のやりとりを眺めていた。

私が眺めていることで、彼女の抵抗が弱まってきた。抗しきれずに、さっと足が挙る。

予世場氏は、えたりとばかり、ロープを引き寄せて彼女の肉のたっぷりとついた脚を開き気味に上へ挙げる。こうして見ると、洋服を着ていたとき見た予想と違って、大根足に近い太さなのだ。

もとより、私は大根足結構、大歓迎の方だが、カモシカのような細い足を期待していた向きには失望を与えるかもしれない。そう云えば、ここへ来る前に、彼女の洋服姿のカラー写真を写せと、予世場氏がやかましく言うので二枚ばかりデイライトで撮影したが、そのときは私も、もっとすっきりとした彼女の脚線美を想像していたのだ。

☆水筆のの字責め

「やっぱり、塚本さんは女の子を縛るのに慣れてるから早いもんですね。縄を変えて、次々と縛ってゆく手際なんか、とても見事なものです。いや、本当に感心しましたよ」

「今日は時間がないので、ゆっくりとはしておれません。次は、このよく使い込んだ斑ら縄でいきましようか。これだったら、そう痛くない筈ですから、股間縛りでもやってみましょう。彼女、大分、飼育効果があがってきましたからナ」

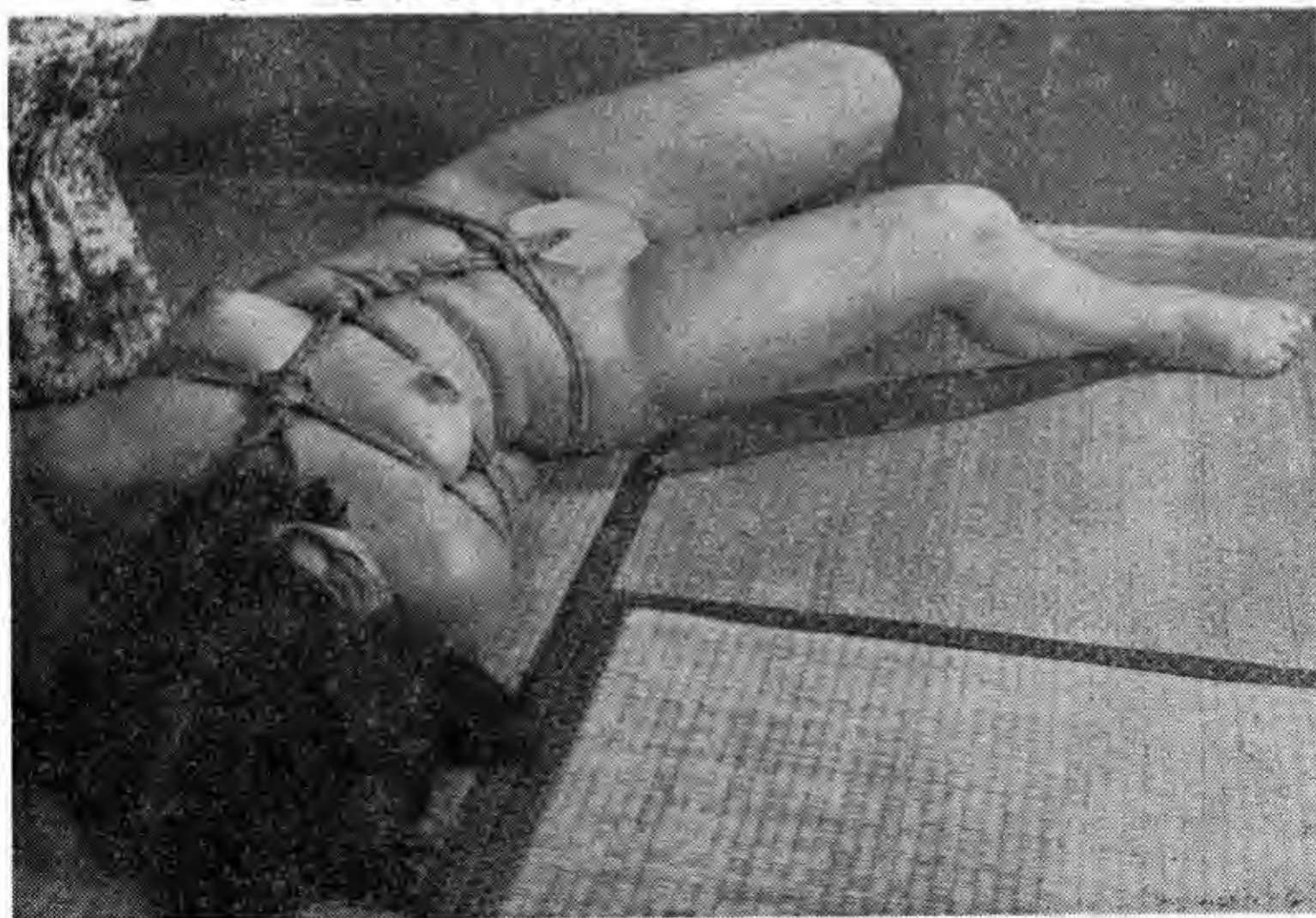
「どんな縛りになるか、こりゃ、なかなか楽しみですネ」
「そうそう、ゆっくり落着いて責めるとすれば、彼女になんかだったら、水筆のの字責め——というヤツなんかやったら、そりゃ泣いて喜んで、もっと縛ってくれて、きつと言いだしますぜ」

「ほ、ほう。そりゃ、どんな責めなんです」

「両股をね、もうこれ以上に広げられないっていうくらいに大の字に固定しておいて、その股の間に、どっかりと腰を下すんですよ。そしてネ、真新しい筆を持ってきて、水で濡して、ねえ、この意味わかるでしょう？ ポイントをくるくると、のの字に、ホレ、触れるか、触れないかぐらいの要領で……」

「ああ、なるほど、なるほど——」

「ベテランのM女だったら、



物足りないって怒るかも知れないが、この貴代子級の初心な娘には、これに限るね。時には、化粧石鹼の薄いのを水に混ぜるんだ。そりゃ、泡が面白いように立って、凄いもんだよ。シャンプーでやったこともあるけど、シヤボン玉が、いくつも、いくつも出来るんで弱ったヨ」

「ひゃあ、そいつは、面白いナ。縛ってないと、とてもやれない芸当だ。それで、この、貴代子に、それがやれますか？」

「そんな凄い、八の字から一直線になるような開股縛りをさせるか、どうか、それが問題ですね。私の見たところじゃ、彼女は貴方に甘えていますから、貴方の見ている前じゃ、とても、恥かしがって、やらんでしょね。もっとも、次回に、もう一度、京都でも、彼女と私と二人っきりで逢う機会があったらやれるかも知れませんヨ」

「ほう、そんなもんですかネ」

予世場氏は隣室へ貴代子を呼びに行く。

私たちの前に、裸身を晒すことには、もう大分馴れてきたようなのだが、それでも、縄を解かれたら、恐ろしいもののように、バスタオルを胸に巻いてしまう。

むきだしになった二の腕や手首には、それ

と、はっきり判る縄目の痕が残っている。

目の前に立たしておいて、さっとバスタオルを引き剥ぐ快さ——。あっと、両手を前へ持ってゆこうとするのを、手首を掴んで後へ捻じまげ、手にしたロープを巻きつける。

高手小手縛りに縦縄を併用した本格的な股間縛りだ。両股の間を縄をくぐらせておいて

双丘を通過して背中で縄止めをする。

若い女の子だから、縛られることに慣れるのも至って早い。ドレッサーの前のスツールに腰を掛けさせると、予世場氏の方へ向って甘えるような視線を投げかける。

「ねえ、私、こんなに、きつく縛られてしまつて、可哀そうでしょう？ 貴代子、こんな





に、むごたらしく縛られているのよ」

予世場氏は、それには答えず、テレ臭さそうに、彼女の縄尻を引っばる。

「貴代子、素っ裸にされて、こんなに、きつ

く縛られているのよ。可哀そうでしょう」

すらりと伸びた長い肢を、駄々をこねるように、開いたり閉じたり、曲げたり伸ばしたりしている。

私は、そこを狙ってシャッターを切った。

この堀貴代子という女性私にとっては、初めて縛る相手であり、また、初めてカメラを向ける対象でもある。私が興味を示すと同様に、読者の方々も、きっと興味を持つ筈だ。それで私は、一枚でも多く写真を撮っておいて、お見せしたいというサービス精神を発揮しようと思った。

サービス精神といったが私は、ここで写真を沢山撮ったからといって、いささかでも報酬を貰えるというわけではない。無料奉仕というのが悪ければ、趣味に徹した道楽とでも云おうか、なにがしかの報酬や原

稿料を頂戴して、総合課税を、それだけ余分に支払うよりも、アマチュアに安住している方が、どれだけ気が楽か知れない。

とは云っても、自分で仕事を持っている悲しさ、今日も今日とて、これから直ちに、とって返して帰阪しないことには、明日の仕事に差し支えるわけだ。

私は予世場氏から縄尻を受取って、それを腰縄に打って縦縄と連結して背後で止めた。

窓際に立たしてカーテンを開ける。陽が当たっているので完全な逆光だ。す早く、頭の中で計算して、絞りとシャッタースピードをきめる。このカメラにはEEどころか、露出計さえついていないのだ。それで勢い、カンに頼ってしまうのだが、今のところ、大した失敗はなさそうだ。もっとも、どんな精巧な電子シャッターでも、完全な逆光では、お手上げになることが多いものだ。

「どうだ、痛くないかい？」

そんなことを言いながら、股間縛りの縦縄に手をかけて、さっと双丘をくぐらせて、縄の湿り具合を、いや締め具合を、懇切丁寧にゆっくりと調べてみるのも、役得の一つとでもいうものだろうか。普通だったら、若い女の子の、そんなところへ手をもぐらせるな

んで、とても出来ない相談だ。

そんなときの彼女の、なんとも云えない身をよじる、羞恥ぶりは、いや早、全く、たまらない。厚意に対して声に出して抗うことも出来ないし、そうかといって、こんな、おぞましい行為を歓迎するほどSMプレイに馴染んではないのだ。

それがまた、S人士にとって無垢な娘の、限らない魅力なのだ。もじもじと、肉づきのよいお尻をゆすりながら、徐々に汚辱の洩のなかへと、足を踏み入れていってしまう彼女の姿だった。

じわじわと、口のなかに唾液が、にじみ出てくるような感激

が、いつとはなしに、責める者と責められる者の心と心のつながりにまで発展してゆく。

人間というものは、やはり快感原則に従って、知らず知らずのうちに行動してゆくものなのだ。私は予世場氏が傍で見ているのにも拘らず、彼女に頬ずりをした。自然に浮いた凝脂のネットリとした絨肌の感触が、私の全



身をしばれさせた。両手は、いつの間にも彼女の緊縛肢体を抱きしめていた。

予世場氏は、手持無沙汰のように、そんな私の仕草を、これが女体責めの導入か——といった顔つきで眺めている。

私は、堀貴代子を、まるで大事な宝物のように抱え上げた。ずっしりとした重量感が、

両腕のなかで、縄と柔肌と、柔肌と縄という風に硬軟とりまぜて快く伝わってくる。

これだけ、近々と顔を寄せているというのに、彼女には、まるで体臭というものが匂ってこない。そのまま畳の上へころがすなり、私は立ったまま、足下に横たわっている堀貴代子の緊縛裸身に目をやった。

柔らかいロープとはいっても腰から上を四つに区切り、しかも、縦縄が身体の中心部を通って固い結び目のコブを作りながら、女体を真二つに割っているのである。誰がつけたか、いみじくも名付けたか、股間縛りと。

「どうです？ 予世場さん、これだけ縛ったら、もう堪能しましたでしょう。彼女も、これだけ縄に馴染んで縛らせるようになったんだから、Mの傾向、大有りですよ。将来の有望株と云ってもよいんじゃないですか」

「いや、本当に塚本さんのお蔭ですよ。一度貴代子の縛られた姿を見たいものだ」と夢に描

いていたのですが、これで、抱いていた夢が一遍に実現したんですからね。この緊縛姿態なんか、実に見事なもんですなあ」

「やはり、彼女に素質があったんでしよう。それを貴方が、奇譚クラブを見せて、うまく見つけたたってわけですよ。まだ、白ロープと麻縄が残っていますが、この二本を使って、あちらの部屋で本格的な緊縛をやってみましょうか。これは、ちょっと痛いかも知れませんが、今までの彼女の様子からして、十分、やれそうですよ」

「出来たら、最後の仕上げに、飛びきり素晴らしいヤツをやって欲しいもんですナ。でも、もう余り時間がなさそうなので、早いところ、一つ頼みましょうか——」

私は彼の言葉に反射的に腕時計を見た。

四時を既に回っている。

慌てて私は白ロープを握った。

時間が残り少ないという気持があるものだから、どうしても早縄になった。といって、結ぶべき要点だけは、きっちりと結び目を作って縛り上げたのは勿論である。予世場氏は女体を縛ってゆく私の手元を好奇に満ちた目で眺め、じっと縄の動きを追っている。

若々しく伸びやかな肢体が、白いロープに

よって縛り上げられると一段と魅力的に見えた。均斉のとれた若い肢体だけに、もう、どんなポーズをとらしたって、とても美しい絵になるのだ。

縄と女体——。

女を縛りたいという潜在的な欲求を持っている男性にとってそれは蠱惑的なエロチシズムだった。惨虐なお仕置でもなく、陰惨な刑罰でもない。SとMとは、所詮そんな美の追求を志した者の見果てぬ夢なのだ。

美しく、底抜けに明るいアクティブとパッシブの燃焼なのだ。

私は堀貴代子の緊縛肢体の上に、限らない美しさと明るさと未来への憧れを見た。

予世場氏は、私が縛っていった逆を辿って縄を解いてゆく。その間に、私はライトの配置を変えて、次の縄を準備した。

私が手にとったのは麻縄だった。



肌にチクチクとするトゲのある、この麻縄はベテランのM女だってさえ、肌を傷つけるといって秘かに敬遠する代物なのだ。

初縛りの堀貴代子にしても、この麻縄を潔く受けるようだったら、本日の飼育は成功したも同然だ。それで私は、もう、いささかの手加減も加えずに、彼女の柔肌を情容赦なく力一杯、麻縄で縛り上げることにした。

これが、今日の最後だ。

もし、痛ければ泣き喚くがいい。

もう二度と、今日限りで堀貴代子を縛る機会がないかも知れない。彼女が越前岬の民宿に帰って再び京都へ戻ってこないとすれば、そのチャンスは遠ざかってしまうわけだ。

私は、彼女の飼育効果を確かめるように、肌もくびれよとばかり、力いっぱい、縄を締めつけていった。流石に麻縄だけのことはある。結び目のコブもトゲトゲしく、荒いタツチの縄目が黒々と白肌をむごたらしいアクセントで飾る。

これこそ、今や全く、間然とするところのない麻縄十字本縄縛りなのだ。今日が初縛りの彼女にとって、こんな本格的な緊縛が出来るだなんて、やっぱり、Mの素質があったのだなあ——と思う。その素質がなかったとし



たら、こんなにも早く、このような厳しい本式の縛りを甘受する筈がないわけだ。

私は、暗々とした気持だった。

肉体的には、いささか疲れてはいたが、気分の上では爽やかだった。

部屋の中央へ椅子を持ちだしてきて、彼女を座らせたり、仰向けに寝かせたりした。こ

の若さ溢れる女体を、弄んでみたい気持だった。

身体を動かすたびに、嚴重に縛った麻縄が肌を締めつけて、とっても痛そうだ。そのたびに、痛さをこらえるように彼女は顔をしかめている。だが、ことここに至って、痛いとか、解いてとか、弱音は一切、吐かない。



それよりも、むしろ縛られることに安住した風さえ見える。若い女性の順応性というものが、これほどまでに早いものなのか。

縄が、自分の裸身を拘束し、自由を奪ってしまっている、すっかり諦観しきっているのか、その見事なプロポーションを、むしろ誇らし気に、私たち二人の目に晒している。

椅子を使って、彼女の緊縛裸身を、いろいろな形に固定しておいて、隅々まで執拗に眺める。花ならばまさに蕾だ。若いということとは、何物にも勝る魅力なのだ。

私は、舐めるようにして隅々まで眺めた。

何処を眺めても見倦きない良き眺めだ。

私は遠路遙々、福井までやって来て、よかったと思

った。

「どうだ、やってみるか」

私は予世場氏に目くばせをした。

「うん、やろう」

彼は既に、落ちていた縄を手にはしている。

二人の目論んでいる悪企みは、言わずと知れた「開股縛り」だ。それも、椅子へ座らせておいて、御開帳を計ろうという、彼女にとっては、至極おぞましいものだった。

予世場氏は屈んで彼女の右の太股を手にしたロープで縛った。この段階では、別に彼女も、どうという懸念もなく、何をするのだろうか——といった目なざしで、彼の手元、即ち、自分の右太股が縛られてゆくのを見守っていたのだが、その縄が椅子の背後を回って引き寄せられ、更に、左足首にも縄を掛けて引き絞られるに至って、初めて、彼女にも私たちの意図するところが、わかったらしい。ぐっと、両膝を引きつばめて、そうはさせじと必死になって抵抗するのであった。

若い女性として、これは当然のことだ。

なんとかして開かせようとする予世場氏。金輪際、開いてなるものかと、必死になって膝をつばめる堀貴代子——。

そんな縄と足首との争いを、こちらから傍

観しながら、私はシャッターチャンスを、じっと狙って待っていた。

徐々に、彼女の太股は、じりじりと縄の引力に抗しきれなくなつて開いていった。

彼女の意志に反して、縄の暴力が、彼女の羞らいに満ちた、とんでもない開股ポーズを促していくのだった。

清純な乙女の、そんな場所を無理矢理に暴いて、さらけだしてみたいという単純で素朴な男の欲求は、いつの世でも変らぬものであるらしい。

私は改めて堀貴代子の顔を見た。

右の目が前髪の半ば隠れて、むっと固くつむった朱い唇が、悔いとも諦めともつかぬ複雑な表情を示していたが、相変らず愛くるしいあどけない顔つきであった。

☆

外へ出ると陽は、まだ高かった。堀貴代子は、逢ったときのあの堅いこわばったような表情が打ちとけて、笑顔さえ見せた。



ているように変化しているのは、ほっとした気持ちの現われだろうか。

私は、なにはともあれ、ガソリンスタンドへ立ち寄ってハイオクを満タンにした。

国道8号線を一路南下して、「越前海岸」と大きく標識した所を右折、田舎道へ入る。山越えて海岸へ出て、彼女の民宿へ着いた

のは、既に六時に近かった。

前は日本海の荒波が打ち寄せる海岸、背後は急な山が背を負うように迫っている。そんな猫の額のような空地に、一部分、新しい木の肌を見せた建物が、へばりつくように建っていた。そんな民宿が、いくつも、いくつも、その附近に並んでいた。

私は元来た道を引き返さずに、海岸沿いの308号線を、8号線の方へ向った。見晴しがよく美しい景色だったが、道が極端に細くて、対向車との離合が困難なため、のんびり風光を媚でているところではなかった。

殊に河野村の8号線と接触するあたりで、向うから来た観光バス数台が、立ち往生して、思わぬ大渋滞に巻き込まれてしまい、時間を無駄にしてしまった。

国道8号線に入ってから、極力疾走したけれど、敦賀市内に入ったときには、とっぴりと日が暮れてしまった。



☆

今日は七月十日。この原稿のペンを走らせているのだが、あの越前行きの日から数えて丁度、一週間目に当る。

午後に予世場良三氏から電話があった。

「貴代子の写真、まだ出来ませんか？ 彼女から電話があつて、自分の写真を見たいから

送ってほしいって、言ってきましたね。もし出来ていたら、お願いしますよ。それから、夏が終わったら、もう一度、縛られて写真を撮ってほしいって言っていました」

相変らず私の気を持たせた彼の口ぶりだ。

堀貴代子を、もう一度、縛って責める機会があるかどうか、それは、私にも、わからない

い。しかし、もし、そのチャンスがあり、しかも読者の方が、それを望むのなら、次回はもう少し手のこんだ、いろいろな責め方をやりたいものだと考えている。

夏が来た。

堀貴代子は越前岬の民宿で、若者たちの世話をしていることだろう。

私や予世場氏の前では無口で恥かしそうにはにかなでばかりいた彼女だが、平常は果たして、どんな性格の女の子なんだろうか。

私の頭のなかには、あの和倉風のレストラの二階で、しおらしく織機を踏んでいた初々しくて、素朴な彼女のイメージと、椅子の上で開股縛りにされて、羞らに顔赤らめていた風情とが妖しくダブっていた。

とにもかくにも、堀貴代代に対しては第一回目の縛りである。しかも、僅か正味三時間ばかりの「飼育」であるから、私としても、これぐらいのところ関の山であった。

予世場良三氏の貴重なコレクションの一つが、堀貴代子であるとしたならば、彼の蒐集品の第一頁を飾るべく、私も、若さ溢れる彼女の△美しき緊縛△のフォトを、腕によりをかけて制作し、彼に贈呈しなければならないと考えている。

△終△

再び・黒い乳房

M女浩子を想う

諏訪 大路 健

ひとときの、初夏を思わせるような、むし暑い日に、はやばやと書店の棚に「奇ク」最新号を見出して、ときめきを覚えながら売切れる心配のないカメラ雑誌の方は後日にまわして「奇ク」七月号の方を購入した。

月の下旬になると、必ず書店通いも頻繁になり、ポケット・マネーを勘案しつつ、「奇ク」誌優先で物色する楽しみは依然、変りがない。「奇ク」さえ手に入れば、それから十日間は、ほとんど書店も覗かず安穏な月越しが叶うのである。

だが、安らぎはうわべだけで、実のところ心の葛藤で悶々とする日が、購入した直後から始まるのである。「奇ク」誌へ寄稿したくなる衝動と、それを抑えて自分の「仕事」を

遂行しなければならない立場とで焦り気味になり、結局、二者択一を迫られて嗜好側の方が、そぎ落されて行く――

△M女通信▽「密室の中での妄想」の読後感としては、今度こそは短信を書き上げねばならないと私に決意さすものが湧いた。

私の自惚れた思いあがりでないのなら幸いだ、M女の哀訴切願を聞く思いがしたのである――長い道程を経て、ようやくM女浩子は、前回の「黒い乳房」の拙文の中に凝集した趣旨を吟味しだす心境に至ったのではあるまいか。

× × ×
「浩子は、ふるえる小羊です」を、読むまでは、昨年九月号誌上（M女通信）「雨の日の

妄想」で、返事に対して梨の磔……と書かれて以来、何度も短信をノートしてはいた。

だが「架空体験記」のロマンにM女は一番心を、ひかれたと告白し、「お門違いの御忠告」者と、比較語において私が無視され続けている……まだまだ「黒い乳房」の内容を理解していない等々を知るに及んで、ノートを整理し纏めかえる作業は徒労に思えたのである。返書の期待を裏切った私へのあてつけか（諦めかもしれない……）「明るくって、真っ直な方」と城崎氏を意中に置く以上、私の出る幕はないからだ。

しかし、今回の通信文中で「東京の読者の方で云々」を発見すると、東京人のアイデア男とは水商売の記述字句関連から推しても、

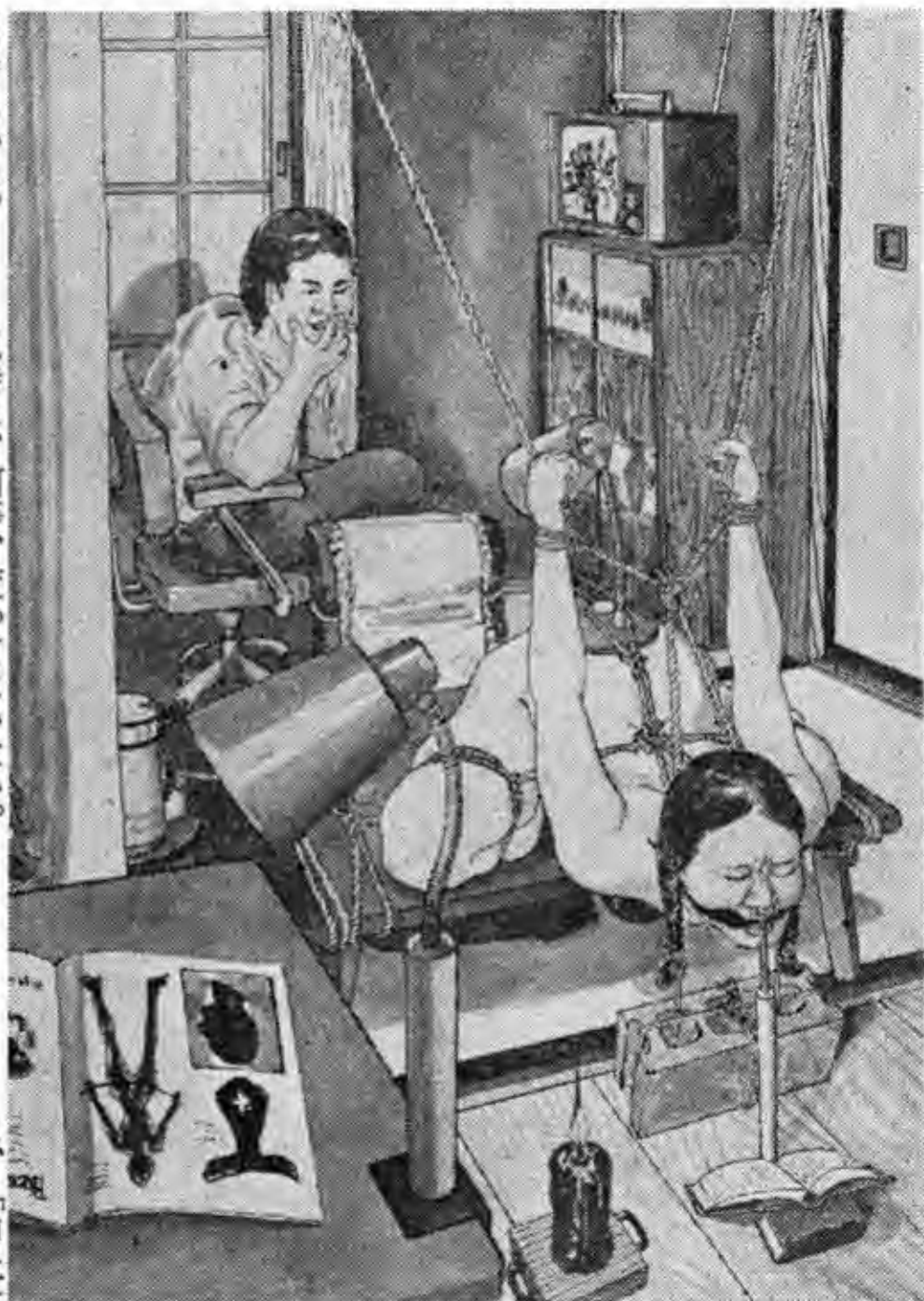
該当する人間は「私」のようである。

M女へ寄せた「私のSM空想」記の秋野氏は信州、さきの城崎氏は山陰在と想定され、S傾向の貴男様への「貴男」は、私をおいてほかにないようだ……

塚本氏とS研会員Y氏とのプレイ経験をへて、私への興味関心を一段とつのらせてきた近況を見るのは私の独断であろうか。語釈にあやまりがあるとしても、この機を逸しては二度と素直なM女懇望は聞かれなくなる……という気が私にするのであった。

× × ×

M女を取材素材にしてのレボや、また、その体験記の彼我に亘る「立体的印象」で、勞せずして私は「M女調教」のプロットが出来ている。しかし私は、それを自らのペンで記述したくはない。初めの約束通り、M女の楽久我記の題材にして使ってくれることを望んでいる。そうした「約束ごと」を履行したい



気持は、何等、変ってはいない。

「M女」出現以来、注目と興趣の対象にして一篇の原稿を仕上げ、やがて「黒い乳房」で私なりに按配可能な現実的記述（結論）を公開した以上、あとは「交歓の実践」という実現化が果せることを待つしかないのだ。

いまの私は、ひたすらこの好機の訪れを待っている、まずはお伝えしておこう。またこう記述すればM女浩子は、リトマス試験紙

のように直ぐ反応を見せてくれることになる……と承知している「責め計画」の種々な技術的展開は、いわば未来の愉しみとして意識的に記さないでいることも。

貴嬢の体験旅行が実現した暁、予備的な知識が災して陶醉はおろか期待外れな失望を与えかねないし、私の独創づもりも掌のうちを見せてしまつて二番煎じとなつてしまつてであろうから。清流に泳ぐ山女を、餌を用いず獲る秘策ほど無理や苦勞があつて、その収獲の喜びは深大であろう。

と、「口上」を述べた後で、さて――

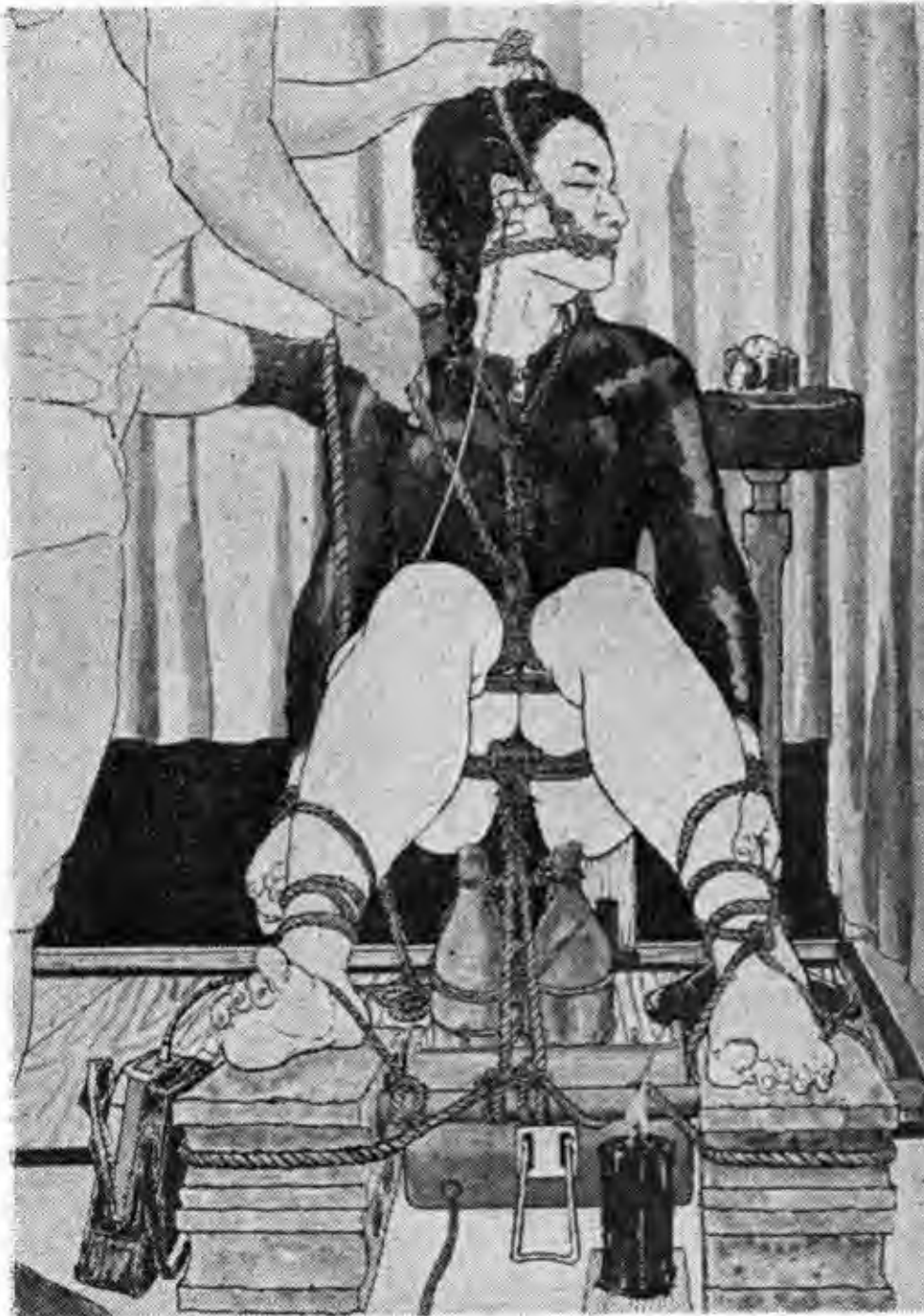
「――貴稿を一読し、大変真面目すぎるほど真面目な方のように見受けられますが、又一面、心にくいほど、奇ク編集の要点を心得た書きぶりのようにも、見受けられました。」

願わくば九分の不真面目さのなかに一分の真面目さを加味して執筆され、誌上に活字になったときは一〇〇%の真面目な作品で

あつてほしいものです（以下略）』
引用の文章は、かつて杉原編集人から拝受したお便りの一節です。

これは、「奇ク」三〇〇号から始まる「新世紀」に期待して投じた愚考進言「奇クはS M出版物界の『暮しの手帖』の如くあれ、といった内容」の「あれこれ雑記」に対しての評価・読後感なのですが、この親書が座右に在り、「奇ク投稿心得」の如く或種の規制と採否の基準を示すものと受けとると、私は爾後、寄稿見合わせの気分をつのらせました。

もっとも『読者の歓迎される』ものを狙った雑文・レポを書いてやろう……と志したことは幾度か、ありました。しかし、それらはやや神経質的に貴嬢のことを考えると、貴嬢に対しては「静観している」と云いおきながら妙な刺激を与えることになりはすまいかなどの思惑がからんで、私的な時間的制約からも没頭出



来ずにプランだけで消滅して行くのでした。「軽卒も甚しい」と評された拙文『誘惑』で人名混同の過失は犯したものの、今のM女浩子は初子女史とイメージがダブルほど被虐希求が嵩じているし、その『誘惑』で語った内容については、私からの修正は必要としないものです。

そうした提示（私からの「結論」）をおこなった以上、貴嬢に意地をやかせることにも

なりかねない拙い寄稿文などで誌上に割り込むのは避ける方が賢明……と、運を天にまかせる気分になるのでした。それに加えて私の頭には、前回の私からの贈呈物納受に際し、途中、万一の事故発生に備え郵便物の責任所在を明かす為に小包の裏に書き記した住所などを貴嬢が記憶されておられるに違いない。

それによって、真底、私に対する関心、又は人物考査を企図し「新幹線に飛び乗って」と思う心が益々つのり出したなら、催促がましく意向をたださずとも何らかの連絡があるう……と期待するものがあつたのです。

私にしてみれば、貴嬢の積極性及び真摯さがどう示されるかを確かめたかったし、畢竟それが何よりも拙文「黒い乳房」を歓迎してくれ理解しているとの証左に通じるものなのです。

まさか、と思う事が実現した時の喝采感と愉悦は強烈なものです。貴嬢にとってのも一大決心を行動で示し得たと思

うなら、夢想と現実と異和相違を感じても、
「M女通信」の話題として採り上げる材料を集めたことになるでしょう。

他人に対する好みと雰囲気的な許否もあり安楽陶酔が果されずに終わることがあるかもしれないし、総体的に失望が勝るとしてもそれ以後の改善に有意義な判断ぐらひは選択できる筈のものです。

貴嬢に、「M女通信の肥料にされてもいいと考えている」旨のことを書き、奇巧誌には「文献誌的性格を期待」して劣情刺戟の小説は書かないと宣言した私は、誌面充実を慮ると貴嬢の質疑点にも、浣腸プレイのことしか眼中にない（関心の対象にならない）竹迫某の批判感想に対しても記述はしません。解答にしても所詮、異文同趣の域を出ない文章で終始するのは明らか。たとえ親交の進展を予感させるためには不可欠であるにしても、具象のないものは無価値と考えるわけです。

また、それと同じ意味で、「密室の中での妄想」を、第一節から順を追って個々に、肯定、否定、指摘教唆を試みたいと思っても余りに個人趣味的な事柄であり、ここでは割愛する方が無難と思います。

その代り、見映えしないイラストですが二

点添付して、短信の内容不足を補いたいと考えます。拙画は活字羅列より雄弁に物語ってくれるものと信じますし、私からの短信を特長づけてくれるでしょう。

「若いこの私の肉体を、今のうちに、責めてくれる人はいないのか。若い今のうちに、いじめて」

と絶唱したM女が、果たして、どうイメージを深め、現実とそのヒロインになって行くかどうか、
「M女通信」に注目する読者にも楽しみを残すことへ役立ってくれるものと思います。

それにしても「S傾向の貴男様へ」の中の「彼は誰なのだろうか、と疑念不安がよぎります。「お手紙下さい」が私を明確な名指しで示されていたら、どうも拱手傍観の結果を気鬱がらずに書けたでしょう。不特定多数のS人士へ色気を見せたもののようにも受けとられるM女の曖昧さは、私を腹立たせる種を撒いたことでもあり、「S傾向の……」と表現した懐疑性に対しては、こらしめをもって臨むしかないと力んでしまいます。

女を責める加虐趣味を満たすうち、相手が恍惚堪能をむさばると羨望を感じ、遂には誰にでもSとMの両面があるものだとつづや

いて嗜虐の立場を入れ替える御仁の悦楽貪欲に納得出来ない私は、「貴男のドレイ浩子」とまで被虐欲の希求をむき出しにしているM女へは、冷厳な立場主張を貫くと明言しておきます。桎梏と解放の繰り返しはあっても、M女は絶えず新しい体験による歓喜心酔の中で稀有な個性を錬磨育成されて行くことになるのです。

ともあれ、貴嬢が年頃の娘に起りがちの気促さで、年長者を、てこずらして楽しむ反撥感や耶揄などを一旦は表にあらわしたにしても、私は達観気分で見守っていきましょう。貴嬢が「私はいい人を得ました」と知らせられるまで。それまでは「黒い乳房」の装いでM女を飼育馴致する夢想に、耽り続けていきます。

既に二年の歳月がたちました。これから先きも、めぐり逢いまで月日がかかるかもしれませんが、「生き甲斐」を模索する上で督励を期待してくれるなら、常に愚生の存在を忘れ去ることなく過して行かれるようにと祈ります。

御機嫌よう――

――（おわり）――

連載 M グループ 〔空想創作集団〕 作品

女の虜囚

(8)

△ある湯治客の話より▽

佐 治 麻 造



汗と涎で濡れた紙紐を上唇に感じた彼は、思わず鍵を齒に、くわえようとして口をパク、

して尻を床につけた彼は、上体を曲げて鼻を床に近寄せて行った。やっとの思いで足鎖の

パクさせた。それが所詮、出来ないことと知って、彼は夢中で頭を激しく振って一声嘔り泣いた。

「ホホホ。いろんなことをやるものね」

「涙をこぼして泣いてるじゃないの。けど此奴、頭が少し悪いんじゃない？」

婦人看守達に嘲笑されて彼は、やる方のない怒りとみじめさが、こみ上げて来た。そ

下へ鼻先の鍵をもって行けた。両方の踵で鎖を押えようとした途端、鍵は鎖の下から抜けて床を離れてしまう。焦れたさと苦しさに歯ざしりしながら、みじめな苦斗を繰り返した末、ようやくのことで両踵は足鎖の下に鍵を押えた。

「やっとならしたらいいわね」

「もうちょっとよ、しっかりおし。ホホホ」

婦人看守達は囚人のみじめな努力を、おかしそうに眺めた。思い切って鼻環を引き上げると、孔をあけられたばかりの鼻の障子がキリキリと痛み、両踵の力が抜けて鍵は鼻環についたまま、床から離れてしまった。からからに乾いた口中の唾液を集めて舌先に乗せ、

懸命に紙紐を湿す。

「早くおしよ、薄野呂ねえ。そんな阿呆だから懲役を喰うようになるのよ」

汗が流れ込んだ両目を固くつぶって、ふらふらする体を切なく喘いだ囚人は、又も鞭を喰って喚いた。再び必死の努力で身を曲げる囚人の背骨や腰の関節が鈍く鳴って、ずきずき痛む。鼻が千切れてしまうような苦痛と共に紙紐が切れて、鍵が足鎖と床の間に残ってキラリと光った。痺れた指先で摘み上げようと床をいざりながら囚人は吐息を吐いた。手錠で締めつけられた両手のままならぬ切なさ、彼は泣き出した。思いだった。やっこのことで差し込んだ鍵を歯がみしながら回すと片手の手錠が外れた。両手を自由にした彼は嬉しさの余り、床にペタリと正座して手首を撫で、目をこすった。股間にぶら下った手錠が床にカチャカチャと当って鳴った。

「出来ないことをしろとは言わないのよ。性根をいれてやれば出来るだろ？ さあ、お立ち！ 鍵を持ってるつもりかえ？ 馬鹿」

よろよろと立ち上った途端、鞭の先端がピチッと小気味よい音を立てて腿の内側の柔らかな皮肉に鳴り、囚人は足を硬張らせ息を詰めて、鮮痛をこらえた。

「環を、ちゃんと閉じておくんだよ」

西川看守は鞭の先で、開いたままの手錠を示して呶鳴りつけた。

「これからずっと御世話になる手錠様だよ。」

そんな根性で懲役を受けさせて頂くつもりかい？」

「ハ、ハイ、申し訳ございません」

囚人の胸は、みじめな思いに詰まった。

「鍵を、お返し」

「ハ、ハイ」

鍵を手渡そうとして囚人は火のようなピンタを喰って、よろめいた。

「その態度は一体、何なの？」

西川看守の靴先が囚人の向う脛を蹴り上げた。呻き声を洩らして膝を床に落した囚人は床にしがみつこうように額をすりつけて、声を震わせた。

「ハ、ハイ。お手数を、お掛け致しました。」

申し訳ございません。手錠を外させて頂きました。鍵をお返し申し上げます。有難うございました」

「フン。わりかしスラスラ言うじゃないの」

西川看守は、囚人が押し戴いて差し出す手錠の鍵をひったくると、息をぶッと吹き掛けてハンカチで、こすってポケットに納め込んで

だ。囚人は足を踏ん張って鎖を鳴らせて立ち上ると、両足を開いて身を屈め、手錠の環を閉じる。錠の部分がキラキラと音を立てた。

「そんなに閉め過ぎると又、回ってしまうじゃないの。どこまで馬鹿なんだろ。昨日や今日、手錠の御厄介になったんじゃないんだろ？ 少し差し込んでけば、いいんだよ」

昼食までの一刻を、彼は床磨きを命じられた。未決囚の担当外の部分の床や鋼鉄の柵、シャワー場の床や廊下を這いずり回りながら彼はポロポロと涙をこぼした。足の間で鎖が股間で手錠が絶え間なく鳴り、全身に残る無数の鞭痕の痛みに耐えようとしても耐え切れない呻きが、歯の間から洩れる。膝頭を床から離すことを禁じられて這い回っていると忽ち膝頭の皮膚が破れて血が滲んだ。西川婦人看守は絶えず目を光らせ、時々そばへやって来ては鞭で脅かし、些細なあらを見つけて容赦なく足蹴を加えるのだった。彼女にとって受刑者は虫ケラ以下なのだ。正午のベルが鳴って彼は未決囚達の配食に忙しく追い回された。女囚十四号も足鎖を鳴らせて走り回った。娑婆の服装をしている当番の未決女囚二人も、腰を捕縄で繋ぎ合わされただけで、藁草履をピタピタいわせて囚人食を配って回っ

ていた。薄汚れたブラウスとスカートを着た彼女達は、鎖錠をまとった彼が近寄ると、うとましそうに身を避けるようにするのだ。それも彼には悲しく情けない事だったが、足鎖をつけられたまま歩き回るのが、こんなにも辛いものとは、彼は今更のように思い知るのだった。昔、良枝の手で足錠のまま労役させられた時の事を思い出す。鎖の長さは、あの時よりも短いようだし、重さは段違いに重い。鎖の長さを一杯に引っ張ると足首の環が回って痛いのだ。それを知っていても、ともすれば鎖がガツと張って、鋼鉄の環で痛めつけられた両足首が息も詰まる程に痛んだ。十四号は、さすがに慣れた足取りで鎖を捌いていた。集めた容器を洗って始末した後、彼と十四号とは、ようやく食事にありついた。

「十四号囚、用便させて下さいまし。お願い申し上げます」

監視台の下あたりの床に二つ並べて持って来て置いた囚人食の傍らで女囚十四号はキチンと正座し額を床にすりつけて願い出た。

彼も同じように真似して哀願して見たが、西川看守が鍵で外してやったのは十四号の革褌だけだった。後部を腰革から解かれて前に垂れ下った縦の革を両手で抱えるようにして

十四号は、自分の監房へ小走りに入って行った。戻って来た女囚は、縦の革を自分で後方へ潜らせるようにして、西川看守に背を向ける。微かに女囚の呻きが聞え、締め上げられる気配と共に錠の音がカチツと鳴り、女囚の顔に押え切れない悲哀の色が浮んで消えた。婦人看守が顎をしゃくると女囚十四号は、

「手錠、嵌めさせて頂きます」

と大声で叫んで膝を開き、足の間の手錠を自分の両手に嵌める。婦人看守の鋭い一べつを受けて、彼もあわてて上体を屈めて両手を下に伸ばし、手錠を握って出来る限り、前へ引き出した。

「誰が手錠かけていいといったの？」

歩み寄る西川看守に叱りつけられて立ちすくんだ彼は、横面を摸りつけられた。

「ハ、ハイ。あのう、手錠をかけさせて、頂きます」

「フン、声が小さいよ。もう一度」

「手錠を嵌めさせて頂きます」

「気に入らないねえ。もっと性根の入った声をお出し」

「ハ、ハイ。手錠を……」

「もう、いいよ。四十五号は手錠、嵌めなくてよろしい」

西川看守は女囚十四号の方へうなずいて見せ、女囚十四号は、いそいそと正座して囚人食の容器の上へ身を屈め、ピチャピチャ音を立てて啜り初めた。正座を命じられて女囚十四号と並んで坐った彼は、囚人食の満たされた容器を両手で水平に捧げて、支えさせられた。用便も許されず、食物も与えられないのだ。だんだんと、だるくなる肩から腕にかけての苦しさを脂汗を浮べて耐えながら彼は口惜し涙をこぼした。初めての労役を一生懸命に勤めたと自分では思っているのに、これという理由もなしに囚われの身にとって、唯一の楽しみである食事を事もなく奪われた彼は、こみ上げる口惜しさに呻くような嗚咽を洩らした。しかし西川婦人看守は囚人の悲痛な思いや苦痛など全く意にも介する筈もなく「四十五号、腕が下ってるよ。おや、何がそんなに悲しいの？ 涙なんか流してさ。ホホ。ちゃんと支えてないと鞭よ」

と、恰好のいい白い鼻の頭にしわを寄せて嘲るのだった。十四号が底を舐める容器が床の上をガラガラ動く。

「西川さんたら、ずい分、絞るのね」

と監視台の婦人看守が、半ば面白そうに半ば憫れみをこめて声を掛けた。彼の肩は、も

う抜けそうになって、胸から脇腹にかけて波打ち喘ぐ。とうに一滴残さず舐め終えた女囚が横目で眺めていた。

「ホホホ。苦しい？ だらしないのねえ」

彼の真前に、すらりと立って見下しながら西川看守が鞭の先端で彼の額を軽く小突いて目を細めて言った。

「こんな臭い気味の悪い物でも喰べたい？」

「ハ、ハイ。お、お慈悲で、ございます」

「そう。じゃ、きつと吸るわね？」

「ハイ、それはもう……」

ルージュの赤い西川看守の唇が開いて、痰が、そしてペッペッと唾液が、彼の目の前で彼の囚人食の中に吐き込まれた。余りのことに彼の胸は熱くなった。彼女の意地悪さは、それでは終らない。

「よし。床におろしていいわ」

腰の革サックから自分の装備品の手錠を抜いた彼女はスカートを蹴して囚人の背後に回った。後手錠を覚悟して、棒のように硬張ってしまった両腕を背後に回し、両手首を背から少し離して、うなだれた彼の右手が手荒く掴まれて振り回され、右肩越しに背に回されて手錠が喰い込む。恐怖の余り、そのまま動かなかった左手が掴まれてグイと引き上げら

れ、右手首は固く嵌まった手錠に引かれて嫌だに引き下げられて行く。両手が右上からと左下からとジリジリと引き寄せられ、両肩から上膊の骨と筋肉がキリキリと痛んだ。

ヒイーと悲鳴を挙げた囚人は、微かに上体をくねらせ頭を激しく振り、大きく開いた口で呻き喘ぐのだが、西川看守は情容赦あらばこそ、膝頭で囚人の背を支え、全身の体重を右手に握った手錠にかけて、空いている鋼鉄の環で左手首を狙う。環が辛うじて左手首を斜めに捕え、クルリと回って途中で止まるのを彼女の左膝頭がスカートの下から押して更に回し、先端部がカチッと錠の中に入った。一応、両手を放した婦人看守は、更に左手首の環を握って締めつけ、キリキリと鳴って縮まった鋼鉄の環が左手首にも固く固く喰い込んで、完全に捉えてしまった。鉄砲手錠を掛けられた囚人は腕、肩、肋骨の激痛に身動きもしないで低く呻いた。苦痛に歪んだ顔に首筋に、新たな脂汗が、じつとりと滲み出て来て半ば開いた口から僅かに舌の先と、よだれが垂れる。

「此奴、腕が少し短いらしいわ。苦勞させたけど、鎖をこじる必要はないわね」

一息入れた西川看守は、ゆっくりと囚人の

前に回り、呻き喘ぐ哀れな囚人を冷たく見下した。哀願の聲が囚人の唇から切れ切れに洩れた。

「ブツブツ言っていないで、さ、お喰べよ。今日一日、禁食させるつもりだったけど、特別のお慈悲で許してやるわ」

出来る出来ないは別として、彼女の命令には服従する他はない囚人は、上体を前に倒そうとして忽ち悲痛な呻きを挙げた。

「担当様、あんまりですわ。私だって未だ出来ませんのに。四十五号は鉄砲にされるの、初めてじゃありませんの？」

女囚十四号が、彼の横で腰を浮かせて歎願してくれた。

「お前は、お黙り！」

盛り上った腿に鞭を受けた女囚は身をよじって鎖錠を鳴らせ、ヒィヒィ言いながら口をつぐんだ。

「さっさと吸るんだよ。出来ない筈はないんだから。ずるけると承知しないわよ。まだまだ苦しい懲罰があるのよ。いろいろと話聞いてるだろ？ 命を落したって大したこと、ないんだからね」

鞭が床に激しく鳴り、びくりとした囚人のむき出しの右腋下から胸の横側に、鮮烈な痛

みが灼きついた。夢中で上体を前に倒しかけ骨も砕ける程の痛みに呻いた囚人は、思わず目を挙げて、立ちはだかる西川看守の顔を怨めしげに見上げる。彼女の冷酷な視線と、かち合った囚人は、忽ち恐怖の色を浮べて目を伏せた。赦しを哀願する呟きが弱々しく消えた。彼女は絶対の支配者なのだ。囚人は必死の思いで西川看守の足許に、ひれ伏して行った。千切れんばかりの両手首から先は既に感覚はなく、筋肉がばらばらになったかと思ふ程の苦痛だった。肋骨が砕かれるようで息も出来ない。ガクンとどこかの関節が鈍い音を立て、囚人食の表面から三寸の所で彼は眼前が昏んだ。西川看守の靴底が囚人の首筋を強く押えつけ、囚人は口から泡を、鼻からは液体をタラリと流して失神してしまった。手当は敏速、且つ、行き届いていた。それも詰まる所、少しでも多くの苦痛を味わせるがためなのだ。気がついた彼は、シャワー場の床にぼろ布にくるまれて横たわっていた。鼻環と股の錠以外の戒具は除かれていた。空腹は、ひどかったが、沈み込むような快い感覚に身を委ねていた彼は、不意に頭を蹴り飛ばされた。西川看守が、そのスラリとした姿で彼の頭上に立って見下していた。

「いつまで寝てるのよ！」

彼女の右手の鞭を見て囚人は、はね起きようとして全身の内部に残る鈍痛と、不意に襲って来た全身の肌の表面の針を刺すような鋭い疼痛に呻いて、ボロ布にしがみついた。鞭痕に治癒促進剤を塗布されたのだ。鼠蹊部から後方にかけての焼くような灼痛は、革鞭に痛めつけられた股ずれらしい。肩の関節は動かすとギクシャクと違和感があつた。

「起きろと言ってるのよ。服従しないの？」

ふらつきながら、ようやく立ち上った囚人の体に、再び戒具鎖錠が施された。

「この革鞭は十四号が掃除したのよ。汚れてたわ。お礼を言うことね。そら顎を上げて」

鋼鉄の首環を囚人の首に当てがいながら西川看守が言う。嫌悪の色を目に浮べることすら許されないで、浅ましい戒具を唯々諾々と外見だけでも喜びと感謝を示して甘受しなければならぬ我が身の境涯が、みじめで堪まらなかった。さも当然のことのようにこの身を小突き回しながら次々と戒具鎖錠を施して錠を鳴らして行く婦人看守が、つくづく恨めしかった。しかし受刑者の身は如何に口惜しく想って見た所で、詮方のない事なのだ。嵌め施される戒具のおぞましき情けなさに、囚

人がどんな、みじめな思いを味わっているかなどとは考えもしていないであろう、この西川看守の顔には、生殺与奪の権を握った支配者の優越感が浮んでいた。

「手錠は自分でおかけ」

「ハ、ハイ。お手数をお掛け致しました。有難うございます」

今朝、多勢の男女の囚人達と一緒に初めて受刑者として施された戒具鎖錠も情けないものであったが、今このすらりと背の高いスマートでスタイリストの西川看守の手で、さも軽蔑し切った顔つきと目差しで、汚らわしい物でも扱うような態度を以て、面倒そうに、しかし要所はキツカリと締めて装着され終えた戒具は、その何層倍かのみじめさ、切なさであった。身を屈めて自分の両手首を見た囚人は、鉄砲手錠のための、むごたらしい傷痕に胸も塞がった。このむごたらしい両手首に更に自分で鋼鉄の手錠を嵌めねばならないのだ。受刑者の身の哀れさに肩を震わせて鼻を吸った彼は、未だ痺れが残る指で我と我が両手に手錠を掛けた。

「手錠、嵌めさせて頂きました」

みじめな言葉に声も詰まった囚人は、冷然と見下した西川看守が唇を曲げて笑ったのが

見えなかった。監視台の下へ追われた囚人は自分の食物が未だ床にあるのを見た。失神してから二時間程、経っていた。

「早く喰べておしまい！」

これからは手を使って食べる事は出来ないのだと思うと涙が溢れて、薄い膜が表面に張った囚人食の中へポトリと落ちるのだった。

先刻、婦人看守が吐き込んだ痰と唾液を思い出した囚人は、ウツと胸が詰まった。しかし、ひもじかったし、これしか口に出来る物はないのだ。啜り残せば又、苛められるに違いない。囚人は屈辱の涙を流しながら容器の底を舐め回すのだった。早苗が見たら声を挙げて哭くだろう。一目でいいから早苗に会いたかった。一言でいいから、声を聞きたかった。しかし早苗は、もはや厚い壁の彼方なのだ。囚人は鼻環を容器に触れさせてカラカラ鳴らしながら身もだえするのだった。

「済んだら労役だよ。手錠を出して。おや」

西川婦人看守の黒い目がキラリと光って囚人はハッと気づいて震え上った。右手の手錠の鍵穴が下側なのだ。

「何度、教えたら分るの？ 故意に、そうしてるものと認めるわ。性根を入れ替えてやるわね」

額を床にすりつけて如何に哀願したとて赦してはくれなかった。鼻環を吊り上げられて立ち上った囚人の手錠が手早く外される。婦人看守の扱い馴れた手にとっては、手錠の鍵穴が下側にあるうと上側だろうと何という事はないのだ。膝をがくがくさせて、わななく囚人の胸部から腹部にかけて革の窄衣が掛けられ、息の出来ない程に緊め上げられた。

婦人看守に顎をしゃくられば、再び股間の手錠を自分で嵌めねばならない。上体を曲げると窄衣の苦しさが更にひどくなった。追いついて少しく歩くと、胸が裂けるばかりに苦しい。冷たい脂汗が額を流れた。

「もう御佗仏寸前てとこね。まだまだ、これからが本番よ」

女囚の十四号も連れて来られ、二人の囚人は戸外運動場に連れ出された。彼の鼻環に二米程の細い鎖がつけられ、彼の前に立った女囚が、両足の間で手錠の手に、その端を握った。そして周囲約一〇〇米程の鉄網の内側を五分間で十回、駆け巡ることを命じられた。出来なければ窄衣を掛けると脅かされた十四号の娘は、革褌の喰い入った鞭痕だらけの尻を、ぶりぶりさせながら彼の鼻鎖を遠慮会釈もなく引っ張って足の鎖を激しく鳴らせ初

めた。一回りするかしない中に、彼は息も絶え絶えに、ぶっ倒れた。

「早く起きてよ。ちえッ！」

女囚は舌打ちして婦人看守の方を盗み見しながら、彼の鼻鎖をチャラチャラと、ゆさぶる。窄衣の苦しさを知って居る女囚は、自分だけは免れようと薄情なものだった。全身に滲み出る冷たい汗が、密着した革の窄衣の内側をタラタラと流れ、鼻孔からは粘液が、口からは泡が垂れて、眼前が昏くなった彼は、死物狂いに倒れては起き、膝でいざっては、のめった。失神せんばかりの苦しさに黒目も吊り上ってしまった彼には、面白そうに眺める婦人看守の姿は、もはや見えなかったが、鼻の痛みは千切れるばかりに益々鋭く、弱々しい悲鳴を微かに洩らしながら既に殆ど這うようにして引きずられて行く。

「しっかりしてよ、あと二回なんだから」

女囚は地団駄を踏んで乳房を、ゆすった。「こらッ！ 段々と内側を回ってるじゃないの。網にくっついて回るんだよ。あと三十秒しか、ないわね。フッフ」

婦人看守は眼前を通る女囚の背と彼の尻とに鞭を当て腕時計を見て笑いながら言った。

「か、かんにんして！ お、お願いです」

女囚は両腿の間に挟んだ腕をもだえて泣き声で哀願しながら、鼻鎖を曳く手は弛めなかった。ようやく回り終えて女囚は地面に蹲まって喘ぎ、男囚は地べたに倒れて、ぴくりとも動かない。その日の朝、穿たれたばかりの彼の鼻環の孔から血が滴って地面に落ちた。「十四号。お前が一生懸命だった事は認めて上げる。窄衣は勘忍してやるわ。解いておやり」

赦された喜びを体一杯に浮べた女囚は、婦人看守の足許に額をすりつけて、何度も感謝の言葉を繰り返した。

「うるさいわね。もういいから、早く解いておやり」

頭を靴先で蹴られた女囚は、股手錠のままの不自由極まる両手で彼の体に腰掛けるような姿勢をとってウンウン言いながら窄衣の締め紐をゆるめ、長いことかかった末に、ようやく解いた。鞭を喰っても立てない彼は、這いずって医務室の裏の廊下へ追われた。両手首の股手錠は先程の苦しみの間に締め切り切っていて、指先には感覚がない。面倒臭げに出て来た若い看護婦が彼の体を小突いて調べ、スリッパの先で鼻の頭を押し上げて、「あんた、ずい分と痛めつけたものね」

イメージギャラリー 『悦虜の陶醉』 岡 たかし



と眉を、ひそめた。

「フッフ、ちょっと注射してやってよ」

「あら、まだ痛めるの？ 治療してやらなくちゃいけないようになって知らないわよ」

「いいのよ、限界は知ってるから。此奴、まだまだ大丈夫よ、ホラ……」

腿の内側に煙草の火を押し当てられた囚人は、ぎゃつと喚いて激しくもがいた。

「ホホホ。最初にヤキを入れといてやるものお慈悲かも知れないわね」

看護婦は笑いながら囚人の尻に乱暴な注射を射って、あとをも見ずに去って行った。

監視台の下に、彼は夕方まで放置されて横たわっていた。上半身を伸ばしたかったが、股手錠は外して貰えなかった。夕食の配給で騒々しい一刻も彼は、そのまま放つとかれた。ひもじさは感じなかったが、咽喉の渇きが堪まらない。呼吸するたびに鈍く痛んだ胸も少し楽になった彼が、手首足首の痛さに時々呻いていると突然、脇腹に鞭が降ってきた。

西川婦人看守が又もやって来たのだ。囚人の齒の根は恐怖でガチガチ鳴った。

「起きるんだよ」

股手錠の身の背中を一旦、床につけてしまふと、もがいてももがいても、なかなか起き上れない。もがき回った末、ようやく立ち上った囚人は、監房へ蹴り込まれた。革鞆の後ろ側の錠が外されて縦バンドがゆるみ、喘ぐ思いで上体を伸ばした囚人は、大きな吐息を吐いた。

「用便をおし」

股革バンドに繋がれたままの両手でバンドや吊り鎖を抱え上げるようにすると、痺れた指が、もどかしい思いだ。

「早くおし。ほんとに手数を掛ける奴ね。済んだらこっちへ来て、手を出して。愚図々々

してると柔らかい所に鞭よ」

手錠が外されて両手が股革から離れた。

「後ろをお向き。股革を後ろへ回すんだよ」

股ずれが疼く股間に、又もや革バンドが固く緊め上げられ、囚人は両膝を開いて少し腰を落した姿勢をとらされたまま、ヒューと微かに身もだえし、そして腰バンドの後ろでガチリと鳴る錠の音を聞いた。両足の間にぶら下った手錠が触れ合ってカチャカチャ鳴りそして腿の内側に冷たく当る。房内でも股手錠にされるのだろう、と悲しく考えた途端、囚人の左手にパシッと手錠が喰い込んだ。背後に立つ婦人看守が腰の革サックから取り出した手錠だ。喰い込んだ手錠に引かれて左腕が左肩越しに背後に回された。又も鉄砲手錠を嵌められるのだ。囚人の胸に悲しさと怒りが、こみ上げて来て、思わず恨めしげな声が洩れ、大きく身を、もだえる。

「反抗するの？」

きびしい声を背に浴びた囚人は恐怖の念に駆られて唇が震えた。右腕が知らず知らずに背に回り、囚人は肩を震わせて吸り上げた。「そうそう。そういう風に神妙にすればいいのよ」

「お、お赦し、お赦し下さいまし。も、もう

こ、こんな……お慈悲を……」

如何に哀願しても、無駄なのだ。腕の筋肉の鋭い痛みと共に、右手首も鋼鉄の環に、捉えられた。

「フフフ。先刻のとは左右反対にしてやったのよ。今夜一晩みっちり汗を流すがいいわ」十四号が彼の囚人食を運んで来て、婦人看守が顎で示すまま鉄格子のすぐ内側の床におき、容器についた細い鎖を鉄格子に結びつけ彼の方を見ないようにして去って行った。

「四十五号！」

婦人看守が鉄格子を閉めながら鋭く言う。

「ハ、ハイ。ウツ、ヒーツ」

囚人は苦痛と恐怖に声を震わせつつ、最後の哀願のまなざしで婦人看守を見上げながら膝を床に落して悲しげに呻いた。

「いいかい？ 朝までかかってもいいから、それを全部、喰べるんだよ。残ってたら承知しないからね」

鉄扉が音高く閉じられ、施錠の音が冷たく響いた。囚人食を膝の前に崩折れるように囚人は正座した。股の手錠が固い床にガチャンと鳴った。囚人の両目から涙が溢れて頬を流れ落ちる。詰所で帰り支度をしている西川婦人看守の姿が想像された。そして、私服に着

替えた彼女が楽しげに家路を急ぐ姿を思い浮べると、胸が煮えるばかりの口惜しさ、恨めしさだ。こんな目に遭わされても訴える術とてなく、与えられる苦痛と屈辱を甘んじて受ける外ない受刑者の境涯が、無性に悲しかった。婦人看守に嵌められた鉄砲手錠は、如何にしようとも外す術もなく両手首に固くがっちり喰い込んで、ほんの僅か身をもだえても呻き声が洩れてしまう程の痛さと、きびしさなのだった。囚人は拭う術もない涙をこぼしながら、訳の分らない絶叫を挙げて喚いたが、その声はコンクリートの天井や壁や床と分厚い鉄扉に、はね返って、独房の内部で響き渡るだけだった。

命じられたとおりに囚人食を啜ろうと囚人は容器の前に正坐して溜息をついた。容器を空にしておかねば、どんな目に遭わされるか知れたものではない。鉄格子に容器を結んである訳が分った。便器へあけることが出来ないようにするためなのだ。苦痛をこらえて、ようやくの思いで一口、啜った囚人は上半身を起し、体がバラバラになる程の激痛に喘いだ。身を起して一息入れ、そして気も遠くなる痛みに呻きながら、死物狂いで容器に口を寄せて必死に啜り込む。天井の電灯に照され

た囚人の全身は脂汗に濡れ、囚人食の中へ汗と涎れが滴った。囚人食の粘液の表面は次第に下って行き、囚人は容器を膝に挟んで唯独り苦闘を続けた。足首を立てて容器に顔面を伏せた囚人は身を起そうとしてバランスを失い横ざまに倒れた。半分、残った容器がひっくり返り、激痛に囚人は悲痛な声で喚く。足首を股革に結ばれているので如何にもがいても起き直れない。カタンと監視孔が開いて婦人看守の白い顔が、おぼろげに目に映じた。

「何を騒いでるの？ 静かにおし」

と、叱りつける声は、水戸婦人看守の声だった。

「あら、そうそう。お前、絞られてるんだ。たわね、可哀想に。あの人は、きついからねえ」

鉄扉を開いた彼女は、更に鉄格子扉の錠に鍵を差し込みながら、

「そういう風にひっくり返ってしまっただんじや、もう無理よ。そんなにされてちゃね」

入って来た彼女は囚人の足鎖を股革から離してやり、何度かためらった末、鉄砲手錠をも外してやったのだった。苦痛から解放された囚人は床にしがみつき全身を波打たせる。

「黙ってるのよ。早く舐めて始末をおし」

「あ、ありがとうございます」

囚人は這いずり回って床を舐め回った。地獄で仏に会ったような嬉し涙を流す囚人は、突然こみ上げて来たみじめな思いにクックツと泣いた。水戸婦人看守は囚人の脂汗にまみれた背を見下ろし、外してやった手錠を弄びながら憫みの色を微かに浮べ、立っていた。

「ほら、まだあそこにも残ってるわ。そうそう綺麗になったようね。じゃ可哀想だけど」

再び足鎖が股革の金具に、カチリと結ばれた。左手首に手錠が喰い込み、肩越しに背後に回されて、ぐいと引き下げられた。

「今夜一晩、辛抱おし。お前は懲役囚だからこれから、こんな事は、しょ中よ」

右手首にも鋼鉄の環が嵌まって、再び鉄砲手錠にされた囚人は、思わず婦人看守を恨めしげに見上げた。しかし、この婦人看守を恨んだりしては罰が当たるといふものだ。

「ありがとうございました」

精一杯に頭を垂れる囚人の頭上で鉄格子扉が、更に鉄扉が重々しく閉まり施錠された。ジリジリと膝で壁際ににじり寄った囚人は、背を壁にもたせて固く目をつぶった。今日一日、痛めつけられた体は睡魔に襲われて沈み込みそうだ。眠っている間は、この苦しみか

ら逃れられるのだ。しかし、倒れた時の苦痛を思うと、眠る訳には行かなかった。水戸婦人看守は何度か監視孔から顔を覗かせたが、もう鉄砲手錠を外してはくれない。

「お慈悲ですから……ほんの少しだけ……」喘ぎながら哀願する囚人に、きびしい声が浴びせられた。

「お黙り！ 甘えると承知しないよ」

囚人は唇を震わせ息を呑んで頭を垂れ、永い永い一夜を呻き続けるのだった。

「ブン」

翌朝、現われた西川婦人看守は、房内や囚人の体を検査しながら、事情を知ってか知らないでか、鼻で笑った。鉄砲手錠が外され、足首が股革から解かれた。

「何か言う事がある？ その目付きは何よ」

「い、いえ、飛んでもございませぬ。あり、ありがとうございました」

「そう。骨身に沁みて分ったんだね？」

「ハ、ハイ。お、お手数を掛けて申し訳ございません」

用便を許された囚人は再び股革を締め上げられ、見るもむごたらしい両手首に、自ら股手錠を嵌めさせられた。

「今日は反省させてやるわね。これからの懲

役を、どうすれば勤めさせて頂けるか、よく考えるのよ」

囚人の鼻環に細い短い鎖がつけられ、正座の目の前で鉄格子に結びつけられた。

立つ事も横になる事も出来ないし、あぐらをかこうとすると股革の金具が痛い。無理すれば、あぐらに坐れないこともなかったが、もし発見された時を考えると、とても出来たものではなかった。太く頑丈な鉄格子越しに黒々と眼前を遮る鉄扉を見つめ、身動きするたびに骨身にこたえる戒具鎖錠を身にまとったまま、じっと正座していると、法のきびしさ、そしてその掟^{おきて}によって受けねばならない刑の苦しさ、ひしひしと胸に迫って来た。犯した罪が激しく悔まれて切ない。あんな事さえしなければ今頃は、と考えると、気も狂わんばかりだ。しかし、もはや如何に思ってみた所で、所詮、どうにもならないことなのだ。人間の社会から隔絶され、人格と自由とあらゆる権利を剥脱されて、冷酷な監獄法の筈の下、懲役囚よ受刑者よ、と蔑まれ、嘲られ、見も知らぬ刑務官達から与えられるのは屈辱と苦痛のみで、憫れみを哀願する声すらも自由には挙げることを許されないで、ただそれを甘受する外はない身なのだ。呼吸する

自由だけが僅かに残されているに過ぎない哀れな境涯だった。コンクリートと鉄扉の独房に拘禁した上、更に足錠手錠、それも股手錠などという戒具を施すとは、何と残酷なことかと口惜しい思いだ。歯ざしりする切なさで叶わぬ事とは知りつつも股手錠の両腕をもたえ、と、下の方で金具や鎖が嘲るように鳴りそして革褌が肌を締めつけたまま、微かに摺れて動く。囚人は鉄格子に顔を押し当てたま、涙の涸れるまで泣くのがあった。泣きながら眠ると、忽ち鼻環が引き吊って、目の奥から脳天にかけてジーンと激痛が貫いた。余りの苦しさ辛さに喚き声を挙げた囚人に、西川婦人看守が待ってましたとばかりに嵌口具をがっしりと嵌めて鞭を当てた。永い一日が、ようやく過ぎて鼻鎖を解かれ嵌口具を外された囚人は、食事もそこそこに泥のように倒れて眠り込み、尻に射たれた注射の痛みも全く知らなかった。

翌日から労役が課された。

「四十五号、出房。労役よ」

頬の赤い小娘のような婦人看守に鞭で叩き起された彼は、やっと思いで身を起した。未だ規定の起床時刻前らしく他の監房は静まり返っている。

「何を愚図々々してるの！」

もう少し横になっていたくて堪まらないが再び降る鞭と婦人看守の命令には抗する術もない。

「手をお出し」

小娘のような婦人看守は鍵を取り出しながら言う。若々しい声には見下し切った蔑みの響きがあった。手を出せと言われても股手錠の身の悲しさ、膝を開き腹部を突き出すようにして両手首の手錠を精一杯に出す。

「黙ってその恰好は何さ！ 馬鹿」

目が飛び出る程のビンタが鳴った。

「ヒ、お、お願い致します」

外された手錠は股間にぶら下がり、囚人は背骨を伸ばして手首を撫でた。

「用便は抜きね。おいで」

よろめきつつ歩き出すと手錠が吊鎖に当たってカチャカチャ鳴り、揺れて腿の内側に冷たく触れる。全身の骨身に残る痛みを、歯を喰い縛ってこらえながら、彼は女囚十四号と手分けして朝の労役、即ち事務室や看守詰所や監視台等の掃除に汗水を垂らした。勝手は分らないし、手の指は意の如く動かない。しかし、そんな事には容赦もなく、小娘の看守の鞭は恐ろしい音と共に囚人の肌に、みみず腫

れを残して行った。看守部長の室を、いざって出ようとした囚人が、吊鎖を膝に敷いて前にのめって倒れた。

「まあ、部長の室の床に、こんな傷を！」

激しく空を切った鞭は、それまでに較べて何倍かの激痛だった。囚人は床に手足を縮めて悲鳴を挙げる。余りの痛さに堪えかねた囚人の目が、おそろおそろ恨めしげに婦人看守のスカートを見上げた。

「その目付きは何なの？」

避ける術もない鞭が又しても鳴って、囚人は床にしがみついて息を詰めた。何としても無性に口惜しくて雑巾を持つ両手が、ぶるぶる震えた。女囚十四号が廊下を磨きながら近寄って来て囁いた。

「お礼を言わなきゃ駄目よ。こんな時には」

看守の足許に額をすりつけた彼の声は、鞭の痛さと無念さにと途切れ途切れだった。

「申し訳ございません。ありがとうございますました」

「フフフ。ちよっぴり口惜しそうな声ね。昨日ヤキを入れられたんだろ。こんな事で口惜しがってちゃ懲役は動まらないね」

額をすりつけた床に涙がポロリと落ちた。本気になって当てられた鞭痕には、肉が裂け

たような激痛が、いつまでも灼きついて残り這いずり回る囚人は時々、婦人看守の目を盗んで手足を止め、四つ這ったまま体を硬くして低く呻くのだった。

「どうして手を休めるの？ ちよっと目を離すと、すぐズルけるんだね」

ピューと振り上げられた革鞭を肌感じて囚人は恐怖の声を絞り出して、わなないた。無意識に手足が動いて鞭から逃れようと這いにじる囚人を冷然と見下す婦人看守のスカートの軽やかに揺れ動いて、忽ち彼女は囚人の頭上に迫った。

「お前を労役させるために私は朝早くから勤務してるのよ。手数を掛けずにキリキリ働いたらどうなの？」

習い覚えたばかりの煙草を、ぎこちない手つきで吸いながら、右手の鞭を軽く囚人の背に鳴らして婦人看守の小娘は、せせら笑うように言った。

「ハ、ハイ、申し訳ございません」

腹の底から口惜しさがこみ上げて来るが囚人の身には鞭が恐ろしい。

「あそこが、汚れてるわ。あれで綺麗にしたつもりなの？」

彼女は鞭の先で床を示す。つい今、磨いた

ばかりの床の上に煙草の灰が落ちていた。囚人は口惜しげに思わず何か言い掛けた唇を震わせる。

「おや、落度を指摘されて不服なの。口答えする気？ フッフ、看守抗弁の懲罰が、どんなのか教えてやろうかしら」

鎖を鳴らして這い寄り、床の灰を拭き取る囚人の胸は無念さで張り裂ける思いだった。

監房区画に起床のベルが響いて、未決囚達が、ざわめき初め、罵る声やビンタの音が聞えて来、四十五号と十四号は監視台の下で手錠磨きをやらされ初めた。看守達の装備品である手錠を革のサックごと沢山、与えられ、入念に磨かされるのだ。似たものは奴隷用具店や金物店で、いくらでも売っているが、警察官や刑務官が装備しているものと全く同じ物は販売を禁じられている。奴隷達に対して一般の人々が使用しているものとは材質や錠の構造が全く違うという事は、こうして、つぶさに見ると、はっきり分った。革鞆の股革に、ぶら下って身動きするたびに床でカチャカチャ鳴っている手錠も、これと同じものなのだ。一旦、嵌まってしまうと、もういくらかもがいても無駄だという事が今更のように、よく分った。未決囚達の出廷時に使用される

この区画の備品の手錠や連鎖や結合金具等も次々と磨き立てさせられ、やがてその手錠や連鎖を身にまとった未決囚の男女が打ちしおれた姿で曳かれて行った。何本かの革鞆にも油をつけて手入れさせられる情けなさを味わわねばならない。磨き方や手入れに何度もケチをつけられ、そのたびに身もだえしながら額を床にすりつけて足蹴を受けつつ、赦しを哀願するのだ。足蹴で済めば有難い事だったが、自分が今、磨き立てたばかりの革鞆を受ける口惜しさには、号泣の声が洩れるのだった。首環、革鞆、足錠を外されてシャワーを浴びさせて貰った。枷や鞭の痕、そして股ずれが泌みて痛かった。濡れた体を拭う事も許されないで、今度は自分達の戒具鎖錠を綺麗に磨かされた。

「性根を入れて手入れしなきゃ駄目よ」

と水戸婦人看守が通りすがりに言う。衣類を剥がれた若い、がっちりした体つきの男が後手錠をかけられて無念げに呻きつつ、彼女に小突かれて追い立てられていた。

「どうしたの？」

と監視台の婦人看守が訊ねた。

「どんなに叱っても態度を改めないの。手錠かけるのに、一汗よ。床に叩きつけてやった

わ。一応、懲罰房へ入れようと思って……可哀想だけど」

「あなたが、そう言うんなら、余っ程ねえ。

「箱」へブチ込んだらどう？」

「そこまでする事はないのよ。けど、私の鞭じゃ、こたえないらしいわ、此奴」

「ホホホ、そりゃ、こたえる所に当てないからだわ」

「そうね。つい可哀想になっちゃって……甘やかせちゃ駄目ね」

首に六十三号の囚人番号札を吊った、その裸の男が、

「ど、どこへ連れて行くんだ。ち、ちくしよ。何かと言うと、すぐ手錠なんか掛けやがって」

身もだえしながら喚いた。拘置されたばかりで囚人生活の苛酷さが身に泌みていないとはいえ気の強い男もあればあるものだった。

「お黙りッ！ ここをどこだと思ってるの」

柳眉を吊り上げた水戸婦人看守が鋭い鞭を男の内腿にピシリと当て男は、さすがにしゃがみ込んでヒーツと悲鳴を挙げた。

「西川さんなんか掛かっちゃ、そんな男は半殺しにされるわ」

監視台の婦人看守は追われて行く六十三号を見送って呟いた。
(つづく)

—＜告白＞—

小夜子さまの便器となって

葉 城 雄 二

このところ数年。私の半生の中で、自分の好むタイプの女性から、奴隷としての忠誠と服従を強要されながら、その女性の便器として使用されることを想像し、悶々と空しく日々をすごしてきた私に、ある夜、偶然にその機会が訪れ、「現実の体験」となったことを簡単に記させていただきます。

三月十六日。その日は朝から、どんよりと曇って肌寒く、雪でもふりだしそうな、ある土曜日の午後。ひっそりした事務所には私だけがいた。待ち望んでいた電話のベルが、けたたましく鳴り、室内の静寂を破る。急いで受話機を取ると、彼女の声がする。

「うふふ……雄二ね。お前の嬉しそうな顔が見えるようだよ。二時きっかりに、こないだの場所にくるんだよ。先に行っているから、遅れたら承知しないよ！」

「はい、解りました。必ず時間までに行きます」と私が言うのと彼女の方から電話を切る。

彼女とは今年の二月、上野のバー「N」で知り合った。その日の五時過ぎ、事務所の帰りに、なにげなく目についたバーに入った。四坪ほどの店には未だ時間が早いせいか、スタンドに馴染み客らしいのが三人だけ。バーテンは五人のホステスを相手に、何やらにぎ

やかに話している。私はスタンドを避け、一番奥にあるボックスにすわる。カウンターの前から、私好みのホステスが出てきて、私の前に笑顔で近づき、横にすわる。

「いらっしやいませ。あなた、今夜が初めてですね。なに召し上がりますか？」

「ビールと生野菜」

彼女は立ち上がりカウンターに向かった。

私は今日、社用の折、神田の古本屋で千円ちかくも出して買った雑誌を、ながめた。しばらくして先刻の女が注文品を持ってきた。彼女は腰を下しながら

「お待ちどうさま。あたしママの小夜子。今後とも宜敷くね」

「ママさんでしたか？ 本当におみそれしました」

私は頭を下げた。

「さあ、どうぞ」

彼女は私にビールをつぎながら、ふと私がページを開いたまま、かたわらに置いた雑誌に目を止め、

「あなた、何を讀んでるの？ ちょっと見せてよ」

私は、ためらいながらも、みていたページをふせて彼女に手渡す。彼女は、むぞうさに

雑誌をめくっていたが、ある挿絵のところで視線を止め、ふくみ笑いをした。

「ねえ、この絵、さっきあなたが深刻な顔して見ていたでしょう。このポーズ、とっても素敵ね。あなた、どう思う？」

「どれですか」

私は目の前に差し出された絵に視線を向けた。その絵は、「女王様の専用便器」と題されたグラマーな女性が短いガウンをまとっただけの姿で、仰向けに足を屈した男の顔の上に、



豊かな肉づきのよい大きなお尻を乗せて、跨がっている姿態が描かれていた。思わず、ため息をもらし見つめていた私のかくれた心を彼女は察知したかのように言った。

「あなた、だいぶ興味があるようね」

「とても素晴らしいですね。僕にとっては、これが絵でなく現実であつたら……」

彼女の言葉と、この場のふんい気で、極度にマゾである私が答えた。

「あなたに秘密が守れるかしら」

「僕は口が堅いほうですから、どんな秘密でも、また約束でも必ず守りますよ」

彼女が意外なことを言ったので、私は期待をこめた目で彼女を見た。彼女は私の視線を受けとめ、しばらく何かを考えている様子であつたが突然、言った。

「あなた、あたしの奴隷になれるかしら？」

彼女は真顔で私に聞いた。内心、このような事態を以前から願っていた私は、彼女の言葉に昂奮して答えた。

「本当ですか？ 僕を、からかっているのではないでしょうね」

「馬鹿ね、冗談じゃないわ。あたし本気よ。お互いに良ければ、それでいいでしょ。ドライに行かない？」

「僕を、あなたの奴隷にして下さい。お願いします」

思い切って私は言った。

「あたしの命令には絶対服従するのよ。あとで後悔しても知らないから」

「後悔など絶対しません。信じて下さい！」

私は彼女の手を握る。

「あなたって正直ね。あたし信用するわ。小夜子と言うのは、あたしの本名よ。年は二十六。どう、若く見えて？」

「ええ、とても美しく、若く見えますよ」

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね」と彼女
女は言いながら、身の上話をしてくれた。私も自分のすべてを彼女に話した。

「今夜は記念すべき日ね。あたし、あなたに何かプレゼントしようかしら……」

彼女は、ふとテーブルの上の、からになったグラスを手にとり立ち上がると、「ちょっと待ってね」と立ち去る。

私は彼女の意向を察して昂奮した。まもなく戻ってきた彼女は手にしたグラスを私に渡ししながら、声をひそませて言った。

「あたしのアレよ！ 奴隷の誓いに、これを飲むのよ。あなたにとっては、すばらしいプレゼントでしょう」

「戴きます。小夜子さん、見ていて下さい」

私は、いちだんと心臓が高鳴るのを覚えながら、液体が入ったグラスを口にあて、彼女の体内の一部から排泄されたばかりの生暖かい液体の匂いをかきながら、一息に呑みこんだ。

「うふふ、嬉しいわ。良く飲めたわね。美味しかった？」

「うん、美味しかった……」

私は、いつの頃からか潜在意識の中で、自

己の心に、マゾヒストとしての要素が芽生え美しく威厳に満ちた女性に対し心から服従を誓い、奴隷となって、その女性にさげすまれ体内から出た排泄物を強制的に飲まされる行為を連想し、悶々とした日々を過してきた。

彼女の液体の味臭が、すこしも苦にならずとても甘美で、しかも地上のあらゆる清水にもまさる彼女の神水を、生れて始めて味わい何ものにも換えがたい貴重な体験となった。

いつの日か、私は墮落するのではないだろうか……と言う疑念と、彼女の奴隷としての奉仕に対する喜びが交錯し、現在の自分にとっては抑えがたい感情が、ある種の快感となって現われてくるのであった。

「小夜子さん。今度、何処かでお逢いできますか？」

「ええ、何時でも結構よ。あした、どうかしら？」

私は彼女と待ち合わせる時間と場所を決め、店が混んできたのをし、おに彼女と別れた。

翌日、彼女と落ち合い、近くの旅館にはいる。部屋に落着き、お茶を飲みながら彼女が言った。

「これから、あなたのことを雄二、と呼ぶからね」

「はい、小夜子さま」

彼女の奴隷になりきった私が答えた。彼女は立ち上がり、服をぬぎ、スリッパだけの姿でベッドに腰を下し、美しい足を組む。

「雄二！ こっちに、おいで」

「はい、小夜子さま」

私は彼女の足下に、ひれ伏した。

「さあ、奴隷のキスをするんだよ！」

彼女は組んだ足を開いた。私は頭を上げ、彼女の股間に顔をうずめる。彼女の荒い呼吸が肌を通し快く顔をしめ、熱気を含んだ体臭に息づまりながら思わず顔をゆすった。

「うふふ、くすぐったいよ。もうおやめ！」

彼女の股間から顔を離し、私は言った。

「小夜子さま、お願いです。はやく尊い御神水を、お飲ませ下さい」

「あわてるんじゃないよ！ 今、たっぷり飲ませてやるよ。さあ、雑誌のポーズをとるんだ！」

歎願した私に便器としての姿勢を命じる。

私は受け入れ体勢をとり、彼女を待った。

「さあ、口を開けな。もっと大きく開くんだよ」

大きく口を開けた私の顔に彼女の股間が、おおいかがぶさる。彼女のお尻の間が、はっき

り見えたと思う間に、柔らかに鼻を撫でる。突然、彼女が私の顔を、押しつぶす。「ううっ」私は、うめきをもらす。彼女は心持ち、腰をあげる。「さあ、たと、お飲み」と言うと同時に、生暖かい彼女の神水が私の口の中に、すさまじくほとばしり、飛びちった、しぶきが頬をぬらす。私は何度も息づまる思いで呑みこんだ。終ると彼女は立ち上がる。「だめじゃないか、こぼしたりして。もったいないから、きれいにお舐め！」彼女に命令され、床にこぼれた神水をきれいに舐める。「雄二。あたしの、あと仕末をするんだよ。きれいにおふき！」

彼女は立ったままベッドにあったハンドバッグの中から数枚の塵紙を取り出し、私の前に投げた。私は、「はい、小夜子さま」と言っ、うやうやしく塵紙を押し戴き、彼女の足下にひざまずき、ていねいにふきとる。彼女は私を見下しながら、「お前は、その紙を何処に捨てる気だい？」私が無言でいると、「さあ、お喰べ！それが便器の役目だよ」「はい、小夜子さま」私は使用済みの紙を口に入れ、よくかみしめながら呑みこむ。「雄二！お前の奉仕に満足したよ。お前、後悔してないね」「とんでもありません。お美し

い小夜子さまの専用便器となれましたことを私は深く感謝しております」私は彼女に答えた。「今度、お前と会ったとき、あたしの、もう一つのものを、いやと言うほど喰べさせてやるからね。覚悟して置くんだよ」私は未だ幾分、ものたりなさを感じながらも、「はい、小夜子さま。ありがとうございます。心から、お待ち致しております」と答え、数分後、彼女と共に旅館を出た。

三月十六日。定刻より十五分遅れ、彼女の待つ旅館に行った。部屋をノックし、ドアを開けると同時に、「馬鹿！おそいじゃないか。こっちにおいで」「お許し下さい、小夜子さま」彼女はスリッパだけの姿で、私が来るのを待っていた。私が、ひざまずき奴隷のキスをしようとすると、私の顔を邪けんに膝で払いのけ、彼女のかたわらにあったビニールの風呂敷を差し出す。

「さあ、これを首に掛けるんだよ。お前に喰べさせようとトイレに行かず、がまんしていたんだよ。いわれた通り、早くおし！」

私は、すばやく風呂敷を首に掛け、床の上に仰向けに寝た。彼女は私の顔に跨がった。

「さあ、お喰べ！少しは、あたしの栄養のかすが残っているよ」

彼女は私の口中に、夢にまでみた彼女の固形物を落す。多量の固形物を口にしたとたん私は思わず、うめき声を洩らした。

息づまる強い異臭と、胃からこみあげてくる、おうどにおそわれ、思わず口にした彼女の固形物をはきだし、顔をしかめた。彼女は立ち上がると、

「馬鹿！もったいないじゃないか……そのざまは、なんだい！まだ、たくさん残っているよ。お前が、あたしの便器であることを忘れるんじゃないよ」

彼女は、またもや、私の顔に跨がる。

「雄二！お前が喜んで喰べるようになるまで、絶対に許さないよ」

私の虚脱した、かすれ行く意識の中で彼女の専用便器として完全に屈服した自覚と彼女が勝ちほこって高らかに笑う声が聞えた。

その後、彼女と数回、逢ったが、ある事情のため、彼女が急に福岡へ行くことになり、「あたしも寂しいけれど、あなたも誰か、いい人を、さがしなさい」と言って福岡へ立った。現在の私は、彼女との過した日々を想いだし、空虚な毎日を送っている。都内居住の女性の方で、私を奴隷、また便器として御使用下さる方がありましたら、御連絡下さい。



第七十二回

お返し

心の受けた衝撃と、肉体に加えられた暴力とによってメリー王女は鉛のように重い疲労を感じていたけれども、その夜は一睡もしなかった。いや、時には眠りの精が目蓋を押し下げてくれる瞬間もあった。しかし、それはおどろおどろしい悪夢の幕明けを意味していた。昼間の怖ろしい凌辱が再現する。ハッとして目を開くと、これも又、浅ましい地獄であった。体内に深く突き込まれた、とうもろこしは、抜く術もない彼女の神経を絶えず苛

立たせていた。もう血はとまっていたけれども、黒っぽく凝結したそれは、内腿にこびりついて、ひどく不快だった。

生れてはじめて、彼女は神の名を呼んだ。真剣になって救いを求めた。だが、どう考えて見ても、その可能性がないように思われてくる。何故なら、有明の組織が、あまりにも巨大であり、それは、ある意味では「国家」にも比すべき強大な権力を保有しているのだということ、彼女なりに臆気ながらではあったが、ようやく理解しはじめていたことが一つ。さらに最も致命的だと思われることは、本国ではメリー王女が誘拐されたことなど、

夢にも考えられていないらしいということであった。ニセの王女がボロを出さないでいる限り、誰一人彼女を救出しようと思える人はあるまい。とつ、こうつ、思案すればする程絶望感に打ちひしがれて行く王女だった。

無情な運命は、次の日もメリー王女に休養を与えてはくれなかった、もっとも、王女とて、その体内に根づいたようにして抜けないとうもろこしが齎らす異様な刺戟に気が狂いそうになっていったから、たとえどんな苦しみや辱かしめが待ちかまえているとしても、一刻も早く、この異常な苦しみから脱出したい

と切望していた。その故か、セルから引き出されたときも、昨日のように屠所に牽かれる家畜のような騒ぎ方をせずに、むしろ、自分の方からアマゾン女兵に縄尻を引っばるようにして出て来たものである。

マジックミラーのある、いつもの拷問室に入ると、硝子越しに、激しく揺れ動く肉体が見えた。イングリス夫人に対する責めが、もう始まっていたのである。

昨夜ひと晩中、舌を吊られて有明の所謂シリニエス・キャンドルになっていた朝小路久子は、今朝方になって、もう絶対に舌を噛んだりして自殺を図らないと固く誓ったので、ようやくヘアピンを抜かれ、セルに戻されたのであったが、その尻を支え、洩らした汚物を溜めていたパットが、今日も責具に使われていた。

なみなみと水を満たしたパットの中に顔を漬け、息が止りそうになってから、やっと引きあげられる。これを、さっきから何回となく繰り返させられているのである。髪の毛をしっかり高橋侍従に握られているから、逃げようとしても逃げられない。膝をいざつてもすぐ、細腰を蹴とばされて、もとの位置に戻されてしまう。後手縛りの上、足首を腿の根

元に結びつけられていたのでは、動作も思うにまかせないわけだ。

「おたすけ、おたすけ下さい。どんなことでもいたします。アッ、く、くるしい」

あとはブクブクとパットの水を泡立てるばかり。二、三分して、高橋侍従の手が、ゆるめられると、パネにはじかれたようにイングリス夫人の顔が、あがる。鼻からも口からも水が噴出して如何にも苦しそうであった。

「海水はタップリあるから、いくらでも、お飲みなさい」

高橋侍従の英語はタドタドしいだけに、こんな場合、かえって凄みがあった。

硝子越しに見ていたメリー王女の方も、夫人の哀泣が、彼女について経験したこともない程、せっぱつまったものであったので、その苦しさがいやられ、あたかも自分が苦しめられているようにオロオロしてしまった。そして、すぐ後に有明が立っているのを認めると、王女の誇りも忘れはてたかのようにひざまずき、

「どうかジャネットを助けて下さい」と額を床につけんばかりに哀願するのであった。

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。それでも一等扱いとなったイタリア娘ジーナの場合は恵まれていたといっている。逆にメリー王女とイングリス卿夫人ジャネットは、地上での地位が地位だけに、獣のようない扱いに身も世もなく呻吟するばかりであった、原潜ネプチューン号で。

それを冷たく見下したまま、有明が全然、別なことを言いはじめた。

「下手くそな牝ブタめ。まだ、とうもろこしがとれないのか。よし、それ程、スイートコーンが好きだというなら……。おい、もう一本、持ってきてやれ。冷凍のままでもいい」
有明の後に跪坐して控えていたジャンヌが跳ねあがるようにして部屋を出ていった。

とうもろこしに金串を横に通して一端を口の中に押しこみ、金串に紐をかけて後頭部で結びつけると即席の猿轡になった。

王女は目を白黒して苦しむ。冷凍のとうも

ろこしは、氷の丸棒そのものだった。それが喉の奥まで突っ込まれたのだから、たまったものではあるまい。

硝子の向うでは、やっと水責めから解放された夫人の腰に何やら黒いベルトが巻きつけられはじめた。悲鳴をあげ、腰を振る夫人に「注意しなさい。動く痛いわよ」

という高橋侍従の声が響いた。泣く泣く夫人は反抗を、あきらめた。

はじめてマイクのスイッチを入れた有明が隣室の高橋淑子に命令する。

「オイ、そいつの目張りをしろ」

あらかじめ用意しておいたらしく直径10センチもありそうに大きな丸い伴創膏のようなものが、ベッタリと夫人の両目に貼りつけられた。昨日の頭巾型目隠しに比べたら、まだ簡単なものではあったが、それでも夫人はメクラ同然になってしまった。

脅され、背中をこづかれ、王女はよろよると夫人のいる部屋に廻された。

突如、王女は棒立ちになつて動かなくなつた。目を丸く開き切つて呆然としている。

やっと足の縛めを解かれたイングリス夫人は後手をひっぱられるようにして、よろよろ

と立ち上った。その股間に、ある奇妙なモノを王女が見たのである。

しかし、似たようなことを昨日も、とうもろこしで体験していた。それが泣く泣く諦めた一つの理由であった。いずれにしても、嫌というて許される筈もないことであつたが。

王女を驚かせたのは、それがあまりにも、真に迫っていたことからであつた。まるで、イングリス夫人の体の一部に、なり切つたように見えたからでもある。

「どんなことでもすると言つたね」

鋭く高橋侍従が聞いた。一寸、考え込むように躊躇した夫人が、血を吐くような声で答えた。

「イエス・ミレディース（はい、お嬢様方）」

メリー王女は、われとわが耳を疑い、わが目をも疑いたくなつた。あれ程、賢く、誇り高い真の貴婦人だつたジャネット・イングリス夫人、その彼女が、このように卑屈な奴隷のような態度を示すまでに、一体どれくらいの拷問が行われたのだらうと思うと、ゾッと背筋が寒くなるような気がした。昨日は人の身、今日は同じことが自分にも振りかかつてくるであらう。こう想像した途端、目の前が

くらくらなって、足がガクガクしてきた。貧血を起したのであらう。

それより早く、王女の白い裸身は、もんどり打つように床に押し倒されていた。ジャンヌの早業だつた。有明の居室とはちがつて、固いリノリュームが背中に冷たかつた。

もう貧血どころではない。足をバタバタさせて起きあがろうと、もがいた。ところが、その足さえ動かせなくなつてしまった。足首を別々に縛られ、夫々反対方向へ引っぱられはじめた。こちらは高橋侍従の役割だつた。

熟練した二人のアマゾン将校は、またたくまに王女を固定した。足を股開きに引っ張つてから今度は後手縛りを一旦、解いて右手は右足首、左手は左足首に夫々結び合はす。

王女は羽根をひろげた蝶々のようなだつた。そして、上下の口に突きささつた、とうもろこしは、標本をとめるピンに似ていた。

「昨日お前は、とうもろこしで犯された。お返しに今日はお前が犯す番だ」

高橋侍従が単調なイントネーションで言つた。前にも言つたように、その調子が一層、夫人を怯えさせたらしく、その全身は鳥肌立ち、目に見えて慄えを増した。

「一步、前へ。そう、そこで跪くんのだ」
にわかめくらの夫人を、高橋侍従は言葉で動かしている。

「そうら膝があたったろう。それは足首だ。きのう、おまえが縛られたと同じ姿勢で、もう一人が、お前に可愛いがって貰うのを待ちかねている」

「ウー、ウー」

王女は猿轡の間から何かを訴えるようであったが、ただ意味のない音を洩らすにすぎない。さかんに手足をバタバタさせて最後のあがきを試みる。

「ゴー、アヘッド。さあ、身を倒して女と胸を重ね合すのよ」

夫人の背中が、水平になった。頭部が次第にセリあがって、メリー王女の胸をかくして行く。

「しっかりおしよ。おぼこじやあるまいに。もっと何とか出来ないのかねえ」

高橋侍従が足の爪先で、は

げしく運動している夫人の豊かな腰のあたりを小突いた。

「も、もう少し、ま、待って下さい」

息をはずませて夫人が哀願した。盲目の夫人には、わからなかったのだけれど、王女の中には、すでに、とうもろこしという先客があったのである。いたずらに、其処彼処を突きまわって、その度毎に王女の悲泣をさそうだけであった。

「あんたのご主人、サー・イングリスは、お聞（ねや）でどんなことを、なさいましたかね。よく思い出してごらん。さあ、やり直しやり直し」

髪をひっぱって夫人を、ひきはなした。けたたましい声が上がったかと思うと、それは王女の体から高橋侍従が問題のとうもろこしを引き抜いたためらしい。それすら何か、わからない夫人だった。

小突かれ、おどしあげられながら、夫人の舌が、そのあたりを這いはじめた。

二つの体は、からみ合い、押し合って、汗みどろになった。もとより、こんな状況下では飲びなど、ひとカケラも生れる筈がない。二人は、ただ恐怖に駆られて演技を繰り返すのにすぎぬ。まして、王女は昨日、とうもろこしによって、その処女性をなくした、いわば生れたて、ホヤホヤの「女」である。これでは、うまく行く筈はないではないか。



それなのに、勢子の役目をつとめる高橋淑子は、あるいは、けしかけ、あるいは叩き、大わらわで、二人を休ませない。

遂に苛立たしそうに夫人が叫んだ。

「て、手が自由なら……」

「そうか」

有明が、いった。

「高橋、目かくしをとらないと約束させたら手をほどこいてもいいぞ」

高橋侍従は言われた通りにした。すると、待ちかねたように、夫人の掌はメリー王女の双の乳房を驚嘆みにしたかと思うと、それを上げしく、ゆさぶりはじめたのである。

「ア、アー、アー、アー……」

とうもろこしを啜えたメリー王女は声を出すことは出来ても、言葉にはならない。いたずらに唾液が泡のようにブクブクと溢れ出るばかりだった。

ややあって、夫人の腰がギュッと締まったかと思うと、反対に下になった王女が、不自由拘束された裸身をのけぞるように反らせて一層オクターブの高い呻き声を洩らした。

ロイヤルクラウン

原子力潜水艦ネプチューン号は、潜航した

まま二十ノットの高速でケープタウンのはるか南の海中を、まっしぐらに印度洋に向っていった。

潜水航海中、有明のつれづれを慰めることを兼ねて、早くも初期調教がはじまっていたといっている。メリー王女とイングリッド卿夫人ジャネットは、そのいけにえとされたのである。誇り高い元子爵、由緒正しい公卿家の血をひく朝小路久子にしてもそうだ。

だが、ここに一人だけ、少しも地上と交らない生活を許されている者が一人だけいた。言うまでもなく、有明から一等扱いと指定されたイタリア娘のジーナだった。

もっとも、彼女にしても、ジュネーブ脱出のときは、着ているもの一切を取り去られてその代り、例のゴリラの毛皮をかぶせられていた。だが、それは怖ろしい秘密結社、ジーナを麻薬中毒の廃人にしてしまうまで飽くともなくシャブリ取る麻薬シンジケートの毒牙から、彼女を救い出すために、どうしてもやらなければならないことだったと説明され人の好い彼女は、今はむしろ、そうした強行手段をとられたことを感謝するような気持ちになりはじめていた。

ここで「自由」ということを少し考えてみたい。人間は誰でも完全な自由を求めることは出来ない。永遠に生きる自由もないし、呼吸をしないでいる自由もあるまい。生死ともに自分の意思をもって決定出来るものでもない。

そうだとすれば、自由などといっても比較的なことにすぎぬ。ジーナの自由は、セルに収容されている女囚たち、特に、徹底的にシゴかれていくメリー王女などから見れば、たしかに垂涎おくことの出来ない境界でもある。だが、ジーナにしてみれば、たとえば、どんなに美味しい食事を与えられたとしても、又、どんなに快い衣服を着せられていたとしても、監禁されているという事実が矢張り苦痛だったといっている。

ジーナには、なる程、恥かしい裸身を蔽うだけの布切れは与えられていたけれど、それも、あの未決服（第22回参照）でしかない。これでは、たとえどんなに一方で感謝していたとしても、一方では、到底ジーナにとって満足できることではなかった。

ジーナには、イタリア語の出来るミセス・ウィリーが、つきっきりであった。ジーナの

違和感を少しでも減らすためには、ミセス・ウイリーののようなヨーロッパ人の付添いは不可欠だったと聞いていい。

ウイリー夫人の努力によって、ジーナの不満は次第に、はぐれるようになった。丁度、そんなとき、有明が姿を見せたのである。

彼は極めて不愛想に言った。英語だったから、ミセス・ウイリーが通訳した。

「君は不幸にも悪逆非道な麻薬組織の罠に陥っていた。彼等は君を腐敗させることしか考えていなかった。あのままだったら、君は五年とは保たなかっただろう。次第に病毒に冒され、心身ともに腐れ爛れていったにちがいない。その意味で、私は君を救ったことになる」

「でも……」

暗い憤りをこめてジーナが言いかえした。

「あなたにしても、わたしをこのように閉じこめていらっしゃる。その点では、虎が狼に変わっただけじゃありませんか」

有明はジーナの言葉が通訳されるのを黙って聞いていたが、

「私は何も君に強制しようとしているのではない。今の君はローマはおろか、ヨーロッパの何処にかくれたとしても命が危いのだよ」

ジーナは、ミセス・ウイリーの通訳を、もどかし気に、さえぎって、

「わたしが逃げだしたんじゃないのよ。あなた方が、無理矢理、攫ったんじゃないのよ。あな」

とヒステリックに叫んだ。

「それはそうにちがいない」

有明が苦笑した。

「だが先方が、その言い訳を承知してくれるかね。そうじゃあるまい。君が何と言おうと取りあげてくれる相手じゃない。ね、そうだとすれば、君は脱走の罪で処刑を免れないことになる」

実際のところ、人身売買グループが金づるである女を殺す筈はないのだけれども、こんな嘘が有明の口から出てくると、如何にも現実味を帯びてくるから不思議だった。

「ああ……」

不可逆的な運命と諦めたのか、ジーナは両掌で顔を被い、オイオイと泣き出してしまった。こうなれば有明の思う壺である。

「さっきも言った通り、私はすべて君と納得づくで行きたい。私は君が気に入った。私は

君が私のところにとどまっている限り、君の健康な生活を保障しよう。いや、そればかりではない。一億リラに相当する六十万スイスフランを、君が私に奉仕する代償として、あげよう。この金はスイス銀行に預けられ、君のサインひとつで使えるようになる」

「リラ・チエント・ミリアーノ（一億リラですって）！」

今泣いたカラスが、今度は目を睜った。ジーナのように貧困な幼少期を過した人間にとって、桁はずれの金をもたらした効果は、それこそ目を瞠るものであったと聞いていい。

結局のところ、ジーナは有明の口車に乗って、むしろ進んで有明の「持ち物」になることを承諾した。もちろん、有明の巧妙なトリックを、そのまま鵜呑みにする程、子供ではなかったけれど、今までの状態が状態であるだけに、どう考えて見ても、今まで以上、悪くはなるまいと、思ったからであった。その「今までの状態」だって、ジーナにとっては結構、満足の出来るものであったから、尚更だったと聞いていい。

イタリア語で作成された契約書にジーナがサインすると、予め準備してあったらしいス

イス銀行の預金証書が手渡された。見ると、チャンと彼女の名義になっていて、あとはサインを届け出ればよいのである。この点では金位、銀位の貴妃高官たちも同様であった。

(第38回参照) 彼女達の口座には、その時々功績に応じて、相当の金額が、振り込まれる。しかし、どの途それは、絵に書いたモチのようなものであったと言ってよい。何故なら、彼女たちには、それを使う必要が全くなかったからである。裸身でいる日常では毛皮も宝石も意味がなかったし、第一、地上で買ったものを、この国まで持って来て貰うには有明の承認が必要であった。中には匿名で親に仕送りをしたいと希望する殊勝な女性もいるが、そのようなことは寧ろ奨励されるべきものと考えられ、地上にある有明の組織が代行してくれる。

金持ちになったジーナが先ず考えたことはその幾分かをシチリアの両親に送りたいということだったが、それはすぐ聞きとどけられた。

ジーナは幸福だった。彼女が送った千万リラは彼女の故郷に爆弾が落ちたような騒ぎを巻き起すであろうし、それが行方不明になっ

た娘からの送金だったと知った両親は、彼女の無事を推察して神に感謝するであろう。

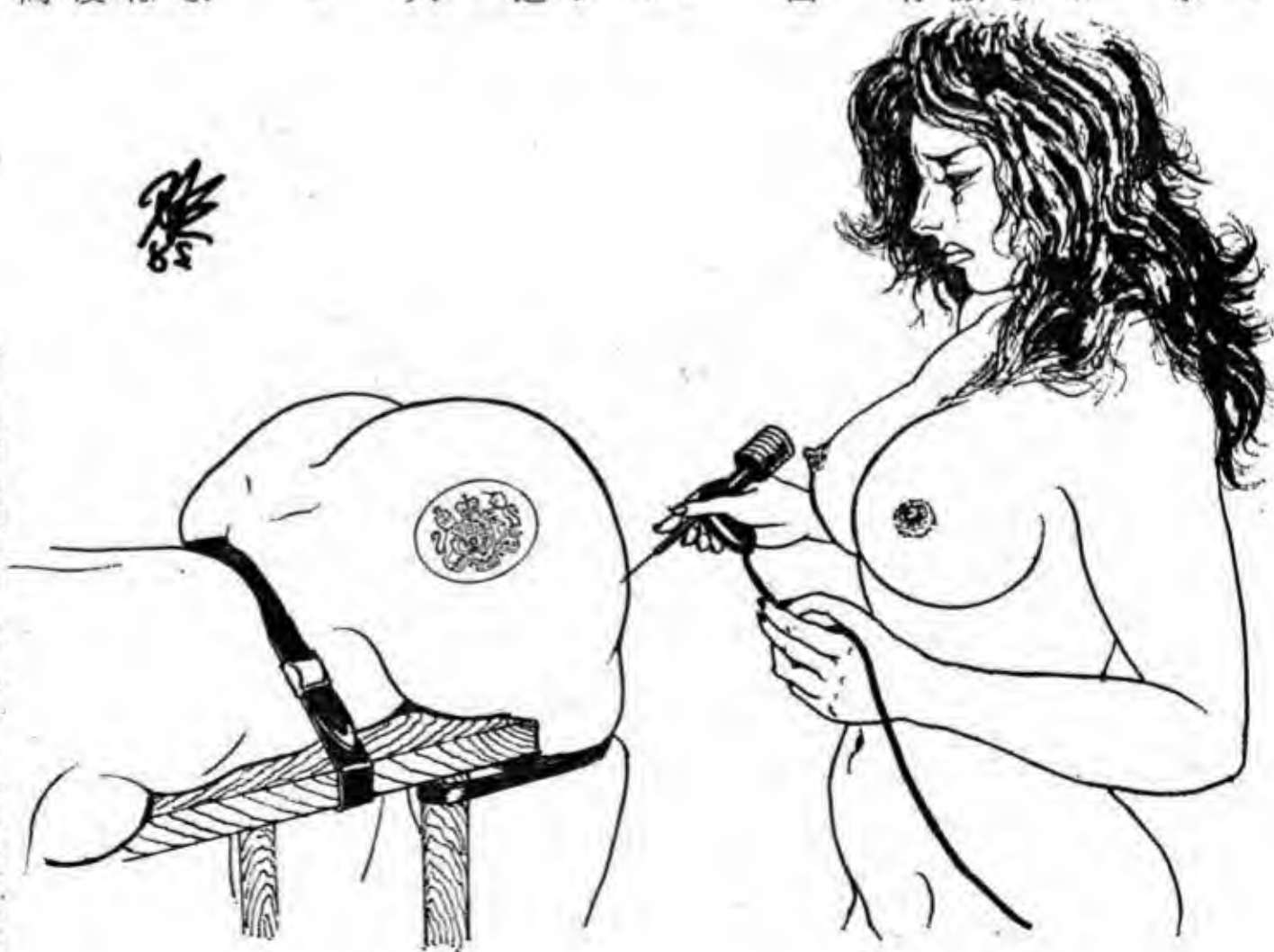
そんなことを想像しているジーナの顔は、かつてないような明るさであった。その顔を好ましそうに眺めながら有明が言った。

「どうかね。退屈しのぎに面白いものを見に行こう」

うながされてジーナは、いそいそと、立ち上ってしまった。実際、一等女囚であるジーナの居室は、一般女囚が追い込まれている「カイク棚」のようなセルに比べたら、天と地程も違っているのだが、それでもジーナは退屈し切っていたのである。

狭い通路をくぐりぬけるようにして彼女が導かれたのはメリー王女たちが未曾有の凌辱をほしきままにされた拷問室であった。

張
85



今日は室の真ん中にドッシリした食卓が据えられ、その上にうつ伏せになるようにして

白い女体が礫になっていた。手足をテーブルの四つ足にククリつけてあるので、身動きも出来ない。

その腰のあたりで、一人のアマゾン女兵が何か懸命にマジックペンを動かしていた。

「ホウ、なかなかうまく画けたじゃないか」

有明の姿を見た女兵が、あわてて開股跪坐の礼をするのに軽く答えて、有明はそのあたりにシゲシゲと目を近づけるのであった。

「おそれ入ります。先程、幻灯機を使いまして投影させた上をなぞったのでございます」

「それはよいアイデアだった。よく映ったのかね」

「それはもう。肌が白いものですからハッキリと……」

丸い砂丘のような臀部、真っ白な起伏が流れて太腿に移る側面のあたりに、15センチ角位の大きさをロイヤル・クラン、英国王室の紋章が画かれていた。

「いかがでしょう。これでこのアザは、すっかりかくれてしまうと思いますが」

指で押しひろげるようにしながら、その女兵が有明の了解を求めた。王女はそこに赤痣を持っていたのである。

「結構、結構。上出来だよ」

有明が機嫌よく女兵の出来ばえを、ほめてやったので、彼女は嬉しそうに頬をそめて平伏してしまった。

有明はツカツカと机上の女体に近づき、何のためらいもなく、その栗色の髪を掴んでグイッと、ひきあげた。

「ググッ」

押し潰されたような悲鳴をあげて女が顔をあげる。正しくメリー王女だった。猿轡が無残に頬を割っていたけれども、ジーナにさえそれがイギリスの王女だとわかった。

思わず声を呑んで棒立ちになるジーナに向かって有明が言った。

「わかったらしいな、ジーナ。こいつを王女だと思ったかも知れないが、ここでは一匹の家畜にすぎぬ。感違いをしないように」

英語だから王女の耳に入ったに相異なる。白い裸身が激しく痙攣した。ミセス・ウイリーが素早くイタリア語に通訳する。

有明がインターホーンを押して怒鳴った。「そっちはどうだ。伯爵夫人のイレズミ技術は？ 大分、うまくなったかい」

スピーカーからジャンヌの声がした。「オーケーです。さっきから、自分の内腿を

使わせて白粉打ちの特訓をしておりましたが下絵さえチャンとしていけば大丈夫、打てると思います」

「よし。すぐこちらへ連れてこい」

と命令して、こっちを振りかえると、「まだ顔を合わせたくないんだ。こっちの上半身をシートか何かで包んでくれ」

アマゾン女兵が、すぐ言いつけられた通りにした。

そこへ、イングリッド夫人を引き立てたジャンヌが入ってきた。夫人の両手は自由だったけれども、その細い首には、犬の首輪が巻きつけられ、ジャラジャラと鎖が連なって、その端をジャンヌに握られていたのである。今日もどんな責め苦を受けていたのか、夫人の頬はゲツソリとコけて、ただオドオドと有明の足下にヒレ伏すばかりであった。

「紋章が横になっているんですね」

不思議そうにジャンヌが言った。

「そう。もう上体を立てることはあるまい」有明がこともなげに答える。王女の運命は軍用畜になることに決まってしまった。王女とは夢にも知らない夫人は、何かに憑かれたようにタートウマシンの針を白い臀部に突き立てるのであった。

(未完)

……△浣腸随想▽……

妻と浣腸の思い出

藤岡江根真

白いシーツの上に、左側を下にして右脚をいくらかずらした恰好でよこたわる女体。盛り上った丘から、なだらかなスロープを描いて流れる黒いシュミーズがやや乱れ、対照的に映える白い太腿がふっくらと柔らかな線を見せ、挑発的な媚を投げかけてきます。微妙な動きにつれて、丸味豊かな90センチのヒップが徐々にシュミーズからのぞけ始める……これが、私の心をゆさぶる「浣腸を待つ妻」の印象的な姿なのです。

私たち共通の愛用浣腸器は「ネラトン氏管15号カテーテル」ですが、黒いゴム管につらなるのは千ccイルリガートルです。大抵の場合、このイルリガートルに入れるせっけん液は八百ccで一回分と定めてありますが、これ

が空っぽになる頃には、妻のお腹はハッキリとふくらみが判りますし、それだけでも充分苦しみが味わえるのでしよう、いつも両足をヒクヒクとこすり合せてもだえます。

毎度のこと、わかり切っているとはいうものの、「あなた、もう行かせて、お、おトイレに……。お願い」という妻の哀願は私のプレイ心をかき立ててくれますし、私の「いや、まだだ。がまんしろ」という言葉は、妻にとって快感を呼び起こすセリフらしいのです。それが証拠に、別に縛ってあるわけでも押えつけているわけでもないのに「許して、もうとても駄目」などと繰り返しながら、相当時間もだえ抜いて耐えているのですから。しかし実際に限度がくれば、私がいくら「ま

だ駄目だ、もう少し我慢しろ」といっても、縛っていない以上は、少々の押えつける力にはね除けてトイレに走りこみますし、私も無理に我慢させることは滅多にありません。

同じ浣腸でも、責めを目的とする人達からみれば、ほんとうにタワイのない猿芝居と笑われそうですが、私たちは浣腸そのものを楽しいのが目的ですのでこれで充分なのです。今、こうして浣腸を楽しんでいる妻は、以前にも一度書いたことがあると思いますが、たしかに素質はあったに違いないものの、30ccガラス浣腸器から始まり、エネマシリンジからイルリガートルと、思えばなつかしい進展ぶりでした。

ゆったりとした感じの双丘にかぶさるパンティも、股の間で圧迫され、肝腎な場所をおおう部分はしわが多く、しっとりとした感じなのです。やがて黒いスリッパ一枚の素肌は、くびれたウエストあたりまで、まくり上げられ白いパンティと、あざやかな対比を見せていました。私の手は、ゆっくりと妻のなだらかな曲線にそってパンティを双丘からすべらせて、太ももから足首にかけて抜きとるのでした。

双丘の中心部、彼女のアヌスは何かを待つように、びくびくとかすかに動いています。やがて、たっぷりワセリンを塗ったネラトン氏管15号カテーテルは、ゆるやかに30セン

チ余りもさしこまれてゆきました。

「いやっ、そんなに見ちゃいやっ。あっち、向いてて」

彼女は上気した顔を赤らめて、枕に顔を埋めてしまいました。白い石鹼液は、ゆっくりと一〇〇〇ccイルリガートルから下降をつづけ黒いゴム管の中を通過して双丘の中へ注入されてゆきました。やがて空っぽのイルリガートルは、白い泡だけが残し、彼女のアヌスにさしこまれたままのカテーテルは静かに抜きとられました。八〇〇ccの石鹼液が入ったためか、彼女のお腹は、はつきりとふくらみが判り、股をひくひくと、こすり合わせています。

「まだ、がまん出来るかい？」

私が尋ねますと、彼女は、イヤイヤをする様に首を振りながら、小さい声で「あなた、トイレへ行かせて。ねえ、あっち向いてて」と羞じらいのこもった声で、ささやきながらゆっくりと立ち上り、廊下に出て行くのです。

やがて一回目の大量の石鹼浣腸から解放された彼女は目をうるませて戻ってきました。

「気分よかったですか？」

彼女が、ここ数日来、便秘状態なのを知っている私は、思わず聞きました。

「ええ、とっても、よかったですわ」



「ところで、今の石鹼浣腸の気分は、どう？ 大分、興奮してるみたいだね」

「だって恥かしいものよ。信じないでしょうけど、こんな気持ちになるのが、私にも不思議なの。結婚以来、だんだん、セックスの喜びというのは分ってきたつもりだけど、セックスとは別に、浣腸されるのは、何ともいえない良い気持ちなのよ」

「しかし、初めは嫌がったじゃないか。下剤を飲んだみたいだなんて言ってたね」

「だってエ、初めて浣腸されたときは、無理矢理、強引に、いちじく浣腸をいっぺんに二つもかけられたでしょう。それに、あなたたち、私の知らないうちに、用意しておいて

浣腸してしまったんですもの、私、びっくりしてしまっただじゃないの」

「この頃は、どうなんだい？」

「あなたの手で、カテーテルを、お尻にさしこまれるときの気持ちって、たまらないわ。それに、液が入ってくるのが感じるでしょ。不思議ね、こんな気持ちって。なんとなく、感じるって気持ちなのよ」

私が彼女に、初めていちじく浣腸をしたのを契機に、私達の間では、おきまりの三〇〇ccガラス浣腸器から始まりエネマシリンジ、そしてイルリガートルと、今から思えば、いろんな、なつかしい思い出が沢山あるのです。

最近、大人のオモチャの店に、一〇〇ccの浣腸器が売られているのを知り、やっと手に入れました。まったく素晴らしいものです。

最近、私達は、土曜日の夜は浣腸プレイを行うことが、当然の様に習慣づけられているのです。今の彼女は意識的に金曜日から便秘の状態にしているようです。第一回はイルリガートルで大量の石鹼浣腸を行い、二回目には一〇〇ccガラス製浣腸器によりグリセリン液を使用しています。彼女の浣腸を受ける態度も今や完全に浣腸マニアの一人になりきって、本当に楽しい浣腸プレイをすることによって円満な毎日を送っている次第です。

連載・M派交友録 (五十五)

痴愚の泥海

△岩見崇の巻(2)▽

鬼 山 絢 策



蔭
の
男

は、一日延ばしに延ばしていたのだが、吟子の命令とあれば、きかぬわけには行かない。遂々アパートに電話が入った。

加納吟子は岩見をマンションから追い出して、代々木八幡のアパートへ移らせたが、昼間ひっきりなしに掛かってくる電話に悩まされた。
「早く向うへ電話ひいてよ。まだなの」

電話をひけば、マンションへ行く用が減ることが辛かった。だから岩見

岩見は寄稿先の出版社へ顔を出すたびに住所と電話番号を告げなければならなかった。
「どうです。久し振りに飯でも食いに行きましようか」

鬼山の出版社へ行った時、誘われて神田のロシア料理店に入った。

「前のマンション売ってしまったのですか」
「いえ、ちょっと……人に貸してるんです」
「そう言えば加納吟子さんが、この頃、売り出してきましたね。テレビで見ましたよ」

鬼山は唐突に話題を変えたが、それは一脈関連のあることだった。

鬼山が岩見のマンションに電話した時、女の声が出てきて「いま、おりません」と、つ

っけんどんに言ってきた。「何時頃、帰りますか」と尋ねたが、そのまま、電話を切ってしまった。

その声がどうも加納吟子の声のように思えた。岩見は一人者で妻は、いないし、岩見の知合いの女なら、あんなに不愛想な応答をするはずもない。吟子なら、やりそうである。マンションを他人に売ってしまったのならそういうこともあり得るが、いま聞けば貸し

登場人物紹介

加納吟子 28才。元アングラの女優。

佐戸崎から逃げるため岩見の世話でアパートに移る。クラブのホステスをバイトしながらテレビのカバーガールに出る。嫌いな佐戸崎から十万円もらっただけで好きになり、佐戸崎と二人で岩見の金を絞り取り、岩見のマンションまで乗っ取る。芸能界進出の野心がある。

岩見 昂 37才。挿絵画家。吟子を敬愛し、奴隷として奉仕している。佐戸崎に百万円渡して吟子と手を切らせる。吟子のアパートに移る。

佐戸崎 昂 36才。画家。女たらしの美男。学生時代から岩見をいじめ、吟子と絶縁したことにして蔭で吟子を操り、岩見の金をだまし取ることばかり考えている。怠惰で放縱な生活を送っている。

ていると言う。借り主なら、やはり、あんなひどい返事の仕方は、しないだろう。しかし吟子なら、やりそうである。やはり、あれは吟子だったのだなと鬼山は思い、話のいとぐちを引き出すために吟子の話を持ち出したのだった。

「実は、その吟子さんに貸してるんです」

岩見は鬼山が、もう気づいていることだと思つて、かくさずに言つた。

「そうですか。会いたいなあ吟子さんにも」

吟子が新宿のメルシーという店で働いていると言うのと、鬼山は、すぐ行こうと言つた。

岩見は乱交パーティーの夜以来、メルシーには行っていない。引越しやら仕事で忙しかつたからで、ちょうど今夜あたり、行きたいと思つていた。

メルシーは客がたて混んでいたが、スタンにいた吟子は岩見を見、鬼山を認めると、すぐボックスへやって来た。鬼山の顔を覚えていたらしく、

「先生、しばらくね」

と愛想がよかった。

「テレビ見ましたよ。また一段と綺麗になりましたね」

「アラ、何おごりましょう」

鬼山の体にピツタリ腰をおしつけて胸のふくらみが腕にさわつた。前に見た時はツンとして不愛想な感じだったが、さすがにホステスに馴れて人扱いがうまくなったのだろう。それと、この前、アングラの初日のあと、焼肉を食べながら演劇論をやつた時は、生硬な感じを受けたのに、いまは軟らか味を増して、おとなになった感じである。

「いらっしやいませ」

ママの洋子が、例によって和服をキチンと着こなして、慎ましくやかに挨拶した。

岩見は顔が赤くなるくらい、羞恥を感じたが、洋子は岩見を全然、無視して平然としている。女というものは、こうも芝居が上手なのであろうか。

乱交パーティーで二時間も岩見の上に跨がって責め、女の欲情を剥き出しにした洋子。最後に小便まで飲ませた、このママが「あたしはオナラさえ、したことがあります」というくらい、お上品に構えているのである。

——女というのは全く化け物だ——

と岩見は思った。

四十分ほど、いて「出ましょう」と鬼山は岩見を促して行きつけの「藤」という一ぱい飲み屋へ行った。

「岩見さん。あなたは吟子さんと結婚するつもりですか」

「えっ？ いえ、とんでもない」

岩見は狼狽して打ち消した。

鬼山は、これまでの、いきさつを大体、岩見から聞いて、吟子を遊び相手として選んだにしては少し深入りしすぎていると思った。

乱交パーティの話も聞いた。手切金を渡して絶縁したはずの佐戸崎を吟子が招んだということが、鬼山には、ひっかった。

もっとも吟子自身は手切金のこととは知らないのだから、昔馴染のよしみで招んだのかもしれないが、姿を消すほど嫌っていた男をどうして呼ぶ気になったのか、そのところが理解できなかった。どうも蔭で秘かに会っていた形跡があるように感ぜられ、率直に岩見に言ってみた。

「僕も、そう思います」

「どうも佐戸崎君が後で糸を引いているように思えるんですがね。やっぱり手切金のこと、吟子さんに話しておいた方がいいと思いますがね。そりゃ、あなたは吟子さんをレディとして敬愛しているのだから言いくいでしょうが、それなら人から伝えるという手もあるのですよ。例えば黒田氏などから、それ

となく吟子さんに知らせるという方法もあるでしょう」

岩見は、かなり深刻に考え込んでいた。

鬼山としても、それ以上、立ち入るのは、わるいと思った。何せ二十代の青年と違って三十も半ば過ぎて、それ相当の分別もあると思っただけである。

決闘するぞ

岩見の貯金は既に殆ど、なくなっていた。金というものは使い出すと、なくなるのも早いものである。

実際はかばかしいと思うこともあるのだが、どうにもならなかったし、既に使い果たしてしまった今では、悔んでも後の祭りだった。

黒田氏を通じて手切金のことを話してもらっても、今の吟子ではフンと鼻で嗤って聞く程度であろう。

最初、佐戸崎から逃げ出すために、アパートを見つけてやり、権利金や礼金を払ってやった時は泣かんばかりに喜んだ吟子だったのに、いまではガラリと変ってしまっているのである。何をしてやっても格別、嬉しそうな顔もせず、当り前のように思っている。

自分が、そういう風にしてしまったのかと反省してみたが、そのようにも思えない。

はじめ吟子は岩見を、まともな交際のできる男にしようと努力しかけたことがある。

だが岩見には、それが果せなかった。それでも吟子は岩見がマゾヒストであること自体は嫌悪も示さず、軽べつもしなかった。「あたし、あなたの性格は理解できるわよ」と言ってくれたではないか。

それが、いつの間にかプレーとしてだけではなく、日常生活に至るまで『女王』の座についてしまったのである。

電話の用事がなくなっても岩見は、やはり一日に一度は吟子のところへ顔を出した。

マンションに移ってから吟子は、友達づき合いが多くなって、毎日、誰かしらが顔を見せていた。

落ちついて二人きりになるチャンスが少なくなっていた。客が来ている時は、食べ残したものを片づけたり、食器を洗ったり、洗濯したりしていた。

岩見は朝起きると、吟子のマンションへ歩いて行った。代々木八幡から代々木駅近くまで二十分足らずの距離である。途中でパンを買って、吟子と一緒に朝食をとるのを楽しみ

にしていた。

吟子は寝坊で十一時頃、起きるので岩見も寝坊になってしまった。

扉を開けると佐戸崎がいた。

岩見は一瞬、顔が硬ばった。

「よう岩見君。御出勤かね。じゃあ明日の晩またな。俺、ちょっと打ち合わせてくるからな。じゃあ——」

佐戸崎は、そそくさと出て行った。

「佐戸崎、いつ来たんですか」

「今朝よ」

「吟子さん。佐戸崎を、あまり近づけないで下さい」

「何よ。やきもち、やいてんの」

「彼は、あなたに近づかないことを僕と約束したんです」

「だって今日、来たのは仕事を持ってきてくれたのよ」

この機会に、あれほど嫌っていた佐戸崎を何故パーティに招んだり、近づけるようになったのか、吟子の心境の変化まで問い訊すつもりだった。

「週刊女性ライフで、あたしのことを記事にするんだって。明日の晩、カメラマンを連れて来るよ。あんたも出るのよ」

「えっ？ 僕が？」

「そうよ。だから明日の晩、来てね。あたしこれからテレビのビデオ撮りがあるから、出かけるわ」

「吟子さん、ちょっと待って下さい」

「あたし、忙しいのよ」

吟子は岩見の言おうとすることも聞かずにサッサと出かけてしまった。

仕方なく岩見は部屋の片づけなどしたが、灰皿の煙草を見ると、二種類の煙草が、かなりの量で溜まっている。一つは吟子の喫ったもので口紅がついているが、あとは恐らく佐戸崎の喫ったものであろう。その量から推して、佐戸崎は昨夜から泊って行ったものとも推察できる。

「残金の五十万を約束より早く払ってしまったのは、まずかったですね」と鬼山が言っていた。いままでは自分に隠れて吟子に会っていたに相違ない。それは残金を取る都合があったからだ。もう金を取り尽したとなると、今度は大っぴらに吟子と会い出した。

吟子がパーティに佐戸崎を呼んだのも、そのためなのだ。

——まずかった……

岩見は、いまさらのように悔いた。だが、

もうおそい。

——これから、どうしよう——

佐戸崎に会ったら面詰すべきだ。奴が何と言おうと約束は守らせてやる！ きっと奴のことだから反発してくるだろう。高圧的に脅しに出るだろう。だが、今度ばかりは我慢できない。

こと吟子さんに関しては一步も退くまい。

彼は前に「俺と決闘するか」と言ったことがある。もちろん彼のは口先だけのものである。もしもまた彼が脅かしに、そんなことを言ったら絶好のチャンスだ。彼と決闘してやる。ナイフでも棒でも、毒薬の飲みっこでも何でもいい。吟子さんのために命を賭けても惜しくない。イザとなれば彼は逃げ腰になるだろう。それでも許さない。決闘してやる。

いままで人を犬畜生のように扱ってきた佐戸崎を、今度こそ徹底的にやっつけてやる。岩見は吟子を前にして二人が決闘する場面を想像して、昂奮した。

ほんとうに戦えば貧弱な身体佐戸崎こそ、問題ではないのだ。

腕力や体力は、すべてガッチリした岩見の方が優っていた。

奴隷野郎

週刊誌が吟子を取材に来ると言うが、どんなことなのだろう。「あんたも出るのよ」と言ったが、自分の役目は何なのだろう。

と一応は考えてみたが、まあ大したことではあるまいと思った。岩見自身は週刊誌などに書かれたくないのだが、吟子の命令とあれば従うよりはかはない。

翌日の夜十時頃、マンションに行った。

部屋には吟子、佐戸崎、それに女の記者、男のカメラマンと四人いて、ウイスキーを飲んでいた。どうせ遅い連中だろうと思って、ひと仕事、済ませて来たのだが、連中は、かなり前から飲んでいたらしい。

「遅いじゃないか。何故、もっと早く来ないんだ。何してたんだ」

佐戸崎が、顔を見るなり、どなりつけた。

岩見はグッと佐戸崎を睨み返した。

「おつまみなくなっちゃったわね。タカシ、何か、つくっておいで。それからサントリールオールドがあったらう。あれ、持っといで」

吟子も顔を見るなり用を言いつけた。岩見を記者に紹介するでもなく、頭から用

を言いつけたのである。だが相手が吟子では岩見も、しょうがない。

岩見は、おとなしく勝手に行って冷蔵庫を開けた。

「ああ、あの人ですか。見かけは普通のひとちっとも変りませんね」

と四十近い女の記者が吟子と話している。

「彼が来たから早速、撮影の方にかかりましょう」

「ちょっと待って下さい。これがフィリピン煙草です。吸って見ますか」

「いえ、結構です」

佐戸崎がマリファナ煙草を出して記者にすすめたが記者もカメラマンも遠慮したので、吟子と佐戸崎が吸い出した。

「ずい分、強い匂いですね」

「これやると調子が出ますからね。いい写真ができますよ」

岩見は酒の肴を皿に盛り、ウイスキーの壺を開けて、お客様に注いで廻った。

「どこをセットして撮る？」

女の記者はカメラマンと打合わせている。

「吟子は、やっぱりヌードがいいですか。それとも何か、ちょっと着せますか」

佐戸崎が女記者に話しかけた。

「そうですね、最初はガウンか何か着て頂いて……」

「タカシ、あたしのガウンを持っといで」吟子が命令した。吟子よりも岩見の方が、しまっている所を、よく知っている。

「隣のお部屋、拝見してもいいですか？」

「どうぞ、どうぞ」

カメラマンと記者を案内して四人ともゾロゾロと寝室へ移った。

折角、酒と肴を運んできても、手もつけずに皆、いなくなってしまう。岩見はガラスの一つでウイスキーをグイと一ぱいあふった。

——ヌードになるとかならないとか、一体どんなところを撮るんだろう——

寝室でアハア笑う吟子の声が聞える。

「タカシ、おいで！」

吟子の声がする。

岩見は前掛けをはずして寝室へ行った。

写真電球が煌々と、まぶしかった。

そのライトを浴びて吟子がシースルーのガウンを、ゆるやかにまとい、胸から片方の乳房を覗かせていた。

「そこへ、お座り」

岩見は取材の目的が、ようやく読めた。

僕は奴隷としてモデルに使われるのだ——

女記者が眼鏡を光らせて見ている。佐戸崎がマリファナ煙草を吸いながらニヤニヤ笑っている。カメラマンも見ている。

岩見は尻込みして立ちつくした。

「何ぐずぐずしてるの。そこへ座るんだよ」
吟子も煙草を吸っている。
どうしようもなかった。
岩見は言われた位置に膝を揃えて座った。



イメージギャラリー『伺候して拝受、若く美しき妻、夜の妖精』岡たかし

吟子はベッドに腰かけ、足を組んだ。
組まれた上の方の足を突き出し、
「足を、お舐め！」

と岩見の鼻先へ突き出した。カメラマンがカメラを目に当てた。

カメラからは斜め後ろになり、顔は殆ど写らない位置にある。

「ホラ、何してるんだよ。足のうらを舐めるんだよ」

仕方なく吟子の足を両手に捧げるようにすると、吟子は足の指先を上に向けて、足のうらを顔へおしつけるように持ってきた。

岩見は唇をつけた。

「そのまま、そのまま。このポーズでいいですか」

佐戸崎がカメラマンに聞いている。

「ええ、いいでしょう」

カチッ、カチッとシャッターの音がする。

吟子は含み笑いしながら、両手に持たれた足を更に上げて岩見の頭を踏んだり、顔へ足のうらをベッタリ押しつけたりした。

カチッ、カチッ、カチッ

ひっきりなしに、シャッターの音がする。

「今度は背中へ腰かけて見て下さい」

「もっと頭を下げて、土下座するような恰好

になつて——」

背中を曲げて平にすると吟子がサツと腰をおろし、また足を組んだ。

「もっと頭を下げるんだ。もっと」

佐戸崎が命令した。

——なにくそッ——

岩見は逆に亀のように腹這つたまま、頭を持ち上げた。

「馬鹿！ 下げるんだよ」

佐戸崎はツカツカと歩み寄り、足を上げると岩見の頭にかけてグイと踏みつけた。

カチッ！

シャッターの音が鳴る。

「何をするんだッ」

岩見は思わず半分、身体をおこした。

吟子が落つちそうになつて、よろけたがスツと立ち上がった。岩見は完全に背中を起こした。その顔は、いつもの柔和さは消えて怒りに燃えていた。

「何だ、この野郎ッ」

佐戸崎は岩見の頬をピシッと殴った。

岩見はその手を掴み、グイと逆に捻った。

「アッ、痛ッ！」

佐戸崎は女のような甲高い悲鳴をあげた。「おやめッ、タカシ。仕事を続けるのよ！」

吟子が命令した。岩見の闘志は萎えた。

「この野郎、この野郎ッ。こん畜生ッ！」

怒り狂つた佐戸崎が岩見の顔を滅多打ちにした。岩見は、もう抵抗しなかった。

手向かわないとみると佐戸崎は調子づいて足で所嫌わず蹴つとばした。顔へ足がとんでくるのを避けて、岩見は両手で頭と顔を抱えて、うずくまつた。

「この野郎ッ、この奴隷野郎！」

佐戸崎は抱え込んだ頭を目がけてガンガン踏んづけた。

「もうよしなよ、たかしさん」

「生意気な野郎だよ、反抗しやがって。畜生ああ痛てえ」

佐戸崎は右手首を、さすった。

苦 痛 と 屈 辱

吟子はシースルーのガウンを脱いで全裸になつていた。下半身をかくそうともせず、岩見を馬にして、口に紐を咥えさせて這い廻らせた。

カメラマンは黙々としてシャッターを、きり続ける。

「ハイ、次は奴隷のキスシーン」

佐戸崎が言った。

「どういうポーズでやる？」

吟子は佐戸崎に相談する。

「最初はスタンドだな」

カメラに正面向いて吟子が立つ。

「ハイ、ここへ来て！」

吟子が言う。岩見は彼女の前に座る。

「両手で腰を抱いて」

岩見は接近して豊かな尻を抱える。

「もう少し横向きになつてくれませんか」

カメラマンが注文を出す。

吟子がグクツと横向きになる。自動的に岩

見の身体も横向きになった。

岩見はカメラを構えた男に向つて、

「あの、顔を写すのだけは勘弁して下さい」

「大丈夫ですよ。この角度では斜め後ですから、誰か分かりません」

「ハイ、キスして」

岩見は言われる通りに膨らみに唇をおしつけて吸った。

「迫力ないなあ。こんな写真じゃ、つまらないでしょう」

佐戸崎が女記者に言った。

吟子が岩見の腕の中からサツと片足を引き抜いて岩見の肩を踏んだ。折り曲げた足の、

太腿の曲線が美しい。

「お前、両足を投げ出して、もっと姿勢を低くしなよ」

岩見は言われるままのポーズをとり、上体を斜めに仰向けのポーズをとる。両手を後に廻して突っかい棒にした。

その顔の上にのしかかるようにしておしつけてきた。

「おう、いい線、出て来たぞ。もっとグッと圧しつけろ」

佐戸崎の機嫌がよくなって、また口数が多くなってきた。

岩見は羞恥と屈辱に顔が真っ赤になった。だが一方で、

「こんなひどい写真を撮ってよいのだろうか。これが公開の週刊誌に載せられるのだろうか——」

自分自身の恥かしさもさることながら、サジスチンとして売り出すことは吟子にとって大きなマイナスになるのではないか。

という不安があった。

カメラマンが二機のカメラのフィルムを撮りきって、フィルムを入れ替えるためタイムを宣言した。

「実は、こんなもの、持って来たんですけど

ね。使ってみますか」

女の記者が犬の首輪を出してきた。

「面白いじゃないですか。使いましょう」

吟子よりも佐戸崎が返事をした。

吟子が首輪を岩見の首に嵌めた。長い綱がついていた。

「芸を、いろいろ仕込むんだな。最初はチンチンだ。チンチンしてみろ」

岩見は振り返って佐戸崎を睨んだ。

「何だ、こん畜生！ 早くやれッ」

佐戸崎は、岩見の腰を蹴とばした。

「何するッ！」

岩見が立ち上って、向って行こうとした。

「こうれッ！」

吟子が綱をグイと引っ張った。岩見はモロに後ざまに、ひっくり返った。

「アハハハ、ざま見ろ、馬鹿野郎」

「早くチンチンおし」

吟子が命令した。岩見は観念してチンチンの恰好をした。シャッターが鳴る。

「よし。いい子、いい子」

吟子が足を上げて、足の裏で岩見の頭を撫でてやる。

「次は、お預けだよ。餌は何かいいかな」

吟子はベッドに浅く腰かけて両股を大きく

ひらいた。

「サ、ここへ来て、この前にお座り。お前には一番いい御馳走だよ」

足の間に岩見を座らせ、顔の前スレスレに熟れた果実を突きつけた。

シャッターがカチカチと鳴る。

「どうだ、食べたいか。お預けだよ。フッフ欲しいかい。欲しけりゃ、ワンと言いい」

岩見は、つとめて女記者や佐戸崎の方を見ないようにした。羞恥で顔が、はてるのが自分でも、よく分った。

「ワン！」

「よし、サア、食べさせてやる。お舐め」

岩見は、なるべくカメラのレンズから後向きになるようにして、与えられたものに舌をのばした。

「もうちょっと横向きに位置を変えてくれませんか」

カメラマンが注文を出す。吟子の太腿が岩見の顔を押し斜めの位置に変えられた。

それでも吟子の太腿にかくれて岩見の顔はほとんど見えなかった。

「ああ、感じる……」

吟子は眉をよせ、いきなり両足を上げて、岩見の首へ太腿を巻きつけた。

「ウン、こりゃいい」

カメラマンは盛んにシャッターをきる。

「もっといいとこ、やらせましょう。吟子、馬乗りでやれ」

吟子は笑いながら足をほだき、岩見を蹴とばして仰向けに倒すと、その顔の上にベッタリと跨がった。

「どうです、これは」

「ウン、凄い。いいですな」

これでは岩見の顔の上半分がモロにレンズに写ってしまう。岩見は後から吟子の尻を両手で押した。押し出された吟子は、岩見の顔の前面に尻が、ずり上がり、岩見は眼のあたりまで吟子の尻が埋まった。顔を写されまいとする岩見の必死の努力だった。吟子の重い尻で鼻が、へしゃげるように潰され、呼吸も苦しく、この方が余程、苦しかったが、それでも顔を写されるよりは、いいと思ったからである。

「フッフ、皆が見てるから恥かしがってるんだよ、此奴！」

「そんなら顔のよく写るようにしてやれよ。ちよっと尻を持ち上げて見ろよ」

吟子は両膝で立って尻を上げた。岩見の泣き顔が露れた。シャッターがカチツと鳴る。

「どうか顔を写すのは勘弁して下さい」

「そんなに顔を写されるのが恥かしいの。あたしが平気で写されてるのに」

「でも、それだけは勘弁して下さい」

泣き声で哀願した。カメラマンもレンズから目を離してしまった。

「じゃ、顔がかくれてればいいんだね」

吟子の目がサジスチックに光った。マリファナが利いてきて、目つきが違っている。

「よし、頭をこっち側に向けて寝てごらん」カメラの方に向いていた頭を正反対の方向に、カメラに足を向けて寝るように命じた。

「こうすりゃ、いいだろ」

吟子は岩見の頭の方から跨がった。顔全体の上にお尻をのせてベッタリと跨がった。

「どうだッ、こん畜生ッ！」

グリグリと尻を揺する。

「ウウッ！」

岩見は苦しそうに吟子の太股に手をかけ、持ち上げようとした。

「ざま見ろ、こん畜生ッ！」

佐戸崎がやって来て岩見の胸に足を乗せ、グーッと踏みつけた。

「どうだッ、この野郎。このまま潰されて、くたばっちまえッ、この野郎ッ」

グイグイ踏みこむ。それに合わせて吟子は笑いながら尻を揺すっている。

「大丈夫ですか。窒息してしまうと大変ですよ」

女記者が見かねて注意した。

吟子が心持ち、尻をずらせて口を出してやった。ハッハッと荒い呼吸が吹き出した。

「この野郎ッ」

佐戸崎は、岩見の胸と腹に両足を乗せて、岩見の上に立った。

「ウッ、グッ！」

骨が折れるかと思われるような苦痛に、岩見は呼吸が出来たと思った瞬間、息つく暇もなく、佐戸崎の憎悪の土足に踏みしめられたのだ。

苦痛に歪む口もとを見下した吟子は、サジスチックな衝動にかられて、再び尻をずらせて、その口を上から、もろに塞ぎ、ピツタリと蓋をしてしまった。

人に見られるのが怖い

岩見は身体の節々が痛く、代々木八幡のアパートで一日、寝ていた。誰も来てくれる人もない。腹が減れば、痛む身体を起して外

に飯を食いに行った。

週刊女性ライフが街に出るのが恐かった。

あの晩、岩見は頭がクラクラして気絶してしまつた。その間に、どんなことをされたのか、どんな写真を撮られたのか全然、記憶していないのである。屈辱の写真と記事が公表されるのが恐かった。

それでも毎日、本屋に行つて女性ライフの新しい号が出てはしないかと見に行った。

一週間、経つた。女性ライフの新しい号が出たが、吟子の記事は、どこにも出ていなかった。

——あれは没になつたんだな——

岩見は安堵した。しかし安心はしたが、あれだけ熱演した吟子が徒労に終つたのかと思うと、吟子に同情めいた気もおきた。

十日以上、経つて岩見も、あの夜の記憶と不安を忘れ去ろうとしていたが、その時、突然、大きなショックを受けた。

それは朝飯を喫茶店でトーストとコーヒーで済ませている時だった。何気なくスポーツ新聞を見ると週刊女性ライフの広告が大きく出ていた。

そのトップ記事に、

男はみんな奴隷

ヤプーを飼う

加納吟子夜の生活

という大きな見出しが出ていて、その脇にヌードの吟子が岩見の背中に跨がって笑っている写真が大きく出ていた。

うつ向いている岩見の顔は見えなかったが髪の色や額のあたり、岩見を知る人には、ひと目で、それと知れる。

岩見は思わず顔をあげて辺りを見廻した。

「写真の男は、お前じゃないか」と見ている人がいるような不安に襲われたからである。

もちろん、そんな人間がいるわけではないのだが、新聞の写真と見比べて「似ているな」と思われるだけでも嫌だった。

早々に店を出て本屋へ行った。

週刊女性ライフは、すぐ目についた。

表紙に新聞と同じ見出しが大きく刷り出されている。岩見は人目を恐れるように買い求め、アパートに帰って読んだ。

先ず、写真を見た。足を舐めさしたり、犬の首輪をつけてチンチンさせたり、ベッドに腰かけた吟子が岩見の首に足を巻きつけたの

まであったが、幸い岩見の顔を露わにしたのはなかった。それと、あの「奴隷の接吻」の場面もカットされていた。

記事を読むと吟子を完全なサジスチンとして紹介している。岩見は「人間家畜のT氏」となっていた。名前のタカシのイニシャルをとったのであろう。また「吟子さんのよき理解者である画家の佐戸崎昂氏は……」と、佐戸崎の方は本名そのまま出ている。もちろん、佐戸崎自身がOKしたからであらう。

「マゾヒストの心理というものは常人では理解できないもので、例えばこのTのような『大型』のヤプーは女性から屈辱を受けることを至上の幸福と考えている人間です。

『家畜願望』と言いますか、人間失格を夢見て家畜のように扱われることを願うのです。また、『汚物愛好症』と言って、女性の排泄物を好むのですね。クニンリングスと言うのは常人でも愛のテクニックとして行いますが、ヤプーの場合は、それが、より汚辱されたものを好むのです。例えば他の男と………した直後のクニンリングス、そうした状態を好むんですね………

——なにを勝手なこと言ってるんだ。何も知らないくせに——

とにかく、ひどい記事だった。吟子が根っからのサジスチンであり、男を虐げることに無上の快楽を感じる女性として吟子自身が、それを誇らし気に認めて、しゃべっているのだ。

果たして吟子が記事の通り、しゃべったかどうか、岩見は居合わせなかったから分らないが、これからテレビや、その他で売り出そうとするのに、このような記事がプラスとなるであろうか？

岩見の考えではプラスは全然、考えられず大きなマイナスとなることだけが、予想された。

一方、岩見の方は従順なヤブーという意味でだけ書かれていて、職業や、その他のことに触れていなかったのが、せめてもの救いだった。

とは言え、この写真を見れば、岩見であることが分かる者は何人か、いる。例えば鬼山編集長。彼は自分の性格や内部事情を、これまで打ち明けているから、知られたところで大した羞恥は感じないが、クラブメルシーに働く人々は、すべて分かるだろう。要するに自分と吟子の関係を知っている人には、すぐ分かることなのだ。

週刊誌だけなら、ともかく（女性誌ということで読者の範囲が限られているから）スポーツ新聞の広告にデカデカと写真を載せられたのでは、一ぺんに知れ渡ってしまう。

岩見は出版社へ顔を出すのが羞かしくて、行きにくくなってしまった。鬼山の出版社でさえ、顔を出すのが恥かしかった。

鬼山は、よいとしても、同じ編集部の人間が知っていやしないか。同じ社の別の編集部の仕事もやっていたのだが、岩見と加納吟子との関係を鬼山が、しゃべったとすれば、当然、あの新聞を見れば自分だと分かるに相違ない。

岩見は、ゆううつになり、一日中、家に引きこもって寝ていた。

出版社から電話が、かかってくれば、電話で用件を済ますようにした。

一日、寝転がってテレビを見ていたが、こうしてテレビを仔細に見ると、愚劣な番組ばかりの羅列で、歌うたいと、はなし家くずれの連中ばかりが、やたらと出て来て、どのチャンネルも同じような顔が同じようなことをやっていて、新鮮味も工夫もアイデアもないマンネリの連続であった。これでよくスポンサーが金を出すものだと感心した。少し変っ

たことをやって、それが当ると我も我もと同じような真似をする。ディレクター達は皆、怠け者ばかりで、手近に転がっているタレントを安易に使って時間をつないでいる。こんな世界にあこがれて身体を張ってまで飛び込もうとしている若い連中が、いかに多いことか。

加納吟子も、その一人である。テレビ局のスタッフに御馳走し、ディレクターに身を委せてまで必死に売り込もうとしている。虚名に憧れた愚かなことだと思ふのだが、その馬鹿な女に輪をかけた馬鹿がいる。

それが他ならぬ俺、岩見崇なのだ。こんな女に、うつつを抜かし、十年かかって貯めた貯金も費い果たし、苦心して、やっと住み得たマンションまで、乗っ取られようとしている。その代償として得たものは何か。嘲罵と汚辱のみではないか。

一時は、ひょっとしたら結婚できるのではないかと、はかない望みを抱き、時には「いやそれは不逞な望みで、自分は奴隷に甘んじるだけで満足だ」と考えたり、岩見自身吟子に対する意志が、はっきり定まらないまま、ズルズルと深みに、はまってしまったのだ。

岩見は、つくづく反省したのだが、さて、これから、どうするか？ となると、いまさら吟子を諦めることもできず、吟子を恋うる心は、ますます強く、どうすることもできないのだった。

——ええい、なるようになれ——
それしか、ないのだった。



イメージギャラリー

『それでも私は幸福だ』

岡 かし

肩 す か し

岩見は吟子に会いにマンションへ行くと、誰かしら吟子の傍にいる。週刊誌に、あの記事が出てから人に顔を見られるのが恥かしく「ああ、この男が有名な吟子の奴隷か」というような目つきで見られるのが堪えられなかった。

あんな破廉恥な記事が出たにも関わらず、吟子は、むしろ得意になって、人前で岩見をコキ使い、足蹴にして見せたりして「これが奴隷よ」とばかりに誇示するのだった。

夜遅く行っても、いないことが多く、一体何時に帰ってくるのか、生活が全く不規則になってしまった吟子は、捉えるのは困難なことであった。

吟子と二人きりで会いたい。あの匂やかな肌に、少しでもいいから触れてみたいと思うのだが、なかなか、そのチャンスに恵まれなかった。それと最近、佐戸崎が吟子に接近してきたことも大きな悩みの種だった。

——あれだけ固く約束したことだ。縁をきると約束した以上、守ってもらわなくては、困る。一度、佐戸崎を面詰してやろう。人をよ

くしていれば、いい気になって、つけ上がる奴なのだ。場合によっては喧嘩になっても一戦を辞さぬ覚悟をきめなくては――

佐戸崎の、あの青白いノッペリした顔は、思い出すだけでも癪にさわった。

岩見は無性に吟子に会いたくなかった。この頃、吟子と二人きりになることが殆どない。今夜は、どうしても、そのチャンスをつくりたいと思い、十二時を過ぎていたが吟子のマンションに出かけた。

吟子は、まだ帰っていなかった。だが、帰るまで待とうと肚を決めて、掃除をしたり、片づけものをしたりして待ったが、なかなか姿を見せなかった。

三時近くなつて、人の話し声が聞えた。

「じゃあ、またね」

「バイバイ、グッナイ」

扉の外で四、五人の声が聞えた。

扉が開いて、酔っぱらった吟子が入って来た。その後から佐戸崎の姿が見えた。

「あらっ、何でこんな遅くまで、いるの！」

と吟子は岩見を叱りつけたが、

「佐戸崎君。君に話がある」

岩見は佐戸崎を睨んで立ち上がった。

「何だよ、やぶから棒に。話があるんなら明

日、聞こうじゃないか。今夜は、もう遅いからサッサと帰んな」

「君は帰らないのか」

「俺？ もちろん帰るよ。俺は吟子を送って来ただけだからな」

それなら送って来た他の連中と一緒に帰るはずである。一人だけ残ったのは泊まるつもりだったことは目に見えている。

「それなら一緒に帰ろう」

「いや、仕事のこと、ちょっと打ち合わせがあるんだ」

「いいでしょう。やり給え。僕は此处で待つて」

いつもの岩見と全然、違っていた。言葉つきも違えば、目の色も変えている。佐戸崎が何か文句を言えば、一触即発で爆発しそうな気構えである。佐戸崎も、その気迫に圧されて今日は、おとなしかった。

佐戸崎はチラと吟子を見た。吟子から「帰れ」と命令してもらいたい様子だった。

「別に僕に秘密のことじゃないんでしょ。どうぞ、ゆっくりやって下さい」

機先を制するように、岩見は吟子に向かって言った。言われてみれば、吟子は岩見に聞かれてまずいということは、ひとつもないはず

である。断わる理由がないのだ。

吟子も岩見の様子が、いつもと違うし、それが佐戸崎に向けられた闘志であるだけに、いつもの高圧的な言葉が出ず、逆に佐戸崎の方を見て、すぎるような目つきになった。

「ホラ、例の映画の件さ。明日あたり里見監督が会おうと言ってるんだよ。その前に、こっちの態度を決めておきたいんだが……」

チラと岩見を見る。岩見は立ち上った腰を落ちつけて本をひろげている。

「まあ、いいや。明日でもいいかな。じゃ今夜は帰ろう」

途端に岩見は顔を上げて佐戸崎と吟子の目の色を、うかがった。

「じゃ、お休み」

扉を開けると岩見も立ち上って「お休みなさい」と吟子に頭を下げ、佐戸崎を押すようにして外へ出た。

「話というのは何だ」

近所のスナックに落ちつく佐戸崎は不愉快を剥き出しにした顔で聞いた。

「佐戸崎さん、僕との約束を忘れたの」

「忘れやしないさ。それがどうしたんだ」

「吟子さんには会わない約束だろう」

「そういう約束をした覚えはないぜ。俺は吟

子から手を引く約束をしたただけだ。そうじゃないのか」

「それなら、あのパーティの晩、何で吟子さんを抱いたんだ。いつか言おう言おうと思つて延び延びになつてたんだ」

「ああ、あれか」

佐戸崎は水割りをグイと一気に飲みほして「ありや、気まぐれさ。あんな薬を使えば皆氣違いになるよ」

「じゃあ、その後は関係してないんだな」

「当り前だ。仕事の上で会うのは、仕方ねえだろう」

それまで制約する権利はなかった。

「しかしそれにしては解せないことがある」

「何だい、そりや」

「吟子さんの君に対する態度だ。以前は君を嫌っていた。それが、この頃は君を快く迎えている。こりやどういふことだ。何があったんだ」

「そりや俺が仕事の口を持ってくるからだろ。吟子だって稼がなきゃ食えねえからな」

「とにかく君と吟子さんの間柄は仕事だけのつながりじゃない！」

「どうしてだ。何か証拠でもあるのか」

そう言われると岩見は確証は何一つ握って

いないのだ。

「吟子さんは君が嫌いで、恐しくて君から隠れるためにアパートを引っ越した。君が再び現れた時は蒼い顔をしていたくらいだ。それが、いまは君を見るあの目は、恋人を見る目だ。どうしてなんだ」

「おいおい、そんなこと聞かれたって無理と言うもんだらう。吟子は、もともと俺が好きだったんだ。又俺が好きになつたんだらう。俺の方は何とも思っちゃいねえが、向うで好きになつてくるのは、どうしようもねえじゃねえか。お前から吟子に、好きになるなと言つてやつたらいいだらう」

所詮、証拠がなくては、どうにもならないことだった。勢い込んでいた岩見のファイトも萎えてしまった。岩見の肚は佐戸崎を怒らすことにあつた。いつもヘイヘイしている自分が高圧的に出れば佐戸崎と喧嘩になるだらう。それを望んでいたのだが、狡怯な佐戸崎は、岩見の心を見すかしたように、その鋭鋒をかわしたのだが、相手のファイトが萎えたを見ると又、態度を変えてきた。

「大体な。あの女は、お前にや過ぎた、しろものだ。お前の女にしまったって、無理だよ。そりやまあ、お前も分かつてることだろ

う。だから奴隷の身分で甘んじる。それでいいじゃねえか。お前は、それでいいかもしれないが、吟子はそれだけじゃものたりねえ。だから、あのディレクターと、つきあったり他の男達とも、つきあつてゐるんだ。吟子は、お前の舌だけじゃ満足できねえんだぜ。吟子だって普通の女だもの、当然のことだろ。それまでお前はブレーキをかけるつもりか」

「イヤ、そんなつもりはない」

「じゃあ何故、俺だけを責める」

「君と僕との間には約束があるもの」

「約束か。フン、つまんねえ約束をしたもんだ、たった百万ぽっちの金で。お前が、あの百万を盾にとって俺を責めるなら、返してやるぜ。金さえ返せば何の義理もねえだらう。」

俺が吟子をどうしようと自由だらう」

口先では何とでも言えるが、いまの佐戸崎に百万はおろか、十万の金もないし、返す意志のないことは目に見えているのだ。

「大体あの時、俺は二百万と言つたのを覚えてるだらう。それを俺とお前の仲だから百万に負けてやつたんだぜ」

「そう金のことばかり言わないで下さいよ。」

僕は吟子さんを金で買ったとは思つてないんですよ。だから吟子さんには、そのことを話

してない。僕は、あなたとの友情による約束だと思ってるんですよ、金なんかどうでもいいんです、返してくれなくても」

「だからさ、だから俺もお前のために一生懸命、尽してやってるんだぜ。それが、お前に分らねえだろう。教えてやる」

岩見が下を向いておとなしくなると、それをジロジロ眺めながら、佐戸崎はウイスキーを飲んで上唇をペロリと舐めた。

「いま吟子には、ある大会社の社長がパトロンになろうとしている。月々三十万の手当てを出し、あんなケチなマンションでなく、もっと豪華なマンションを買ってやろうと言ってるんだぜ。そうになったらどうなる？ お前なんかポイだぜ。ポイだ」

佐戸崎は右手で物を捨てる手つきをして見せた。岩見の顔色が変ったのを見てとると、佐戸崎は得たりとばかりに、

「それを喰いとめてやってるのが、この俺なんだぜ。お前のためにだよ。考えて見ろよ。

お前は俺を金のことばかり考えてる野郎だと思ってるかもしれねえが、俺がそういう男なら、喜んであの社長に吟子をくれてやるぜ。いろいろ、うまい汁にありつけるからな。それをしねえのは、お前との約束、お前との信

義、交情があるからこそなんだ。分かったか」

そんなパトロンが果たして、ほんとうにいるのだろうか。口から出まかせを言う佐戸崎だから信じられない。だが、嘘だと否定する根拠もない。

だが、もしそれがほんとうだとすれば、岩見にとつては重大なピンチである。全然、見も知らぬ男が出現して吟子をさらって行かれでは、いままでの労苦も、すべて水泡に帰するからである。

「吟子が俺に相談をもちかけてきたが、俺は極力、反対してるんだ。そんな猥々親爺の世話なんか受けなくても、吟子はいまに自力で立派にその位は稼げると言ってるやっただ。

吟子には、それだけの素質がある。実力がある。あいつは、いまに大物になるぜ。そうなりや、お前は大スターの、つけ人だ。相撲で言やあふんどしかつぎだな。吟子さまのお供をして日本国中、外国でも、どこへでもついて行けるぜ」

「あなたは？」

「俺はマネージャーよ。俺は吟子を大物に育て上げてやろうと思ってる。だから仲よくやろうぜ。あまり硬いこと言うなよな」

佐戸崎は岩見の肩をポンと叩いた。

岩見も吟子の出世は願っている。だが、そんなに出世した時、果して自分を傍に置いてくれるだろうか。それが心配だった。

「しかし……」

「何だ？」

「いつかの週刊誌の記事ですがね。あれは吟子さんにとってマイナスになるんじゃないですか。少なくともNHKでは使ってくれないでしょう。あんな風なイメージでは……」

「フフフ、NHKが何だ。NHKだけが放送局じゃねえんだぜ。俺は吟子をサジスチンとして売り出そうと決めたんだ。アーシユウアンドレスみたいにな。日本じゃ、まだそういうタイプの女優が、いねえ。吟子がスターになりや放送局の奴等、吟子の前に土下座して頼みにくるぜ。ヘッヘヘ。いまでこそディレクターの御機嫌とって寝てやつたりしてるが、いまに見ている。奴等を吟子の前に跪かせて見せてやるからな」

酔っぱらった佐戸崎は気焰をあげた。

「まあそういうわけだからな。お前、俺に突っかかると思はねえぜ。じゃあな」

言うだけ言うと佐戸崎は一人で帰った。今夜こそ佐戸崎を詰問し、その不信をなじ

り、場合によっては喧嘩も買って出ようという、岩見としては珍しく強い意気込みで臨んだのだが、みごとに肩すかしをくわされてしまった。

それにしても気になるのは佐戸崎の言ったパトロンの事である。もしそれが事実なら、自分と吟子の間は、どうなるのだろう。全財産を注ぎ込んでまで打ち込んだことが、すべて水泡に帰するのであろうか。まさか吟子がある不人情なことはすまいと思うが……

——これは吟子に会って直接、確かめて見なければならぬ——

そう思う一方で、

——これで、もし吟子に捨てられたら、俺という男は何という阿呆な男なんだろう。佐戸崎にも金をだまし取られた挙句、いいように嘲弄されて……俺が使った金は何にもならない。すべて死に金だ。ハハハ——

岩見は心の中で淋しく笑った。二人の男女に翻弄される馬鹿な男——だが岩見自身、そ

の馬鹿を承知で、ここまで踏み込んでしまったのだ。どうせ馬鹿になったのなら、徹底的に馬鹿になってやれ——

そう思うより、仕方がなかった。

翌朝十時頃、吟子のマンションへ行った。

まだちょっと早いかなと思ったが、鍵をあけて中に入ると、

「だあれ？」

隣の寝室から吟子の声が聞えた。

「僕です」。

やっぱり早かったと思ったが返事をする。「そのテーブルの上のもの、片づけておいて頂戴」

見ると、喰い散らかした皿小鉢が並んでいる。昨夜は誰も来なかったはずだが？

「ウフフ、くすぐったいッ。イヤよバカ」
寝室で吟子の嬌声がある。誰かいるのだ。

——誰だろうか？ あの北尾とかいうディレクターだろうか。それとも、まさか新しくパトロンとかになるという男ではあるまいか——

「やあよう。何よ、朝っぱらから。ウフフ、スケベッ！ アハハハ」

吟子の一語一語が岩見の胸に突き刺さる思いだった。

——誰だろうか？——

(続く)

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	三万円
秀作	一篇につき	二万円
佳作	一篇につき	一万円
可作	一篇につき	五千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文藝味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

連載・時代S小説

紫

蘭

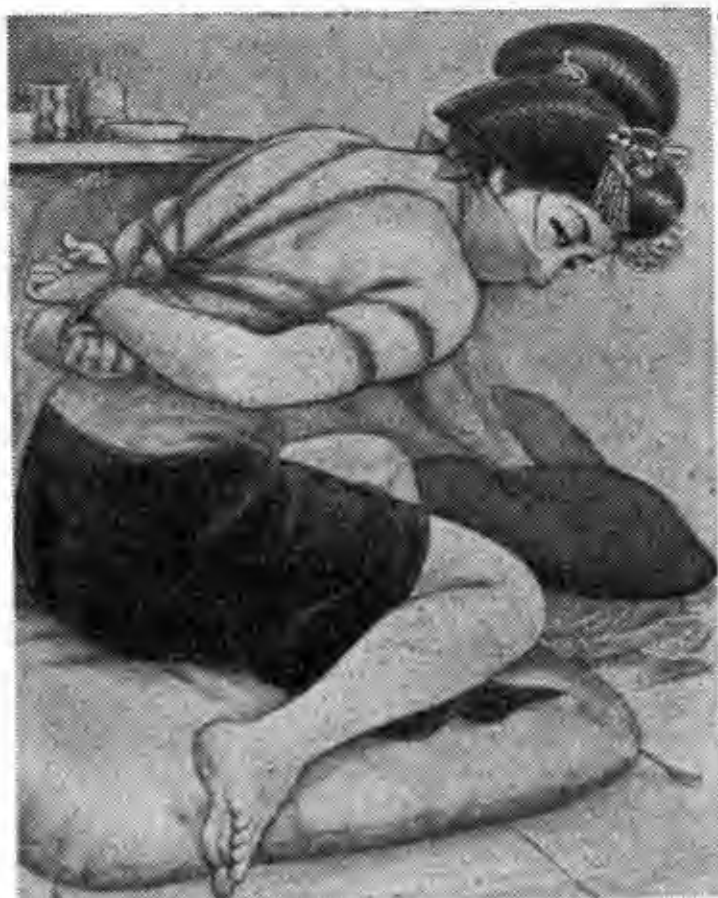
の

門

(39)

人間という生きものは
どこかで、誰かに、儀式をする
——あるいは為てもらわなくてはな
らない、生きものなのかも、知れぬ
たとえ、それが……。

風 流 極 道 軒



は、小さな大筒であった。

小さな大筒というのも変であるが、鉄玉をとばせる車輪つきの大筒を、そっくりそのまま縮少した長さ二尺、筒の直径は、そう、中細両端太り——で太いところが一寸から二寸というところであろうか。

「淫器・春嵐筒——『紅搾木』の名器にはもってこいの貴具だと存じます」

散位、得意そうにいったが、これが黒縄の黒馬からの借用だということは元禄屋たちには、すぐわかることであった。

「フッフッフッ、やって見なされ」

云われるまでもなく散位は、その筒を雅子

の正面に向けた。

「まずは、これにて紅搾木に春の雨など降らせて見せましょう」

「虫」の字なりに縛られている雅子の内股めがけて、コロ、コロッと車輪を廻して筒先を近づけた散位は、

「フッフッフッフ……」

含み笑いとともに一押しした。

「ア、アッ！」

左足首を右膝の上にあてがうという「女体半開き」の態勢で雅子は喘いだ。

後退しようにも背後は壁、しかも裏返しにされた畳の上である。むき出しのままの荒い藁が、柔らかな太腿や双臀につきささってき

淫 器 ・ 春 嵐 筒

むんむんと三人の女の肌の匂いが、たちこめる部屋で、青江散位が、まずとりあげたの

で、じっと坐っているだけでも苦しいのに、春嵐筒に迫られて女体が疼く。

「もう一押し、それ！」

車輪が軋んで筒先が横になっている左脚のふくらはぎを越え、ついむき出しになっている逆さ富士を掠めた。

「少し下を狙わなくっちゃあ」

よこから口を出した黒馬が、車輪軸のあたりを操作すると筒身が静かに下っていったがそれは、あたかも獲物を襲うまゝに身を屈める虎狼の猛々しさを思わせた。

「ア、アッ！ お、お許しを！」

白い木肌を見せながら、こちらを狙う筒先をまゝにして、雅子は息をつめた。

ゴクンと生唾をのんだのは清兵衛なのか善兵衛なのか――。

と、コトツという音がしたかとおもうと次の瞬間、

「ア、アレッ！」と雅子が悲鳴をあげ「雅、

前号まで――豊太閤が一子・秀頼に遺した莫大な秘宝の謎を求めて、元禄屋と怪盗徳夜叉の間にいよいよ決戦の幕がきつておとされようとするとき、元禄屋は悠然と貴子を責め、さらに雅子、お国の裸身にも稀代の淫ら廻りを加えていく。

雅子さまア！」思わず貴子が呼びかけた。

ものの一尺も離れていないところで同じように「虫」の字にされている貴子には、その苦しみが、よくわかった。

「や、やめて下さいまし、旦那さま！」元禄屋に訴えても、もちろん許されようはずもない。

「押し、引く、引く。そして、押す……」

コト、コロ、コロ、コト……ひきつづいて車輪が、もの悲しい軋音をたて、雅子の悲鳴が断続してあがった。

貴子は、とても見てはいられなかった。ぶるぶると自分が責められているように震えながら臉をしっかりと閉ざすだけ。が、お国はちがった。雅子をはさんで貴子と反対側に、これまた一糸まとわぬ素っ裸で縛られておりながら、斜め下へ、つまり雅子と春嵐筒との格闘へと視線を熱っぽく走らせている。

「いよいよ、発射のときが迫ったようだ、フツフツ。これで、みどもにイヤでも抱かれないと、その紅い唇で願ひでるはず」

ひとりごちた散位が筒の根もとにある紐をいったん引き、つづいて細い竹をくりこんで押した。

筒である以上、砲弾のとびでるように中は

くり抜かれているはず。要は、筒先から何がとび出してくるかであろう。

散位が竹を二押し、三押しすると、それに伴って筒が前進し、雅子との距離、一寸弱、つまり、三・三センチのところに迫った。そして、さらに小刻みにすすんで、筒先が視野から消えたとき、その刹那であった。

恐怖にひきつった雅子の唇から、

「ヒ、ヒエエッ！」

つんざくような叫びが、ほとばしった。

「雅……雅子……さま」

つられるように臉をひらいたが貴子には何がどうなっているのか皆目わからなかった。貴子だけではなく、昭吉にも和吉にも十分には納得がいかない。

さきほどの押し――引き――押しと何の変りもないではないか。

だのに雅子は、目を白く―あるいは黒くして紅白だんだらの縄目もきれよとばかり、悶え、ふだんの優雅さも忘れはてて、狂ったように絶叫しつづけるのだった。

不審そうに目を凝らす列座の人々の耳に、

「ア、アッ！ う、う、う……」

お国のうわづった声が、とびこんだ。彼女だけは、なにかを、かいまみたに違いない。

「う、う——って何ですか、お国さん」

昭吉が尋ねたがお国の唇はわななくだけ。

所が、奇妙なことがおこった。

散位が、わめきつづける雅子の耳に唇をよせて、

「どうですかい。みどもに抱かれるというのなら、許してさしあげてもいいのだけれど」

と一言いっただけで、雅子が大きく、うなずいたではないか。

「許してエ！ 散、散位さま。ひどい、ひどい！ 早く、早く！ ゆ、ゆるしてエ！」

「何でも命令に従うというのですね」

「キ、キャアアアッ！」

さらにわめいた雅子は、何度も何度もうなずきつづけ、裸身を狂ったように動かした。

それを見てニヤッと笑った散位は、正面の元禄屋に、

「『虫』の字のままで——と仰言いましたが肝心の雅子さまが、このように、一刻も早く抱かれないと申されますゆえ」

「散位さん。ずるいお方じゃの。フッフッ、だが、御立派なお手並みと云えよう。勝手になさるがよい」

「虫」の字のままでは抱きづらい。だが雅子に、どうにでもしてと云わせれば自由な姿態

をとらせることもできようという散位の魂胆が、みごと図にあたったのだ。

散位の目配せをうけた黒馬がニヤッと笑って雅子を一膝、二膝、三膝すすめて背後の壁との間に二尺あまりの距離をとった。

あとは春風筒を、かるく一押しするだけであった。散位が車輪を廻す。雅子が「ヒイッ！」と叫んで、うしろに倒れる。と筒先からとび出したのは大きな、うなぎであった。

それも頭のほうは筒に残して、尻尾だけが今まで戯れていたらしく、ほの白く湯気のようなものをたちのぼらせていたではないか。

あとは——

座禪ころがしならぬ『虫ころがし』というのであろうか。左足首を右膝にのせたまま背中を畳につけた雅子の下半身は、まったくの無防備で曝けだされ、散位のもてあそびにまかせただけであった。

七 福 神

「貴子や、どうですじゃ」

琥珀色に燦めく巨大な玉虫のように転がり回る雅子の姿を、いつのまにか眺めはじめていた貴子は、元禄屋の言葉にハッと成り、つ

づいて頬をパァーッと紅くそめた。

「恥かしがることはない。男でも女でも見たくなるものですじゃ」

散位の再度の挑戦も、名器・紅搾木のまえにあえなくつぶれたのであろうか。満足した顔で散位は立ちあがったのに、雅子は、まだ喘ぎは洩らしても、嗚咽をながく、あとひかせてはいなかった。

「フッフッフ。どうやら、まだ夢見心地にはほど遠いようじゃの」

「元、元禄屋サ……マッ」

野太い声がきこえたのか雅子が、ムキ出しの姿態のまま、黒髪的一端をくわえて、羞恥をかなぐり捨てたように喘いだ。

その喘ぎに応じるように、

「昭吉さんや。三国責めでも四国攻めでも好きなようにやりなされや。僕は貴子と、あちらの部屋に参りますによって」

「好きなようにと申されますのか、旦那様」

「そこはそれ、常々、申し聞かせておいたであらうが、接而不洩とな」

「あ、あの、お国さんもござりまするか」

すでに貴子を軽々と抱きかかえていた元禄屋は、チラッと片目をつぶって見せた。

「すると、お国さんがよいと申されれば！」

昭吉が勇んで訊ねたが、そのときには、すでに、あいの襖が、元禄屋の足で、パタッと閉じられてしまったあとであった。

それにしても――

ともかくも、無礼講が許されたと信じてよかった。

「和吉さんや、どうする」

「もちろん、ここに残ります」と答えたのは久しぶりに雅子を責めたててみたかった。

「じゃあ、散位さんは」

と訊ねられて、蒼白い顔に嗜虐の炎をめらめらと、うかべた散位は、

「お国さまを徹底して責めて見とうござる」

「これで、きまった！」

一番々頭らしく一座を差配した昭吉は、元禄屋が貴子を抱いて襖を閉めた反対側の部屋を指さすと、

「散位さんと、清兵衛、善兵衛さん。お国さんをお連れになって。さあ、どうぞ！」

「すると、この部屋には、二人の番頭さんとそれに黒馬さんが残るということに」

早くもお国の縄尻をひったくって、悲鳴をあげさせた散位の問いに、

「御主人さまの仰せには、交換するもよからうと。だから、な、おわかりでしょう」

「して、接而不洩とは、お国さんにものことござるかな」

今度は、昭吉が片目をつぶって見せる番であった。

「フッフッフ、わかり申した。では！」

と納得した散位は、新しい刺戟を得たのかお国の女相撲番付の小結にでも乗ろうかというほど肥満した裸身を、清兵衛・善兵衛の二人に、かつぎあげさせると、

「では、のちほど」

と隣室に消え、襖をボタンと閉ざした。

二つの部屋にかこまれた部屋に残ったのは

黒馬と昭吉、和吉の三人――。

襖ひとつをへだてた両隣の部屋から聞えてくる悲鳴や嬌声を聞きながら、雅子への責めを始めるのであった。

「久我雅子……たしか、そうおっしゃるのでしたねえ」

まず和吉が得意の女言葉で、虫ころがしにされている雅子の乳房をつつく。

「ハ、ハイ……」

「さきの大蔵太輔柳原宗忠さまの御内室で、あとは、この江戸にきて」

「ハ、ハイ……」

訊ねられもせぬに答えたのは雅子自身よほ

ど、われを忘れているということであろう。

「こんなに、あられもないところをイケズされて恥かしくはないのかえ」

和吉のしなやかな指が、どこに触れたのか「アッ、アウ！」という喘ぎがおこった。

「御主人さまのおいつけでこれから三国攻めにかけるのだけど、どうだえ、嬉しいの」

返事の代りにしきりに雅子が呻いたのは、和吉の指々の巧妙なせいであった。

「アレッ！ 和、和吉さん！ 妾、妾……」

「妾がどうしたとおいいだえ。これで、楽しいとでも」

「ア、ア、ア――」

「ア、アッ――だけでは、わからないねえ」言葉がねちねちしている以上に和吉の指々は、もっとネチネチと、ねばっこかった。

「ア、アレッ！ も、もう、アレッ！」

「もっとはつきり、おっしゃいな。そうでないと、ほれ！」

「虫ころがし」にされたままのムキ出しの女体をまさぐられて雅子は、いやがおうでも夢見心地になってくる。

「貴子さまに較べれば、早かったわねえ、あなたは。それにしても、紅搾木ももっと、ほれ、もっと、しめぎにかけてごらんよ」

イメージギャラリー 『紫蘭の門、高嶺の花』 岡 たかし



和吉の指が三本に、ふえた。

紅い唇を、なかば、ひらきっぱなしで雅子は、熱い喘ぎを吐き出しつつける。

「紅搾木——御主人さまは、よい名をおつけになったもの。まったく、しめぎにかけられ

ているようですよ、昭吉さん」

「どれどれ、では、私も久しぶりに」

と、ひと膝すすめた昭吉が、和吉と頬をす

りあわさんばかりにして眺め入る。

「俺にも見せてくださいよ」

沈丁花の匂いが馥郁と薫ってくる裸身をと
りかこんで三人は、しばし鑑賞に余念がな
った。

が、隣の部屋から、けたたましい、お国の
悲鳴が聞えてくると、

「三国攻めを始めましょうか。散位さんたち
に負けては、おれませんよ」

昭吉が口火をきった。

「ちようどよい姿態ですわね。じゃああちき
は吉舌を」

「吉舌は、この俺に」

「ダメよ、一番は、このあちき。つきつきに
交替して車懸りで攻めたてるのですもの。い

いでしょう、ねえ、黒馬さん」

しなをつくってみせる和吉に、

「いいよ、いいよ。和吉さんからやりなよ。

お前さんの女形ぶりを見てると俺、胸くそが
悪うならあ」

「嬉しうありんす、黒馬さま」

「ケッ！」

ひらかれきった煌くような内股に、膝をよ
せる和吉をみて黒馬は、しつとりと汗ばんだ
乳房を抓みあげた。

三国攻めは、三峰採戦とも、三所詰めとも
いい、「風流春雨陣」によると、親嘴を攻め

乳頭を責め、吉舌を勢々理する——とある。

これに「菊花弄玩」を加えれば四国攻めになるのであるが、いまここにいるのは三人——四国攻めは散位でもやってきたときのことにして、和吉が、勢々理はじめ、黒馬が乳首索弄を開始したのであった。

残るは昭吉。「じゃあ、私はここ。雅子さま、ごめんなすって」

乱れた黒髪を、かきあげるようにして頭をもたげさせ自分の膝にのせると、そのまま上体を前にかがめた。

「ア、アッ！ ム、ムムウ！」

三人の男にかこまれて姿が見えなくなってしまう雅子の唇から妖しい呻きが湧いた。

それにしても——

三国攻めとか四国攻めとか、江戸時代からすでに男たちは、女を攻めるには、一人よりも二人、二人よりも三人と、数人で一人の女を攻めるのが至極と快楽と考え、かつ、実行していたらしい。そして男たちに、そのようことを考えつかせたのは、ほかならぬ女であり、その実行される日を期待して待っているのもまた、女なのであろう。

女というものは一人の男性より二人、二人よりも三人の男性というふうに、多数の男性

たちに裸身の催情部を一時に責められたいと心から願っているものであり、この願望は、どんなに淑かで優雅に見える女性でも、かわりはない。いや、淑かに見えれば見えるほど、この心底の欲望は、より熾烈に燃えているものと信じて、さしつかえない。

雅子は、いまその女として極上の悦楽に我を忘れていた。

つぎつぎと場所をとってかわりながら昭吉たちもまた、快楽に前後不覚であった。

三人が、フツと雅子の裸身から顔をあげたのは、隣の部屋から、ひときわ、すさまじい絶叫があがってきたせいであった。

「和吉さんや」

万一、散位の拷問でお国の躰に傷がつくようなことがあっては大変だと昭吉が目配せをすると、四つん這いになっていた和吉が、うなずいて足で、あいの襖を、そっと開いてみた。

「散位さん！」

なかの情景をひとめみた昭吉は思わず雅子の顔を膝からおろして立ち上っていた。

「ひ、ひどすぎますよ、散位さん。こ、これでは、お国さまが！」

駆けよったものの、いったい、どこをどう

すればよいのであろうか。

お国は、宙にういていた。「大」の字にされて空間にただよっていたのである。部屋の四隅からのびた縄に四肢を縛りつけられて四五尺の高さで揺れているそのさまは、虚空を「大」の字になって滑空する忍者を、思わせた。現代風に云えば、ウルトラ・ウーマンに扮したヒロインが、映画撮影所でピアノ線に手足をひっぱられて空をとぶ場面を撮影している最中とでもいえようか。

映画のヒロインは裸ではあるまい。いや最近、ヒロインがヌードを見せてリンチされるシーンも、たびたび、お目にかかるが、さりとて、いまのお国のように一糸もまとわず「大」の字にされることはあるまい。

「早く、早くおろして下さいよ。このままじゃあ、手足がバラバラになってしまいます」「フッフッフ、昭吉さん。そう騒ぐこともありませんまい」

大きくひらかれた股間から散位が顔をあげたが、その手には青竹が握られていた。さきほどの、すさまじい叫びは、この青竹のせいだったのであろう。

「お、お国さま。大丈夫ですか！」

背の上に、腹部を下にして、ぐったりとな

っているお国の顔を昭吉は、うかがった。

おそらくは、この地獄のような責めにズタズタにされて、昭吉たちの救いを待ちのぞんでいるのであらうと思ったのに、

「昭、昭吉かえ」

かろうじてあげた瞳には、うっとりとした翳りが刷かれていた。

「い、いいのよ、昭吉。こ、このままで妾はいいの。ほおっておいてくださいな」

「でも、お国さま。これでは、あまりにも」

「い、いいのですったら……痛！」

散位の青竹が繰り出されて、ギリッと歯を喰いしばったが、

「昭、昭吉さん。妾、まだまだ、我慢できるの。ヒ、ヒイイッ！」

ピクッと、けいれんしたはずみに、どこにたまっていたのだろうか、汗がポタ、ポタツ——と畳へと、おちて行く。

お国さまもお強い——と変なところで感心した昭吉が目を転じると清兵衛が見えた。踏みこむことはできないまま敷居のこちら側で雅子の部屋を、のぞきこんでいる。

のぞきの趣味など、とんと、もっていない昭吉であったが、自分たちの部屋の情景も、こうしてみると、こちらとあまり大差はな

った。

「虫ころがし」にされた一人の女を二人の男が責め罵っているのではないか。

「昭吉さん。なんなら交替しましょうか」

青竹をしごきながら散位が申し出た。

「けっこうですよ。まだ交替には早すぎますよ。紅搾木を堪能してませんか」

「フッフッフッ、それはこちらとて御同様。

お国さまの「雌蛸花」も、まだ味わっておりませんので」

「雌蛸花」ですって。不粋な散位さんにしては、できすぎた言葉ですね。雌蛸のように吸いつく花か。ハッハッハッ、これはいい。

お国さまも、さぞお喜びでしょう」

心配したのがバカらしくなった昭吉は、こちらの部屋にもどると、清兵衛の鼻っ先で、ピシリッと襖を閉めきるのであった。

恍惚としている雅子姫のお顔をも少し眺めたかったものを、残念でたまらぬ清兵衛は、

「散位さま。ひどい拷問は、これくらいにして、早く、そのメダコバナを賞味しようじゃありませんか」

「あせるな、あせるな。このようによく肥えて、しかも美しい女など、そうざらにいるわけではない。のう、お国さま」

いいながら、いまの姿態が、もう限界に近づいたことを悟った散位は、二人に手伝わさせて、お国をおろしていった。

畳の上におろされても、ぶよぶよに肥えた女体を「大」の字のまま肩から腰へと脈打たせるだけで動こうとはしない。

その股間から青竹をとりあげて、

「お国さま。さあ、今度は大あぐらをかきなされ。もっともっと楽しませてあげましょうほどに」

「散、散位さん」

手足に縄をつけたままで、お国が上体を、もたげた。

「さあ、早くしなされ！」

青竹で小山のように盛りあがった乳房をつつかれると、ゆっくりと膝をたてておきあがり、その場に、いったんは蹲ったが、やがてむんむんする爛熟した女の薫りをただよわせつつ、云われたとおり、あぐらを組んだ。

「そうです。なんでも命令に従うと約束したはずですよ。両手を後に廻して」

「ハ、ハイッ」

「もっと上へ、肘を上へ」

「も、もう、これ以上は、とても、あがりませぬ」

うっとりとして被虐に酔い痴れたように、お国は濡れた唇をひらいた。

両手を背後で組ませても散位は、縛るつもりはなかった。自由なままにしておいて、この女が春嵐筒の責めをうけて、どう振る舞うかを観察してみたかった。

春嵐筒にこめるのは今度は、うなぎではない。砲身基部の装置をとりかえると車輪をうごかして六、七尺の距離へと後退させて、「フッフッフッ、さてなにが飛び出すやら」砲座につらなる紐をひき、ついでそれを手から離れた。何かがとび出した！ と、

「アッ！」

という音と、バシャーッという、ひびきがあがった。

乳房に命中したのはなま卵で、白味も黄味も、いっしょになってドロドロッと乳房の谷から腹へと、ながれおちる。

「散、散位さま……」

やめて下さい——と云わないところがお国の長所であろう。

二発目は、へそに命中して女体がギクッとけいれんをおこす。

別に縛られているわけではないから両手で防ぐこともできようにお国はそれをしない。

三発目は、もう一方の乳房にあたって、三個の卵を浴びた裸身が、ぬるぬるっと奇妙な輝きをおびてきた。

「散位さん、俺にも」

すすみでた清兵衛が、紐をひく。どうやらバネ仕掛けになっているらしい。

「面白そうじゃ。狙いは、股間につけて」

狙いをつけように照尺はない。あてずっぽうで散位が押しこんだものを発射した途端、お国が、キヤアッと悲鳴をあげた。

筒先からとび出してゆるく弧を描いた長いもの——お国が蛇だと思ったのも無理はなかった。が、それは、腰紐であった。

「フッフッフッ、こたえられぬ。恐怖にゆがむ女の顔というものは、いつ見てもゾクゾクするものよ」

できれば本物の蛇をつかいたような口調であったが、いまは晩春、まだ蛇がでてくるには少々早かった。

その代りにというわけで、こけし、はりがた、大筆小筆と、あらゆるものが、つぎつぎと筒先からとび出して「女体の標的」へと射こまれつづけるのであった。

が——

これは、まずは「お遊び」と云えた。一刻

も早く雌蛸花をと、あせり心地の清兵衛が、なま卵を一発、ピシャーッと股間へと命中させて、

「散位さん、早く……」

と再度、要求したときであった。襖の向うから激しい声が迸った。瞬間、動きをとめてシーンとすると、

「ア、アレッ！ 黒、黒馬さま！」

まがうことのない雅子姫の痴声。

「フッフッフッ。名器・紅搾木に対してはこの『莫塵破り』が応わしいものでござりましょうなあ、姫」

「ア、アレッ！ ヒ、ヒヤアッ」

ながく尾をひく、あまりにも悩ましい声にお国までが臉をひらいた。

いいでしょう、散位さま——というふう

に襖を指さす清兵衛に散位は軽くうなずいた。

別に開けて悪いという命令は受けていない。

第一、向うから昭吉が入ってきたではないの

か。よろこび勇んだ清兵衛が襖をひらいたが

アッ！ と息をのんだ。

「虫ころがし」から解放された雅子が、腰の下に踏台をおかれて弓なりに仰向けにされていたのだが、昭吉が顔を、黒馬が太股を和吉が乳房をというふう

陣取って、三国攻めのクライマックスが展開されていたのである。

襖がひらいたのに気がついた昭吉が、ニヤッと、むき出しの毛臍を見せて、

「清兵衛、参加してみるかい。四国攻めにしでさしあげたいと思っていたところなのだ」

「な、なんなりと！」

ゴクンと唾をのむ清兵衛に、

「舐めてみなさい。そ、そこを」

昭吉が、あごで示したのは、黒馬の膝の前踏台から見える雅子の豊かな双臀のあたりであつた。

「ど、どこを、舐めさせて頂けますので」

ひざまずく清兵衛に黒馬が、

「そこだ、菊の花さ」

菊の花と云われても、わかるはずのない清兵衛が、おろおろしているのを見かねたように雅子の乳房を口いっぱい、ほおばっていた和吉が、

「バカ野郎！ 菊の花も知らねえのか、この野莫天！ すっこんでろ！」

ついさっきまでの女言葉とは、うって代つて荒々しく叱りつけた。

「清兵衛さん。菊の花とはなあ、ほれ……」
いつのまに入ってきたのか善兵衛が、雅子

の見えかくれする双臀の凹みをさした。

「善兵衛さん、有、有難う」

腹這いになった清兵衛が、弓なりに反っている雅子の腰の下に潜りこむとグルッと一回転がした。

な、なんちゅう美しい肌だろう。「八」の字に開かれた太股のちょうど真下から見上げる雅子の双臀は、まるで極楽浄土の宮殿を飾る天井のように麗しく、また虹のように煌いていた。

二つの虹のようにかかる雅子の双脚のつけねにある菊の花は、すぐわかった。

「舐めてみなさい、清兵衛。フッフッフ」

雅子の上の唇を思ふ存分にむさぼっている昭吉の声がした。

その声に応じるように清兵衛は、むっちり肉の凝った双臀の凹みへと、下から舌を突きあげていく。

「アッ、アッ、アッ。イー、イーッ」

折りふしは妾、月夜に釜ぬかれとか、

月の夜は、釜を抜く気になる亭主

という古川柳があるが「釜」とは、あまりにもみやび心のない表現であろう。Anusとよぶのも直接的にすぎるようだし、アナス、エ

イナスという南欧風の表現も、おもしろみにかける。やはり、黒馬たちの云っているように「菊の花」とか「菊座」とか呼ぶのが、風流を重んじる日本人の心情に、もっとも応わしいと思われるのだが、さて、そこで、

芋武士は葵よりみな菊に這い

という句が、おわかりだろうか。

芋武士——とは、薩摩の武士ひいては江戸は旗本・御家人たちが、田舎侍をさしてよんだ別称であるが、その芋武士たちが、葵よりも菊を好んだ、つまり、前よりも後が好きだった——とそう解釈なさるのも一興。またその裏に、薩長藩閥政府に牛耳られてしまった明治新政府に対する江戸っ子の心意気を読みとられるのも二興。さらに元来、この「菊座」は、衆道ののこしたもので、若氣（ニヤケ）の至りと評されるも三興——さらにさらに人間の性感は、まず口唇より始まり肛門に至りやがて性器に至る、と人体を發展構造学的に論じたまうも四興・五興といえましよう。

ただ、この句の「菊に這い」という五文字が、なんとなく面白く、

わがもので見たことのない菊の花

という「守貞漫筆」所載の戯歌を、あわせうかべて微笑ましく、飛躍して、三国攻めの

上に、一国を加えようとして仰向いている清兵衛の舌さきに触れる四十八弁の菊の花の麗しさを思いうかべてみるのです。

とまれ——。

菊の花は、十二弁なのか十六弁なのか、それとも四十八弁、五十二弁なのか、清兵衛は

知るはずもなかった。

ただ、あつくほてった雅子の双臀に、頬をあてがって舌の根がきれてもかまわぬとばかりに左へ、右へと舌をのばして舐めつづけるのであった。

雅子の愉悦が、絶頂に達したことは云うま



イメージギャラリー

『M女をもらったゴリラ』

岡 かし

でもあるまい。

その長く尾をひく鳴咽にあわせるように、お国の号泣がきこえてきたのは、散位と善兵衛が、雅子の痴態に刺戟されて、お国への最後の攻撃を開始したからに相違なかった。

と、そのとき、昭吉は、はっきりと、隣の部屋から洩れてくる主人の声をきいた。

「瑠璃殿のうしろ菊座のありどころ——と言つての、ここは『後庭華』とも申すのじゃ」とたん、けたたましくあがったのが、貴子姫のものであったか、お国の叫びであったかそれとも、いま目のまえで、黒馬の『莫塵破り』の攻撃をうけている雅子の号泣であるのかは、さだかでない。

が、そこは一番々頭、酒と女と二つの酔いにもうろうとした頭を振りたてて、隣の部屋の襖を、うやうやしく開いたのであった。

そこには、貴子の極めたる妖艶な姿が繰りひろげられていた。元禄屋の声が響く。

「六本の棹で漕ぎ出す宝船——と申してな。

昔、中国の聖人で老子とかいうお人が、三皇五帝以下、善の極限、悪の極限を探索し終つて、結局、『男は女に帰るもの、女は男に帰るもの』と、この世を睥睨なされて、ほれこのような姿を男女の、まことの姿と、のた

もうたのじゃ」

もうろうとした昭吉の目に金の屏風が、うつった。眼を開いて、もう一度よくみると、まさしく金粉を塗りこめた黄金づくりの大屏風であった。

そしてその前——実は、まず最初、こちらのほうが目にとびこんできたのだが——たしかに貴子がいた。

が、これが御内儀さんなのだろうか。

目をしばたかせる昭吉の眼前には、七福神が並んでいる。

大黒天、恵比須、毘沙門天、寿老人、福祿寿、布袋、そして弁財天。

由来、福の神として日本津々浦々で信仰されている七福神に、まぎれもない。

ただ——

弁財天だけが、弁財天になぞえられた貴子だけが赤裸だった。

そして貴子の「舟」には、六本の棹が、くりこまれていたのである。

恵比須が右から、毘沙門天が左から、寿老人が右上から、福祿寿が左下から、布袋が右下から、大黒天が左上からと、それぞれ角度をかえて、あたかも宙に浮ぶ「大きな舟」のように青畳から三尺の高さに吊り下げられて

いる貴子に迫っていたのであった。

両手両足首を紅白だんだら縄で縛られて天井から「大」の字なりに仰向けに吊られているのだが、背中のあたりには、T字型の支えが三コばかり、見えた。

「どうじゃな、みごとなものじゃろう」

元禄屋は、さすがに得意気であった。

「まっこと！ 旦那さま。六人の男が同時にこのような姿を、よくぞとれたものでござりまするな」

襖から昭吉が身をのり出すと、和吉たちも顔をのぞかせて驚嘆の目を見張った。

金屏風を背景に青畳の上に、ただよう貴子の裸身を「大きな舟」にたとえるならば、八の字にひらかれた双脚のあいたの名器は蘭麝の香りにみちた小さな「舟」といえよう。

その小さな「舟」に寿老人以下の六人が同時に、六つの方角から、みごとに棹を立てているのであり、番頭たちが驚嘆するのも無理はなかった。

「よくも、このようなことが……」

大黒天に扮しているのが鞭兵衛で、福祿寿が青蛇、布袋が白豚と……以下、羅卒一家がそれぞれ衣裳をこらしているのに気づいた黒馬が、「親分、まいりました。こんなことが

現実に出来ようとは夢にも思っておりやせんでした」と兜をぬぐと、

「フッフッフッ、あれもこれも元禄屋の旦那の御指示どおりに動いたまですよ。さすがおやりになることが人の意表をおつきになる」

鞭兵衛が少し身うごきしただけで、貴子の喰いしばられた歯並みの間から燃えるように熱い吐息が洩れてきた。

「旦那、どうです。こう棹を入れているのでやすから、いっせいに、この宝船を漕がしちゃあ、いただけませんか」

「もう漕いでるのじゃあないのかい」

「なんのなんの、ただ、あてがっているだけでござんすよ」

左下から突きあげている福祿寿が、

「ちよつとばかり、ほれ、こうして」

と腰を、ひとひねりさせた。

「ア、アッ、旦那さま。妾、もう……ア、ア

ウ！ ダメ、旦那サマッ！」

小さな「舟」に、乗り合っているのだから

福祿寿が動くと、恵比須も毘沙門天もという

ように六本の棹が連鎖作用で同時に揺れる。

「ハッハッハッ。少しくらいなら、いいだろう。やってみなされ。お前さんたちに、ここでひき下がられては貴子とて、がっかりする

じやろうからのう」

「な、なにを申されます。旦、旦那さま。

もう、お、お許し下されませ。ア、アッ」

「やめてもいいのかな、貴子や。ほれ、どうじゃ、大黒天さまの有難さが。ほれ、かまわぬ。鞭兵衛さんや、白豚さんや。もそつと漕いでみなされ。貴子や、わかったかえ、大黒天さまの有難さ。それ、それ、もそつと」

布袋が右下から、つきあげると、寿老人が右上から、これに応じ、恵比須が右から棹をひとひねりすると、左から毘沙門天が——というふうに、どのくらいの間、六本の棹で、宝船を漕ぎつづけたことであろうか。

いつの間にやら青江散位たちも入ってきて貴子の痴態を息をひそめて見守っていた。が、それもやがて——

貴子が、もの狂おしいほどの女悦の叫びをほとばしらせたとき、登鯉尺時計が五つを知らせて、

「今夜はうちうちの遊びじゃったが、貴子や近いうちにソリゲノギシキを行いますぞ。そのおりは、数多くのお客さまを、お招きしますから、そのつもりでな」

元禄屋の合図で、鞭兵衛たち六人が、いっせいに棹を、ぬき出していった。

その貴子の裸身、別して花開いた「剝身」のあたりを、あかあかと掛燭が照し出していた。

儀 式 の 開 始

三日後——

日本橋四丁目の元禄屋の本邸には夕暮れから、いくつもの駕籠が到着した。

兜頭布あり、猫頭布あり、丸頭布に、ほくそ頭布と、色とりどりの頭布で顔を覆った何十人もの客たちが廊下を奥へと、ひっそりと姿を消していった。やがて八時。

五十畳敷きの書院造りの部屋では、中央の円型の舞台を囲んで四、五十人の客たちが、それぞれ朱塗りの蝶足膳に盛られた肴をつつきながら、静かに酒盃を傾けていた。

老中筆頭水野出羽、老中松平越後、勘定奉行肥田若狭を始め、幕閣の重臣たちの顔も見えれば、神宝方探秘職棟梁・折戸小左衛、木差・笠倉屋藤十郎、北町の与力・工頭監物、鞆師・丸田屋平兵衛……と、いずれも当時、江戸の町で高名な人物ばかり——さすがは天下の富を動かす元禄屋が招いた客ほどのことはあった。

と、一座の視線が舞台にそそがれたのは、それが徐々に下へと、姿を消していったからであった。

が、それもつかのま、すぐに、せり上ってきたのをみると、高さ一丈ほどの円筒型の垂幕に囲まれているではないか。

と、その緋色の垂幕のなかから、

「東西、東西！」

すきとおった柝（き）の響きとともに昭吉の声が聞えてきた。

「本日はソリゲノギシキに、御多忙のところはるばると御来駕賜りまして主人・元禄屋の喜び、これにすぐるものはございません。いや元禄屋よりも、只今より介添役をつとめする一番々頭の、この私の光栄、何にたとえようもありません。厚く厚く御礼申しあぐる次第であります。いや、いや」と、ここで口調をあらためた昭吉は「この私めよりも、主人の元禄屋よりも、もっともっと光栄と喜びに、うちふるえておりますのが」

柝の音が入って、

「それは、ほかならぬ、当の本人・菊亭貴子姫でござりまする、東西、トオーザイ！」

柝の音がやむとともに緋色の垂幕が徐々に垂れ下っていき、昭吉の顔があらわれ、そし

て貴子が姿を見せた。

——オウ……

と、どよめきが上ったのは、白木の十字型の柱に縛りつけられた貴子の、あまりの端麗さであつたろうか。

緋色の幕が垂れていくのに従つて全貌をあらわした、その姿は、ただ端麗と形容するだけではすまない妖しいばかりの色氣と崇高さを兼ね備え、あたりを圧するばかりの王妃の風格に輝いていた。

五尺余の黒髪を腰のあたりまでなびかせ、何の飾りもない白木の柱に「大」の字なりに紅白だんだら縄で縛りつけられて、やや、俯向き加減に、一糸まとわぬ裸身を曝け出す。

「では、これより皆さま方に、お一人・一剃りずつ、この菊一文字の小柄こがらで剃りあげていただく」と存じまするが、そのまえに」

五百匁はあろう大蠟燭を、へそから開かれた内股のあたりに、つきつけた昭吉は、

「まずは、とくと御覧賜りますように、このあたりを！」

あかるく照し出された天鵞絨（びろーど）のような内股に視線をそいだ正面の客たちの間から、いっせいに吐息が洩れた。

「では回転させますによって、みなさま、ど

うぞ、ごゆるりと御改めのほどを」

円形の舞台が静かに廻り始め、廻るにつれて客たちが、いっせいに膝をのり出し、息をつめた。

「富士の山が逆さに黒々とかかつておりますが、その麓のあたり、いくらか青々としておりますのは」

「お前さんが剃つたと申すのかの」
かぶりつきで笠倉屋が声をあげた。

「私めではございません。最初の一剃りを主人の元禄屋が加えましたあとでござりまするが、とくとおわかりでござりましょうか」

死んだように身動きひとつしなかった貴子が、双脚をうごかし、頬のあたりがポオーッとそまるのが、ありありと窺われた。

「さて、次は」

ゴクンと唾をのみこんだ昭吉は、

「巾着のふちは紫、なかは紅絹——と申しまするが、とくと、御賞味下さりませ！」

さすが身分の高い客たちの前だけに、指を直接あてがうのを遠慮したのであろう昭吉は懐から象牙の箸をとり出すと、それを巧みにあやつっていくのだが、黒い逆さ富士の頂に白い象牙の箸が、なんともいえない対照美を示した。

客たちのへそ下三寸のあたりに、もぞもぞした春欲を駆りたてていく。

「ほれ、このとおり……貴子姫が、もうタマヲヌとばかりに、喘ぎ、うごめき始められました。ほれ、ほれ……」

ソコヲ見ラレテイル——と思っただけで女は、いてもたっても居られない羞恥をおぼえそれが、欲情へと移行していくもの——いま五十人近い客たちの前で、見られ、穴のあくほど見つめられ、しかも象牙の箸で、

「では、なかの紅絹をば、とっくりと」

と、昭吉に「裏返し」になるくらいに翻られていくにつれて、どうしようもない官能の炎が、その白蘭の花びらのような肌を、とろけさせてくるのであった。

「ア、アウ！」

悲鳴をあげるのは、はしたない。叫んだり呻いたりするのは、もっとはしたないことだと思ひながら貴子の唇から、つい、つい、せつない喘ぎが洩れた。

なかば開かれた象牙のような歯並みのあいだから、早くも糸をひき始めたのは、涎であらうか——。涎は、男がながすものの、猥りに女が垂らすものではないというのに——。

つづく

映画『花と蛇から』

小沢 準 一

—— 長谷田真知子再び ——

現代の伊藤晴雨ともいうべき長谷田亀治氏は私にとっては、まさに垂涎おくあたわさる宝石にも比すべき先達であった。(小沢準一)



(1)

日活作品『花と蛇』が公開された。

原作の団鬼六作品から受けたイメージからは程遠く、物語展開も原作とは一向に関係の

ないもので、登場人物も、遠山静子夫人のみで、京子や小夜子は出てこない。

原作での淫靡で猥雑な、どうしても抜け出すことが出来ない肉体の内部の迷路に、さまざまによってしまい、とうとう、あらぬうめき声が

精神とは別個のところから出てしまい、更にこのことによって、どろ沼に入ってゆくと云った、あわれで、もの悲しい、あのマゾ・ミセス静子は、映画作品では、いなかった。どこか、もうすでに市民権を得たんだということで、軽くへんに開き直りをしたS・M映画であった。

映画作品は原作とは別個のものであったも一向にさしつかえないのだから、とりたててがなり声を上げることもないのだろうか、いやしくも団鬼六原作を、看板にかかげてあるのだから、原作の雰囲気の一嗅ぐぐらいは感じたいものだと思ひ、私の方が無理というものだろうか。

プロット紹介は本題に関係ない事なので止

めるが、谷ナオミ扮する静子が、飼育過程を終えた後の散歩の途中で、白昼の繁華街の電話BOXでおまつり（映画の内、こういうた）する場面の興奮は、映画という作品でなければ描くことが出来ないものだろうと思っ
て感心した。又、マゾ・ミセスが昇華して
って（最後のシーンなのだが）静子は股間縛りのまま性具となってダブル・ウェイを受け入れるのだが、羞恥責めの最高とするところは、A・V一体を同一に責めることになるのだらうと思えたりした。

責めも縄がけから始まって、股間開脚、浣腸羽毛撫ぜ、パイプと一応、色々登場するが期待の静子の花電車や、女同士による性戯は最後まで出てこなかった。表現方法として、現状の規制等から取り止めになったのか制作段階で捨ててしまったのか解らないが、少々残念であった。

この映画では、マゾ・ミセスを、サド男性の女王として扱ってあったが、私はこの考え方に、おおいに賛同する。

女性の肉体か魂に又、もっと別のものでも良いが、どこかに一点その女性に対するあこがれの気持がなければ、サド男性となることは無理であろう（ここが女性サドと本質的に

ことなるところではあるまいか）と思うが、いかがであろうか。

縛った女体を開脚させたところ、羞恥も何もなくケロリとしていたなら、どうであろうか。興味も何も湧いては来まい。

たとえば責めて責めまくられて、とうとう抗しきれず、歓喜となって淫らに顔が歪み、凄まじい喘ぎ声を発したとしても、それは只その女性の肉体のみが、喘ぎ淫らに歪んでい
るだけの事で、魂の一片と言うか、最も、その女性の大切な、なにかは微動だしないで、逆に淫らな姿体を演じてしまった事に、微動もしなかった魂の一片が、さめた時、羞恥と後悔をかき立てられてジレンマとなってホゾをかみながら益々消え入りそうな風情となっ
て、自分で自分の肉体をのろったりして、それが又新しいチャームを輝き照らし出す。このように一点のあこがれのコアがあれば、次から次へと、美しいものを、自己みずからのチュウゾウによって右に左に創り出されてゆく、まるでプリズムのように、ジュウナンに動くような女性でなければ、マゾ・ミセスとは呼ばない。は、なり得ないだろうし、私はマゾ・ミセスとは呼ばない。

独り身の、夫妻の機智さを知らぬくせして

マゾ・ミセスとは、何かと一笑されそうな気もするが、私は、マゾ・ミセスを女王とあがめることにサディズム男性の本質の心情があるように思っている。

(2)

前項で、マゾ・ミセスを、ぶつけて置いてから、長谷田真知子を、話す事になるのだが真知子の写真を、見ていても感動するのは、眼を閉じて、次におこなわれるだろう責めを期待しながら喘ぎつつ、真知子の内部にある、一片だけが、どうしても屈従しないといった態の、無意識の可憐さがあって、このことが、とてもきれいで可愛らしく思えてならない。

長谷田氏の創意によるものであることは当然のことであるが、真知子が大きく股間開脚された姿体であっても、清潔な白足袋を着けているのは、真知子の清楚さを意味するし、このことから憐憫を想像喚起して『拉致されて来て無理矢理、犯されているのだろうか』といったようなことを思ったりする。又、真知子自身も、白足袋をハズした方が、どれだけ気が安まるだろうか、自分の羞恥をハズすことが出来るだろうか、と思ったりする。し

かし、白足袋、長襦袢といった、一縷が真知子の最後の防波堤であるのだが。

逆にこれが、真知子の嗜虐感を、燃やしているとは一向に気がついていない。そこが又哀れである。

このように、一つのこと千日手のようになつてどうしようもなく真知子からどれか一点ハズしただけで、すべてバラバラになつてしまふ。虚構の積木が、きっちり組み込まれておるといった内に在って真知子が浮ぶのか、もともと真知子の自身が在って積木を築くのか、とにかく真知子にマゾ・ミセスを見出し出して、ふるいつきたくなる興奮が自覚出来るのは、本当のことである。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

例の黒いガードルとストッキング姿においても、この姿で外国娼婦を意味としてののだから、夜の世界の娼態の真知子だけしか連想出来ぬか、と言えば真知子のヘアーに巻かれたヘアーバンドから、昼の日常生活の片鱗がのぞかれ、夜にあって媚体を売るのみではなく、昼の世界も真知子にはあるのかと思えば、のぞき趣味からのエロスが加わって、縛りのままで横たわっている姿体から何かが発芽されるような気さえする。

(3)

私は、自分自身では、女体に縄をかけたり責めをおこなって見たいという欲望がある性格に、その縄をかけた女性を女王としようというのだから、正式にはサディズムに属するかマゾヒズムに属すのか、はなはだ心もなにかざりである。まあ、無理して言えば少女趣味サディストとでも言うておこうか。思ったりしている。ところが、実際に女性を責めるとなると無理をしてみまい、一夜限りで良いような気持になつてしまふ。相手を唯々苦しめるだけだから、痛いということだけしか感じられないのだろう。過去に二人にふられている、縄をかけた後であるが。「私、こ

のようなことは、知っているから、貴方が好きなら分かつてあげるが、貴方のは、本当に痛いのよ」と言われた時は、どうも白け切っちゃって、嫌な感じの思いだけが残ったものだ。

閑話休題。

真知子の写真や記事は、雑誌からバラして小冊に作り直しているが、表紙に岩波書店の『世界』を表装しているので、なんとなく奇妙なおもしろさが、かもし出される。実際のところ、真知子のどこに具体的なチャームを感じているかと言われても、明確には出て来ないが、真知子の雰囲気、私のことをとらえるのだろうと思っている。この雰囲気という、しごくあやふやで、とらえどころがないものが一番、大切なのかも知れない。

真知子の写真から、黒いストッキングが網目もようなものと識別出来た時は、本当にうれしかった。又、ガードルも、フチ全てにレースもようがあつて外国製品だと思われた時も、又、うれしかった。見るたびに何かを発見出来るとは、とても楽しいことである。

とりとめないことを書いたが、『私説、真知子』へのアプローチとなればと思つてい

(おわり)

——〔SM研究会〕の会合に出席して——

あめ 雨の夜の語らい

中 河 恵 子

米原で新幹線に乗り換えた頃から、次第に雨足が激しくなってきました。

赤いウェット・スーツを着込んで、スキンドайビングやスキューバダイビングを楽しんだ琵琶湖の湖面を、一目でも見たいと、のびあがり、のびあがりしましたけれど、あたりは雨に煙ってしまって何も見えません。瀬田川に架かった鉄橋も、あつという間に轟音と共に通過してしまいました。

トンネルをくぐり抜けたかと思うと、もう列車は京都駅に着いていました。その早いこと、早いこと。私の過去のなつかしい思い出なんか、ふっ飛ばしてしまう早さなのです。

そして、またたく間に、新大阪駅、新神戸駅へと、列車は進んでいました。せめて車窓からなりとも、なつかしい思い出の地を、ゆ



っくりと眺めたいという私の気持も、折りからの雨空のように、すっかり、とざされてしまいました。

今度、私が神戸を訪れるということは一月ほど前から、わかっていましたので、塚本さまに、時間はあまりないのですけれど、もし、SM研究会のお方が、お集まりになるのであれば、顔を出さしていただきたいと、お願いしておいたのです。

でも、私のためにだけ、沢山のお方が、お集まり下さいますようにと、くれぐれも、お願いしておきました。大変、我ままたお願いですが、塚本さま以外に、一名か二名の男性の方を、と。

それが、あいにくと昨夜からの雨。とても止みそうにも、ありません。

神戸での用件が済んでしましますと、あとは今夜、大阪の西区にある叔母の家へ帰って泊めてもらうだけなのです。

神戸も、ずっと細かい雨が音もなく降っていました。雨に煙る港町なんて、なんとなくエキゾチックに思いましたけれど、早く定め

の場所へ行かなければと、気のせく私には、そんな気持を味わっている暇はありませんでした。午後四時ともなれば、雨の日とて、なんだか、すっかり暗い感じなのです。

やっとタクシーをつかまえて、オリエンタルホテルへ行きました。ホテルの十一階までエレベーターで昇って、スカイ・レストランへ案内された時、三人の男性の方が、テーブルに腰かけておられて、私の席を一つあけて待っていて下さいました。

私がおそくなった事を、お詫びしますと、

「いや、私達は話す事があったので、わざと、少し早い

目に来たんですよ」と、塚本様は言って下さいました。

私が席へ着くか着かないかに、「この方、御存じでしょ？」と言われて、ふっと顔をあげて、前を見て、私は「あっ！」と驚きの声をあげました。そして思わず頬が、みるみる赤くなってきてしまうのでした。

小谷さんです。私が前にプレイをしたことのある小谷俊夫さんなのです。恥かしさと共に、なつかしさがこみあげてきました。

どうして、此所に彼が？ と私が不審に思ったのに、答えるかの様に、塚本様が言葉を挟んで下さいました。

「彼がね、中河さんとプレイをしたことがあるので、是非、今日の会合に出たいって、頼んできましたんです。貴女に、びっくりさせてやろうと思って、黙っていたんですよ」

小谷さんて、奇譚クラブの読者で、私に手紙を下さった方の一人なんです。三回ばかりお会いして、プレイをしたことがありました。私が妊娠してからそれっきりになってしまったのです。

あれから、もう何年になるでしょう。あの時の激しいSMプレイのことを思うと、恥かしさのために、顔を上げることが出来ません。

「お久しぶりです」





小谷さんは落着いた淡い声で、挨拶して下さいました。私は、なんと、お返事していいか、他に三人の男性の方もおられるので、只黙って頭を下げていました。

私を素っ裸にして縛っておいてメジャーで身体のあらゆる所を測った彼の事を、今でもはっきりと覚えております。

あの時のプレイのことを思い出しますと、私はなつかしさと共に、恥かしさが身体中にしみわたってくるようでした。

小谷さんは、私が『初縛られの記』という告白の短い文章を奇ク誌上に載せて頂いてすぐ、私あてに手紙を下さった読者の方なので

す。二回ばかり、手紙のやりとりをしただけで、お逢いしたのですが、その頃の私って、なんだか、物につかれたように、羞恥責めにされたくって仕方がなかったのです。

それでも、私は小谷俊夫さんと逢うなりくずれる様にして、彼の責めの手の中に溺れていってしまったのです。

よりによって、こんな方を、今日の会合にお呼び下さるとは。私はもう、最初から顔を上げる事が出来ず、テーブルクロスの白さばかりを見つめていました。

「中河さん、この方はね、それは熱心な恵子ファンなんですよ。貴女の写真や文章は全部

集めて持っているという、打ち込みようなんです。それで私も、その熱心さに、ほだされて、特に今日、来て頂いた方です」

塚本様が、そう言って紹介された小谷さんの右に坐っておられた方は、立ち上がられて「村上です。どうぞ、よろしく」と丁寧に挨拶されました。

「村上さんは、貴女に関係したコレクションを、こうして全部、此所に持ってきておられるんですよ。ごらんになりますか?」

塚本様は、そう言って、ベージュ色の鞆から、今にも雑誌を出されようとされます。

私は穴へでも入りたい気持で、再び顔が真っ赤になってしまいました。私の顔が赤くなる癖って、どうしても直らないものです。

あの頃に、私が書いたものって、文章も下手ですし、それに、自分の恥かしい事柄ばかりを、おく面もなく、ありのまま飾りたてずに書いたものばかりなので、とっても、恥かしいのです。それを、今、目の前に出されるなんて、それこそ恥の上塗りです。

写真や切り抜き、となると、それも尚更、私を大勢の人達の中で素っ裸にしてしまう様なものです。塚本様って、よくよく、私の弱点を巧みに擱んで、こんな席上でも、私をお

責めになられるのが、お上手なんですのね。私は、恥かしさに、いたたまれなくなっていながら、それでも、なんとなく、甘しいなつかしい思い出が、胸の中に蘇ってくるのを、どうする事も出来ませんでした。

それは、プレイをしていた夢を見ていて、途中で覚めた時の様な、やるせない気持ちでした。でも、私に対する羞恥責め？ は、まだそれだけではなかったのです。

「中河さん。そら、あの時のテープを、今、持ってきてるんですよ。さっきから、貴女を待っている間、この二人の方と、イヤホーンで、貴女の責められている声を一緒に聞いていた所なんですよ」

「ええっ？」

塚本様に、そう囁かれて、私は物悲しいまでの甘酸っぱい思い出も、ふっ飛んでしまいました。ああ、なんという事でしょう。

こんななんだったら、来なければよかった、と、私は凄く後悔しました。今日の塚本様って、三人で私を、なぶり者にしようと思っていらっしやるのです。酒の肴のなぶり者にして楽しんでいらっしやるのです。

私は、のこのこと、この会合に顔を出した自分の浅はかさを後悔しました。SM研究会

だと言いますから、もっとSMの勉強になる研究でもするのかもしれないと思いましたのに、これでしたら、女性の私一人を、三人の男の方達で面白半分の笑いにしているのと違うのでしょうか。

陽がすっかり落ちて、あたりが薄暗くなっているのが、私にとって、せめてもの救いでした。それに、このドキドキする心臓の音が聞かれはしまいかと心配です。

奥まった、位置のテーブル。それに、まだ時間が早いせいか、お客も多くありません。

キャンドルに入った灯だけが、ぼんやりとあたりを照らしているだけで、人の顔も定かではありません。

やっと、陽が暮れたのです。これで、私の赤面した顔も、見られずにすみます。

一瞬、向うで真っ赤な炎の色を感じて、あ



っと、その方へ視線を転じますと、ほの暗いテーブルの上に、明るい大きな炎が、赤々と燃えているのです。

「ああ、あれは、ビーフ・ステーキに、ブランドイとワインをかけて火をつけたんだよ」

塚本様が、そう説明して下さいました。火が消えると、あたりは一層、暗くなって

きたように感じました。

私が羞恥責めにあっていいる有様の一部始終を録音したテープが、今、このテーブルの下に仕掛けられているのです。

「どうですか？ 中河さん。貴女も、ちょっとさわりだけでも聞いてみますか？」

「いやです、いやです。そんなの、こんな所で聞くなんて、たまりません」

「だって、貴女の声で、凄く気持ちいいの」なんて、責められている時の声が入っているんですよ。一つ、以前のプレイを思い出す為に聞いてみませんか。ほん今まで、三人で、その頃の事を話し合いながら、このテープを聞いて楽しんでいた所なんですから……」

「言わないで、言わないで。私、そんなの、聞きたくありませんわ」

私は思わず耳を掩ってしまいました。

テーブルの上に投げ出されたイヤホンから、今にも、私の、その時に発した声が流れてきそうに思えたからです。

「どうです。中河恵子さんて、いつになっても、こんなに可愛いんです。責め甲斐があるでしょう？ 素晴らしい女性ですよ」

塚本様は、まるで私を冷やかす様に、二人の男の方に向かって話しておられます。

私はふと、目を転じまし

た。三方が一枚ガラスになった窓からは、神戸の山も海も深い真っ暗な闇の中に沈んでしまつて、この十一階のレストランだけが宙に浮かんでいる様なのです。雨は小降りになったのか、それとも、止んでしまったのでしょうか。

星の粒の様な色とりどりの光が、ある物は動き、ある物は静止して、目の下に縞模様を織りなしているのです。

ああ、なんという美しさでしょうか。私はうっとりとして、そんな光の渦を眺めてロマンチックな気持ちにたっていました。

やがて、三人のコックが銀色のワゴンでロースト・ビーフを運んできました。コックが一张张切ってくれて、お皿に盛ってくれました。シャンペンが私の心を快く酔わせ、そして、さっきの、あのテ



プを聞かせられるという恐怖からも逃れる事が出来ました。

口あたりのよいルビーの様な赤い色をした洋酒を口にしてからは、私の身体は、完全に



とろけた様になってしまいました。

それからは、小谷俊夫さんと羞かしいプレイをした事を喋らされ、そして、村上さんの持つてこられた自分の写真を三人の前で披露し、更に奇クに載った告白の文章の中の一部を読ませられました。

キャンドルの灯だけという薄暗さが、私に

とっては一番の救いでした。赤くなった顔を見られないで済むからです。

そうして、とうとう最後には、あのおぞましい自分のプレイの最中の声が入ったテープを、イヤホンで聞かされたのです。

最初に塚本様の耳から小谷さんの耳へ、そして、村上さんから、私の耳へと、そのコレ

コの声が回し聞きさせられたのです。

その時の私の顔をじっと見つめる三人の男の方達の目を、私は、はっきりと意識して思わず、身ぶるいしてしまいました。

ああ、なんというたまらない羞かしさでしょうか。

あの時の自分のあられもない喘ぎや呻き、それに混じって自分の声が、はっきりと録音されているのです。

それでいて、自分の耳から、そのイヤホンを、はずすことが出来ない私って、一体、どうなっているのでしょうか。

私は、不動金縛りにあったように、その羞かしいテープを無理に聞かされて、テーブルの前で身体を小さくしていました。

早く、この自分の声を止めて欲しい……とそればかり願いながら、私は、いつとはなしに夢心地に陥ってしまいました。

無理に聞かせられている中に、私は、あの当時の自分の身に激しく加えられた羞恥責めを思いだして、身体中が、かっかと燃えるように熱くなっていました。

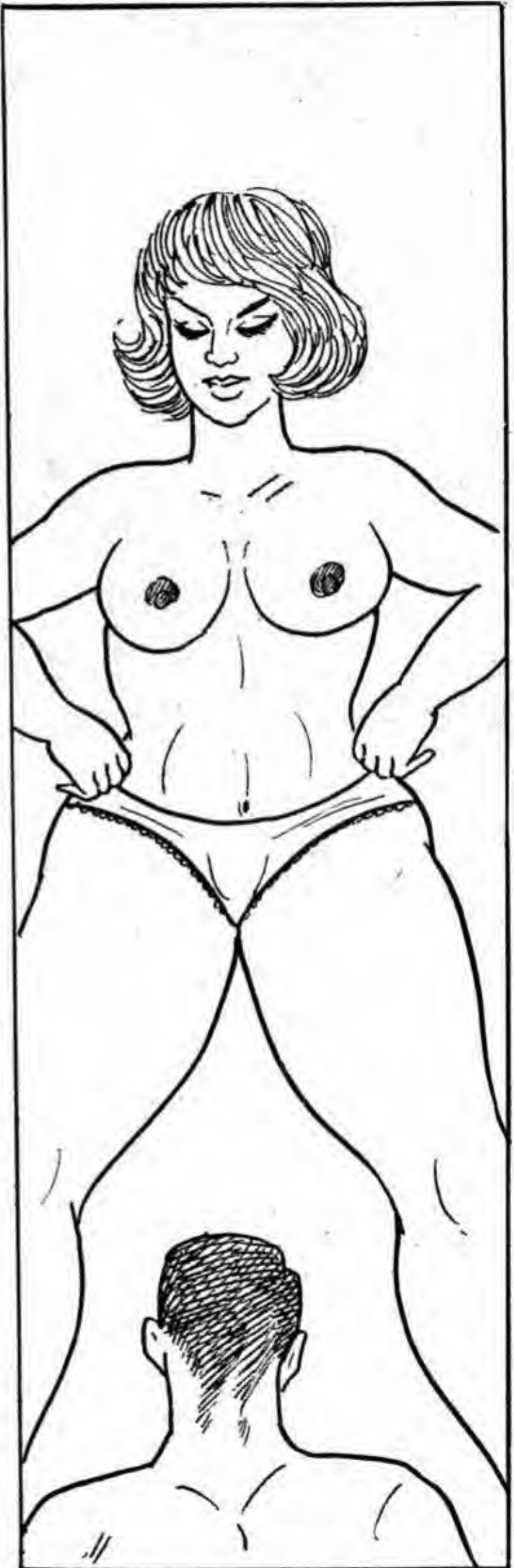
あの様にして、もう一度、責められてみたいという気持が、もう、どうしようもなく、私の身体が訴えています。でも、ここは密室ではありません。私は、ますます、やるせなくなってきました。

軽い、お酒の酔い、そして快い満腹感。私は、身のおきどころのないジレンマに悩みながら、三人の男性の方達の前に、ほてった身体を晒していました。

「タクシーで大阪まで、お送りしますから」塚本様は立たれました。私は肘を支えられてエレベーターまで歩きました。

私のマゾ雑記帳

馬場好男



昨年の暮れ、大みそかの夜は、愉快であった。恒例の「紅白歌合戦」が始まったが、その直前、近所のSデパートの女子寮の娘達が五人、私宅へ訪れたのである。私の女房が、この娘達と親しくしているので、時折りよく顔を見せていた娘達で、かんじんの紅白歌合戦が始まるというのに、テレビが映らなくなったというわけだ。あれこれ手をつくしたらしいが、どうにもならず、電気屋は、あちらこちらで故障が多くて駆け廻っているのだから、いつのことか判らず、他室は満員で止むを得ずに、見せてもらいに来たという次第だ。

当家の応接間は、時ならぬ彼女らの出現でにわかに、にぎやかになった。

十八才から二十才までの娘達で、特に彼女らをよろこばせたのはカラーテレビある。

私にと気をつかって、ウイスキーや子供達にはお菓子を持参して来たのはいいが、ワァワァ、キヤァキヤァとそのにぎやかなこと。女房も若返るとばかり、一緒になってウイスキーを、のみはじめる始末である。

さて、紅が勝つか白が勝つかで、けんけんがくがくとなったのだが、白の男性軍が勝つといったのは私と、私の子供の男の子だけ。紅の女性軍が勝つというのは、五人の娘達と女房と私の子供の女の子である。

本当は私にしても、生来の女性尊重者？

であるから、無論、紅組の勝ちといったかったのであるが、何のことなしに男は男、女は女と別れてしまったのだ。

終りが近くなって、我が家の観戦者も相手の性を毒づいて、何のことはない、男性対女性性の争いとなってしまうた。

結局、勝負がついたら、負けた方は勝った方に両手をついて、おじぎをすることとなった。唯一の私の味方である男の子は、まだ幼いせいか、途中でソファにもたれたまま眠っ

てしまつて戦線から脱落。雲行きが怪しいと思つてゐる間もなく勝敗は決まつて紅組、女性軍の圧倒的勝利となった。

「キヤァー」

と五人の娘達は奇声をあげて大拍手。

「小母サマ、罰則は、どうするの。何だか小父サマは、しよげて可哀想みたいよ」

「だって約束ですものね。小母サマ、この際やつつけるべきよ」

と、やかましい。女房は一緒になつて笑つていたが、ここで年内のアカを払おうとばかり、

「約束は約束、さつき散々、貴女達にも毒づいていたので、みんなの前で謝ってもらいましょう」

娘達は両手をあげて大よろこびだ。女の子までが、自分の弟が眠ってしまったのを、おこそうかという始末で、これは愛すべき娘達の思いやりで中止。結局、眠つた子供の分まで責任を負わされて、私は椅子やソファに腰かけてゐる女房や娘達の前に、じゅうたんに正座して両手をつかされてしまった。一人ずつ頭をさげて廻る時、すんなりと形よくのびきつた娘達の足を目の前にみて、人目がなかったら、いや、せめて女房と子供がいなかつたら、こうして敗者の責任をとりますとばかり一人一人のその脚に、キスをして廻つたかも知れなかった。

みかんの皮や、ピーナッツの皮を娘達は片づけながら、夜半の一時すぎに私宅を辞していった。

正月の二日に、その娘達は御年賀に来たが大みそかの夜とは違つて和服姿でおしとやかなこと。私が「この間は大の男に頭をさげさせたくせに」と笑うと、

「じゃ、また、やろうか」

と、ひょうきんなのがみんなを笑わせた。

或話の脚色 (1)

暖かい夜である。

外は音もなく絹糸をたらすような雨が降つてゐる。春の雨だ。ひとあめ降るごとに、暖かくなつてゆく三月の気候は、草木ばかりでなく人間も、犬や猫の動物も生き生きとしてくる。良平もそうであった。彼は新婚だから尚更である。妻は彼より五つ下の二十三才、美人でグラマーである。性格も陽気で、あけっぴろげの応接が、彼にはいとしくていとしくて、どうしようもない。この妻、まり子に惚れぬいて完全に参つてゐるのだ。

夕食も終えた二人は、晩酌の酔いが、いささか廻っている良平の提案で、痴戯にふけることとなった。いつからともなく、月に一、二回、行方遊びである。

戸締りをし、部屋には石油ストーブがつけられて暑いほどである。

新婚の若い二人には、ちょっと、ぜいたくな家で、二階建ての五間も部屋があるのは、まり子の実家が大金持のせいでもある。

二人は、ふくみ笑いをしたまま裸になって水着をつける。まり子は、いわゆるビキニの真っ赤な水着だ。白いムッチリした肌にくいこむ水着が、たまらなく美しい。良平は紺色のパンツをつけた。

遊びは、ドレイごっこである。ドレイは、いつも良平と、きまっている。

先ず、ドレイとなるための、征服される二人だけの儀式がある。良平の両手は後手に紐でしばられ、両足も固くしばられた。そして畳の上に仰向けになると、女王のまり子は、その良平の身体の上に跨がり立って、顔はいたずらそうな笑いで美しい。

「やるわよ」
まり子は、良平の返事も待たず、どっかとその顔の上に、お尻をすえる。

「……」

口も鼻も、まり子のお尻にひしがれて良平はお腹を荒く波だたせながら、しばられている両足をたてたり、のばしたりして、ふんばる。まり子は、心地よげな表情で自分の股下にある良平の頭の毛と、ひたいを見下している。息が出ずに、わずかに顔をよじって、へしまがった口のハシの方で、息を吐いている良平の呼吸を感じながら、まり子は腰をゆすって良平の顔を更に敷きなおす。

死にそうになる者は、最後のあがきで馬鹿力を出すというが、顔をよじって横顔を畳におしつけ、片方は、まり子のお尻の下になっっている良平は、ひよっとこみたになっっている唇で助けを乞うた。

「ご、ごめん。もうわかった。も、もうやめて……」

「よしッ、許してあげる。良平を今からドレイにする」

まり子は、芝居がかった声色をつかって、良平の顔の上から立ち上った。良平は、しばられた両足を、だらしなくのばしたまま、ふうふうイキをついている。まり子は、良平を助けおこして紐を解くと、

「今夜は、お馬は、とりやめよ。その代り、

ほかの罰をあたえるわよ」

「ほかの罰って？」

「それはヒ、ミ、ツ。それより早く洋服を着てちょうだい」

良平は、いぶかりながらも下着をつけ、色もののワイシャツと、ずぼんをつける。まり子も、春物のセーターにスラックスをつけて軽々しい服装となる。

「さあ、手をうしろにするのよ」

「え？ また、しばるの？」

「女王サマのいう通りにするのよッ」

まり子は、良平の両手を後手にして再びしばりあげた。そのしばった後手の上から、良平のレインコートを羽おるように肩にかけ、胸のボタンを一つだけ、とめた。両手を通さないコートの腕がブラブラとして、和服のふところ手のようでもある。

「何だい？ これは……」

「黙って私のいうとおりにしてちょうだい。」

「さあ、こうやって外に行くのよ」

「ええッ？ 外へ。き、きみ、冗談じゃないよ、こんな恰好で」

「うるさいわよ。さあ、歩けッ」

「ま、まり子、まり子さん」

「ふふふ、大丈夫よ。恥はかかさないわよ」

「大丈夫かな」

「早く下駄をはくのよ」

玄関にひきたてられて良平は下駄をはく。まり子は、二人の遊びに使う細い竹の棒を手にもって、もて遊びながらついてくる。まり子は女物の洋傘をさすと、後手の良平によりそうようにして、洋傘をさしかけ、相合傘よろしく街の方に歩き出す。

「こ、こまったな」

良平は、故意にふんぞり返るような恰好で殊更に威ばった恰好をする。レインコートで後手にされている姿は見えないが、往きかう人達の視線が、自分の身体にあるような気がして、彼はいても立ってもおれない気持である。

だが、案外と誰も気づかないでいるのをみると、街の中で、こうしてまり子にしばらくたまま歩いていく姿に、良平はなんともいえない刺戟を感じていた。

良平は、みんなの前で自分の着ているレインコートを、かなぐり棄て、まり子にひき廻される姿を、却って見せたいくらいな気持になってくるのが不思議であった。

まり子は、良平の心をみすかすように、時折り路地に入る。暗い小さな路地には誰もい



ない。まり子は、洋傘をさしかけながら良平のレインコートを取りあげてしまう。

「お、おい。こんな姿を……」

「だまって歩くのよッ」

「だ、だって……」

「いうことをきかないの？」

まり子は洋傘をさした腕に良平のレインコートをかけ、片方の手にもっている竹の棒のムチをふりあげて、良平のお尻を、ピシッと叩く。

「い、いたいッ！」

「じゃ黙って歩くのよ」

「だって……」

「口をきくと、ぶつわよ」

良平は、絹のような小雨の中を、うすぼんやりと灯る外灯を恐れ、人目を恐れるようにキヨロキヨロとしながら、まり子にひきたてられる。まり子は意地悪く、明るい表通りのそばに来るまでレインコートを着せてくれない。

「まり子、まり子さん。まり子サマ。もう許してくれよ、許して下さい。もう許して」

「ほほほ、弱虫ね。じゃ許してあげる。さアこちらにいらっしやい、コートをかけてあげ

るわ」

よりそった二人の痴戯は、家に帰っても、まだまだ続けられるのである。

○

以前の週刊誌「漫画サンデー」の諺、格言の替え文句の中に、「京女に東男」を「サド女とマゾ男」として入選しているのが、あった。これなど、サド女としたところなど、なかなか新鮮で、おもしろい。評に、これはピタリ！とあったと思ったが、よだれを流しても欲しいのは「サド女性」である。

数年も前のことだが、或週刊誌に谷崎文学に溺愛している若い女性とあって、痴人の愛のナオミだとか、ふうてん老人日記のようなことを、男性にしてみたいという投稿が掲載されたことがある。

大してアテにもしなかったが、私が手紙を出してみると、なかなか上手な文字で返事が来た。私とあなたは、ぴったりだから、きつと面白いプレーが出来ると言う、というわけだ。そして、私の写真があるが、いらないかとあり、もしいるなら××円、送れという。どうしようかと思ったが送金してみると、随分古い写真らしいものを送って来た。これが仲々の美人グラマーで、きれいなのは文字だ

けでなく、顔も脚もいいなあと感心したが、手紙の方を見ると、この写真のように美しい女性からいじめられてみたくないかというわけだが、私はふっと気がついたのは、私の神酒をのませてやるとか、馬にして這い廻らせるとか、傷つかない程度にムチで打つ等とあるのに、この写真のように美しい女性から云々とある文面に少々ひっかかりを覚えた。

写真にあるこの私とか、自分を美しいといっても、それはちっともかまわないが、どうも第三者的な匂いが感じられたのだ。

それに、可成り多額の金円を送金するようにも書かれていたので、私はそれ以来、手紙を出すことはやめてしまった。

こうしてみると、本当にマゾ男を理解し、又自分の性のサドを感じる女性とは、なかなか、いないものらしい。

マゾの性癖を利用して儲けることも結構だと思うが、余り露骨にやられると、いいものではない。もっとも、トルコに行ったり、キヤバレーのホステスを口説いてマゾの欲望を充たそうとするのは、いいかえれば同じことになるが、結局こわいのはヒモ的な存在の介在ということかもしれない。

最近の話だが、独身の或男が道で若い女性

に声をかけられた。何となく誘発的なので、ついてゆくと何のことはない。新興宗教の誘いであつたというわけで、若い女性にかこまれたのはいいが、みだらな気持でついて来た貴方は、この信仰で心を入れかえるべきだと一せい攻撃をうけ、放々の態で逃げて来たという。内容は違うがどうも似ている点もあるようで面白いといえれば面白いし、そうでないといえばそうでもない。

○

戦争のはげしい頃のことだ。

私はまだ学生で、家族ぐるみで郊外の小さな町に疎開したが、物資の配給や、防空演習は街の中と少しも変わらずに行われていた。

私の家の隣には、新婚夫婦がいたが、この夫がすぐ召集をうけてしまった。当時、二十三、四才の新妻は、自分の妹を呼んで二人で暮っていたが、この姉さんの方は美人であつた。妹の方も美人ではあったが、学校を出たばかりで町の軍需工場に勤めていた。

或日、私の母が病気で配給物をとりに行くことが出来ないで、仕事あけで帰っていた私が代りにとりに行くことになった。カゴをもって外に出ると、隣家の新妻が私をみて母のことを聞き、私が代りに行くことを知ると

馴れ馴れしく、悪いけど自分のところのも、もらって来て欲しいというのだ。

私は内心、恋いこがれていた、この年上の新妻に、まるで弟にでも頼むように口をきかれたことがうれしくて、「ハイ」と殊勝に答えて、心も軽く配給所に出かけた。

配給物は魚だったが、私の家族が四人、隣が二人なので、大きさが当然、違ってはいるのだが、私は大きい方を、新妻に届けてしまった。姉妹のいるところでこれを渡したが、この姉妹に感謝されたり、口をきかれていたことで満足していたのだから、たあいなものだ。さすがに、夕食についた小さな魚を食べる時には、どうも家族に面目がなくて困ったことを覚えていた。

その後、力仕事などをよく頼まれたりして落ちそうになった棚を修理してやったことがあったが、この時などは、

「坊や、ちょっと、ここで台になって頂戴。そうそう、四つ這うのよ。男だから、つぶれちゃダメよ」

と私の背中に足をかけて乗り、棚の上に荷物をのせたりした。

私は、もううれしくて、もらったお菓子も食べずに大事にしまっておいた。

私をつかまえて平気でこんなことをする女性だから、到って健康で明るく、応召家族としての暗さもなく、よく私の家に回覧板をもって来てあがりこんでは、父や母と戦争のこつとやら、自分の身の上話などを喋っていた。

人使いもなかなか若い女に似合わずうまく各家庭で防空壕を掘ることになった時も、私や父が自分の家の庭に掘りはじめていると、何処から連れて来たのか遅い男を二、三人呼んで、さっさと自分の家の壕を完成し、更にその人達に頼んで私の家のも手伝わせ、アツという間に仕上げさせて、私の父母を感心させたりしていた。

私は、この四つ五つ年上の女性に恋こがれてしまい、まさしくドレイのように仕えたものであるが、戦争半ばにして夫を失い、郷里の方に帰ってしまった。

○

現代の交通戦争では、当りまえの言葉になったものに「ムチ打ち症」というのがある。この言葉が、この症状がおきはじめた頃は、この「ムチ打ち症」というゴロに奇妙な反応を疊えたものである。

マゾとかサドはヘンタイと自覚させられた期間の長かったせいもあるが、ヘンタイ行為

がムチとか、馬が主役なので、この「ムチ打ち症」なる言葉が気になるのだ。

このいわれについては種々あるが、私はよく人に訊ねられると次のように答えている。

人間がムチで背中を打たれてみると判るがこの時、どんなに前かがみになっていても必ずといっていい程、頭をうしろに瞬間的だがのけぞらせる。

この状態が追突された時の状態とそっくりだから「ムチ打ち症」という名をつけたというところを取りあげて答えるのである。

以前、テレビに出た偉い人が、ムチのしなう様相をさして、この名前がついているといったのを聞いたが、私はやはり前者が正しいと信じている。

ヘンタイ行為の？ 状態がそのまま病氣の名前につけられたことも現代といえる。もっともムチ打ちを、ただヘンタイときめつけては、おかしいかも知れないが……。

或話の脚色 (2)

K君は、或生命保険会社の勧誘員（今ではセールスというのだろうか）であった。

もう十年も前の話である。

可成りベテランで成績も上位にあり、トッ



プ賞も、しばしばとっていた。容姿たんれいとは、ちょっといいかねたが、それでも男性

№8位には、なっていた。少し背の低い欠点もあったが、温和しい性格で二つ違いの妹と暮らしていた。

このK君が、全く魔のさしたようなことにおつかったのであるが、考えようによっては、彼の将来がひらけたともいわれる小さな事件があった。

当時、独身の彼は、三十になつても結婚の相手がみつからないことに少々、あせっている感があったが、事実、財産もない彼には、いくら裸で来てもらってもいいとはいえ、かんとんに相手がみつかる状態にはなかった。

或日、K君は山の手の、ちょっと高級なアパートを訪ねた。

六、七世帯の部屋があるようであったが、二号さんとかキャバレーのホステス（それも銀座あたりの）が殆どらしく、みんな朝は遅くまでねている人種らしく、どの部屋もカギがかかって返事がなく、一部屋だけ「どうぞ」と声がかかった。

K君は、いつものように笑顔で丁

寧にドアの中に入ったが、出て来た女性をみて、フツと心の中でたまらない衝動を覚えたのである。決して美人というのではないが、

K君には魅力のある女性にみえたのである。

型通りの勧誘が始まったが、この女性は嫌な顔をするでもなく、熱心に話は聞いてくれたが保険に入るような様子もない。ただ世間話をしてるのが好きらしく、お茶をいれてくれて、ドアのそばでは、きゅうくつだからおあがり下さいと、初対面の彼を招じてくれたのである。

そこは話術のたくみさで年令をきくと二十五になるという。もともと魅力を感じた程の女性に招じられたのだから、K君は天にも登る気持で、もう商売気をぬきにして何か、みやげ物でも持参すればよかったと後悔するほどであった。

余り女性に親切にされたことのない彼が、小さい時からの知人のように接してもらえたことが、K君にすると鬼の首でもとったような気持になってしまった。

自信もついたのである。

そこまではよかったが、一時間近くも話しこんでいるうちに、抑えきれない欲情と、そうしなければいけないような錯覚とでK君は

「僕は貴女が好きですッ」とばかり、彼女にしがみついてしまったのだ。

「なにをするのよッ」

彼女は、さっと身をひるがえすと、K君のはらわたを、えぐるような気合いと共に、あっと気がついたらK君は大きくもんどりをうって、ずでん、どうとばかり、投げとばされていた。

「しまった！」

と思う間もあらばこそ、彼女はK君の背中にのしかかると、彼の右手をグイとねじりあげてしまった。K君の手首は、彼女に握られたまま自分の背中の上に首すじ近くまでねじあげられてしまって、はね返すことも出来ないのだ。

「すみません、許して下さいッ」

痛い！と感じるより、この場をどうしようかということが先であった。

後悔の念が走り、失望があり、ガクガクとふるえ上ってしまったのだ。

K君は泣き声で許しを乞うたが、口をきくたびに彼女の体重は彼の背にのしかかり、腕はもう折れる寸前にまでねじりあげられた。腕に顔をおしつけられたまま、K君はとうとう泣き出してしまった。もともと気の弱い男

なのである。

「おとなしくしないと、警察を呼ぶわよ」

K君は警察と聞いて、ふるえが一段と、はげしくなった。

「警察だけは許して下さい。どんなつぐないでもします。家に妹がいるのです私は……」彼の声がとまったのは、尚も腕をねじあげられたからである。

K君は手錠をかけられた姿を想像して気が遠くなったように思えた時、ドアを誰かが叩いたのである。そして、すぐ「きみ子さん、私よ」と女性の声だ。

K君の身体の上で彼女、きみ子と呼ばれた彼女が、とびあがるようにホッとした声で答えた。

「ああ、よし子さんね。早く来てッ。大変なのよッ」

この声に、よし子と呼ばれた女性が、ドアをあけて入って来た。

男を組みしっている、きみ子の姿に、

「あらア、どうしたのよ。なによ、これは」と声にならない。

「ううん、痴漢なのよ。今やつけたのよ。ねえ、そこらにヒモない」

「うん、じゃ私、一一〇番よんでくるわッ」

よし子は、あわてて外に出ようとしたが、急にハッとしてK君をみた。

「あらッ！ お兄さんじゃないの？」

「？……」

K君は、二度おどろいてしまった。自分をおさえつけている女性の友達は、自分の妹だったのだ。ぎゅうぎゅういわされていたのど、気がつかなかったが、助けの神のようでもあり、恥ずかしい自分の姿を妹の前にさらしたK君は、もうどうにもならない立場に追いやられてしまった。

「えっ、あなたのお兄サマ？」

きみ子は、ねじあげていた手を離し、K君の背中からおりてくれたが、今度は妹のよし子がK君の背中にむしゃぶりつき、馬のりになってK君の頭をなぐりつけたり、髪をつかんで、こづき廻しはじめたのである。

「バカ、バカ。お兄さんのバカッ」

よし子もK君も泣きだして、騒ぎは一層、大きくなってしまったのだ。K君は、妹のよし子から、はじめて顔はれあがるほど、なぐられてしまったが一切の抵抗もせず、ただただ、二人の前に両手をつくだけであった。

よし子の奔走で、きみ子さんとK君が結婚したのは、それからすぐであった。

笠井奈保子様への便り

僕にとって素晴らしい人

高橋睦夫

東京は、このところ、じめじめと蒸し暑い
うっとおしい日が続いています。北海道育ち
の僕には、こうした梅雨の時節が、いちばん
の苦手で、仕事をしていても何となく気持ちが
集中出来ず、疲れもひとしお感じられるよう
なこの頃です。

笠井奈保子様。

突然、お便り差し上げる失礼を、お許し下
さい。実は奇譚クラブ八月号誌上で、貴女の
手記を読み、自分でも、よく理由は分りませ
んが、何か胸にこみ上げて来るようなものを
覚え、一筆したためようと思いついた次第で
す。未知の女性に便りを書くなどという経験
は、もちろん、今まで一度も無かったことで
すが、それだけに、貴女が書かれた今回の手
記には、僕にとって、何か強く気持を引き立

たせるものが（人間的な共感とでも言ったら
いいでしょうか）あったに違いありません。

僕は、奇譚クラブについては、長年の愛読
者という訳ではありません。まだ、僕の本棚
には、七、八冊の奇譚クラブが、ひっそりと
並べられてあるだけです。

ですから、SMということについても、ま
だよく分らず、むしろ今までは、一時的な興
味心から眼を通していた、と言ったほうが当
っているかも知れません。

でも、誌上に発表される、いろいろな方の
手記とか告白、あるいはカメラ・ルポを読む
うちに自分自身が、まったく知らずにいた世
界。そして、その世界では、いっさいの束縛
や偽善から解放された、真に裸になった生々
しい人間の姿が明らかに浮き彫りにされて

おり、日常的には、まったく平々凡々な、単
調きわまりない生活を送っている自分が、心
の奥底から、何か激しい力によって揺り動か
されるような目まいを覚え、いつしか、不思
議な想念に、がんじがらめにされている自分
に気がつくのです。

○

以前から、SMについて、僕が潜在的にあ
る種の意識を持っていたのは事実だと思いま
す。しかし、ひどく保守的な家庭で育った僕
には、自然、そうした意識を持つこと自体、
何かしら罪悪と感ずるような気持ちが植え付け
られていたのでしょうか。

もちろん、三十を越した今では、そんな意
識は、ほとんど払拭されていますが、やはり
貴女を始め、他の人達の生き方に触れるたび

に、新鮮な驚きと同時に、とうてい自分には突き破ることの出来ない隔壁があることを、また認めざるを得ない気持ちにもさせられるのです。

○

貴女は、これまで奇ク誌上に、何度か手記を載せられたそうですが、そんな訳で、僕が貴女の手記を読むのは『奴隷妻を夢見る私』と題する今回のものが初めてなのです。

ですから、貴女の、これまでの事について



は、僕は何も知りません。ただ奇クのグラビアに載っている写真を通して、いつも貴女のことを、あれこれ想像をめぐらせているに過ぎませんでした。

そして、数多くの女性たちが、競い合うように、美しい肢体を展開しているグラビア写真の中で、僕には、なぜかいつも、貴女の写真が一番に印象に残り、ひきつけられるものを感じました。

最初は、正直言って、こんな物静かで、淑

かに見える清純な若い女性が、僕のような独身男性にとっては、目に強烈すぎる姿体を、さらけ出していることが、ひどく不思議で、信じられないように思え、それ以上に、何か痛々しい感じさえしたものです。

このような貴女のM性が、どこから来たものなのか、僕は知りません。多分、そのことについて、貴女は、以前に奇ク誌上に発表されたのでしようが、残念ながら、僕は読んでいません。

今回の手記で分ったことは、貴女が一年前から、病床のお父さんの世話をするため、実家に帰られたこと、そして『奴隷妻』としての結婚を望んでおられること……等でした。

また、これまで奇ク誌上で、他の人の文章から、貴女がお父さんの家へ帰るまでは大阪の会社でOLをしていたことも知りました。

きつと写真で見る通り、笠井奈保子という人は、物静かで、気立てのやさしい女性なのに違いありません。貴女の文章を読んでいて貴女のやさしい人柄と誠実な思いやりが、そこそこに読み取れるような気がして、僕はいつそう貴女のファンになってしまいました。好きになってしまった、というのが本当かも知れません。でも、本当に貴女は『奴隷妻』

としての結婚を夢みているのでしょうか。

僕には、そんな貴女の言い方が、何となく悲しい響きを持って伝わって来るのです。M性の貴女にとっては、それが一番の幸福なのかも知れません。でも、貴女が、そのように言われる言葉を聞くと、Mについて、ほとんど何も知らない僕には、ひどく、やり切れないような気持になってしまいますのです。

やはり、お互いをいたわり合い、やさしい愛情と理解で見つめ合う結婚生活が、人間本来の幸福な生き方ではないだろうか——と、僕が書くと、貴女は反発するでしょうか。

こんな僕の言い方は、貴女にとっては、ひどく、つまらないことに、聞えるのでしょうか。僕には、その辺のところが、どうしても理解出来ないのですが……。

○

今の僕は、S性とかM性については、ほとんど一般的な意味での範囲でしか捉えることが出来ませんし、僕自身、サディストでもマゾヒストでもないこと（真の意味で）は、事実です。

だから、僕がMとかSとか言うこと自体、貴女にしてみれば、おこがましいことに聞えるのかも知れません。

僕は女性に対して鞭をふるうことはもちろん、口ぎたなくのしるなんてことも、とうてい出来ないし、もちろん、これまでに、そんな経験は一度もありませんでした。

しかし、貴女も書いていらっしゃる、塚本氏に、口ぎたなく罵られ、やはり、心底では悲しくて仕方がなかった——と。

『愛の暴力』という言葉がある通り、僕はSやMを決して否定はしません。それでなければ、奇譚クラブという雑誌を読むこともないでしょう。そこに、互いの深い愛情があるならば、すべての暴力に対する、すべての従属は肯定されてしかるべきだと思います。

だから、正直いって、単なる行きずりのSMプレイ、互いの血走った欲求を満足させるだけのSMプレイに、僕は否定的な考えを持っています。

これについて、貴女は、どう



考えているのでしょうか？

○ 今回の手記を読んで、僕は貴女という人についてそう魅きつけられました。これまでは、グラビア写真での貴女をしか知るすべがありませんでしたが、もし機会があれば、実物の貴女に、お会いして、いろいろ、お話を聞かせて欲しいという気持ちが強くします。

○ 手記によると、お父さんの病気は脳軟化症とのこと。実は、僕の母も、昨年来、容体がおかしくなり、精密検査の結果、動脈硬化と高血圧とを併発した脳軟化症であることが判ったのです。

四月に帰省した折、父から聞いたのですが（父は故郷で開業医をしています）現在の医学では、脳軟化症に対する根本的治療法は無く、ただ薬で血圧を下げるだけしか方法が無いようなのです。

いわば、有吉佐和子の「恍惚の人」と同じように、本来の治療法も無いまま、恍惚化していくより仕方がないというのが、現状らしいのです。（お父様には、もちろん、このことは、話さないように……）

しかも、そうした病人に対する国の施設は

皆無の状態で、結局、家族の者が犠牲的に世話をしなければならぬのが実状で、僕の家でも嫁いだ妹が、幼ない子供を留守番において、夜晩くまで、母の世話をしているような有様です。本当に、僕ならずとも、日本の福祉行政の冷たさ、貧困さには、やり場のない怒りを感じます。

そんなこともあり、貴女の手記を読んで、身近に胸が痛む思いがしたのでした。

でも、病状には程度の差があるのですから貴女のお父さんの場合と僕の母の場合とは、きっとケースは異なっていると思います。

貴女のやさしい献身的なお世話で、きっと元気を回復なされるだろうと信じています。

○ おそらく、心底で、僕は貴女のようなタイプの女性を求めていたのかも知れません。と言って、奇ク誌上の写真と文章からしか、貴女のイメージを想像するしかないのですが、少なくとも、貴女は自分自身に対して、嘘のつけない、正直な人だと思います。自分自身に誠実すぎる人だと思います。

だからこそ、貴女のひたむきな姿と告白が僕の心底に眠っている保護心と人間的な共感というような感情に訴えて来るものがあるの

だと思っています。それだけで、貴女は、僕にとって素晴らしい人だという事が出来ます。

もし、貴女が僕の近くに住んでいる人ならおそらく僕は、すぐにも貴女に、プロポーズしてしまうかも知れません。

でも、現実には、お互い、遠く離れた地に生活する身であり、それぞれに事情があり、ただ奇クの誌上を通してしか、接することが出来ないのは、どうにもならないことながら残念に思います。

○ 今はただ、貴女に、このような共感と親しみと愛情を秘かに寄せている男がいることを知っていただければ幸せです。

以上、とりとめのない便りを書き散らしてしまいました。乱筆、乱文、どうぞ、お許し下さい。奇ク誌上を通じてでも結構です。御返事いただければ幸甚に存じます。

暑さ厳しくなる折柄、くれぐれも、お身体大切に、お過ごし下さい。

お父上の回復を祈っております。

では、また……さようなら。

笠井奈保子様

東京都・高橋 睦夫

体験告白

緋牡丹は二つ

瞳 耀 太 郎
江 波 秀 二・画

緋牡丹は二つ

キユルルル、キユルルル。

ベルの音が受話機から流れてくる。取り上げた向う側から次郎氏からの電話を通しての声が入ってくる。

「私の方は準備して出掛けますが、如何でしょう。少し早目にお出掛けになりませんか」彼とその妻の環夫人は、もう外出されている由である。

「よろしいでしょう。私達も、では繰り上げて出かけることにしましょう」

電話を切る。

「何のお電話なの？」

「麗花。次郎さん達は、もう、出られたらし

いよ。予定が早くなつたけれど、出かけようか。早くなくてもいいじゃないか」

あちらさんタイムで時間をきめたのだが、今日は早く起きられて繰り上げタイムになつてしまった。二十四時間フルのフリータイムをとっていた私達にとっては、予定が繰り上っても、どうのという事は全くなかったので変更通り、家を出る事にした。

五月晴れの空は晴れ渡って清々しい感じがする。だが、清々しい五月晴れというよりはむしろ、初夏の匂いのする朝だった。

そくさくとせかれて準備した割には、妻の、麗花の方が余裕のある感じといえいいのか

心のゆとりが感じられる。前回は妻の意志を最後的には無視したような強行プレイであったから、不平を鳴らした妻であったが、今日は積極的に行動している妻の態度に、心が湧く想いがした。

あの日以来、私と妻との生活は以前とは一線を画したようなハッキリとした生活の変化が生じ、新しい時代の幕が開かれた。麗花は歓喜して従来に況して輪をかけた生活を開いたからです。これが妻なのか、これが同じ女なのかと比べてみたくなるような、フレッシュでエネルギーな夢みる女の生活が、描かれ始めたからだ。

どうやら、私が環夫人に魅せられるあまりに、見返りとして自分がコールされたと思っただ女心の微妙さ。プライドが傷つけられたと思っただらしい。確かに私が夫人に魅せられたことを否定しないと言えれば自分を偽った事になる。それが妻のプライドを傷つけたことに



なり、思いつめるようになったらしい。妻はその後、夫人に会う席で歓談し合って行動を共にすることによって、そのプレイの終りには環夫人への感情が融け、私への怒りも消え去ったのを知った。

女らしい優しさを湛えた女、温かさをもっ

た女を環夫人の上に発見し、何故、私が環さんにも次郎氏にも、好意以上のものを持ったのかを知った訳である。『百聞は一見にしかず』という古い諺があるように、環さんの女らしさという要素や、年下の妹とも言える彼女の年令と愛らしさに、妻は心を傾斜させ、ぐっと抱き寄せたい情愛を、感じたのであった。

一つの心の中に生じた安定という名の錨が深く下りてゆくことを私も妻も感じとったことを、記さずにはいられない。

彼女にないものを妻がもち、妻にないものを彼女がもち。女らしさが匂うという点においては環夫人も麗花も一点一画もソツのない完璧な女性である。私が、その彼女に魅かれたとて無理からぬお人、妻は知ったのであった。前へ一歩も出ず、また一歩も後へ退くこともない、彼女と妻との生活と性格の距離は、ただ年令のへだてがあるというだけで妻を満足させ、ひいては、それが、お互いの夫婦の間をとり去ったといえるのではないだろうか。しかも次郎氏の一挙手一投足が、妻を充分、満足させるものであったことも見逃すことのできない事柄であった。

初回の出会いが終ってから一週間程たって

私達は、次郎氏へ贈るための妻のヌード・フォートをつくりたいと提案した時、妻は衣服をぬいで寝室でのフォート・モデルになった。先日まであった六台のカメラは二台を人に与え、一台を貸し出した処、朝になって二台が圧力操作の関係で破壊され、特殊カメラ一台だけになってしまった。特殊カメラでは困るので一台をレンタルしなければならなかった。馴れないカメラは不自由なもので便利が悪く、結局どうやらといえるものは数葉だった。四ツ切りに伸ばして次郎氏に進呈した。

むしろ画材として扱った環夫人にすまないようなものであったけれども、勘弁願うことにして、環夫人、麗花とも、美しいものをつりたいと思う。環さんのフォームを美しく捉えたつもり写真が凡作のため、環さんにすまないなあとはい、いずれの機会には次郎氏から彼女を拝借して、時間をかけて美しい写真を作成したいと、今も念願している訳である。

妻と選んだ妻のフォートは次郎氏に深蔵して貰いたいと思っている。

二組の夫婦は、それぞれを理解し合う中で最早、他人ではなく結合している。お互いが

お互いを、いたわり愛し合って生きる瞬間は最高の誠意を贈る事によってプレイを遂げるという、帰趨の仕方は大きな成功であったと私は思う。いそいそとしている妻を見ることは私にとって、大きな喜びが満ちてくることを、さとした。妻がフレッシユな日々を礎きはじめてとき、私は二十年以上の歳月が不死鳥のように甦ってくるのを次第に感じ、齒車が予定通り動き出したのを知った。

夜に強い海の伝統が電撃のように五体に漲りはじめ、「反転、二十四ノットになせ」と私は私に下令した。眩しいように太陽が輝きはじめてようでもある。

「しばらくでございました」

妻と彼女が言葉を交した時、百年の知己か姉妹のような情愛が溢れていた。何一つとて隔てることのない現在。作られゆく栄光の詩を編むにふさわしい担い手の二人であった。次郎氏とはプレイについて、また事業についてビジネスサイドで話し合った時、彼はこう言った。

「あなたの方ほど許し合える人が、また得られるかどうか。再び、会えない人でしょうね」私もまた、弟同様に思える彼に、同じレベルな行動を通して、プレイによって与えら

れた仕合せを感謝していると伝えた。

今回は私は一つのミスをしてしまったが、それは後段にゆずることにしたい。

私は昔から短兵急に入って行けない性格があり、それがムード派と言われる言葉の一つでもある。環夫人に團竜点睛をかく始末になり、完全な満足を与えられなかった遠因にもなっているだろう。

こんな可愛い彼女を、官能の涯に連れて行けなかったら、男ではあるまい。連れて行かずにはおかぬと私は思った。

「あなた。環さんを可愛がってあげて。でなかったら、環さんが可哀そうよ。私も環さんを喜んで泣かせてあげたいわ」

男特有の征服欲というか、サディズムの心というのか、それが私に湧き上る。

彼女が女らしくあればあるだけ、私の心は掻き立てられるのだ。妻もそうした女だけれども、環という彼女もそうした女であった。

私達にとって魅力ある女性とは、女らしい女であることによって私達は新しい力を得て未知の海をたずねてゆく原動力となる人のことだ。短い言葉の一つ一つが、黄金のシズクと言えよう表現が、二人の女の間で交わされた。誠意をこめて語る言葉に多くの言葉の必

要はない。時として少ない言葉が効果的である場合、千金の重みをもつ時がある。

いたわりとか親しみというものは積み重ねられた言葉や挙動の中から生まれ出るものであり、作為の中からは生まれない。それを操る人の言葉の高低やフィリングのある音の綴りの中から、本当に相手を愛し、また尊敬しているのが大きな要件をもっている。

お互いがお互いを理解できるのは、その故である。一回で相手を信じ得る者、百回会っても信じ得ない者が存在する場合もある。

相手を信じることのできない者が、どうして相手の苦しみや悩みを、理解できるだろうか。妻達も私達も対等の立場にたつて、お互いを理解し続ける限り、身も心も一つにして無限の空間の中におかれるに違いない。

彼女が妻にビールをすすめるが、妻はそれを軽く辞退した。飲用後、尿意が早くなり、しきりと排尿したくなる旨を笑いながら伝え私も助け舟を出して事実であることを語る。

「いいじゃありませんの。結構すぎるお話しやございません？」

彼女の言葉を妻はストレートで聞いてしまった。麗花は通常の言葉は理解できても、裏の言葉は理解できなかったらしい。結構すぎ

るといふ言葉の意味が、分らなかったのである。後で私が妻に環夫人の言葉を解説して意味を伝えた時、妻は含みのある文学的な表現にびっくりしてしまった。

「お馬鹿さんだねえ。次郎さんも望んだに違いないし、環さんも望んだのだよ。次の機会には進んで、それを与えるのだね。求められようと求められまいと、それは与えられなければいけないよ。鈍感だったねえ。環さんはそれを知っていたから、それとなく麗花に願ったのだと思うよ。彼女は文学的に、こなしだね。私もそれを次には環さんに求めるつもりだよ」

「へーえっ」と後での、お笑い草だった。一室でも、よろしいか。悪ければ、もう一室、とりましようか、という次郎氏に、一室でよい旨を伝えて四人プレイを承諾する。

プレイは一对二、一对三、二対二、ともなるであろうが、すべて承諾、私達に異存はない。

次郎氏の調教よろしきを得て、環さんもそれを望んでおり、妻もまた、十七、八の娘さんならいざしらず、濃厚な女年増とあっては拒否する筈があるとは思えないし、妻も今日は、それを望んでいるのであった。

先に湯を浴びた私達は、後から湯を浴びて帰ってきた二人の妻に、麗花は次郎氏の横へ環夫人は私の傍らへ、くるように命じた。天衣無縫のままで彼女達は、それぞれのプレイ夫の傍らへ寄り添って行った。私は全裸の環夫人を抱いて運ぼうとは思ったが一応、遠慮して手を引き私のセクトポジションへ環夫人を連れて行った。これから、お互いがプレイ妻をもつのであるから「何々夫人」というのはやめて読者の情感を高めるためにも「私の環、彼の麗花」として話をすすめよう。

先ず前奏は私と環から開始した。

羞恥責めからである。羞恥責めを環が愛好していると聞いており、羞恥にもだえる彼女は限りなく美しい。

私は環を上を向いて寝かせ、私の手にそれぞれの足首を握りしめ、動く人形のように体をくねらせ、体を、或は、足を折った。時には思い切り伸ばしたりした。足首を左右にくつろげたとき、彼女は同じように私の意のままに体一杯、左右に開いて、私の自由のままに従った。私に応じながらも羞恥にふるえて全裸を目の下にひろげている彼女は、とても美しかった。私は彼女の全身に、くまなく接吻の雨を、そそいだ。

どこから匂ってくるのか、神秘的匂いが私の鼻先をかすめる。私は彼女の、しまった木目のつんだマンドリンを抱えて、恋の唄を伴奏する。右手は下の音域を奏で、左手は彼女の首を支えながら、上部のポイントセクション帯を掌で指で伴奏してゆく。演奏につれ、環は少しずつ体を反応させ、遂にたまらなくなつたのであろうか、声を洩らし始めた。

次郎氏自ら薫陶された故であらうか、感度は抜群である。細身ではあるが、よくしまつた美しいニンフを抱えて、私は感激してしまふ。私が、あまり感激してしまつては、彼女を欲びに導くことはできないし、彼女に欲びを与えることもできない。私だけでは欲びなつもりでいた。こんな美しく可愛い夫人に対して申し訳ないような気がする。環に心を使わないで無茶苦茶にして下さいと次郎氏からの御依頼であるが、私なりの、いじめ方で彼女は責めるつもりであり、プレイが始まつたら充分、喜んで笑っていただく心づもりであつた。指と指との間に彼女の乳首を挟みながら、乳房を強く、或は弱く、いためつける。フィンガー演奏のその度に、彼女の小さな唇から、愛の切なさやうたう声がもれる。きらきらと黒いダイヤのように輝く、表現の

しようなない美しい彼女を私は何時までも、何時までも抱きしめ、喰べてしまいたいような気持ちさえる。静かにのびてきた環の手が私の中心に、すがりつく。不自然な姿勢は環にも、つらいだろう。彼女の体を反転させて胸と胸、腹と腹とが相接するように抱き代える。しかし、私の腕は手は、相変らず彼女の全身の敏感な性感帯を責めつけ、彼女のすすり泣きや、うめきが惱ましく聞える。扉一枚は開け放したままであるから、一枚の向うでは、私が全裸の環を責めているように、全裸の麗花が次郎氏に同じように抱かれ、くつろげられて責めのプレイが行われている筈である。寝物語かと思われる会話らしい音が途切れて、水を打ったような静けさが感じられるのは、麗花が彼の得意の舌攻めに崩れて陶酔している瞬間でもあるだろう。今は彼の妻として麗花も充分、濡れている筈である。

環が私の胸に顔を埋めて痛い程、噛みついてくる。それがまた快い感じを、もたらす。誘い水を受けたように環を愛しいものとして私は体が折れる程に、しめつける。彼女の腰が痛まなかつただろうか。

私がどんな賛辞を贈ったとて、それは彼女の素晴らしさとは比べられない、ふさわしくない色褪せたものでしかないだろう。そこは優しい彼女の寛容に甘えて、許して貰いたいと思う。

私は、静かに環を離して床の上に横たえ、仰向きに転ばせ、豊かな肢態のすみずみまで刻明に鑑賞する。ここにいるのは、次郎氏の妻の環ではなく、私によって被虐の欲びを見出さそうとしている一人の女、環の裸像だ。もう一度、足を大きく左右へ割らせ、足首を両手で、それぞれの腰へ密着させて引きつけさせる。私も転がり、彼女の腰に顔をあてがうように接近し、唇を近づける。彼女の太腿から腰を廻り上半身へ伸ばした両手で、しっかりと双の乳房を捉える。充分と姿勢を確かめた上で、恥かしげに顔をかくしている環の両手を、左右へ伸ばし、力を抜くように命じる。私の言葉通り環は力を抜いて手を左右へ伸ばす。

彼女の胸の谷間を通して、美しい花の顔容かんばせの表情を一つ一つ確かめながら、同時乳房責めをして、環を夢の世界へ連れて行こうとした。カメラに手練れの者があれば、このフォームを私と環のために、記録して欲しいと思う。残念ながら次郎氏はカメラに不馴れのようである。

次郎氏からは、お望みなら、剃毛していただいてもよろしいんですよ、ということであったが、彼女自身もそれを拒みはしないと思う。しかし彼女の剃毛をするのは、しばしの回を重ねてからの後の楽しみとしたい。

何れ遠からず充分に彼女を歓喜させた上で剃毛の儀式を行って、もっと高い処へ環を昇華させたいと思っている。

その時には次郎氏の目前で確かめて貰いながら、童女に変身してほしいと思うし、彼もまた、その儀式に参加して、その妻の童女となり、生まれ出ることを望んでいる筈だ。私が彼女に剃毛を、とりすすめるとき、彼と彼女は、どんな風に燃えるだろうか。それがまた、楽しみの一つかも知れない。美味しいものは、ゆっくりと味わいたいのは私の希望でもある。

私の顔が彼女の太腿にピッタリとあてがついた時、彼女は大きく呼吸をしたようだ。次第に期待にふくれて行く彼女の息づかいが、彼女が登ってゆく階段の高さを示しているようだった。私の舌先が彼女の最も鋭敏な部分にふれたとき、彼女の体がピクンと、ハネ上った。すごく敏感な彼女である。

肩口から上膊に力を入れて、挟み込むよう

にして、彼女の美しい尻を抱えながら、舌先の動かし方を変化させて見た。小さな低い声が可愛らしい唇から洩れ、それが私の昂まりをはやめる。柔らかな起伏の間から、次第にテンポの早くなつて行く彼女を眺めながら、乳房から乳を吸いとりと同じようなリズムで吸いつく。舌先がうねりする毎に、彼女は顔を左右に振って、も

だえる。

被虐の対象が美しければ美しいだけ、その

もだえは艶麗な絵というような感じで、この危な絵に終りがなければ、もっとよかろうにと、自分に語りかけて

見る。私の目の前で被虐の身を、くねらせもだえる姿が、私に歓びを加速させていること



を彼女は知っているだろうか。彼女と私の歓びは、それぞれ別個のものであるけれども、

また、同じ上に始まった表と裏の関係という連帯観が、私と彼女をへだてなく結びつけるきづなを濃くしてゆく。

彼女が私に求めたのか、私が彼女に求めたのか、何れが求めたのかともなく、やがて私の腰は彼女の顔の上にあつた。彼女の花の顔容が、すっぱりと、かくれてしまつていた。

彼女の両足は私の両脇に挟み込まれ、二つの丸い丘にゆるい傾斜の中で、のびやかに色づいて呼吸する女の園が、媚を湛えて私の愛咬責めを待っていた。私の腰に手を廻し堅く力を入れかけた激情の環の奉仕する心が、体のすみずみまで浸み渡る。私の意志とは全く反対に、私自身が燃えつきってしまった。

燃えてくる私自身を彼女から遠ざけるにはあまりにも私は人間的であり、自己的であつた。環の欲びは中断させてはならないと思つた瞬間、環の情熱の美技は私を一挙にマウンテンの頂上に登らせてしまった。快いリズムと外気を求めて環の愛に融けた私の心は、環の中へ飛び込んで行った。優しく私を傷つけまいとして、いたわってくれる彼女の女っぽさが身に浸み、彼女の原点を見せられたように思つた。この見地からは環の期待を裏切つたように、プレイヤールしくないテクニック

であつたと思いつつ、心で彼女にわびるのだつた。私は舌責めを続けたけれども、満足は与えられなかった筈だ。

その時になつて次郎氏と時妻の麗花が入ってきた。麗花に手早く告げたので、一切を素早く、さとしたらしい。麗花は環に接吻を求めて抱き合い、彼女の乳房を愛撫した。環もまた、麗花の乳房に手をふれ、愛撫をくり返す。

『これは素晴らしい！』と次郎氏。

私は静かに身を離して、次郎氏に代つた。私と交代した次郎氏が、彼の妻に攻撃を加えつつ、一本の手は延びて、環を責めている麗花を指責めする。妻の麗花は片足を立て、太股を大きく開いて、彼が責め易いように肢態を崩した。

三人の混合プレイに入つたのを見すませて私は浴室へ入って水を浴びた。

冷たい水が燃えた身体を冷やし、熱した下肢を冷やす。正常ならぬ身の悲しさ、身体が鈍って冴えない感じだ。冷やした身体を、ゆっくりさせて部屋へ戻って見ると、三人プレイは続いている。カメラをとり上げて、三人の姿を色々な角度からとる、麗花と次郎氏とのプレイの姿は、グロでもエロでもない。お

互いがお互いの持つ財産を分ち合つて、その情を通じ、心と肉体をつなぎ融かし合つて、情炎をかきたてているのである。美しい近代情緒の絵画が存在した。

このようなプレイの営みが美ではないというのなら、何処に美というものが存在するのだろうか。こんな美しい絵を知ること、見ることのできない不幸な人達が、いたましい。私達は一つのもの捨てることによって、高いものを握り取るプレイの美果、美酒を得、幸せを感じるのだった。

麗花の上で環が乳房を吸い、彼が麗花の肌の一部分をすすっているのも、とてもほほえましい限り。『燃えないわ』といった麗花が瞳をうるませて微笑をたたえるかと思うと、目を閉じて小鼻をうごめかしているのも、被虐の快感が押しよせている証拠であろうか。

『楽しいかい？』耳に口を寄せて囁く私。

『とても楽しいわ』と麗花が低音で呟く。

前後左右から私は、その恥態を曝す妻のプレイ姿をフィルムにおさめる。

カメラを握つた時の私は、すぐく冷静になる。冷静になれば、よい写真がとれるが、失えば何一つ、とれなくなること、潜在意識が教えるのだ。

プレイを通して彼の愛情を素直に受け入れその肉体の全部をフルに使って、その愛技の訓育を受けつつ、陶醉し艶然とする妻の姿はまた美しく見え、長い歳月が逆行して振り出しへ戻ったような、新鮮さが発見された。

O嬢の物語を復誦する訳ではないが、『彼は私自身であることを忘れてはいけなによ。彼女はお前の分身でもあるんだよ』

忘れないように麗花に語っておいたが、妻は歎びをもってそれを理解し、納得しているのだから、少しも不思議はない。

選んでプレイに陶醉し、歎びに湧くことは三人に対する最大の贈物であった。身も心も許し合った私達は、幸せなカップルといえるのではないだろうか。すべてを一つの壺に

入れて融かして結び合った仲だから、この思いやりが続く限り私達は前へ前へと進む。

四人のすべてが主人公であり、三本の線をもったプレントラストなのだから。

後で眺めるフォートは二つの夫婦の秘蔵集となるだろう、私は、とても美しい画集だと思う。『愛の炎』と名付けた次郎と妻の接吻のシーン。

私と彼女のシーンは特に美しい、夢見る想いに妻も素晴らしいと言う。

彼と妻のプレイを克明に記録し終ったとき私と私のベター・ハーフ環とのプレイが再び開かれた。馴れぬ手つきで彼がシャッターを切るが、これは後でシャッターブレになって、惜しいと思った。サンフランシスコからのバ

☆ SM画稿 募集!! ☆

☆ SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしいSM画稿を読者の方々から募ります。

☆ 必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カット的なものは半分大でいいと思います。

☆ 掲載作品につきましては、作品の出来に相当した画料をお支払致します。アイディアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

△ 奇譚クラブ編集部 △

イブが、環の上で爆発した。環のむせび泣きは大きくなった。『家内は、とても飲んでい

るんですよ』と彼が叫んだ。

『奥さん、もっと声を出して泣いたらいいわよ』と麗花が横から助けの手を出す。

麗花は環のむせび泣きにつられて、彼女の愛撫が胸に頬に行われ、心から環を自分の妹のように責め、時々片手を添えてパイプ先端に圧力を加える私に、リズムをあわせる。

ひょっとしたら環がバテてしまうのではないだろうかと思いつつも、恋の虜になった私は、弱く強く、軽く重く、パイププレイイングを行ってゆく。彼女の愛しい泣声は、私の五官をゆさぶり、情熱をかき立てるには充分だった。

ファイナールのセクションは私の手での思いながら、私自身は遂に気だけが奔って遂に帰らず、次郎氏をアンカーとして頁を閉じた。燃える緋牡丹の環という彼女。融ける緋牡丹の麗花。何れを何れと区別できない、甘露の宿をもっている。

私達は陽のあたる場所へ出た瞬間は、元のペア夫婦に戻って他人になる。だが扉の中では私達はそれぞれのフォームに応じて、異なった組合せの夫婦になる。それはたのしい。

☆妊婦フォトを入手した感激☆

—女性 of 妊娠と羞恥責め—

—小 倉 悠 紀—

私が奇譚クラブを手にして、一番嬉しく思ったのは「妊娠フォトの分譲」の広告があることでした。奇譚クラブ以外に、印画紙に焼付けた妊婦フォトVを分譲してくれるところなんて他には無いからです。

以前から、他のフォトを注文する際に、中止分の再分譲を乞う旨を附記していたりしたのですが、半ば以上、諦めていたのが実現したのですから、その嬉しさは格別でした。

私は奇譚クラブを読むのが比較的、日が浅かったために、こうした、ずっと以前に分譲していた妊婦フォトを入手する機会に恵まれなかったのです。直接、印画紙に焼付けられた鮮明な「妊婦の写真」は、私を魅了せずにはおきませんでした。

特に、いかにも普通の奥さん風で、それだけに一層、興味をそられた田中美佐子さん



や、双胎腹の偉大さで空前と伝え聞いていた増田みゆきさんのフォトが、このように一挙に入手できるとは思いがけなかっただけに、田中さん、安原さん、増田さん、そしてその妊娠ヌード公開に、理解と勇気をお示し下さった御主人方には感謝の他ありません。

ところで、私は何故、こんなに妊婦というものに惹かれるのか分かりませんが、とにかく、ただのヌード写真なら何とも思わないのに、妊娠している姿となると、とたんに凄く魅力的に思えてくるのです。

強いて理由をつけるとなると「妊娠」という事実が一種の羞恥責めの現われのように感じられるから、といえそうです。

つまり私としては、女にとって「妊娠」とは、妊娠させられるという女の弱さの表明であるように感じられるのです。男に従属する



ことの嬉しさと哀れさを、その妊娠腹がハッキリと証明しているように思えるのです。

いだろうと想像してしまいます。

私は、そんな妊婦のやるせなさに身を揉ん

考えてみれば、妊婦に高慢チキなツンツンした顔つきはないように思います。男女同権などと肩肘張っている女性でも、妊娠することによっていやでも女の、なんたるか、いかに従属的存在であるかを本能的に感じとるのではないのでしょうか。

女は、たとえ、その意志に反しても、大きなお腹になっ
てしまえば、もうどうしようもない。典型的な例では強姦による妊娠が考えられるのですが、これほど、女にとって屈辱的な怒りと悲しみは他にないでしょうし、最大の被虐といえるでしょう。しかし、それが愛する者であるか、憎悪する者であるかは別としても妊娠ということ自体に、女の弱さと、従属的立場が、いやおうなく含まれていることには変わりなく、女性はその事実の持つ嬉しさ悲しさに翻弄されつくすことは間違いない

でいる姿を、つい想像してしまい、一層、いとおしさが増し、可愛さが募るのです。妊婦フォトに惹かれるのは、きっと、そんなことを無意識のうちに思い浮べてしまうからだろうと思います。

私も、春に目ざめた頃、人並？に産婦人科医になりたいと思ったことがあります。しかし当時のそれは、ただ単に出産状況に対する好奇心であって、今の私のように、妊娠という厳粛な事実によって女性が、あらゆる羞恥や苦しみを甘受し耐え忍ぶ、という情景に心躍るのは大分、様子が違うようです。パントリーが見えても恥ずかしがる女性が、妊娠したが為に、医者とはいえ他人の男性にすべてを晒すことに耐えなければならぬ。私はそんな羞恥を、じっと噛みしめている妊婦の姿を想う時、いい知れない被虐女性の、いとおしさを感じてしまいます。そして結婚しても、我が妻だけは絶対に男の医者には行かせないでおこうと思ってしまうのです。

ともかく、妊婦フォトは私に、いろいろな夢と連想をもたらしてくれます。今までに分譲されたのは、児玉昌子、安原さゆり、田中美佐子、増田みゆき、中河恵子、木戸悦子、金原奈加子、富田由美子、福井桃子、南加津子の十人の妊孕美写真だと思えますが、皆、大きなお腹を晒して縛られ、それぞれが持つ風情で、いずれ劣らぬ『女の可愛さ』を見せ

てくれています。特に私には、安原さゆりさんの真つ白なパンティが、ハチ切れそうなお腹に、ピッタリと貼りついているのを見て、非常に新鮮な魅力を感じましたが、私の好みというか、考え方に一番ピッタリしているように思えるのは田中美佐子さんです。

田中さんの、畳にペタリと坐った写真は誠に素晴らしい風情で、いかにも、「坐りなさい」と言われて「ハイ」と素直に坐ったといった感じが出ていて、私をゾクゾクさせてくれました。そして、全裸で正座し、床柱に後手に括られているポーズは、もう、女性の従順さを示す以外の何ものでもない素敵なおトであると思います。

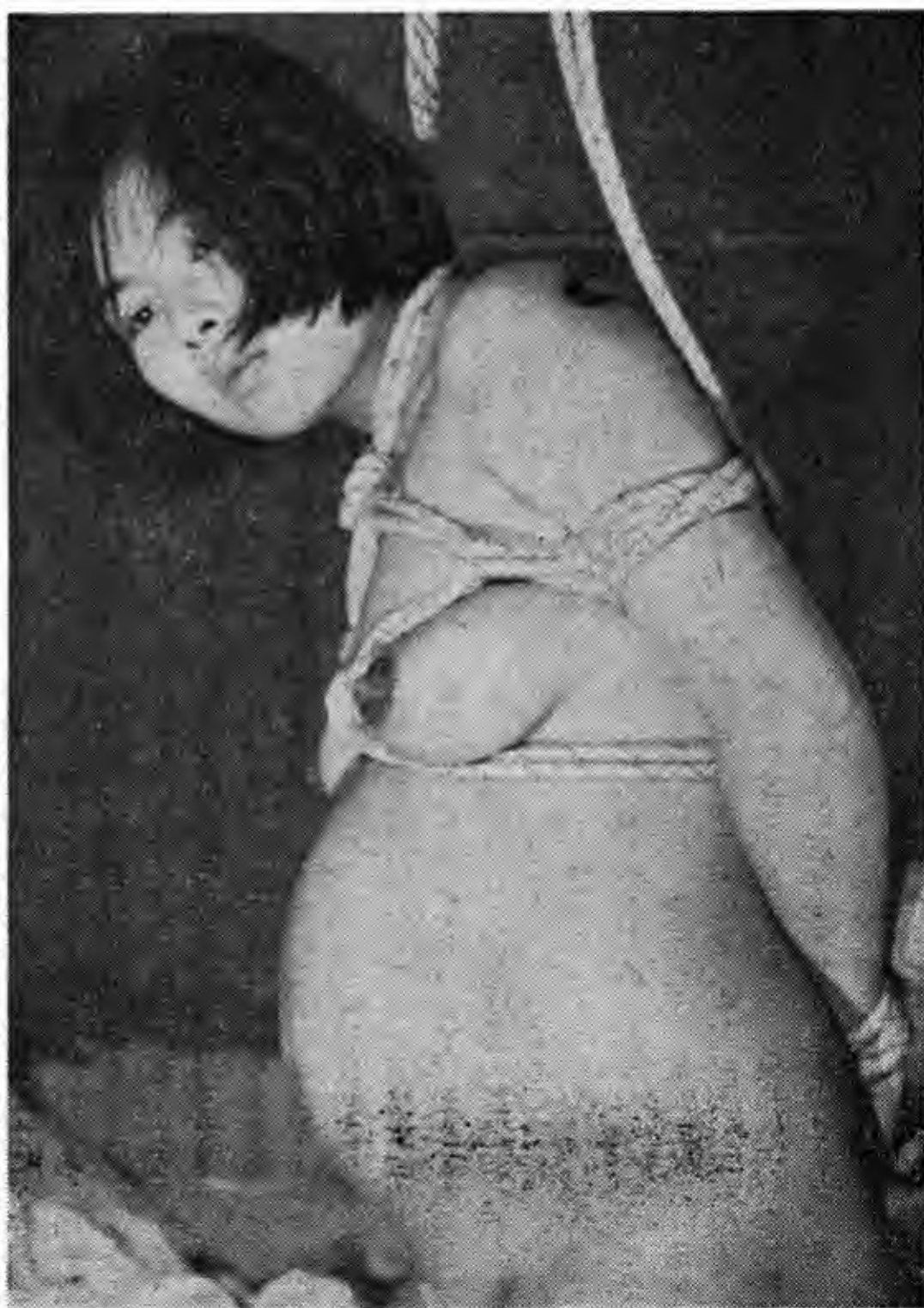
安原さん、田中さん、木戸さんが、最も普通の奥さんらしい初々しさを以て、私の興味を、かき立ててくれます。

増田みゆきさんの双胎腹には驚きの一語。

金原さん、富田さんには、淡白な、まだ残るあどけなさを感じましたが、今後とも、次々と新しい妊婦の登場を期待したいものです。

六月号で、瀬戸内勇さんが、八児玉昌子の思い出Vとして「妊婦初縛りの告白」を書いておられたのには、感激しました。早速、奇譚クラブの六月号を二冊買ってきて、この児玉昌子さんの四枚の写真を切り抜いて、スクラップブックに貼りつけました。

「ええ、いいわ。それで勇さんの気がすむん



なら、縛ったって、いいのよ」

なんという、しおらしい、従順で女らしい言葉でしょうか。瀬戸内さんが児玉昌子の妊娠した裸を見て、「女の妊娠姿」というものに興味を持たれたというのも当然でしょう。

そうして、このように彼女を縛りたくなっただのも、当然のなりゆきでしょう。なんという見事で美しい妊婦姿でしょうか。あり合せ

の紐をつないで、余りきびしくなく縛ってあるのも、瀬戸内さんが、愛する児玉昌子の妊娠している身体をいたわってのことと見受けられて、一層、感激しました。

女を縛るということが、八責めVじゃなくて、八愛情Vだということが、この児玉昌子の四枚の「妊婦フォト」によって、私には、よくわかりました。



私は今、『妊婦フォト』や『妊婦の縛りフォト』を、びっしりと貼りつけたスクラップブックを手にしております。

私は前に、家庭的な婦人の妊婦フォトにひかれると申しましたが、一見して、家庭の夫人でないように見える、中河恵子、福井桃子の二女性についても、彼女達が妊婦にならない前から、普通の緊縛モデルとして、誌上に姿を見せておられたのが、妊娠されてからは△妊婦モデル▽としても登場されたということに大変、魅力と興味を持ちました。

妊娠前からの緊縛フォトを眺めていた私達にとって、妊娠した太鼓腹のフォトを見るということは、とても楽しみでした。

とくに、福井桃子さんでは、臨月腹の出産間際に至るまで、塚本氏のルポによって、詳細に報告されたということは、私達妊婦ファンにとって、まさに圧巻でした。このような企画は、全く奇譚クラブならではの文献的価値を高く評価した企てだと思いました。

カメラ・ルポといえば、昨年八月号に載った南加津子さんの記事と写真も、素晴らしいも

のでした。いつもの事ながら、△妊婦▽という一生にそう何度もないという貴重なチャンス（南加津子さんの初産という妊娠のチャンスは、一生に一度しかない）、このように写真によって提供して下さるということは、本当に有難いことです。奇譚クラブの誇るノンプロタレントの協力のお蔭です。

八月号から九月号、そして、南加津子の臨月の妊孕美を暴いた十一月号で、なんと、百数十枚に達する便々たる太鼓腹の妊婦フォトが、ぎゅぐゅと出ているのだから、私達のような妊婦ファンならずとも驚くでしょう。

出産十日前の、この大きな乳房と蛙腹。なんと見事な、膨らみでしょうか。しかも、単なるヌードではなくて、ロープによって荒々しく縛られているのです。私は何度も何度もルポの文章を読み、妊婦フォトを眺めた事でしょう。M女加津子でなければ果し得ない、この写真と文章。私は最近に於ける一番、素晴らしいかったカメラ・ルポの三連作だと信じて疑いません。

いつの日か、私も自分の妻の妊娠腹を奇譚クラブの誌上で公開できる日の来ることを願望しているのですが、さて、いつの日のことになりますことやら。今のところ、妊娠の兆しも見えない状態です。

(おわり)

S M 短篇小説

棕しゅ欄ろ繩なわ物もの語がたり芝 好 夫
小 妻 容 子 ・ 画

なんだって？ おれの話をも、ぜひ聞かせて欲しいっていうのかい！

棕欄繩の先輩としての、おれの話をも……。そんなに先輩、先輩って言われると、少し照れてしまうな。

確かにおれは、この拷問部屋の繩の仲間じや一番古いさ。

おれが、今迄に縛ってきた囚人の数は……。そうさなあ、少なく見積っても、五、六十人は、いるだろう。

初めてここへ来た時は、おれも今のお前さんと同じように、シャキツとした棕欄繩だったもんだ。

だが、今じゃ、ごらんのように、人間の汗と脂がしみついて、トゲトゲもすっかりとれ

ちまった。

人間は年をとると、よく角がとれたっていうが、棕欄繩は、このトゲトゲがとれちまうと、もう年だって事かな。

若いお前さんを見ると、初めて、おれが女囚の肌からみついた時の事を思い出しまうぜ。

それじゃ、せっかくのお前さんの言葉だ。

その思い出話ってえのを話そうか。

さっきも言ったように、今迄に何十人とな、おれは罪人の身体を縛りつけてきた。

役人達がしゃべるのを聞いてみると、おれ達のように棕欄で編んだ繩ってえのは、水を吸うと縮んでくる性質があるので罪人を縛って拷問にかけるには都合がいいんだそうさ。

だいたい拷問ってえのは、素肌の上から繩を掛ける事になっている。

そんな時、汗にすべらず、しかも食い込むってなりや、都合がいいわけだよな。

考えてみれば、おれは運が良かったと思ってるよ。

男のゴツゴツした身体には、あんまりからみつかねえで、女のやわらかえ肌を締めつけていた方が多いから、今迄なんとか持ちこたえたのじゃねえかな。

変な話だが、何十人と客をとっている女郎だって、最初の客は何年たっても覚えていてるように、おれだって最初に縛った女は、今でも忘れちゃいねえ。

なにしろ、最初にしては、相手が大物すぎ

たんでね。

夜桜のお駒——。

背中一面に、夜桜の刺青をした女賊で、年は二十三、四才位の、すげえ別嬪だった。

「チクショウ！ あたしが何をしたっていうんだよ。どんな事をしたって、知らないもの



は知らないからね」

この拷問部屋へ、荒っぽく突き入れられた時、お駒はこう言って、わめいたもんだ。

おれは、丁度、その壁に掛けられていたが、まだ入りたてでドキドキしていたから、お駒の言葉に、びっくりして身体がふるえたもんだ。やっぱり若かったんだな。

お駒を連れて来たのは、戸倉平馬という、功名心にかられた若い同心だった。

拷問を手伝わせる為、二人の牢男下男を、したがえている。

「知らないだど？ よくも、ぬけぬけとはざいたな。まあいい……今に泥を吐かせてやる」

戸倉が、お駒の囚衣の上から掛けてある縄を、ほどく。

女牢から拷問部屋迄連行するのに掛けてある縄で、おれ達みたいな太い棕櫚縄は使っていない。

せいぜい五分丸の麻縄だ。

囚衣の上からだし、縛りやすく、ほどきやすく縄掛けしてあるから、おれと違って、縛ると

いう本当のよろこびは知らないだろう。

お駒の縄が解かれたのは、もちろん許されるわけじゃなく、裸にして拷問用の縄掛けをする為だ。

「や、止めておくれよッ！」

囚衣を脱がされそうになって、さすがに、お駒は悲鳴を上げた。

しかし、そんな悲鳴に耳をかすような牢男下男じゃねえやな。

襟に手をかけたと思う間に、さっと囚衣を脱がしちまいやがった。

「あッ……ああー」

お駒が身につけているのは、薄い腰巻が一枚だけだ。

その背中から張り切った乳房にかけて、見事な夜桜の刺青がしてあるじゃねえか。

あれから後、何人かの刺青を見た事があるが、お駒の刺青より見事なものには、お眼にかかった事がねえよ。

とにかく、薄暗いこの部屋の中でも、そこだけがパッと明るくなるような感じなんだ。

「ほう！」

戸倉も、壁からおれの身体をはずして、しごきながら、思わず、ため息をついたねえ。

むき出された乳房を抱いて、上半身を前に折ろうとするお駒。

下男達は、そんなお駒の両手を、無理矢理背中で重ね合わせる。

おれは、初仕事がこの女の身体を縛る事かと思うと、ぞくぞくっと身振いがしたね。

抵抗を封じられたお駒の身体に、戸倉の手で、おれがからみついていた。

まず手首を重ねて縛ってから、首に掛けて二の腕を思いっきり引き上げる。

首から下った、おれの身体は、やわらかくふくらんだ乳房の上で二つに分れ、二の腕にからみつく。

そして、また乳房の下を通り、肘の上から胴に廻って締め上げると、菱縄の完成というわけだ。

お駒は女としても小柄だったから、それだけ複雑に縛り上げても、おれの身体の余りつまり縄尻というのは四尺近くもあったろう。

刺青がきれいに肌になじんでいる位だからその肌のこち良さったらなかったもんだ。

おれの身体のとげとげは、お駒の身体から少しでも離れないように、そのやわらかい肌に、しっかり食い込んでいた。

特に、乳房をはさみこむように締めつけている感じが、何ともたまらねえや。

縛られるという事は、普通でも、かなり苦痛なのに、拷問の場合の縄掛けは、それだけでも屈服する囚人がいる程、苛酷なものだという。

まして、あの時のおれは、真新しい棕欄縄なんだから、縛られたお駒は、さぞつらかったろうと思うな。

「ウッ、イッ……」

お駒は血の出る程、唇を噛みしめ、食い込んでくるおれの痛みから少しでも逃れようと懸命に、もがいてみたが、かばそい女の力でゆるむような、おれじゃない。

「さっさと白状した方がいいぞ！ お前の亭主、紫小僧の源太は、どこへ逃げた？ お前は知っているはずだ」

「し、知らない！ そればかりは、あの時から聞いていないんだよ」

「そんなセリフが、ここで通ると思っているのか！」

戸倉は、手にした青竹の笞で、パシッと床を叩きつけた。

「まず最初は、敲（たたき）からだ。お駒、覚悟せい！」

二筋に分けたおれの身体、つまり、縄尻をそれぞれ下男が引き合い、お駒の動きを止めさせた戸倉。

「ひとおーッ」

ビシッと青竹が、お駒の肩で鳴った。

「ヒーッ」

お駒の身体が、そりかえる。

「ふたあーッ」

今度は反対側の肩へ一撃。

お駒の二の腕は、肩近く迄引き上げられて縛り付けられているので、肩には肉が盛り上っており、笞打ちの痛みが骨迄ひびかないようになっている。と後で知ったが、それにしても、お駒のがんばりは大したものだった。悲鳴こそ上げるものの、亭主の源太とやらの居所は白状しない。

「うぬッ、これでもか！」

戸倉は、肩といわず、背中から腹へかけて

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売!

一月分	1冊	六〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一八〇〇円 (送共)
半年分	6冊	三六〇〇円 (送共)
一年分	12冊	七二〇〇円 (送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八號出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお

も、メチャメチャに、なぐり始めた。

これには、いい気持になっただけおれも、いささか参ったね。

なぜって、お駒の身体をなぐるって事は、おれにも、いくらか当るわけだからな。

その内の一撃が、女の急所である乳房に当たったからたまらない。

「ギエッ」

お駒は、がっくりと頭をたれ、今迄、固く

払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)」のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず、現金書留にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代六〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

握りしめていた手が開いた。

失神してしまったのだ。

○

ザブンとお駒の身体に、気付きの水が、かけられた。

おれの身体に、大きな変化が起きたのは、それからだ。

その前からも、お駒の身体から出る脂汗を吸い、少しずつ、おれの身体は締まっていたが、その時の水を、たっぷり吸ったおれは、縮み方が、なおいっそう激しくなった。

ギューギュー、ギシッ、ギシッ。

おれの身体の太さは7分(約二センチ)もあるが、その半分は、お駒の肌に取り込んで見えなくなった位だ。

手首を縛ったところが一番ひどく、指先が白っぽくなっているのを見ると、ろくに血も通っていないのだろう。

「しぶとい奴め！」

戸倉が青竹を、グイッとお駒のアゴの下にこじ入れた。

うっすらと眼を開いた、お駒。

見事だった刺青も、青黒く張れ上り、皮膚が裂けて、まっ赤な血に染まっている。

そして、その血の色にも負けない位の深紅

の腰巻が、水に濡れてピッタリと腰に張り付いているのだ。

「さすがに刺青迄しただけの事はあるのう。」

肌身の痛さ位は、こたえんとみえる」

「ほ、本当に、あたしは知らない。こ、この縄を、少しゆるめて下さい」

「馬鹿者！ 白状するまで、縄を解いた事は今までにない」

お駒の顔にひろがる絶望感……。

戸倉の眼が、そんなお駒の腰を舐めるように見ている。

「もうこんな物は邪魔だな」

お駒の身体に残された、たった一枚の腰巻に手をかける戸倉。

「嫌ッ、お願い、止めて！」

「ふふふ、さっきから急に、しおらしくなったな。お前でも、女には変りないのか」

しずくのたれてる腰巻が、お駒の腰からゆっくり剥がされていく。

「それだけは……許して」

お駒も、やっぱり女だったなあ。

体がギュッと固くなるのが、おれには、すぐに感じてきた。

もし、おれがその両手を、がっちり縛っていたら、どんな事をして、きつと

前を隠したかったに違いない。

しっかり閉ざした太腿のふるえが、お駒の心の内を、あらわしている。

男達の眼は、お駒がもっとも隠したいと思っているところに吸いつけられ、下男の一人などは、着物の前を押さえたまま、しきりにこらえているありさまだ。

「こんなものまで丸出しにして、まだ強情を張り通すつもりか？」

「ひどい……あんまりです。こんな……お上には御慈悲ってものが無いんですか」

「普通はな。女の責めには、最後のものは着けさせておくのが慈悲だ。しかし、今逃げている源太は、役人を斬って逃げたんだ。その行方を吐かす迄は、どんな方法を使ってもかまわんと許しが出ている」

「知らないんです。本当です。信じて下さい」

むちむちした腰を振り立て、すがりつくように哀願するお駒。

その間にも、おれは休みなく、お駒の身体を、じわじわと締め続けていた。

上下からおれに締めつけられた乳房は、まりのようにふくれ上っている。

「駄目だッ！ 敵（たたき）でも白状せぬ時は、石抱きにかけるのが定法。この形の良い

脚が、砕けてしまってもよいのだな？」

お駒の顔が、ゆがんだ。

唇がふるえ、切れ長の眼から、大粒の涙がすーっと頬を伝って、乳房を締めているおれの上に落ちて来た。

「この縄を解いて下さい。そうすれば……」
血を吐くような声だった。

「さっきも言ったはずだ。すっかり白状してしまう迄は、この縄を解く事は出来ん」

「では、せめて……こ、腰を隠すものだけでも……」

戸倉の顔に、にやっと、いやらしい笑いが浮かんで来た。

「よしっ。どんな物でも、とにかく、お前の一番大切なところを隠せばよいだろう」

「は、はい」

お駒は、もう消え入りそうな声。

「おい、その縄尻を渡せ」

戸倉は何を考えたのか、下男から、おれの身体の一部を受取った。

「足を開かせろ！」

「へ、へい」

二人の下男が、お駒のぴったり閉ざした太腿に手をかけ、割り開こうとする。

「な、何を！ 止めてエ！」

思わず上げた、お駒の悲鳴。

「どんな物を使っても、隠して欲しいと言ったのは誰だ」

必死に暴れるお駒の両足をかかえ込んだ下男達は、力まかせに左右に押し開いていく。

「あ、ああッ」

みるみる朱に染まっていくお駒の全裸身。

「これなら太いから充分、隠せるはずだ」

戸倉は、おれの身体の長さを確かめてから結び玉をこしらえ、お駒の羞恥の中心へ押し込んだのだ。

さらに余ったおれの身体は、腰の上で括り合わせてしまう。

股間縛りと呼ぶんだそうだが、女の身体に食い込むには、これが一番だ。

「ああッ、あーッ」

お駒の悲鳴を聞きながら、おれの興奮は最高に達したね。

それまでは、いくらきつく締めつけてるとはいっても、お駒の身体の中に迄入っていたおれじゃなかった。

しかし、その時は本当に、お駒の身体の中へ、おれは、もぐり込んだわけだ。

後にも先にも、極楽みたいな気分というのは、きつと、あの時の事を言うんだらうな。

おれのトゲトゲが、いっそう元気づいたのは当り前だろう。

女の身体で一番敏感な肉の襞を、おれは夢中で、ところかまわずチクッ……チクッと刺し続けた。

「ウウッ、ヒェッ！」

お駒の身もだが、今迄と少し違うようだなと感じた時、おれは結び玉になったところに、なまあたたい水が、どっと、しみ込んでくるのに気がついた。

どこから、そんな水が、おれにかかったのかって言うのかい。

そいつを、はっきり言うと、若いお前さんには刺戟が強すぎるんで、しゃべらねえ方がいいんじゃないかな。

その水のおかげで、ますますおれが元気になる、よく締っていった事は確かだが……。

つまり、お駒は自分が、しでかした事で、自分を痛める結果になったわけだ。

チクッ、チクッ……。

おれの結び玉は、外からは見えない位にもぐり込み、お駒の身体を、いたぶり続けた。

肌当てられただけでも痛い、おれのトゲトゲが、女の秘所では、どれだけのさいなみを与えるのか、男には、とうてい、想像出来

ないのじゃないかな。

お駒が、とうとう耐えきれずに、恋しい男の隠れ家を白状したのは、それから間もなくだった。

笞打ちには耐えられた女も、おれの痛さと羞恥責めには耐えられなかったのだな。

おっと、なんだか自慢話みたいになっちゃったぜ。

× × ×

おや、いつの間にか、すっかり時刻がたちまったなあ。

なんだか今、入口で人のけはいが、したみたいだが……。

やっぱりそうか——若い女囚が入れられて来たな。

もう、おれの出番じゃなさそうだ。

若いお前さんに、お役目をゆずる時が来たようだぜ。

じゃ、しっかりやりな。

あのピチピチした肌に、お前さんの若いトゲトゲを、思いっきり食い込ませてやるんだよ。



〔告白〕

西側の窓辺に倚りて

荒^{あら}尾^お慶^{けい}子^こ

何か書いてみないか、と言われましても、今の私には、皆さまに読んでいただけますよ。うなものは、なに一つ持ち合わせてはおりません。自分の体験しましたことの思いのたけを、つたない筆で書きつづりましたうえは、もう今では、なにも残っておりません。

それなのに、こんな私に対して、いまだにお手紙を下さるのは、なんとしたことでしょうか。この私を、買いかぶっていらっしゃる。としか、私には思えないのです。

こんな私に、一体、なにを、お求めになろうとされるのでしょうか。

結婚後間もなく、交通事故で夫を失うという最大の不幸に見舞われて、気も動てんしてしまつた私は、そのときの心境を、誰かに訴えたくて、あんなはしたない告白を、おくめんもなく書いてしまいました。

そればかりではありません。夫が生後に愛読していたという、それだけのえにしで、自分の欲求を果たしたいと願つたのです。

剃毛と股間縛りという、その一見して、おぞましい責めを、私は自らすすんで願ひでたのです。そして私は、夫以外の男性の手によって、その責めを受けたばかりでなく、写真にまで、とられてしまったのです。

一泊で、というお申し出に対しても、私はそれが一泊でないといけないものだ、単純に考えて、一夜、自分のマンションをあけてしまったのでした。

縛られた上での剃毛責め……。それは、自分で予期していました以上に、私に刺戟を与えてくれました。そのときの気持って、そんな責めを経験された方ではないと、おわかりになれないと思います。羞かしい、いやだ、いやだと思いつつも、どうしても、その境地にひきずり込まれていってしまうのです。

そのときの私の身体って、ほんとうに凄くもえあがってしまっていました。それを見られるのが、とっても恥かしいのに、後手に縛られているものですから、かくすことも、逃げだすことも、できません。

よくクッションのきいたシングルベッドの毛布の上でしたから、何一つ、苦しいとか、痛いとかいうことはありませんでしたが、そんな格好を見られるということだけが、羞かしくてたまりませんでした。

そのとき、塚本さまも、当然のことのように、私の身体を求めてこられました。部屋へ落着くなり、すぐに始まったプレイでしたのに、その第一番目が、△剃毛責め▽という、

私の念願の責めだったものですから、私自身も、前後の見さかしくもなく、とり乱してしまっていたのです。

私は、もう夫を亡くした女でした。でも、ふっと、私は夫の傍を、そのとき目にしたのです。ともすれば、溺れていってしまいそうになる自分の気持を必死におさえました。

「ああ、それだけは許して。私は主人を失って、まだ一年とたっていない女です。他の責めでしたら、どんなことでも、お受けいたしますから、それだけは、お許し下さい」

私の涙ながらの嘆願に対して、塚本さまは快く、身を引いて下さいました。

「そうだったね。それじゃ、おっしゃる通り

他の責めを存分にやりましょうか」

そう言われて、剃毛責めに引きつづいて、股間縛りから海老縛りへと、極端な羞かしいポーズをとらされて、写真におさめられました。そればかりではありません。いつの間に出されたのか、塚本様の手には、小型のバイブが、かくし持っておられました。

そのバイブが、私の身体のうちで、どのように、あばれまわったか、そのとき彼が、あわてて、テープレコーダーをセットされたのでも、おわかりになると思います。

縛られた縄をききませながら、私は自分の身体がバラバラになってしまっているのではないかと思うくらい、大きな声を立てました。



私は、いつまでたっても、夫以外の男性から素っ裸にされて責められるという羞かしさから抜け切ることはできませんでした。

こんなことなら、剃毛責めのあとで、塚本さまのお情けを頂戴しておいた方がよかったのではないかと、ちよっぴり後悔しました。

ルームサービスで、日本間の方へ夕食を運んで下さいましたので、二人で向いあって夫婦のように食事をいたしました。が、私は、お給仕をしていても、羞かしくて顔をあげることができず、ずっと、うつむいていました。

食事の後片づけがすんでからは、その日本間で、またまた、私は責められました。

責められている間は、私の好む股間縛りを中心とした羞恥責めを、情容赦なく加えられましたが、一旦、プレイが終わってしまいますと、手の裏をかえしたように、やさしくして下さいました。

「ベッドで寝るのは慣れていないから……」



と、申しますと、日本間の方へ、お布団を敷いて下さって、私を寝かせ、御自分はツインベッドの一つに、おやすみになりました。

その当時、両親も、傷心の私をいたわる気持から、一人でマンションへ移った私にも、何も言いませんでした。ただ、傷のいえるのを温かい気持で見守っていて下さるだけでし

たので、私としては、ほんとうに自由な毎日でした。

それが、そうした一時期がすんでしましますと、私が再婚の意志があるのか、どうか、そのことに、大変関心を持つようになってまいりました。娘の幸福を願う親心のあらわれだと、私は大変、有難く感謝しておりました

けれども、そうした相手も機会もないまま、いたずらに日がたっていききました。

そうしますと、両親は、マンションの一人暮らしをしている私の身を案じて、なんとか自分の手元へ呼びたいという話をもってまいりました。証券会社に勤めています兄は、いいのですが、やはり兄嫁や子供がいますから、遊びに行くのはいいとしても、同居するのはどうかと、私がためらっていますと、丁度いいぐあいに、両親の家の近くに格好の売家があったのです。

相続税を完納したあとの私名義の投資信託や債券、株券

などが、相当の金額になるということを、兄から聞いていましたけれど、数字に弱い私は0ばかり並んでいる計算書を、見るのが苦手で、いつも盲判をおしていたのです。その一部で不動産を買っておくのもよいという両親のすすめで、この芦屋の古い邸宅を手に入れたのです。

持主が手離そうかと思うほどですから、気味が悪いほど、ただ広くて、それに建て方も古いのです。でも、その建物をこわすだけでも三十万円近くもかかるといわれて、そのままにしています。そのかわり、庭の一部に、小さな、かわいい家を建てました。

私一人が住むのにふさわしい、ちっぽけなかわりに、上品な数寄屋造りにしてもらいました。今、その西側の窓辺によりかかって、このお便りのペンを走らせています。

西側の窓は西陽が暑いと申しますが、ヒマラヤシダーや梧桐が茂っておりますので、陽をさえぎってくれるばかりでなく、冷たい風が吹き込んできて、とても涼しいのです。

ただ、庭に樹が多いのと泉水がありますため、蚊が多いのには閉口します。お昼でも蚊取線香をつけていないと、足にかまれたあとが知らぬ間にいくつもついていくのです。

先日、お友達の悦子さんが遊びにみえてふくらはぎを蚊にかまれて、大きくはれたことがあります。私は、もう何度もかまれて免疫になっていきますけれど、彼女は初めてだったものですから、真っ赤になって、中心部だけ固く盛りあがってしまいました。

今の私って、こんなに、のんきに毎日を通してあります。マンションの七階の窓から飛び降りてみたいと思った感傷的な気持は、持ち合わせておりません。

“時”というものが、すべてを解決してくれるということとは、真実なのです。

私は、自分という女を、つくづく、イヤだなあとすることが多くあります。それは、ほんとうのことなんです。

第一に、私はお金をふやすことに興味を持ちながら、自分で努力するということをしないんです。ですから、当然のことながら、命が惜しいんです。あの初めての告白を書いたときのような純粋な気持は、少しも持ち合わせていないのです。

そして更に悪いことは、あの塚本様に責められたときに味わった剃毛責め、股間縛り、それにパイプ責めの味が忘れられなくなってしまったイヤな女なのです。

他の男性の方に縛られたような気持になつて自ら用いるパイプに、私は陶醉してしまうのです。その陶醉のなかに、亡き夫に対するせめてもの貞淑を誓っている私なのです。

あのころと、私の身体は少しも進歩しておりませんけれど、私の心は大きく変ってしまつたことを、私は自分で十分、自覚します。

あれから、一度もお勤めしたこともなく、両親に甘えて、ただ、ぜいたくに暮しているこんな私は、至ってつまらない女です。

私に、わざわざ、お手紙を下さった方々は私をきつと買いかぶっていらっしゃるのだと思います。私は決して、そんな立派な女ではありません。お許しさえあれば、もう一度でも二度でも、素っ裸にされて股間縛りにされて写真にとられたいと思っていますのです。

いえ、いえ、ほんとうのことを告白しましたら、もう一度、剃毛責めにして下さい、とお願ひしたことがあるのです。

そのときは、私が病気をして転地しましたので、その望みは、幸か不幸か、果たされませんでした。今から思いましたら、穴があったら入りたい気持です。

今日は、これにて、お許し下さい。

さようなら。

— 体験告白 —

女責め図絵の系譜

文と画

南彦造

私が母の肉体を初めてカイ間見たのは、かなり幼い頃だったに違いないのだが、現実を生々しくイメージを浮かべることが出来るのは、小学校の五、六年の頃だったと思う。

ようやく女体に興味を持ち始めた年頃だったし、その頃になると女の部分についての好奇心を母の体に求めていたのは事実だった。

大きなお尻——たわわなおっぱい——さぞ見事であろうと思われる、前の部分など、ようやく性にも眼ざめ成熟し切った美しい女体のすべてを知りたいと思う気持ちが横溢しつつあった頃である。お湯屋のカマ場からチラリと覗ける内湯を窺ったり、廁での尿の飜出する騒音に耳を傾けたり——とにかく、あらゆる

る女の魅力については微細なことでも見逃すまいと、冷たい神経を使い始めた頃でもあった。

意外な時に意外なクジ運にめぐまれるものであった。——ある引越しの時——懇意にしていた近所の職人の家の娘さんが母との最後の手伝いも終って、夜の八時か九時になった頃——どっち道帰ったって銭湯に行くのでしょうし、私も入ろうと思っていま炊き直した処なのだから、入ってゆっくりして行ったらどう？ 今度は何時会えるか、分らないのだし——との母のすすめで、娘さんは素直に頷いた。

父は、役所のお別れパーティの席に行っ

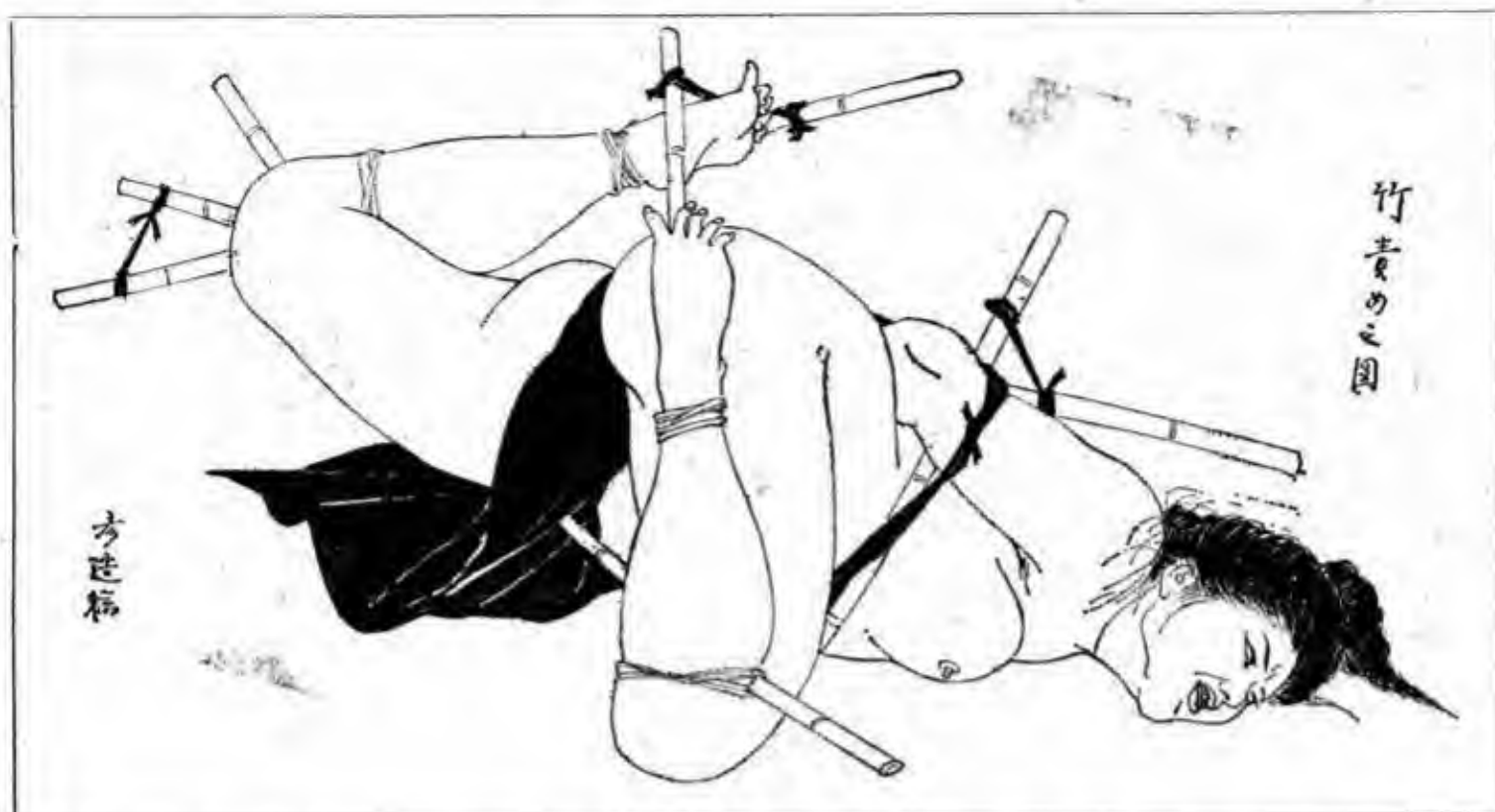
まだ帰らなかったし、私の兄や幼い弟妹たちは、昼間の疲れで、その頃には別室で、グウスカ軽いイビキをたてていた。

私も別室に行くつもりだったが、その夜はふと父の蒲団にもぐりこんでいたので、茶の間の見える奥の部屋で横になり、雑誌に読みふけていた。

「みんな、寝てしまったから、ここで着物をお脱ぎなさいな。誰も見てないし、私と二人きりなのだから……」

という母の声——私が何気なく茶の間を眺めると、母とその娘さんは、お茶のみ話の食膳で、さし向いだった。

娘さんは、当時——尋常高等小学校を卒業



したての——いまように数えれば新制中学の三年生と云う年頃でしょうか。ようやく女らしく円みを帯びた女体の美しさは成人になり始めた初々しい年頃なので——身長も母と同じくらいの立派な体格で——髪の毛は二ツに分け、おサゲにはしていたが、その夜は母のすすめで、クルリと巻き上げ細っそりとした白い襟足を覗かせ、つげの櫛巻きでアップにしたばかり。

その初めて眺める円くて白い襟足の処女肌は、長い後毛を、何本か残しているだけで、漆黒な髪の毛のタワワさといまって、恐ろしいほど魅惑的で成熟した妙齡の乙女の香りを無限に発散させて居た。私は、続いて脱ぎ捨てた着物の下から、初めて眺める艶かしい襦袢のピンクの曲線——乳房の高いふくらみが柔らかな下着に包まれて、その姿は意外とポインであった。

「どうぞ——」と母は先にたって湯殿の杉戸を開いた。娘さんは安心して立ち上ると襦袢を脱ぎ捨て、白いネルのお腰もサラリと脱った。

一瞬——私は我が眼を閉じた。見てはならないものを見て終った自責と男の羞恥と——そして見たい欲望とで、なかば混乱し

乍らも、再び眼を開く……と……おお、そこには、まだ汚れを知らぬ白い女体が、スラリと佇み——やがて杉戸の奥に、消えたのであった。その女体美についての驚異とセックスとを求める男の本能とがミックスして、私はお恥かしい話だが男性自身の異様な変化に気づいたのでした。

私は部屋との境の襖に忍びよった。見てはならない女の羞恥の立姿を、もう少しつぶさにカイ間見たいと思う欲望で身も心も動転していたのであった。

「どうしたの？ まだ寝まなかったの？」

と鋭い声が背後から私をたしなめた。母の瞳には鋭い叱責があった。私は思わず、しまった！ と後悔したが、間に合わない。

「うん、どうしても眠れなくて」

と誤魔化した。

「じゃ、自分の部屋で勉強なさいな！」

と母は鋭く云い捨てると、急いで、ピシャリと境の襖を閉め切って終った。

私はその瞬間——心の卑しさを母に見すかされた想いで恥かしかったが——それ以来、私は娘さんの、白い、たおやかな肢体を忘れ去ることが出来なかった。

私は、機会あることに娘さんの立姿を脳裏

に再現するようになった。と同時に、彼女の女体が様々な形で虐待されるのを夢中で、描くようになった。

ある時には閻魔様の前で長い舌の根元から釘抜きで引き抜かれ、泣いて苦悶する姿を描いたり……また、ある時には針の山に迫り上げられ、白い足を血だらけにして逃げ廻ったり——また、ある時には、釜の中で、煮られて章魚のように肌を真っ赤にして藻掻き、助けを求めているポーズなどであった。

私は、彼女があれから満州に渡り、開拓団青年の花嫁となり、敗戦を迎えたが、それからの消息は知らない。だが偶然、私は彼女の実弟から、彼女が土匪の犠牲となり横死したらしい——との便りを得たのであった。彼女の弟は姉と共にやはり満蒙の地に渡り、新天地で活躍していたが、不幸にして敗戦となり彼の地を彷徨った。

彼女の弟は信吉といったが、姉の身が心配であった。急いで任地から北満のハイラル郊外の姉の嫁ぎ先に着いてみれば、既に日本人の姿は無く——止むを得ず彼は南下を続け、より一步でも故国の近くへと歩き出した。とある満人の部落にたどりついた時——彼は異様な光景を見た。大勢の満人が取り囲んだ中

で、数人の日本婦女子が、まるで奴隷売買の態よろしく、全裸にされ、満人の淫らな欲望の眼の犠牲に供されているのであった。

彼——信吉は満人の服装をして居り、幸い少年の頃から満蒙育ちなので言葉も生活も満人と少しも交らないのであった。彼は裸体の婦女子の間から、以前、信吉らの生活よりも高級で贅沢な有産階級を誇示して来た、とある令夫人が、露れもなく下着まで剥がれ、全裸の肥えた肌を満人の前に曝しているのを発見して、小気味よい快感に浸った。

この令夫人は、彼がかつて訪ねたことのある上役の奥さんで、彼に接する態度は、何時も横柄であった。彼女は信吉を下男か下女でも扱う態度で召し使った。だから、彼は今こそ溜飲の下がる思いで、この夫人の痴態を眺めていた。

信吉は、ふと、この夫人が思い切り、酷い拷問や、刑罰にかかれればよいと希った。さんざん、自分をさげすんだ、この高慢ちきな女の恥かしい姿をもっともっと満人たちの手でいたぶりつけて復讐がしたい——と思った。

と、その時であった。一人の日本人の中年男が現われ、なめし皮の鞭を握ると、裸女の塊の中に入り、いきなり大声で、満人の群れ

に向って喋り始めた。彼は流暢な満州語で、日本人の悪虐非道を罵り、いまこそ重なる怨みを晴らす時が来たのだ——と、まくしたたてた。信吉は、ギョツとして、まじまじとその男を眺めた。

憎むべきこの男は、同胞の女を売り物にして、満人の歓心を買ひ、自分だけの無事を計っているものであった。彼にも恐らく妻子が居る筈であった。そんな年頃の中年の五十がらみの日本人が満語をたくみにあやつり、彼等にとり入ろうとしていた。情けない奴！ みさげた奴！ 彼の心は逆に憤りの焰で燃え上った。信吉はいま、狼の群れに囲まれた女たちを救い出したいと思った。然し多勢に無勢——下手をすれば自分の身が危いのだった。

彼は焦る心を押えて、この哀れな婦女子と狼のような満人群——日本人の中年男の暴状を——いま暫くの間、黙過せずには居られない。惨めな立場に置かれていた。

中年男は、饒て震え戦く婦女子の中から、やはり、ちょっと目立つ令夫人を選び出すと他の婦女子の危難を救うべく——人柱になるよう——犠牲を強請た。夫人は硬ばった白い顔を一層蒼白く引きつらせ男に哀願した。へお金はいくらでも出します。日本に帰れば

数億円の財産があるのですから、それも全部あなたに差し上げましょう。Vと男に縋りついた。男は冷酷な眼で見下すと、△お前のような雌豚まがいの肥えた満州ゴロに、どれだけ土地の者たちは苦しめられて来たことかVと詰るのであった。すると、取巻く満人の唇から、異句同音に淫ら声が湧き起ると、この女性敵は勢いを得て△この女たちを諸君の好きなようにしようではないかVと嘯鳴った。

△逆吊りにして、腸を抜いて終え！V

と前の方でなりゆきを見守っていた、いぎたない洋車風態の奴が答えた。瞬間——彼はこれは酷いことになる——と愕然とした。

中国人の刑罰には、古来すさまじいものがあるが△腸抜きVの刑罰ほど、酸鼻を極めたものはない。

△腸抜きVとは、好んで土匪の使う惨酷な刑罰の一つであるが、男でも女でもよい、裸に剥いて立木の枝に逆さに吊り下げ、まるで盲腸の手術でもするように、右下腹部の一部を僅かに切り開き内部の腸を大腸は勿論、小腸から胃、肝臓にいたるまで引き出して、空気に曝らして終うのだ。死ぬにはまだ傷が浅すぎるのだった。しかも内臓は外部に引き出されながら、蛇のようにうねり、くねって生活

反能を繰り展げ続けるのであった。しかも水を与え、たっぷり食物を与えている限り、逆しまに吊られた肉体は悶えながらも生き続けていたのであった。

それを取り囲み天空に吊られた肉体を見上げ、団匪たちは酒を掬み交し、オダをあげ、高吟放歌——引出された青白い静脈の浮いた長い腸管を首にまき、はては縄のように、よじったり、しごいたりしていたぶり続け、はては焚き火であぶったりして、その変化を楽しむのであった。そして、その俚——一週間——、いや、時には一月以上も、生かさず殺さずの俚、放置しておくのであった。

この刑罰を、いま令夫人の肉体の上に実験しようとするのであった。

△なんと惨虐な！V（けだもの奴！V

彼はこの中年男の非道さにあきれ、おののいたが、敗戦により主客転倒した現在——どうすることも出来ない有様であった。

令夫人の蒼白な肉体が、やがて群衆の男たちの手によって逆さに吊り上げられ、天空に舞うと、最早、エリート夫人の誇りも、名誉もないのであった。ただ悶え、号泣し、長い髪を振り乱して助けを乞うだけであった。

そんな女の羞恥の姿に、やがてどんな結末

が、どのように及んだか——此処で述べることは出来ない。それは禁忌すべき文章であり禁じられた発表でもあるからだ。だから、賢明な諸君の想像にまかせるより他に方法はあまるまい。

信吉は過去数年の満蒙生活で、中国人を含め、所謂大陸人たちが、如何に人間に与える刑罰の奇抜さを楽しみ、惨烈さをモットーとし、とりわけ婦女子に与える刑罰の種々相は最早、刑罰というよりは、人民の体質的な流れの中から生れた歴史的な遺産に違いないと思うようになった。それほど大陸人は、すべて、することが、おおまかで、動物本能的で苛酷な刑を生むのに天才的であった。

例えば△鉄板焼きの刑Vなどは、その典型的なものであった。薄い鉄板をたき火で焼きその上に鶏を立たせて縛り一層、激しく鉄板の裏から火を燃やせば、鶏は両肢のヒラが熱くなるので、足踏みを繰り返す。だが次第に熱さを増す鉄板に矢も楯もなくなり鶏の足踏みは次第次第に速度を増す——やがて、精根も尽き果てた鶏は、失神寸前に、追い込まれる。

両肢の神経と生命のあがきは、より高い処へ、より高い避難の部分求めて、鶏体の上

部へ上部へと逃避行を開始する。その全精気が、やがて鶏の脳天に集った頃を見はからって、鶏の頭蓋骨を割り、熱しきった脳味噌をいただく——まさに八トサカに來たVとは、このことであろう。諺の語源が生れたのではないかと思う。

これが世に云う中国の「不老長寿の妙薬」の一ツであり、トルコ人を含めて、古来、大陸人は好んで、こうした惨虐な方法で八不老長寿Vを求めたのであった。鶏の生きようと全精力が集った脳天を頃はよし！と金槌とノミで打ち砕く。鶏の頭骸骨を開いて、内部の脳を鋭いサジで、すくいあげては妙薬として呑むのであった。こうして饑えて動かなくなった鉄板上の鶏は、その俛、焼鳥となつて家族の食膳を賑わすのであった。

こうした、鶏の立場を人間の婦女子に取り変えたら、いったい諸君は、どんな光景を想像するであろうか？ 人間の婦女子のバーベキューである。思っただけで戦慄を覚えずにはいられまい。

しかも、こうした刑罰の種々相が、昭和の現今では——八残酷焼きVなどと云って、大衆に親しまれ、もてはやされているのであった。材料は異なっても八鯛の生きづくりVと

か八伊勢海老の残酷焼きVなど枚挙にいとまがない。信吉は令夫人の始終を群衆の間から見届けると反吐を吐く想いで、歩き出した。怒りよりも、刑罰の実態に打ちのめされて、ただ夢遊病者のように、歩き続けたのであった。

その彼が、チチハルから数百軒も離れた部落で、やがて変り果てた実姉の無惨な屍体にあおうとは——その体には恥部がなかったのであった。女を象徴する部分に加えられた生々しい損傷の痕跡は、古来、女が甘受せねばならぬ最も憎むべき侮辱の一端なのであったが、そうした女の刑罰は、常に生々しく、常に限りなく、女体を苛み続けているのであった。

それから、三十数年たった——いま私は當時を振り返って、残念に思うこと、しばしばだった。

それは、あの夜、何故もう暫くの間、彼女の美しい肢体を堪能し尽さなかったのか？

——と慚愧に耐えないことだ。彼女の総てを見得るチャンスに恵まれ乍ら、それらを恥じる行為であった。おそらく二度とカイ間みるチャンスはあるまいと思われるその貴重な一

瞬を、あっさり、捨てて終った男の不甲斐なさであった。

想ってみれば、それは男の純情であり、清純さの現われか——と反って懐かしくも思う今日この頃の私であるが……やはり、彼女が異境で横死したとあっては、なおさら、かえすがえすも残念でならない。チャンスは二度とやっては来ないのだったから。

それは、私の母の周辺に起ったアネスペクドリクな出来事についても云えよう。

私が、まだ旧制中学校の三年生になった頃——私の母は四十才で、いちばん末の私の妹を懐胎した。当時の主治医は、軍医上りの逞しい角田と云う婦人専門の医師で、私も、その男性的な容貌と、まだ五十才に満たない明るい若さを、大変魅力的だと思った。

母は、その先生に何回となく、大きなお腹を診せては健康診断をして貰っていたが、ちやうど八奇クVの「童女受胎譜」(辻村隆)

——金原奈加子さんの写真——のように——肥えたお腹をしており妊娠七・八ヶ月の頃だったと思う——突然、自宅の居間で、気分が悪くなり臥って終った。慌てて役所から帰った父は急いで角田医師の往診を乞うた。

当時の医師は、殆ど人力車夫を雇って居り

火急の場合には、車夫をとばさせ、患家の往診に当たっていた。

その日——私は自室でノートの復習に余念がなかったが、父の声で、事態の緊迫を知りひしひしと危惧を感じたものだった。

私はノートを伏せると、声のする方に駆けつけた。父は、どうすることも出来ず、ただ苦しげに悶える母の帯を弛めたり、背筋を撫でたりして、オロオロするばかり——どうしたものか？ と唯々みているだけだった。私が行くと、父は慌てて八子供の来る処ではない！と険しい眼つきで私を睨んだ。

私は、その時——父を憎んだ。私は興味半分、母の寝室へ、駆けつけたのではなかった。母を想う真実がなせる行動だったのだ！——と父のはしたない怒罵をたしなめたかったが、現場が現場だけに、そんなゆとりなど全然ないほどの母の苦しみだった。

私は瞬間——母の膨大な腹部を見た。ちょうど父が岩田帯とでもいうのであろうか、膨らんだお腹に純白のサラシ木綿を幾重にも巻いたのを解きほどこき、すっかり母の腹部を露呈した時だっただけに——父の愕きようも理解出来ないわけではなかったが、なにしろ、その時には父も理屈抜きに慌てていたのである。

ろう。

ただただ、愛する妻の裸形を見せてはならない子供の前に、曝してしまったと云う悔悟で、居たたまれない想いだったのであろう——と思う。

母は、腹部の緊迫から解きほぐされると幾分、落ち着いたのか、喘ぎ喘ぎ、父に向って、大きなお腹をさすって欲しいと頼み込んだ。父は妻の見馴れぬ異常な肉体を見て驚異とリビドを覚えたのであろう。暫くは、じっと眺めたまま——悩ましくも横たわる母の白い肌を眺めていたが、聴て、いたわるような手つきで母の鳩穴の辺りから、円々と盛り上った上腹から下腹にかけての広い面積——はてはどんぐりまなこの臍窩の頂上附近から、その両側にかけて、撫で下るように、何遍となく撫で上げ、撫で下げた。母は、その間——じっと瞳を閉じ、父のなすが儘にしていたが、次第に正気に戻ってくると、やっぱり羞恥に身悶え——慌てて開いた俤になっっている腹部を蔽い、円い膝を立てた。

一瞬——私は母を美しいと思った。幼い時から見馴れた母のグラマティックな肉体ではあったが、そうして黙って父の愛撫にまかせている姿には、別の面の……つまり裏面の母

の生活をカイ間みたと云おうか——いささか興奮せざるを得なかった。

私は、その頃になると、性の問題について悪友から教えられ、知らず知らずの間に八男女問題に眼ざめる年頃Vとなっていた。

だが、私は父と母との問題については神聖化していた。父と母だけは別の世界の高貴な存在に思えてならなかった。敬慕すべき神にほかならなかつたのであった。そんな現象について、心理学者八高橋鉄先生Vも著書で述べて居られたが、たしかに少年の頃の複雑な心理は八性に興味を持ち始める反面、自己の身内に対しては神聖化し、別格視する傾向Vがあった。

そんな父と母とが互いに助け合い睦み合っていた。それは、子供心にも、甘酸っぱい、何となく、ジーンと胸に迫る、快感があつて——私の心を締めつけた。

だが反面、母の肉体に対する興味も湧いていて母の神聖なる見馴れぬ肉体の裏側を覗き見た——と云う思いがけないチャンスが、私の心猿をゆさぶり、父とはまた違った母への観察眼を、拡げていったのであった。

私は、父の近くであることも忘れて、暫くはこの凄まじい光景に見惚れていた。

ちょうどその時、角田医師の来訪だった。

父は安堵の想いで医師を迎えた。医師は挨拶も、そこそこに剥き出された母の胸などに聴診器を当てていたが、ポンポンとその大きな腹部を軽く叩くと看護婦に命じ——不思議な器具を用意させた。

私は、その俛、立ち去れない想いで襖の影から眺めていると、医師も気づいて八坊にはまずいな——Vと父に云った。父は、はじめて、まだ私が立ち尽しているのを知って八まだ、居ったのか！ 向うで勉強しなさい！ Vと白眼を自棄に血走らせて云った。私は、その父の瞳の中に、何時もの父とは、まるで違った不思議なヒラメキを見た。父は異常に動揺していた。その心の動揺は何を意味するものか？——恐らく性について未知であり、まだ、幼稚だった私に異性としての母の存在をいやが上にも認識させた、その日の父の期待に疼くような落着きのなさが、印象的であった。

私は、自分の部屋に戻った。その間に、医師がどんな治療をしたのか？——残念ながら、私は知る由もなかったが、やがて看護婦が、湯殿の方に洗面器やら薬缶で、熱湯とか冷水を大仰に汲み取りに行くのを見て、再び母の

容態が心配になった。だから——こんどは叱られないように、と思い裏手に回ってみることにした。

玄関から裏に、そっと出ると——角田医師の雇い車夫の血色のよい、見るからに逞しい六十がらみの男が、八坊々！ Vと私を手まねきした。八坊々！ こっちじゃ！ こっちじゃ！ Vと老車夫は私の手を引き、庭続きの奥の部屋の裏側に回った。そこには明りとり的小窓があつて、幸い、八手の葉影が私たちの姿を隠した。

私は老車夫に抱えられるようにして隙間から母の居る辺りを覗いた。八どうじゃい！ よう見えたか？ Vと老車夫は私の両足の下の方で小声で囁いた。八ううん？ よう見えん！ Vと私は小声で答えた。八それ！ よう捜すんじや！ Vと、また足の方で声がした。瞬間——私は異様な光景を発見した。

それは、いまの今迄、私が、かつて見たことも聴いたこともない、成熟した母のあられもない姿態だった。

極度に折り曲げられた女体は、子供のよう縮んでいて、横に、はみ出した幅広い肉体は奇妙な曲線を描いていて、それが誰だか分からない程だった。しかし、それが不自然に歪

められた母のポーズであつた——と知った時の私の驚愕とリピドは脳天に突き抜けるような——興奮となつて私の胸を早鐘のように打った。その動揺が分つたのか、老車夫は八坊！ どうじゃい？ 坊！ どうじゃい！ Vと私の足を叩く——私は、ただ云いようのないリピドと肉体の疼きに、酔い痺れ動けなかった。

それが、所謂八瀧腸Vという医師にとつては、極く簡単な手術であつたことも。それから間もなく母の顔色もよくなり、普段の美しい笑顔に戻つたのだが、私は手術の功罪は、ともかく、現代医学の進歩の有難さをしみじみと味わうことが出来たのであつた。

そして同時に、私をカイ間みせてくれた老車夫に感謝したものであつた。老車夫と私との繋りは、誰知る者としてない秘密の俛だが——私は、その後、母の熟れ切つた見事な肉体に接するたびに、きまつてあの時の八緊迫した瀧腸のシーンVを想い出すのであつた。

あの意外に見事な母の姿態——父の腕にかく押さえつけられ、看護婦が上げたアヌスに深々と送り込まれた医師の嘴管のキラリと鋭い銀色の反射——それにも増して真剣に母の表情を窺いつつ処置を続ける医師の姿、父

の眼の異様な輝き——母の苦悶——快感と平和——等々を、私は忘れ得ない。だが実は私は、あの日あの時の實際を、入母の灌腸の図Vを、つぶさにカイ間みては居なかったのだ。だが好意ある老車夫に——嘘はつけなかった、と……云って見えるよう小窓を押すほどの勇気も興味も、……実は持ち合せてはいなかった。

私は小窓越しに聴えてくる、苦しげな母の絶叫と重厚な医師の励しの声、看護婦の扱う道具の触れ合う金属的な音、等々。おそらく父は、その場で愛する妻の肉体を確りと押さえつけ医師に協力を惜しまなかったであろう

☆読者告白原稿募集☆

◆左記テーマにて募ります◆

一、夫婦SMプレイの体験談

夫婦又は恋人間に於けるSM関係の体験談を、お寄せ下さい。写真があれば尚結構ですが、なければ文章だけで構いません。住所氏名その他、発表に支障のある事柄は、秘匿されていいのですが、体験の内容については出来るだけ詳細に御報告頂ければ幸いです。

？——と想像するのである。

その時私は、神聖なる母の見てはならない姿を、かい間見るのに抵抗を感じていた——私は確かに、父によって押えつけられた母の不自然なポーズをカイ間みすることは出来たけれど不自然な形で医師の手術に委せている従順なる母の姿態は正視するに忍びなかったのだ。まして、そこはあまりに空間が少なかったし、看護婦も扱い馴れているであろう処の部分も視界にさえ切られ、障害物があって、つぶさに観察し得なかったのだ。

だが後年、オペ映画を企画するチャンスに恵まれ、遅ればせ乍ら、灌腸の術技なるもの

二、特別異色体験談と告白

普通の雑誌では取扱わない異色ある性癖の告白、例えばマゾ体験、窃視、下着愛好、どのようなことでも長短に拘らず、詳しく、お書き下さい。尚、体験までに至らずとも、空想や妄想についても、それが異色のあるものでしたら歓迎します。奇ク既刊号の読後感について、それが執筆者の特異な性癖に関連したものでしたら、是非、お寄せ願います。

三、女性読者の告白と体験談

読者通信に折角投稿されたり、或は又、編集部へ私信を寄せられた女性の読者の方の多

も、実際に見学するを得たし、その患者が母と同じ妙齡の臨月に近い妊婦だったのも不思議な、めぐり合せだった。私は、その患者の表情に、いままって、若々しく、水々しい肌を誇っていた当時の母の、あの日あの時の、妙な形のポーズを想い出しては、秘密の悦楽——つまり入女責め図絵の構成Vに耽っているのである。

そして、その母のポーズは、いまだに新鮮なイメージを、私の脳裏に再現してくれる。私の数々の「灌腸責め」のポーズには、そうした母の、あの時のポーズが、生々しく再現しているに違いない——と思うのである。

くは、お友達を得て満足されると、殆ど沈黙を守ってしまったのです。それは相手の男性の方の希望も多分にあると思うのですが、やはり読者の方は、その後の経過も知りたいと思うわけですから、便りだけでも、お寄せ願いたいのです。それから、文章の巧拙は問いませんから、女性読者の方々からの入読者通信Vを初め、入奇クサロンVそれに、告白的な短文を勇気を出して、ドシドシお寄せ願いたいものと、心から、お待ち申し上げております。身辺雑記、読後感など、内容は、どんなものでも結構です。